講義要項／シラバス

多摩大学大学院

2020 年度

May 1, 2020

目　次（フィールド別）

MBA開講科目一覧

実践知考具/志

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
経営者の志と実践知	佐々木　弘明	春	2	1
企業理念経営	佐々木　弘明	秋	2	3
スーパージェネラリスト論	田坂　広志	春	2	5
ネオ・リベラルアーツ論	田坂　広志	秋	2	7
ライフシフト:人生の成長戦略	荻阪　哲雄	春	2	9

実践知考具/イノベーション

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
知識創造経営のプリンシプル	紺野　登	春	2	11
イノベーションマネジメントシステム（IMS）と目的工学	紺野　登	秋	2	13
シナリオプランニングワークショップ	紺野　登	春	2	15
デザイン思考ワークショップ	紺野　登	秋	2	17
ビジネスモデルイノベーション	河野　龍太	春	2	19
イノベーターのための顧客創造戦略　理論と実践技法	河野　龍太	秋	2	21
ビジネスモデル創造特論	河野　龍太	秋	2	23
経営戦略概論	前川　慶一	秋	2	25
実践アントレプレナーシップ	本荘　修二	春	2	27
グローバル技術経営論	楠田　幸久	秋	2	29

実践知考具/顧客創造

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
マーケティングマネジメント概論	河野　龍太	春	2	31
インサイトコミュニケーション	久恒　啓一	春	2	33
Webマーケティング戦略	土屋　有	春	2	35
日本の流通構造とサプライチェーン・マネジメントのメガトレンド	西田　邦生	秋	2	37
最新ロジスティクス戦略	角井　亮一	春	2	39
経営視点からのコンタクトセンターの活用	宮﨑　義文	秋	2	41
観光インバウンドマネジメント	中山　こずゑ	秋	2	43
商品ブランドマネジメント	佐野　扶美枝	春	2	45

実践知考具/リーダーシップと人事

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
ヒューマンリソース概論I-A	徳岡　晃一郎	春	2	47
ヒューマンリソース概論II	徳岡　晃一郎	秋	2	49
インナーコミュニケーション	徳岡　晃一郎	春	2	51
カルチャーベースマネジメント	徳岡　晃一郎	秋	2	53
ヒューマンリソース概論I-B	佐々木　弘明	春	2	55
ストレスマネジメントと精神回復力	水木　さとみ	春	2	57
実践組織変革	浜田　正幸	秋	2	59
キャリアマネジメントとモチベーション	片岡　裕司	春	2	61
実践ポジティブ心理学	三田　真美	秋	2	63

実践知考具/ファイナンス&ガバナンス

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
ファイナンス基礎I（経営財務）	宇佐美　洋	春	2	65
ファイナンス基礎II（リスクマネジメント）	宇佐美　洋	秋	2	67
法の経済分析入門	宇佐美　洋	春	2	69
組織と戦略の経済学	宇佐美　洋	秋	2	71
企業会計・簿記入門	井村　順子	秋	2	73
行動経済学	真壁　昭夫	春	2	75
M&A戦略と実践企業ファイナンス	中岡　英隆	春	2	77
夢をかなえる実践リスクマネジメント	樋渡　淳二	秋	2	79
ファイナンスイノベーション実践	伊藤　祐輔	秋	2	81
中小企業の価値創造と事業承継	藤本　江里子	春	2	83

実践知考具/データドリブン経営

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
データ活用入門	今泉　忠	春	2	85
集中ゼミ(統計検定)	今泉　忠	春	2	87
マーケティングリサーチ	今泉　忠	秋	2	89
データドリブンの戦略構築	栗山　実	秋	2	91
クリティカルシンキング	柏木　吉基	秋	2	93
サービスサイエンス	中野　未知子	秋	2	95
データビジネス活用（課題解決モデリング）	志賀　敏宏	秋	2	97
統計的データ分析	久保田　貴文	秋	2	99
マーケティング実践	佐藤　洋行	秋	2	101
DX変革：AI/Watsonに学ぶ知のデジタル化の実践知	鈴木　至	秋	2	103
DX変革：データサイエンスによる企業変革	前田　英志	春	2	105

最新ビジネス実践知/ヘルスケア

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
日本の製薬企業の未来	佐々木　弘明	秋	2	107
医療・介護経営I	真野　俊樹	春	2	109
医療・介護経営II	真野　俊樹	秋	2	111
医療・介護マネジメントの実践知	真野　俊樹	秋	2	113
高齢社会のまちづくり	川井　真	春	2	115
異業種間のコミュニケーション術	白井　雅弓	秋	2	117
地域包括ケアのビジネスモデル	石井　富美	春	2	119

最新ビジネス実践知/アジアビジネス戦略

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
アジアビジネス戦略とグローバル共創	佐藤　勝彦	秋	2	121
世界潮流と企業戦略	金　美徳	春	2	123
日本企業の中国ビジネス	徐　向東	春	2	127
Business in Globalized India – The Japan Perspective	Aniruddha Mallik	秋	2	129
日中企業比較論	柯　隆	秋	2	131

最新ビジネス実践知/ソーシャルインパクトビジネス

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
非営利法人のファイナンス	堀内　勉	秋	2	133
トライセクターリーダー論	金野　索一	春	2	135
SDGS(社会課題)×Tech ビジネス	金野　索一	秋	2	137
ベンチャーCFO養成講座	新村　和大	秋	2	139
ソーシャル・ファイナンス	小林　立明	秋	2	141
まちづくり最新事情	長島　剛	春	2	143

最新ビジネス実践知/テクノロジー&ベンチャー

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
最新テクノロジーとAIの世界	金野　索一	春	2	145
ITビジネス原理と事業創出演習	金野　索一	秋	2	147
プロジェクトマネジメントの基本と応用	中分　毅	春	2	149
実践事業創造	亀井　省吾	春	2	151

最新ビジネス実践知/ルール形成戦略

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
社会課題起点のルール形成戦略	國分　俊史	春	2	153
経済連携協定(FTA・EPA)と経営戦略	羽生田　慶介	春	2	155
安全保障経済政策論I	井形　彬(國分　俊史)	春	2	157
安全保障経済政策論II	井形　彬(國分　俊史)	秋	2	159
議院内閣制度における公的ルール形成プロセス論	福田　峰之	秋	2	161
ルール形成のためのメディア戦略	岡田　宏記	秋	2	163
ルール形成戦略研究所特別講義	ルール形成戦略研究所	春	2	165

教養基盤

科目名	担当教員	開講	単位数	ページ
ビジネス実践知探究	佐藤　勝彦	春	2	167
問題解決学I	下井　直毅	春	2	169
問題解決学II	下井　直毅	秋	2	171
21世紀の日本の社会課題	近藤　洋介	秋	2	173
インターゼミ(寺島実郎学長ゼミ)	金　美徳	春秋	各2	175
フィールドスタディ	金　美徳	春秋	各2	179
【留学生対象】留学生のための日本経済・経営基礎	佐藤　勝彦	春	2	181
【留学生対象】ビジネスジャパニーズI	藏夛　礼佳	春	1	183
【留学生対象】ビジネスジャパニーズII	藏夛　礼佳	秋	1	185
【留学生対象】論文スタートアップI	劉　麗娜	春	1	187
【留学生対象】論文スタートアップII	劉　麗娜	秋	1	189
論文演習	河野　龍太	春秋	1～2	191
論文演習	宇佐美　洋	春秋	1～2	193
論文演習	紺野　登	春秋	1～2	195
論文演習	佐々木　弘明	春秋	1～2	197
論文演習	徳岡　晃一郎	春秋	1～2	199
論文演習	今泉　忠・久保田　貴文	春	1～2	201
論文演習	久保田　貴文・今泉　忠	秋	1～2	203
論文演習	巴特尔(バートル)	春秋	1～2	205
論文演習	國分　俊史	春秋	1～2	207
論文演習	田坂　広志	春秋	1～2	209
論文演習	真野　俊樹	春秋	1～2	211

目　次（担当教員あいうえお順）

MBA開講科目一覧

	科目名	担当教員（あいうえお順）	開講	単位数	ページ
1	安全保障経済政策論I	井形　彬（國分　俊史）	春	2	157
2	安全保障経済政策論II	井形　彬（國分　俊史）	秋	2	159
3	地域包括ケアのビジネスモデル	石井　富美	春	2	119
5	ファイナンスイノベーション実践	伊藤　祐輔	秋	2	81
6	データ活用入門	今泉　忠	春	2	85
7	集中ゼミ(統計検定)	今泉　忠	春	2	87
8	マーケティングリサーチ	今泉　忠	秋	2	89
9	論文演習	今泉　忠・久保田　貴文	春	1～2	201
10	企業会計・簿記入門	井村　順子	秋	2	73
11	ファイナンス基礎I（経営財務）	宇佐美　洋	春	2	65
12	ファイナンス基礎II（リスクマネジメント）	宇佐美　洋	秋	2	67
13	法の経済分析入門	宇佐美　洋	春	2	69
14	組織と戦略の経済学	宇佐美　洋	秋	2	71
15	論文演習	宇佐美　洋	春秋	1～2	193
16	ルール形成のためのメディア戦略	岡田　宏記	秋	2	163
17	ライフシフト:人生の成長戦略	荻阪　哲雄	春	2	9
18	日中企業比較論	柯　隆	秋	2	131
19	最新ロジスティクス戦略	角井　亮一	春	2	39
20	クリティカルシンキング	柏木　吉基	秋	2	93
21	キャリアマネジメントとモチベーション	片岡　裕司	春	2	61
22	実践事業創造	亀井　省吾	春	2	151
23	高齢社会のまちづくり	川井　真	春	2	115
24	世界潮流と企業戦略	金　美徳	春	2	123
25	インターゼミ（寺島実郎学長ゼミ）	金　美徳	春秋	各2	175
26	フィールドスタディ	金　美徳	春秋	各2	179
27	グローバル技術経営論	楠田　幸久	秋	2	29
28	統計的データ分析	久保田　貴文	秋	2	99
29	論文演習	久保田　貴文・今泉　忠	秋	1～2	203
30	【留学生対象】ビジネスジャパニーズI	藏夛　礼佳	春	1	183
31	【留学生対象】ビジネスジャパニーズII	藏夛　礼佳	秋	1	185
32	データドリブンの戦略構築	栗山　実	秋	2	91
33	ビジネスモデルイノベーション	河野　龍太	春	2	19
34	イノベーターのための顧客創造戦略　理論と実践技法	河野　龍太	秋	2	21
35	ビジネスモデル創造特論	河野　龍太	秋	2	23
36	マーケティングマネジメント概論	河野　龍太	春	2	31
37	論文演習	河野　龍太	春秋	1～2	191
38	社会課題起点のルール形成戦略	國分　俊史	春	2	153
39	論文演習	國分　俊史	春秋	1～2	207
40	ソーシャル・ファイナンス	小林　立明	秋	2	141
41	21世紀の日本の社会課題	近藤　洋介	秋	2	173
42	トライセクターリーダー論	金野　索一	春	2	135
43	SDGS(社会課題)×Tech ビジネス	金野　索一	秋	2	137
44	最新テクノロジーとAIの世界	金野　索一	春	2	145
45	ITビジネス原理と事業創出演習	金野　索一	秋	2	147
46	知識創造経営のプリンシプル	紺野　登	春	2	11
47	イノベーションマネジメントシステム（IMS）と目的工学	紺野　登	秋	2	13
48	シナリオプランニングワークショップ	紺野　登	春	2	15
49	デザイン思考ワークショップ	紺野　登	秋	2	17
50	論文演習	紺野　登	春秋	1～2	195
51	経営者の志と実践知	佐々木　弘明	春	2	1
52	企業理念経営	佐々木　弘明	秋	2	3

	科目名	担当教員（あいうえお順）	開講	単位数	ページ
53	ヒューマンリソース概論I-B	佐々木　弘明	春	2	55
54	日本の製薬企業の未来	佐々木　弘明	秋	2	107
55	論文演習	佐々木　弘明	春秋	1～2	197
56	アジアビジネス戦略とグローバル共創	佐藤　勝彦	秋	2	121
57	ビジネス実践知探究	佐藤　勝彦	春	2	167
58	【留学生対象】留学生のための日本経済・経営基礎	佐藤　勝彦	春	2	181
59	マーケティング実践	佐藤　洋行	秋	2	101
60	商品ブランドマネジメント	佐野　扶美枝	春	2	45
61	データビジネス活用（課題解決モデリング）	志賀　敏宏	秋	2	97
62	問題解決学I	下井　直毅	春	2	169
63	問題解決学II	下井　直毅	秋	2	171
64	日本企業の中国ビジネス	徐　向東	春	2	127
65	異業種間のコミュニケーション術	白井　雅弓	秋	2	117
66	ベンチャーCFO養成講座	新村　和大	秋	2	139
67	DX変革：AI/Watsonに学ぶ知のデジタル化の実践知	鈴木　至	秋	2	103
68	【留学生対象】留学生のためのビジネス日本地理・日本史I	瀧川　浩人	春	2	191
69	【留学生対象】留学生のためのビジネス日本地理・日本史II	瀧川　浩人	秋	2	193
70	スーパージェネラリスト論	田坂　広志	春	2	5
71	ネオ・リベラルアーツ論	田坂　広志	秋	2	7
72	論文演習	田坂　広志	春秋	1～2	209
73	Webマーケティング戦略	土屋　有	春	2	35
74	ヒューマンリソース概論I-A	徳岡　晃一郎	春	2	47
75	ヒューマンリソース概論II	徳岡　晃一郎	秋	2	49
76	インナーコミュニケーション	徳岡　晃一郎	春	2	51
77	カルチャーベースマネジメント	徳岡　晃一郎	秋	2	53
78	論文演習	徳岡　晃一郎	春秋	1～2	199
79	M&A戦略と実践企業ファイナンス	中岡　英隆	春	2	77
80	まちづくり最新事情	長島　剛	春	2	143
81	サービスサイエンス	中野　未知子	秋	2	95
82	観光インバウンドマネジメント	中山　こずゑ	秋	2	43
83	プロジェクトマネジメントの基本と応用	中分　毅	春	2	149
84	日本の流通構造とサプライチェーン・マネジメントのメガトレンド	西田　邦生	秋	2	37
85	論文演習	巴特尔（バートル）	春秋	1～2	205
86	経済連携協定（FTA・EPA）と経営戦略	羽生田　慶介	春	2	155
87	実践組織変革	浜田　正幸	秋	2	59
88	インサイトコミュニケーション	久恒　啓一	春	2	33
89	夢をかなえる実践リスクマネジメント	樋渡　淳二	秋	2	79
90	議院内閣制度における公的ルール形成プロセス論	福田　峰之	秋	2	161
91	中小企業の価値創造と事業承継	藤本　江里子	春	2	83
92	非営利法人のファイナンス	堀内　勉	秋	2	133
93	実践アントレプレナーシップ	本荘　修二	春	2	27
94	経営戦略概論	前川　慶一	秋	2	25
95	DX変革：データサイエンスによる企業変革	前田　英志	春	2	105
96	行動経済学	真壁　昭夫	春	2	75
97	Business in Globalized India – The Japan Perspective	Aniruddha Mallik	秋	2	129
98	医療・介護経営I	真野　俊樹	春	2	109
99	医療・介護経営II	真野　俊樹	秋	2	111
100	医療・介護マネジメントの実践知	真野　俊樹	秋	2	113
101	論文演習	真野　俊樹	春秋	1～2	211
102	ストレスマネジメントと精神回復力	水木　さとみ	春	2	57
103	実践ポジティブ心理学	三田　真美	秋	2	63
104	経営視点からのコンタクトセンターの活用	宮﨑　義文	秋	2	41
105	【留学生対象】論文スタートアップI	劉　麗娜	春	1	187
106	【留学生対象】論文スタートアップII	劉　麗娜	秋	1	189
107	ルール形成戦略研究所特別講義	ルール形成戦略研究所	春	2	165

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	経営者の志と実践知		
サブタイトル/Sub Title	日本的経営の神髄の探求		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Management aspirations and practical knowledge		
教員/Instructor	佐々木　弘明	E-mail	sasaki-hi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	志	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

志とは士の心と書く。日本的経営の神髄を探求する。経営者を取り巻く環境は激変しており、その中でどう舵取りするのか。また企業文化企業理念の創造、浸透などについて、ゲストやトップ層を迎えてのオムニバス的な講義。授業を通じて、企業内外で活躍できる起業家精神の神髄に触れ、自らの志を語れる人材を養成する。

到達目標/Course Goals

経営者の志と実践知に触れ、その差が企業の成長にもたらす効果について理解し、ディプロマポリシーにある DP1:「知識と理解」を確実にした上で、DP2:「思考と判断」を身に着ける。DP3:「意欲と関心」を高め、他社事例の研究を通じて、DP4:「表現と技能」を学び、DP5:「志」を磨き、起業家精神を醸成し、社内外で活躍できることを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる 程度の具体的な学習内容	事前学習：指定図書予習及び宿題資料の読み込みで(毎回 2 時間程度) 事後学習：講義内容の振り返り(毎回 1 時間程度)

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	経営者の志とは何か～企業研究 A:アステラス製薬
事前、事後学習ポイント	自社の経営課題を整理しておく。企業理念と経営戦略の関連性、それを支える人事戦略との関連を整理する。
詳細	合併企業の経営管理や、人事管理、コミュニケーション管理を学ぶ。また、経営企画や人事のあり方、各部の役割、課題を学ぶとともに、グループディスカッションで、経営陣の役割を再認識する。
第 2 講	
概要	経営者の志とは何か～企業研究 A:アステラス製薬
事前、事後学習ポイント	経営戦略と人事戦略の関係、経営とステークホルダーの関係を考える
詳細	労働生産性の持続的向上モデルによる経営戦略、人事戦略と人材マネジメント手法の学習。また、グループワークにより個人と組織のコミットメントづけについても学習する。 課題：自社組織について調べ、企業理念と経営理念の関係、経営戦略と人事戦略について深く考察し、自分が考える経営課題をパワーポイントでまとめてくる。第 8 講までに全員が発表する。
第 3 講	
概要	日本的経営の問題点とは何か～企業研究 B:北海道拓殖銀行
事前、事後学習ポイント	経営戦略と人事戦略の関係、経営とステークホルダーの関係を事前に考える
詳細	倒産した企業から、経営の神髄を学ぶ。目まぐるしく変わる環境変化の中で、経営陣・組織・経営企画・人事として何をすべきかを探求する。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション①
第 4 講	
概要	日本的経営の問題点とは何か～企業研究 B:北海道拓殖銀行
事前、事後学習ポイント	企業の舵取りを誤った本質を考える
詳細	またそのおかれている環境背景を推察し、教訓から生かす点は何かをダイアローグし、整理する。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション②
第 5 講	
概要	日本的経営の分岐点の考察～企業研究 C:田辺三菱製薬
事前、事後学習ポイント	経営戦略と人事戦略の関係、経営とステークホルダーの関係を事前に考えてくる
詳細	創業 1678 年の製薬企業の変遷を知り、経営の神髄を学ぶ。目まぐるしく変わる環境変化の中で、経営陣・組織・経営企画・人事として何をすべきかを探求する。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション③

第 6 講	
概要	日本的経営の分岐点の考察～企業研究 C:田辺三菱製薬
事前、事後学習ポイント	企業の舵取りの本質を考える
詳細	またその合併・TOB 等の経営判断から生かす点は何かをダイアローグし、整理する。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション④
第 7 講	
概要	経営者の志と実践知まとめ 1
事前、事後学習ポイント	ゲストスピーカーセッション：知識創造を実践している企業研究 3 社中の経営陣を招聘しディスカッション
詳細	経営者としての役割をもとに、経営の難しさを学び、「自分が経営者だったら、大事にする点」を作成し、発表、討議する。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション⑤
第 8 講	
概要	経営者の志と実践知まとめ 2
事前、事後学習ポイント	知識創造型経営とはどうあるべきか、自らの考えを統合する
詳細	第 1 講から 7 講までの視点を踏まえて、知識創造経営を構築していく上での経営陣の役割とその推進の諸条件について、グループディスカッションする。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション⑥
教科書 /Textbook	適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	「イノベーターシップ」徳岡晃一郎著、東洋経済新聞社 「コミットメント経営」ジョン R カッツェンバック著、ダイアモンド社
参考文献・参考 URL /Reference List	「MBB：思いのマネジメント」一條和生、徳岡晃一郎、野中郁次郎著、東洋経済新報社 (中国語の翻訳あり「信念」) 「40 代からのライフシフト実践ハンドブック」徳岡晃一郎著、東洋経済新報社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席(30%)、授業内での議論参加(35%)、プレゼンテーション内容(15%)、最終レポート(20%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	経営者の志と実践知について、自らの言葉で語り、企画推進できる
評価： A（89～80 点）	経営者の志と実践知について深く理解し、自社の制度への改善案が描ける
評価： B（79～70 点）	経営者の志と実践知について理解でき、自社の制度の課題を指摘できる。
評価： C（69～60 点）	経営者の志と実践知についての概要が理解できている。
評価： F（59 点～）	経営者の志と実践知について理解が不十分、出席も不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	企業理念経営		
サブタイトル/Sub Title	何を残し、何を捨てるべきか		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Corporate philosophy management		
教員/Instructor	佐々木　弘明	E-mail	sasaki-hi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	志	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

企業理念とは、創業者精神を表すものであり不変的なものもの。また経営理念とは、その時々の環境に合わせ可変的なものを経営理念と呼ぶ。今まさに、何を残し何を捨てるべきなのか。ウェイ伝道者を招聘し深く探求する。

到達目標/Course Goals

グローバル化・複雑化する経営環境下にあって、創業家精神に触れ、企業理念・経営理念を深く探求し、自ら自社内で新規事業の総責任者(intrapreneur:イントラプレナー)として、社外で創業者(entrepreneur:アントレプレナー)として、活用・指針にできるようにとなる。企業理念経営に触れ、その差が企業の成長にもたらす効果について理解し、ディプロマポリシーにあるDP1:「知識と理解」を確実にした上で、DP2:「思考と判断」を身に着ける。DP3:「意欲と関心」を高め、他社事例の研究を通じて、DP4:「表現と技能」を学び、DP5:「志」を磨き、起業家精神を醸成し、社内外で活躍できることを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる 程度の具体的な学習内容	事前学習：指定図書予習及び宿題資料の読み込みで、毎回(2時間程度) 事後学習：講義内容の振り返りで毎回(1時間程度)		

講義概要/Course Description　全8講　第1講～第7講は各90分×2講座 第8講は90分

第1講	
概要	企業理念とは・・・経営理念との違い、経営戦略と人事戦略との関連性を知る
事前、事後学習ポイント	自社の企業理念を整理する。企業理念と経営戦略とそれを支える人事戦略との関連を整理する。
詳細	良い企業とは、好業績を継続している企業とは、その要因を深く探求する。 そのために、企業理念と経営理念、ビジョンと戦略と戦術の一貫性や、ステークホルダーからの観点から企業分析を行い、その効果を深く探求する。
第2講	
概要	経営理念とは・・・企業理念との違い、経営理念と経営戦略と人事戦略との関連性を知る
事前、事後学習ポイント	自社の経営理念を整理する。経営戦略とそれを支える人事戦略との関連を整理する。
詳細	企業理念と経営理念を浸透・実践している好業績先の代表事例を共有し、自社への活用のヒントを探求する。企業価値向上のための各社取り組みをシェアし、実践活用のための重要ポイントを整理する。 課題：自社組織について調べ、企業理念・経営理念を深く考察し、優劣点(誇れる点、もう少しの点)をパワーポイントでまとめてくる。第8講までに全員が発表する。
第3講	
概要	A.花王ウェイと好業績との関係を深く探求する①
事前、事後学習ポイント	花王の企業理念と経営理念、経営戦略とステークホルダーの関係を考える
詳細	講師指定企業の事前分析とクラス全体のダイアローグ。 第1講で出された課題のプレゼンテーション①
第4講	
概要	A.花王ウェイと好業績との関係を深く探求する②
事前、事後学習ポイント	講師指定企業である花王から、自社への活用点を考える
詳細	企業内にいる者から見た脈々として息づいている企業理念について、ゲスト講師によるレクチュア。 自社内で活用したいポイントについてダイアローグする。 第1講で出された課題のプレゼンテーション②
第5講	
概要	B.日本IBMフィロソフィーと好業績との関係を深く探求する①
事前、事後学習ポイント	日本IBMの企業理念と経営理念、経営戦略とステークホルダーの関係を事前に考えてくる
詳細	企業内にいる者から見た脈々として息づいている企業理念について、ゲスト講師によるレクチュア。

	自社内で活用したいポイントについてダイアローグする。 第１講で出された課題のプレゼンテーション③
第６講	
概要	B.日本 IBM フィロソフィーと好業績との関係を深く探求する②
事前、事後学習ポイント	講師指定企業である日本 IBM から、自社への活用点を考える
詳細	企業内にいる者から見た脈々として息づいている企業理念について、ゲスト講師によるレクチュア。 自社内で活用したいポイントについてダイアローグする。 第１講で出された課題のプレゼンテーション④
第７講	
概要	C.アサヒビール　企業理念と好業績との関係を深く探求する①
事前、事後学習ポイント	アサヒビールの企業理念と経営理念、経営戦略とステークホルダーの関係を考える
詳細	企業内にいる者から見た脈々として息づいている企業理念について、ゲスト講師によるレクチュア。 自社内で活用したいポイントについてダイアローグする。 第１講で出された課題のプレゼンテーション⑤
第８講	
概要	C.アサヒビール　企業理念と好業績との関係を深く探求する②
事前、事後学習ポイント	講師指定企業であるアサヒビールから、自社への活用点を考える
詳細	企業内にいる者から見た脈々として息づいている企業理念について、ゲスト講師によるレクチュア。 自社内で活用したいポイントについてダイアローグする。 第１講で出された課題のプレゼンテーション⑥
教科書 /Textbook	適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	花王魂　今村哲也著　生産性出版 IBM お客様の成功に全力を尽くす経営　北城恪太郎・大歳卓麻著　ダイヤモンド社 アサヒビール 30 年目の逆襲　永井隆著　日本経済新聞出版社
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席(30%)、授業内での議論参加(35%)、プレゼンテーション内容(15%)、最終レポート(20%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	企業理念経営に関して、自らの企画が行える。
評価： A（89～80 点）	企業理念経営を深く理解し、自社の制度への改善案が描ける。
評価： B（79～70 点）	企業理念経営の概要が理解でき、自社の制度の課題を指摘できる。
評価： C（69～60 点）	企業理念経営の概要が理解できている。
評価： F（59 点～）	企業理念経営の理解が不十分、出席不良で、授業内の議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	ゲスト講師を花王、日本 IBM、アサヒビールから予定していますが、講師の都合により変更の可能性有

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	スーパージェネラリスト論		
サブタイトル/Sub Title	いかにして、垂直統合した知性を身につけるか		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Super Generalist		
教員/Instructor	田坂広志	E-mail	tasaka@hiroshitasaka.jp
科目群/Course Classification	志	単位数/Credits	2
講義目的/Aim of Course			
経営者や起業家、マネジャーやリーダーとして、目の前の現実を変革することのできる「変革の知性」を身につける			
到達目標/Course Goals			
ディプロマポリシーにおける「DP5：志」に沿って、思想、ビジョン、志、戦略、戦術、技術、人間力という「7つの知性」を垂直統合して身につける			
授業形態 /Form of Class	講義	学外学習 /Off-Campus Learning	有り
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	教科書『知性を磨く』の熟読（予習・復習　各講義2時間程度）		
講義概要/Course Description　全8講 第1講～第7講は各180分 第8講は90分でも可			
第1講			
概要	「思想」のレベルの知性について		
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する		
詳細	「思想」のレベルの知性を磨く方法と、その知性を支える人格のマネジメントを語る		
第2講			
概要	「ビジョン」のレベルの知性について		
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する		
詳細	「ビジョン」のレベルの知性を磨く方法と、その知性を支える人格のマネジメントを語る		
第3講			
概要	「志」のレベルの知性について		
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する		
詳細	「志」のレベルの知性を磨く方法と、その知性を支える人格のマネジメントを語る		
第4講			
概要	「戦略」のレベルの知性について		
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する		
詳細	「戦略」のレベルの知性を磨く方法と、その知性を支える人格のマネジメントを語る		
第5講			
概要	「戦術」のレベルの知性について		
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する		
詳細	「戦術」のレベルの知性を磨く方法と、その知性を支える人格のマネジメントを語る		
第6講			
概要	「技術」のレベルの知性について		
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する		
詳細	「技術」のレベルの知性を磨く方法と、その知性を支える人格のマネジメントを語る		
第7講			
概要	「人間力」のレベルの知性について		
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する		
詳細	「人間力」のレベルの知性を磨く方法と、その知性を支える人格のマネジメントを語る		
第8講			
概要	「多重人格」のマネジメント		

事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	「多様な才能」を開花させるための「多重人格のマネジメント」について語る
教科書 /Textbook	『知性を磨く　「スーパージェネラリスト」の時代』（田坂広志著：光文社新書）
指定図書 /Course Readings	『人は、誰もが「多重人格」　誰も語らなかった「才能開花の技法」』（田坂広志著：光文社新書） 『人間を磨く　人間関係が好転する「こころの技法」』（田坂広志著：光文社新書）
参考文献・参考 URL /Reference List	ダイヤモンドオンライン「７つの知性を磨く田坂塾」の連載記事
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率（30%）受講姿勢（25%）質疑内容（25%）所感内容（20%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	出席率良い＋受講姿勢良い＋質疑内容良い＋所感内容良い
評価： A（89～80 点）	出席率良い＋受講姿勢良い＋質疑内容良い＋所感内容普通
評価： B（79～70 点）	出席率良い＋受講姿勢良い＋質疑内容普通＋所感内容普通
評価： C（69～60 点）	出席率良い＋受講姿勢普通＋質疑内容普通＋所感内容普通
評価： F（59 点～）	出席率悪い＋受講姿勢普通＋質疑内容普通＋所感内容普通
留意点 /Additional Information	単に「書物」を通じた「知識」を学ぶ講義ではなく、自身の「体験」の振り返りから「智恵」を掴む講義であり、真剣勝負で講義に参加する姿勢が求められる。 集中講義形式。 河口湖研修施設にて実施。河口湖までの交通費、宿泊費・食費等は各自負担。 事前本講義のオリエンテーション参加と志望理由書を提出の上、参加者を選抜。 実施日：2020 年 8 月 1 日（土）・2020 年 8 月 2 日（日）

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ネオ・リベラルアーツ論		
サブタイトル/Sub Title	いかにして、２１世紀の変革リーダーとしての教養を身につけるか		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Neo Liberal Arts		
教員/Instructor	田坂広志	E-mail	tasaka@hiroshitasaka.jp
科目群/Course Classification	志	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

「言語的な知識」ではなく「身体的な智恵」としての教養を学ぶことにより、21 世紀の「変革の知性」を身につける

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにおける「DP5：志」に沿って、書物や文献で学ぶ「知識」としての教養ではなく、経験と体験から掴む「智恵」としての教養を身につける

授業形態 /Form of Class	講義	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	教科書『知性を磨く』の熟読 （予習・復習　各講義 2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講 第 1 講～第 7 講は各 180 分 第 8 講は 90 分でも可

第 1 講	
概要	「変革の知性」について
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	２１世紀に求められる「変革の知性」とは何か、いかにして、それを掴むかを語る
第 2 講	
概要	「知性」と「知能」について
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	「知性」と「知能」の違いとは何か、なぜ、その二つを区別しなければならないかを語る
第 3 講	
概要	「知性」と「知識」について
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	「知性」と「知識」の違いとは何か、なぜ、その二つを区別しなければならないかを語る
第 4 講	
概要	「知性」と「専門性」について
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	「知性」と「専門性」の違いとは何か、なぜ、その二つを区別しなければならないかを語る
第 5 講	
概要	「知の生態系」について
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	なぜ、「知の貯蔵庫」ではなく、「知の生態系」が重要かについて語る
第 6 講	
概要	「７つの知性」について
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	なぜ、思想、ビジョン、志、戦略、戦術、技術、人間力の垂直統合が必要かを語る
第 7 講	
概要	知の「３つの病」について
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	「知と知の分離」「知と行の分離」「知と情の分離」という「３つの病」について語る

第 8 講	
概要	「人間観」と「人間力」について
事前、事後学習ポイント	『知性を磨く』の当該部分を事前に読み、事後には、自身の当該体験を回顧する
詳細	なぜ、「人間観」と「人間力」が、21 世紀に最も重要なリベラルアーツになるのかを語る
教科書 /Textbook	『知性を磨く　「スーパージェネラリスト」の時代』（田坂広志著：光文社新書）
指定図書 /Course Readings	『直観を磨く　深く考える７つの技法』（田坂広志著：講談社現代新書） 『人間を磨く　人間関係が好転する「こころの技法」』（田坂広志著：光文社新書）
参考文献・参考 URL /Reference List	ダイヤモンドオンライン「７つの知性を磨く田坂塾」の連載記事
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率（30%）受講姿勢（25%）質疑内容（25%）所感内容（20%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	出席率良い＋受講姿勢良い＋質疑内容良い＋所感内容良い
評価： A（89～80 点）	出席率良い＋受講姿勢良い＋質疑内容良い＋所感内容普通
評価： B（79～70 点）	出席率良い＋受講姿勢良い＋質疑内容普通＋所感内容普通
評価： C（69～60 点）	出席率良い＋受講姿勢普通＋質疑内容普通＋所感内容普通
評価： F（59 点～）	出席率悪い＋受講姿勢普通＋質疑内容普通＋所感内容普通
留意点 /Additional Information	単に「書物」を通じた「知識」を学ぶ講義ではなく、自身の「体験」の振り返りから「智恵」を掴む講義であり、真剣勝負で 3 時間の講義に参加する姿勢が求められる

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ライフシフト：人生の成長戦略		
サブタイトル/Sub Title	職業の学びを稼ぐ力へ変える「７つの成長技法」		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Life Shift and Life Growth Strategy		
教員/Instructor	荻阪 哲雄	E-mail	ogisaka@changeartist.jp
科目群/Course Classification	志	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

本講義の目的は、これから起こる「ライフシフト」時代に備え、職業の学びを稼ぐ力へ変える！「７つの成長技法」を学び、自分自身の職業人生へ活かすことです。教室は、履修生が「主人公」となり、「志」からビジョンを生み出す「創作の場」になります。この講義で学ぶ技法は【飛躍の７力（ななりき）】と呼ばれる人生の成長戦略。その学び方を学ぶ「実践のノウハウ」を全公開！人間成長するための思考法を身につけ『論文の研究テーマ（院生）』や『職業のビジョン（聴講生）』を考え、アウトプットし、自らの言葉で、語れるようになることをめざします。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP3:「関心と意欲」、DP4:「表現と技能」に基づき、その能力を身につけることを目指す。具体的には、下記の３つが到達目標になる。

・社会と自分の関わりを考え、自らを省みて、研究テーマや、職業ビジョンを「構想」できる。

・自らの研究テーマや、ビジョン・ストーリーを「自分の言葉」で紡ぎ、内外へ「発信」できる。

・本講義で学ぶ「飛躍の７力」を磨き、個人・組織・顧客・業界・社会へ「変化」を働きかけることができる。

授業形態/Form of Class	講義、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション、双方向	学外学習/Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	「予習」教科書の指定範囲を熟読し自分の意見を創る（2時間） 「復習」毎週の講義を振り返り、所感レポートを提出（2時間）		

講義概要/Course Description　全８講　第１講～第７講は各 90 分×2 講座 第８講は 90 分

第１講　これから始まる「ライフシフト」時代の、飛躍する「人材像」、そのビジョンとは？	
概要	研究論文をつくる暗黙知の伝授　／　論文という「作品」　／　講義の全体像
事前、事後学習ポイント	事前に、教科書『成長が「速い人」「遅い人」』を準備して、講義に臨む。事後には講義の学びを人へ語り、そして、自らを省みて、所感をアウトプットし、新たな智恵を発見する
詳細	新たな人材ビジョン　／　飛躍の７力（ななりき）／　荻阪式　逆ピラミッド法
第２講　職業の働き方を見つめる「第１の成長戦略」／惹く「対象」を眺め、「熱望力」で、自らの「研究」を始める	
概要	惹く「熱望力」とは、何か？　どのようにして、その力を身につけるのか
事前、事後学習ポイント	『成長が「速い人」「遅い人」』のＰ３～Ｐ５７までを事前に熟読し、事後には講義の学びを人へ語る。そして、自らを省みて、所感をアウトプットし、新たな智恵を発見する
詳細	美意識　／　職業の主人公　／　プロフェショナルの学び方　／　社会貢献５つの心得
第３講　職業の働き方を起こす「第２の成長戦略」　／　今の「最善手」を選び、「実験力」で、次の「方法」を試す	
概要	試す「実験力」とは、何か？　どのようにして、その力を身につけるのか
事前、事後学習ポイント	『成長が「速い人」「遅い人」』のＰ６１～Ｐ１０１までを事前に熟読し、事後には講義の学びを人へ語る。そして、自らを省みて、所感をアウトプットし、新たな智恵を発見する
詳細	心の信号機　／　場の理論　／　アクション・リサーチ　／　１２のストロングポイント
第４講　職業の働き方を高める「第３の成長戦略」　／　秘めた「能力」を知り、「修業力」で、「自分」を育てる	
概要	磨く「修業力」とは、何か　どのようにして、その力を身につけるのか？
事前、事後学習ポイント	『成長が「速い人」「遅い人」』のＰ１０５～Ｐ１３３までを事前に熟読し、事後には講義の学びを人へ語る。そして、自らを省みて、所感をアウトプットし、新たな智恵を発見する
詳細	師匠と弟子　／　修業時代は人生の宝　／　学び方を学ぶ方法　／　プロの実践モデル
第５講　職業の働き方を動かす「第４の成長戦略」／考えを「形」にして、「結果力」で、「作品」を生み出す	
概要	生み出す「結果力」とは、何か　どのようにして、その力を身につけるのか？

事前、事後学習ポイント	『成長が「速い人」「遅い人」』のＰ１３７～Ｐ１５２までを事前に熟読し、事後には講義の学びを人へ語る。そして、自らを省みて、所感をアウトプットし、新たな智恵を発見する
詳細	実績　／　創作の世界観　／　出逢い　／　第１位の違い　／　結果力の要点
第６講　職業の働き方を深める「第５の成長戦略」　／　新たな「解釈」を持ち、「体験力」で、「実践知」を紡ぐ	
概要	動き掴む「体験力」とは、何か　どのようにして、その力を身につけるのか？
事前、事後学習ポイント	『成長が「速い人」「遅い人」』のＰ１５５～Ｐ１７２までを事前に熟読し、事後には講義の学びを人へ語る。そして、自らを省みて、所感をアウトプットし、新たな智恵を発見する
詳細	実体験　／　挫折の処し方　／　自分の使命　／　志ある人　／　自信の意味
第７講　職業の働き方を強める「第６の成長戦略」　／　未来の「目的地」を語り、「盟友力」で、「同志」を得る	
概要	支え合う「盟友力」とは、何か　どのようにして、その力を身につけるのか？
事前、事後学習ポイント	『成長が「速い人」「遅い人」』のＰ１７５～Ｐ１９１までを事前に熟読し、事後には講義の学びを人へ語る。そして、自らを省みて、所感をアウトプットし、新たな智恵を発見する
詳細	５段階の友　／　バインディング・ペア　／　学び合う刺激　／　助け合い　／　激励
第８講　職業の働き方を省みる「第７の成長戦略」　／　今の「現実」に挑み、「好転力」で、「姿勢」を変える	
概要	良くする「好転力」とは、何か　どのようにして、その力を身につけるのか？
事前、事後学習ポイント	『成長が「速い人」「遅い人」』のＰ１９５～Ｐ２２０までを事前に熟読し、事後には講義の学びを人へ語る。そして、自らを省みて、所感をアウトプットし、新たな智恵を発見する
詳細	３つの内省　／　在り方とやり方　／　働き方のベクトル　／　好転力の公式
教科書 /Textbook	『成長が「速い人」「遅い人」』（荻阪哲雄著：日本経済新聞出版社） ※毎回、講義レジュメを配布
指定図書 /Course Readings	『社員参謀！人と組織をつくる実践ストーリー』（荻阪哲雄著：日本経済新聞出版社） 『リーダーの言葉が届かない１０の理由』　（荻阪哲雄著：日本経済新聞出版社）
参考文献・参考 URL /Reference List	『何のために働くのか　自分を創る生き方』　（寺島実郎著：文春新書） 『仕事の思想　なぜ我々は働くのか』　（田坂広志著：PHP 文庫） 『40 代からのライフシフト　実践ハンドブック』（徳岡晃一郎：東洋経済新報社）
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	講義の出席（２５％）所感の提出（２５％）対話の量（２０％）研究の成果物（３０％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	受講姿勢、対話内容、所感レポート、成果物が、到達目標へ達し優れている場合
評価： A（89～80 点）	受講姿勢、対話内容、所感レポート、成果物が、到達目標へ達している場合
評価： B（79～70 点）	受講姿勢、対話内容、所感レポート、成果物のいずれかが、目標へもう一歩の場合
評価： C（69～60 点）	受講姿勢、対話内容、所感レポート、成果物がもうひと踏ん張りで今後に期待する場合
評価： F（59 点～）	低い出席率で、所感レポートが出せず、成果物が提出できない場合
留意点 /Additional Information	本講義の履修における修得のプロセスは、①『講義の傾聴』②『履修生の対話』③『仕事の実践』④『日々の内省』⑤『所感の提出』⑥『実験室（facebook）の所感交流』⑦『学びの発信』という７つのプロセスで実践知を育て、履修生全体で、進めます。所感レポートについては、講師が拝受した後、必要に応じて、履修生へ助言メッセージのフィードバックを贈ります。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	知識創造経営のプリンシプル		
サブタイトル/Sub Title	知識経済社会の企業・経営・戦略・組織		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Principles of Knowledge Creating Management		
教員/Instructor	紺野　登	E-mail	konno-n@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

企業価値の主要な源泉は物的な有形資源（モノ）から人々の無形の知識に移行している。それに沿って、大きく経営学も変化している。本講では知識創造経営という「理念型」から出発して、戦略論、組織論、リーダーシップ論等、毎回テーマを追いながら、経営全体を「知」で切って考える。

到達目標/Course Goals

ディプロマシーポリシーでの DP1:「知識と理解」、DP2:「思考と判断」に沿って、知識社会・経済の経営を理解するための基本的な考え方としての＜知識創造理論＞をもとに、とくにイノベーションを念頭に置いた戦略・組織などについての経営モデルを提示する。それらをてがかりに、個々人の経験を材料としながら、これからの経営のあり方を自分なりに理解し、創造し、綜合していく。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	（一部・未定）
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容への自己の関心の確認と指定図書の熟読（シラバスに応じて毎回２時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	知識創造経営のすすめ
事前、事後学習ポイント	「知識経済社会」の観点から経営、事業、組織、個人のあり方を理解する
詳細	知識経営とその背景:知識社会、知識経済、分析から創造への経営の転換 知識ベース理論に向けて：知識とは何か
第 2 講	
概要	知識創造理論
事前、事後学習ポイント	知識創造経営を理論的観点から理解する
詳細	暗黙知と形式知、「SECI（知識創造）モデル」、知識創造とイノベーション
第 3 講	
概要	知識経営企業事例研究（1）
事前、事後学習ポイント	企業事例を通じて知識創造経営を理解する グループディスカッション、双方向（アクティブラーニング）
詳細	知識創造企業事例及び対話
第 4 講	
概要	「戦略論」と知識経営
事前、事後学習ポイント	戦略論の系譜の中で知識創造経営を把握する
詳細	知識経営の「ルート・メタファー」について論じる
第 5 講	
概要	「知識資産」の戦略
事前、事後学習ポイント	知識の生み出す経済的価値について理解する
詳細	知識資産とは、知識で富を生み出すとは
第 6 講	
概要	「場」の経営
事前、事後学習ポイント	知識創造における場の意味合いを理解する
詳細	「場」とは何か---暗黙知、文脈、言語 「場」の組織と経営
第 7 講	
概要	知識経営実践事例研究（2）

事前、事後学習ポイント	企業事例を通じて知識創造経営を理解する
詳細	各自の事例企業研究を共有、知識リーダーシップ（賢慮）の事例 グループディスカッション、双方向（アクティブラーニング）
第 8 講	
概要	総括の対話
事前、事後学習ポイント	これまでの総括、振り返りを行う
詳細	全講を通じて理解したことを基に発展的議論を行う グループディスカッション、双方向（アクティブラーニング）
教科書 /Textbook	紺野登(2020)『イノベーション全書』東洋経済新報社 野中郁次郎、紺野登（2012）『知識創造経営のプリンシプル』東洋経済新報社
指定図書 /Course Readings	野中郁次郎、紺野登（1999）『知識経営のすすめ』ちくま新書
参考文献・参考 URL /Reference List	随時提示
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席率 30%／講義議論参画度 30%／最終レポート 40%　3 点の総合評価 レポートのフィードバックは成績評価とする
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートの内容が大変優れている
評価： A（89～80 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートが優れている
評価： B（79～70 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートが良い
評価： C（69～60 点）	出席不良、グループワークへの参加が消極的、事後レポートが普通
評価： F（59 点～）	出席不良、グループワークへの参加が消極的、事後レポートがない
留意点 /Additional Information	《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルが経営実践のキーであるので議論には積極的に参画すること 「ナレッジマネジメント」（知識管理）という用語も使用しますが、所謂ＩＴをベースにしたナレッジマネジメントシステムが主テーマではありません。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	イノベーションマネジメントシステム（IMS）と目的工学		
サブタイトル/Sub Title	イノベーション経営のシステムと賢慮		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Innovation Management System and “Purpose Engineering”		
教員/Instructor	紺野　登	E-mail	konno-n@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

２１世紀の経営はイノベーションが核になり、ISO 化など規格(IMS56002)も生まれている。一方、主観的なものである「目的」をいかに経営に取り込むかも大きな課題となっている。ではどのような経営がありえるのだろうか？「善い目的」とは何か、「目的と手段の選択・判断」はいかにあるべきかを IMS x「目的工学」という視点から考える。

到達目標/Course Goals

本講では、イノベーションの体系面と意志面の双方を学び、統合することを狙いとする。まずディプロマシーポリシーでの DP1:「知識と理解」に沿って、イノベーション・マネジメントシステムに準拠したイノベーションの知の体系的方法習得を目指す。さらに DP3:「関心と意欲」、DP5:「志」に沿って、「目的工学」を通じて、善い目的に基づく経営(Management On Purpose)、および社会、企業、個々人の目的を調整して成果を生み出すための経営(Management Of Purposes)からなる、イノベーションのための実践知(practical wisdom)を学ぶ。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容への自己の関心の確認と指定図書の熟読（シラバスに応じて毎回２時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	２１世紀はイノベーションと目的の時代
事前、事後学習ポイント	「目的」というキーワードから経営、イノベーション、社会／経済の現状を考察する
詳細	目的が重視されてきた由来、契機、なぜ目的が現代の経営において重要になってきたのか
第 2 講	
概要	イノベーション・マネジメントシステム(IMS)（1）
事前、事後学習ポイント	ISO 化の背景としてのイノベーション経営の体系
詳細	IMS ISO 56002 の成立
第 3 講	
概要	イノベーション・マネジメントシステム(IMS)（2）
事前、事後学習ポイント	IMS ISO 56002 の構造と詳細
詳細	IMS ISO 56002 の概要と目的の意味合い
第 4 講	
概要	目的の哲学
事前、事後学習ポイント	アリストテレスの四原因説、目的論的世界観、実践的三段論法
詳細	グループディスカッション、双方向 個々人の目的と企業、社会の目的をどのように調整するのか
第 5 講	
概要	目的工学（1）目的に基づく手段の判断
事前、事後学習ポイント	よい目的はいかに生み出せるのか、目的の創出／判断と手段選択のメカニズム
詳細	目的工学に基づく目的と手段の関係性を考える（演習　グループディスカッション、双方向）
第 6 講	
概要	目的工学（2）アクティブラーニング（ワークショップ）
事前、事後学習ポイント	いかに目的を媒介にプロジェクトマネジメントを実践するか
詳細	目的工学に基づく大目的／中目的／小目的の関係性を考る（演習　グループディスカッション、双方向）
第 7 講	
概要	目的工学とソーシャルイノベーション

事前、事後学習ポイント	社会的なイノベーションにおける目的工学的な視点と実践
詳細	社会的イノベーションの事例を通じて Theory Of Change と目的工学を対比的に理解する
第 8 講	
概要	総括の対話、グループディスカッション、双方向
事前、事後学習ポイント	これまでの全講義を基により深い理解を進める
詳細	各自のレポーティングの過程での学び、観点を共有する対話
教科書 /Textbook	紺野登(2013)『利益や売上げばかり考える人は、なぜ失敗してしまうのか（目的工学)』(ダイヤモンド社) 紺野登(2020)『イノベーション全書』東洋経済新報社
指定図書 /Course Readings	紺野登、野中郁次郎（2018)『構想力の方法論』日経 BP 紺野登他『目的工学によるイノベーション実践手法』(2019)翔泳社
参考文献・参考 URL /Reference List	随時提示
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席率 30%／講義議論参画度 30%／最終レポート 40%　3 点の総合評価 レポートのフィードバックは成績評価とする
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートの内容が大変優れている
評価： A（89～80 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートが優れている
評価： B（79～70 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートが良い
評価： C（69～60 点）	出席不良、グループワークへの参加が消極的、事後レポートが普通
評価： F（59 点～）	出席不良、グループワークへの参加が消極的、事後レポートがない
留意点 /Additional Information	《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルが経営実践のキーであるので議論、演習には積極的に参画すること

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	シナリオプランニングワークショップ		
サブタイトル/Sub Title	創造的対話手法と可能主義の戦略構想としてのシナリオプランニング		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Methodology of Scenario Planning: Dialogue to Futures		
教員/Instructor	紺野　登	E-mail	konno-n@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ディプロマシーポリシーでの DP2:「思考と判断」、DP3:「関心と意欲」、DP5:「志」の綜合を重視し、構想力の練磨を目指す。「知識創造」とは本質的に未来に向けた創造、イノベーションである。イノベーションとは未来へのビジョンのもとに不確実で複雑な環境の中で「可能主義」的に生きることである。それは未来について「構える」のでなく、未来に向けて判断，変容させることである。本講では未来研究に関する研究と、ワークショップによるシナリオプランニングの実践的演習をともに行うことで「可能主義（非決定論的）の戦略」について考える。

到達目標/Course Goals

知識創造の観点から従来からあるシナリオプランニングを、不確実・複雑な環境における思考法、未来視点での対話の方法として再発見し、その背景を考え、体験する場（集中プログラム）を通じて習得する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション（アクティブラーニング）	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容への自己の関心の確認と指定図書の熟読 事前テーマの考察、講義日間の宿題（毎回 3 時間程度）、事後のグループワーク（毎回 3 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション
事前、事後学習ポイント	イノベーション経済、未来への視座。可能主義の戦略の系譜
詳細	シナリオプランニングの背景、由来、経緯など、導入的な講
第 2 講	
概要	シナリオプランニング技法について
事前、事後学習ポイント	シナリオプランニングの基本ステップについて予習ししておくこと
詳細	シナリオプランニングの基本ステップとその方法論的意味合いを理解する
第 3 講	
概要	シナリオプランニング事例
事前、事後学習ポイント	具体的事例からシナリオプランニングの活用イメージを理解する
詳細	複数企業事例のシナリオマトリックス、その背景、活用を説明し、対話する
第 4 講	
概要	シナリオプランニング演習（1）
事前、事後学習ポイント	ワークショップ形式で課題を設定しシナリオプランニング演習を行う
詳細	テーマ設定の方法、スキャンニング、シナリオマトリックス策定
第 5 講	
概要	シナリオプランニング演習（2）
事前、事後学習ポイント	ワークショップ形式で課題を設定しシナリオプランニング演習を行う
詳細	シナリオロジック、ストーリー作成
第 6 講	
概要	シナリオプランニング演習（3）
事前、事後学習ポイント	ワークショップ形式で課題を設定しシナリオプランニング演習を行う
詳細	初期的兆候、シナリオの意味合い、戦略オプション
第 7 講	
概要	未来の哲学：経営における未来の意味合い

事前、事後学習ポイント	現状のシナリオプランニングについての限界と今後の発展、活用のあり方
詳細	「備え／構え」の受動的シナリオから能動的、対話型のシナリオプランニングへ
第 8 講	
概要	総括、討議
事前、事後学習ポイント	これまでの全講義を基により深い理解を進める
詳細	各自のレポーティングの過程での学び、観点を共有する対話
教科書 /Textbook	紺野登、野中郁次郎（2018）『構想力の方法論』日経 BP
指定図書 /Course Readings	紺野登(2020)『イノベーション全書』東洋経済新報社
参考文献・参考 URL /Reference List	オグルビー,J.、紺野登、野中郁次郎(2005)《知識創造としてのシナリオ　PART 1　シナリオ・プランニングのベーシックス&PART 2 シナリオ・マインドのすすめ》Think！2005 SPR. SUM　No.13&14【配布する】
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席率 30%／講義議論参画度 30%／最終レポート 40%　3 点の総合評価 レポートのフィードバックは成績評価とする
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートの内容が大変優れている
評価： A（89～80 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートが優れている
評価： B（79～70 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートが良い
評価： C（69～60 点）	出席不良、グループワークへの参加が消極的、事後レポートが普通
評価： F（59 点～）	出席不良、グループワークへの参加が消極的、事後レポートがない
留意点 /Additional Information	《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルが経営実践のキーであるので議論、演習には積極的に参画すること 講義日の間に作業（個人、グループ）がある 計 3 日間の集中グループワーク

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	デザイン思考ワークショップ		
サブタイトル/Sub Title	イノベーションのための質的研究方法論と実践		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Design Thinking Workshop—Qualitative Research Methodologies in Action		
教員/Instructor	紺野　登	E-mail	konno-n@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

業種・職種を問わず、これからのリーダーにとって不可欠な「デザイン思考」の理論と実践を学ぶ。

到達目標/Course Goals

近年世界中の経営大学院などでもデザイン思考のプログラムが増えている。イノベーション経営への潮流ともに、組織横断的な構想力・実践力が要請されているためである。それは机上の学習では得られない。そこで本講ではディプロマシーポリシーにおける DP1:「知識と理解」、DP4:「表現と技能」のためにデザインと経営の関係を把握し、DP3:「関心と意欲」のためのエスノグラフィーや GTA など質的研究方法論、コンセプトの構築、プロトタイピングといったデザイン思考の基本を集中ワークショップで綜合的に身につけることを狙いとする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション（アクティブラーニング）	学外学習 /Off-Campus Learning	フィールドワーク

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容への自己の関心の確認と指定図書の熟読 事前テーマの考察、講義日間の宿題（毎回 3 時間程度）、事後グループワーク（毎回 3 時間程度）

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	デザイン思考への誘い
事前、事後学習ポイント	デザイン思考に関する概略を書籍などを通じて学んでおくこと
詳細	知識創造の観点からデザイン思考を理解する
第 2 講	
概要	フィールドワーク演習(1)
事前、事後学習ポイント	フィールドワークを通じてデザイン思考の実践的理解を行う
詳細	エスノグラフィー、GTA(Grounded Theory Approach)等文献研究などの紹介
第 3 講	
概要	質的研究方法論
事前、事後学習ポイント	質的研究方法論についての文献学習（持続して輪読を行う）
詳細	コンセプトデザインの方法論および質的研究方法論(Qualitative Research Methodologies)概論、などについて学ぶ
第 4 講	
概要	フィールドワーク演習(2)
事前、事後学習ポイント	特定の課題に沿って、グループワークを行う
詳細	観察（Observation）あるいは共同化の方法
第 5 講	
概要	フィールドワーク演習(3)
事前、事後学習ポイント	特定の課題に沿って、グループワークを行う：前回の復習、作業の継続
詳細	概念化(Ideation) あるいは表出化の方法
第 6 講	
概要	フィールドワーク演習(4)
事前、事後学習ポイント	特定の課題に沿って、グループワークを行う：前回の復習、作業の継続
詳細	プロトタイピング(prototyping)／ストーリーテリング(storytelling)あるいは連結化／内面化の方法
第 7 講	

概要	企業のイノベーションとデザイン思考
事前、事後学習ポイント	ケースを読んでおくこと
詳細	具体的企業事例からデザイン思考がイノベーションにいかに活用され得るかを考える
第 8 講	
概要	総括の対話
事前、事後学習ポイント	これまでの全講義を基により深い理解を進める
詳細	各自のレポーティングの過程での学び、観点を共有する対話、輪読の発表、デザイン思考の次なる発展とは
教科書 /Textbook	紺野登（2010）『ビジネスのためのデザイン思考』東洋経済新報社（指定図書）
指定図書 /Course Readings	フリック,U.（2002）『質的研究入門―「人間の科学」のための方法論』春秋社（指定図書） グレイザー,B.G.,A.L.シュトラウス（1996）『データ対話型理論の発見』新曜社（指定図書）
参考文献・参考 URL /Reference List	
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席率 30%／講義議論参画度 30%／最終レポート 40%　3 点の総合評価 レポートのフィードバックは成績評価とする
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートの内容が大変優れている
評価： A（89～80 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートが優れている
評価： B（79～70 点）	出席数が十分、グループワークへの積極的参加、事後レポートが良い
評価： C（69～60 点）	出席不良、グループワークへの参加が消極的、事後レポートが普通
評価： F（59 点～）	出席不良、グループワークへの参加が消極的、事後レポートがない
留意点 /Additional Information	《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルが経営実践のキーであるので議論には積極的に参画すること 講義の合間に文献輪読作業あり。ワークショップ形式ゆえ継続出席を重視。 計 3 日間の集中グループワーク

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ビジネスモデルイノベーション		
サブタイトル/Sub Title	持続的競争優位が終焉を向かえた時代の新たな戦略アプローチと実践手法		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Business Model Innovation		
教員/Instructor	河野　龍太	E-mail	kono-r@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

アップル、アマゾン、ユニクロを例としてあげるまでもなく、現代の勝ち組企業に共通しているのが、【ビジネスモデルの差別化】に成功していることです。ビジネスモデルとは、事業の持続的成長を可能にする戦略メカニズムのこと。現代の経営においては商品・サービス単体レベルでの差別化が難しさを増しており、ビジネスモデルによる差別化が重要になっています。本講義では、ビジネスモデルに対する本質的理解を深めながら、世界の一流企業が採用し経営の現場で実践するビジネスモデル構築手法を学び、受講者自らが関わる事業のビジネスモデルをイノベーションするための戦略的視座と問題解決力を錬成することを講義の目的とします。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの「DP2：思考と判断（実践知考具をもとにした知的課題解決力）と「知の再武装」を達成するために、ビジネスモデルで差別化するためのセオリーとケースを理解し実践知を身につける。ビジネスモデルキャンバスを活用して新規事業や既存事業の新たなビジネスモデルをデザインするスキルを習得する。ビジネスモデルの仮説検証を実行する理論とスキルを習得する。

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	課題図書、指定論文の予習。指定時にレポートの提出。予習 1 時間程度、復習 1 時間程度。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	ビジネスモデルとは何か
事前、事後学習ポイント	ビジネスモデルが経営上注目される背景、事業環境を調べ理解しておくこと
詳細	ビジネスモデルが経営上注目される背景、事業環境について、特に「一時的競争優位」が前提となる現代の経営環境について考察する。講義で取り上げる理論や方法論を受講生各自の経験や所属組織の現実課題に当てはめて考察を促す形式の個人及びグループワーク、クラスディスカッションを随時行う。
第 2 講	
概要	ビジネスモデル・キャンバスの各要素と内容について調べて理解しておくこと
事前、事後学習ポイント	イノベーションの共通言語の重要性について理解する。ビジネスモデルキャンバスの構成要素と基本的な使い方を理解する。
詳細	現代の経営においてビジネスモデル・イノベーションの重要性が増す中でイノベーションの共通言語がなぜ重要なのかについて考察する。イノベーションの共通言語として普及するビジネスモデルキャンパスの使い方を理解し自社のビジネスモデルをビジネスモデルキャンバスで実際に可視化する個人演習及びグループワークを行い、随時クラスディスカッションを交える。
第 3 講	
概要	ビジネスモデルで差別化するための戦略的な着眼点
事前、事後学習ポイント	ビジネスモデルで差別化するための方法について調べておくこと
詳細	ビジネスモデル・イノベーションを構想するための戦略的な着眼点、アプローチ法を学ぶ。自社のビジネスモデルの強みや弱み、課題などを評価する。講義で取り上げる理論や方法論を受講生各自の経験や所属組織の現実課題に当てはめて考察を促す形式の個人及びグループワーク、クラスディスカッションを随時行う。
第 4 講	
概要	顧客視点での価値創造（1）
事前、事後学習ポイント	ジョブ理論について調べておく。バリュー・プロポジション・キャンバスを実務で使う。
詳細	顧客視点での価値創造の方法論を学ぶ。顧客が本当に欲しているニーズを理解する方法としてジョブアプローチについて考察する。バリュー・プロポジション・キャンバスの内容と各構成要素を理解し自社の事業に当てはめて基本的な使い方を習得する。講義で取り上げる理論や方法論を受講生各自の経験や所属組織の現実課題に当てはめて考察を促す形式の個人及びグループワーク、クラスディスカッションを随時行う。
第 5 講	

概要	顧客視点での価値創造（2）
事前、事後学習ポイント	顧客視点でビジネスモデル・イノベーションを起こしたケースを調べる。
詳細	顧客視点での価値創造の具体的なケース分析を通じてプル型のイノベーションのポイントを考察する。顧客の側に立って問題を発見し解決アイデアの選択肢を広げ試行錯誤から方向性を見出す実践的スキルとしてデザイン思考について理解する。随時グループワーク、クラスディスカッションを交えて参加型講義を行う。
第 6 講	
概要	リーンスタートアップと仮説検証（1）
事前、事後学習ポイント	リーンスタートアップのセオリーと実践方法について調べる
詳細	リーンスタートアップ、顧客開発モデル、MVP などについて理解する。ビジネスモデルの仮説についての仮説検証方法について理解する。講義で取り上げる理論や方法論を受講生各自の経験や所属組織の現実課題に当てはめて考察を促す形式の個人及びグループワーク、クラスディスカッションを随時行う。
第 7 講	
概要	リーンスタートアップと仮説検証（2）
事前、事後学習ポイント	リーンスタートアップに基づいた仮説検証の考え方と実践方法を調べておく
詳細	リーンスタートアップ、顧客開発モデル、MVP などについて理解する。ビジネスモデルの仮説についての仮説検証方法について理解する。講義で取り上げる理論や方法論を受講生各自の経験や所属組織の現実課題に当てはめて考察を促す形式の個人及びグループワーク、クラスディスカッションを随時行う。
第 8 講	
概要	まとめ
事前、事後学習ポイント	ビジネスモデル・イノベーションに関するこれまでの講義の全体を振り返る
詳細	講義の全体を振り返り、ビジネスモデル・イノベーションの取り組みを自社内でいかに実践するかについて考察する。各自の組織の事例や個人の経験による自主的意見の発言とクラス内での知見交換を奨励しクラスディスカッションを行う。
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	「ビジネスモデル・ジェネレーション」　アレックス・オスターワルダー、イヴ・ピニュール著、翔泳社
参考文献・参考 URL /Reference List	「バリュー・プロポジションデザイン」アレックス・オスターワルダー、イヴ・ピニュール他著、翔泳社、「イノベーションへの解」クレイトン・クリステンセン他、翔泳社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席（20%）、グループワーク、クラスディカッション（40%）、修了課題レポート(40%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	ビジネスモデル・イノベーションのセオリーとケースを十分に理解し所属組織やチームの共通言語として実践で応用している。ビジネスモデルキャンバスを活用して新規事業や既存事業のユニークなビジネスモデルをデザインできる。ビジネスモデルの仮説検証の方法論、スキルを身につけ自ら仮説検証を効果的に実行できる。
評価： A（89～80 点）	ビジネスモデル・イノベーションのセオリーと実践ケースを理解している。ビジネスモデルキャンバスを活用して新規事業や既存事業のビジネスモデルを発案できる。ビジネスモデルの仮説検証の方法論を理解し実践している。
評価： B（79～70 点）	ビジネスモデル・イノベーションのセオリーを理解している。ビジネスモデルキャンバスを理解し実務で活用している。
評価： C（69～60 点）	ビジネスモデル・イノベーションのセオリーを基本レベルで理解している。ビジネスモデルキャンバスを理解しているが実務での応用が不十分。
評価： F（59 点～）	ビジネスモデル・イノベーションのセオリーやケースについての理解が基本的なレベルに留まっている。
留意点 /Additional Information	当講義の理解と応用を促進する上で関係の深い「マーケティング・マネジメント概論」を当講義の履修前もしくは履修中あるいは履修後に受講することを推奨する。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	イノベーターのための顧客創造戦略 理論と実践技法		
サブタイトル/Sub Title	市場創造と事業変革のロジックと実践方法を学ぶ		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Customer Creation Strategies in Theory and Practice for Innovators.		
教員/Instructor	河野 龍太	E-mail	kono-r@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

アップルのスティーブ・ジョブズやアマゾンのジェフ・ベゾスといった傑出したイノベーターは単なるアイデアや感性、直観の人ではない。ハーバード大のクリステンセン氏のイノベーション理論などを研究して自らの事業構想に生かす、セオリーと実践の両方に精通したイノベーション・マスター（達人）として知られている。世界を変える巨大な功績を残している人がその天賦の才能やセンス以外に何を志向しているかは留意しておきたい。即効性のあるノウハウなど表層的なものを追い求める風潮が否めない中でセオリーやロジックを軽視する人は危ういと言えよう。イノベーションを志す者にとって、市場変革と顧客創造のための代表的な戦略、セオリー、ツールを理解し習得することは助けとなる。この講義では現代の重要なイノベーション戦略、セオリー、それらを実践するためのツールを取り上げ、ケースと演習を交えて実践的に習得を図る。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」と「知の再武装」を達成するために、市場構造を変革し顧客を創造するイノベーションの理論、ツール、スキルを習得し、新規事業開発・新商品、新サービス開発における実務上の課題解決に実践応用できる力を身につける。

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容の咀嚼と指定図書、資料の熟読 事前学習（2 時間程度）,事後学習（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	顧客の真のニーズを理解する：ジョブメソッド基本
事前、事後学習ポイント	ジョブ理論について調べておく。
詳細	顧客創造戦略において顧客の真のニーズを理解することは極めて重要である。このための有効な理論がハーバード大学のクリステンセン教授が提唱する Jobs to be done という理論である。JTBD について理解を深め演習を通じて実践に応用できるスキルを養う。
第 2 講	
概要	顧客の真のニーズを理解する：ジョブメソッド応用
事前、事後学習ポイント	ジョブ理論のケースについて調べておく。理論に適合した実際のケースを調べる。
詳細	顧客創造戦略において顧客の真のニーズを理解することは極めて重要である。このための有効な理論がハーバード大学のクリステンセン教授が提唱する Jobs to be done という理論である。JTBD について理解を深め演習を通じて実践に応用できるスキルを養う。
第 3 講	
概要	破壊的イノベーションを理解する
事前、事後学習ポイント	破壊的イノベーション理論について調べる。理論に適合した実際のケースを調べる。
詳細	破壊的イノベーション理論はインテルのアンディ・グローブ会長が戦略転換に応用するなど有用性が高いイノベーションセオリーである。破壊的イノベーション理論の基本と本質を理解する。さらにクラスディスカッションを交え、双方向かつ主体的に認識を深める。
第 4 講	
概要	ブルーオーシャン戦略を理解する
事前、事後学習ポイント	ブルーオーシャン戦略の理論とケースについて調べる。
詳細	イノベーション戦略論としてブルーオーシャン戦略の基本と応用を理解する。クラスディスカッションを交え、双方向かつ主体的に認識を深める。
第 5 講	
概要	ビジネスモデルキャンバスを理解する
事前、事後学習ポイント	ビジネスモデルキャンバスの内容と実践的な使い方について調べて理解する。
詳細	ビジネスモデルをデザインするための画期的なツールとして世界中に普及しているビジネスモデルキャンバスについて基本と実践での応用方法を学ぶ。演習とクラスディスカッションを交え、双方向かつ主体的に認識を深める。

第 6 講	
概要	バリュープロポジションキャンバスを理解する
事前、事後学習ポイント	バリュープロポジションキャンバスの内容と実践的な使い方について調べて理解する。
詳細	ビジネスモデルキャンバスと合わせて使うプラグインツール、バリュープロポジションキャンバスについて基本と実践での応用方法を学ぶ。演習とクラスディスカッションを交え、双方向かつ主体的に認識を深める。
第 7 講	
概要	アトリビュート分析を理解する
事前、事後学習ポイント	アトリビュート分析について調べて理解する。
詳細	競合に対してユニークな顧客価値をデザインする上でアトリビュート分析は有効なヒントを与える。これら分析手法について演習とクラスディスカッションを交え、双方向かつ主体的に認識を深める。
第 8 講	
概要	まとめとディスカッション
事前、事後学習ポイント	イノベーターのための顧客創造戦略の全体像と要諦を理解する。
詳細	イノベーターのための顧客創造戦略について改めてクラスディスカッションを交えながら振り返り理解を深める。
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	「イノベーションのジレンマ」、「イノベーションの解」、「ブルーオーシャン戦略」など
参考文献・参考 URL /Reference List	講義の進展状況に応じて適宜クラス内で実施
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席（20%）、グループワーク、クラスディカッション（40%）、修了課題レポート(40%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	市場構造を変革し顧客を創造するイノベーションの理論、ツールを十分に理解し実務に応用できるスキルを習得している。講義で学んだ理論、スキルを実務で実践している。
評価： A（89～80 点）	市場構造を変革し顧客を創造するイノベーションの理論、ツールを概ね理解し実務に応用できるスキルを習得している。
評価： B（79～70 点）	市場構造を変革し顧客を創造するイノベーションの理論、ツールの基本を理解している。
評価： C（69～60 点）	市場構造を変革し顧客を創造するイノベーションの理論、ツールの理解が一部不十分。
評価： F（59 点～）	市場構造を変革し顧客を創造するイノベーションの理論、ツールの理解が不十分。
留意点 /Additional Information	クラスでの発表やディスカッションなどに積極的に参加しクラス全体の学びの向上に貢献すること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ビジネスモデル創造特論		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Business Model Generation in Practice		
教員/Instructor	河野　龍太	E-mail	kono-r@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

リーンスタートアップや顧客開発などの手法に代表される仮説検証型の事業創造の実践技法を習得する。講義期間を通じて、新しいビジネスアイデアを発想し仮説検証を通じて具体化し、それらのプロセスを受講生各自がプレゼンテーションする。対象者は、新事業開発のアイデアを持った経営者および経営者相当、起業家志望者、インントレプレナー（組織内起業家、新規事業開発担当）など。特に優秀な受講者は、世界的な起業プランコンテスト、ジャパン・ビジネスモデル・コンペティションのセミファイナルへ推薦する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP4:「表現と技能」と「知の再武装」を達成するために、自らが関与する新事業、既存事業のビジネスモデルの構想を描き仮説検証する実践演習とクラス講義内での繰り返しのプレゼンテーションを行うことを通じて、新ビジネスを立ち上げ軌道に乗せる実践的スキルとリーダーシップを修得する。

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内でのフィードバックに基づいた調査、課題図書、指定論文の予習。予習 1 時間程度、復習 1 時間程度。

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	自らの事業構想についてプレゼンテーションしクラスでディスカッションする。
事前、事後学習ポイント	ビジネスモデル創造の基本を理解する。ビジネスモデル・キャンバスなどの基本ツールを理解する。
詳細	リーンスタートアップの手法を応用し自ら実現したい事業構想、ビジネスアイデア、ビジネスコンセプト、ビジネスモデルについてプレゼンテーションし講師及び受講生のフィードバックを元にディスカッションする。
第 2 講	
概要	事業構想の仮説検証と変更についてプレゼンテーションしクラスでディスカッションする。
事前、事後学習ポイント	リーンスタートアップの内容と仮説検証の実践方法について調べて理解する
詳細	前回講義でプレゼンした事業構想やビジネスモデルについて仮説検証を行った結果を織り込んでどのようにビジネス構想を進化させたかの進捗をプレゼンテーションする。プレゼンについて講師及び受講生のフィードバックをうけディスカッションする。ディスカッションでのアドバイスや問題指摘に応じてビジネスプランの変更を検討する。
第 3 講	
概要	事業構想の仮説検証と変更についてプレゼンテーションしクラスでディスカッションする。
事前、事後学習ポイント	リーンスタートアップの内容と仮説検証の実践方法について調べて理解する
詳細	前回講義でプレゼンした事業構想やビジネスモデルについて仮説検証を行った結果を織り込んでどのようにビジネス構想を進化させたかの進捗をプレゼンテーションする。プレゼンについて講師及び受講生のフィードバックをうけディスカッションする。ディスカッションでのアドバイスや問題指摘に応じてビジネスプランの変更を検討する。
第 4 講	
概要	事業構想の仮説検証と変更についてプレゼンテーションしクラスでディスカッションする。
事前、事後学習ポイント	リーンスタートアップおよび仮説検証の様々な実例（成功例）を調べる
詳細	前回講義でプレゼンした事業構想やビジネスモデルについて仮説検証を行った結果を織り込んでどのようにビジネス構想を進化させたかの進捗をプレゼンテーションする。プレゼンについて講師及び受講生のフィードバックをうけディスカッションする。ディスカッションでのアドバイスや問題指摘に応じてビジネスプランの変更を検討する。
第 5 講	
概要	事業構想の仮説検証と変更についてプレゼンテーションしクラスでディスカッションする。
事前、事後学習ポイント	リーンスタートアップおよび仮説検証の様々な実例（失敗例）を調べる
詳細	前回講義でプレゼンした事業構想やビジネスモデルについて仮説検証を行った結果を織り

	込んでどのようにビジネス構想を進化させたかの進捗をプレゼンテーションする。プレゼンについて講師及び受講生のフィードバックをうけディスカッションする。ディスカッションでのアドバイスや問題指摘に応じてビジネスプランの変更を検討する。
第 6 講	
概要	事業構想の仮説検証と変更についてプレゼンテーションしクラスでディスカッションする。
事前、事後学習ポイント	リーンスタートアップおよび仮説検証の組織での活用方法を調べる
詳細	前回講義でプレゼンした事業構想やビジネスモデルについて仮説検証を行った結果を織り込んでどのようにビジネス構想を進化させたかの進捗をプレゼンテーションする。プレゼンについて講師及び受講生のフィードバックをうけディスカッションする。ディスカッションでのアドバイスや問題指摘に応じてビジネスプランの変更を検討する。
第 7 講	
概要	事業構想の仮説検証と変更についてプレゼンテーションしクラスでディスカッションする。
事前、事後学習ポイント	仮説検証からピボットして成功した実践例を調べる
詳細	前回講義でプレゼンした事業構想やビジネスモデルについて仮説検証を行った結果を織り込んでどのようにビジネス構想を進化させたかの進捗をプレゼンテーションする。プレゼンについて講師及び受講生のフィードバックをうけディスカッションする。ディスカッションでのアドバイスや問題指摘に応じてビジネスプランの変更を検討する。
第 8 講	
概要	事業構想の仮説検証と変更についてプレゼンテーションしクラスでディスカッションする。
事前、事後学習ポイント	ビジネスモデルをスケールアップする方法論を調べる
詳細	前回講義でプレゼンした事業構想やビジネスモデルについて仮説検証を行った結果を織り込んでどのようにビジネス構想を進化させたかの進捗をプレゼンテーションする。プレゼンについて講師及び受講生のフィードバックをうけディスカッションする。ディスカッションでのアドバイスや問題指摘に応じてビジネスプランの変更を検討する。
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	「バリュー・プロポジション・デザイン」アレックス・オスターワルダー、イヴ・ピニュール他著、翔泳社（教科書）
参考文献・参考 URL /Reference List	「リーンスタートアップ」エリック・リース著（教科書）、日経 BP、「ビジネスモデル・ジェネレーション」アレックス・オスターワルダー、イヴ・ピニュール著、翔泳社、「競争優位の終焉」リタ・マグレイス著、日本経済新聞出版社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	プレゼンテーション（50%）、ディスカション（50%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	周囲を巻き込みイノベーションを実現する力を習得し、新事業、既存事業のビジネスモデルの構想を描き仮説検証を通じて実際のビジネスとして立ち上げる実践的スキルとリーダーシップを高度に身につけている。自らのビジネス構想の事業化をスピーディーかつ効果的に実行した。
評価： A（89～80 点）	周囲を巻き込みイノベーションを実現する力を習得し、新しいビジネスモデルの構想を描き仮説検証を通じて実際のビジネスとして立ち上げる実践的スキルとリーダーシップを身につけている。
評価： B（79～70 点）	周囲を巻き込みイノベーションを実現する力を習得し、新しいビジネスモデルの構想を描き仮説検証を通じて実際のビジネスとして立ち上げる実践的スキルとリーダーシップの基本を身につけている。
評価： C（69～60 点）	新しいビジネスモデルの構想を描き仮説検証を通じて実際のビジネスとして立ち上げる基本を身につけているが不十分。
評価： F（59 点～）	新しいビジネスモデルの構想を描き実際のビジネスとして具体化する基本的な力を身につけたが不十分。仮説検証の理解とスキルの実践が不足。
留意点 /Additional Information	クラスでのプレゼンテーションやディスカッションなどに積極的に参加しクラス全体の学びの向上に貢献すること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	経営戦略概論		
サブタイトル/Sub Title	経営戦略策定と意思決定		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Basic Business strategy building		
教員/Instructor	前川　慶一	E-mail	maekawa-k@tama.ac.jp kmaekawa@dj9.so-net.ne.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

一企業が自社の持つコンピテンスやリソースの制約の中ですべての領域でリーダーになって高い利益を享受することは難しく、それゆえ企業は戦略を持ってリソースを重点配分し、激しい戦いを避けながら目指す目標を達成することが求められる。本講座では戦略策定にあたって考えるべきポイント、戦略策定手法、意思決定を含む戦略策定のプロセス等を理解しながら、いかに経営戦略を策定し、実行していくか、自ら考えながら学んでいただく。

到達目標/Course Goals

経営戦略策定の手法とそれぞれの手法に適した使い方を理解・習得し、置かれている状況を分析、環境変化を察知して課題を設定し、現状を変革しようとする意志力を持って戦略を策定できる資質を身につけ、ディプロマポリシー「DP2: 思考と判断（実践知考具をもとにした知的課題解決力）」の能力向上を図る。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション　グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容理解のための復習（各回 1 時間程度）とケーススタディの予習（第 3 講：2 時間程度、第 5 講＆第 6 講：4 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	概論
事前、事後学習ポイント	事後：戦略策定ツールの習得
詳細	経営戦略の構造と戦略策定ツール（講義）、 企業分析のケーススタディ（グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向論議）
第 2 講	
概要	戦略策定法と実習（1）
事前、事後学習ポイント	事後：プロダクトポートフォーリオマネジメント・競争戦略の考え方・活用領域・手法の理解、及び次回に論議するケースの学習
詳細	PLC 理論と PPM=プロダクトポートフォーリオマネジメント（講義）、 PPM ケーススタディ（グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向論議）、 M.ポーターの競争戦略（講義）、
第 3 講	
概要	戦略策定法と実習（2）
事前、事後学習ポイント	事前：第 2 講で配布するケーススタディ（戦略分析）の学習（2 時間程度） 事後：学習した各戦略の考え方・活用領域・ポイントの理解
詳細	ブルーオーシャン戦略（講義）、ランチェスター戦略（講義）、P.コトラーの業界地位別戦略（講義）、 競争戦略の視点からのケーススタディ（グループディスカッション　グループワーク、プレゼンテーション、双方向論議）
第 4 講	
概要	経営の意思決定
事前、事後学習ポイント	事後：経営(戦略策定)の意思決定プロセスのポイントの理解
詳細	戦略検討・決定のプロセスと手法、不確実性の中での意思決定（講義）、 キャッシュフロー基礎のケーススタディ（双方向論議）
第 5 講	
概要	全社戦略（多角化、合従連衡）、ケーススタディ　経営戦略分析

事前、事後学習ポイント	事前：事前配布したケースの戦略・成功要因分析、意見のまとめ（4 時間程度） 事後：事業拡大を考える際の適切な方策の理解
詳細	不連続な事業拡大を狙う方策としての多角化・M&A・アライアンス戦略（講義）、事前学習した企業戦略と経営課題の分析（グループディスカッション　グループワーク、プレゼンテーション、双方向論議）
第 6 講	
概要	機能別戦略、地域戦略の策定
事前、事後学習ポイント	事前:第 4 講で提示するキャッシュフロー検討に基づく生産戦略ケーススタディ(4 時間程度) 事後：ケーススタディ結果および機能別戦略策定のポイントの理解
詳細	機能別戦略(技術戦略、開発戦略、生産戦略、購買戦略)、地域戦略策定のポイント 生産戦略のケーススタディ（グループディスカッション、双方向論議）
第 7 講	
概要	商品戦略の策定
事前、事後学習ポイント	事後：STP マーケティングの習得、および商品戦略策定に当たって考えるべきポイントの理解
詳細	マーケティングの基礎知識、商品戦略策定プロセス（主にプロダクトポートフォーリオ）及び手法 セグメンテーションのケーススタディ（グループディスカッション、双方向論議）
第 8 講	
概要	まとめ　（約 90 分）
事前、事後学習ポイント	事後：自社・個人の課題への活用の可能性の検討
詳細	第 1 講～第 7 講のポイントのまとめ
教科書 /Textbook	毎回、講義資料を配布
指定図書 /Course Readings	特になし
参考文献・参考 URL /Reference List	各回の講義資料に記載
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席：授業・グループディスカッション参画度：レポート＝３０：３０：４０
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	出席率が高く、授業・グループディスカッションに積極的に参画して発言し、かつ最終レポートにて説得力のある自らの戦略提案を行っている
評価： A（89～80 点）	出席率が高く、授業・グループディスカッションに積極的に参画して発言し、かつ最終レポートに自ら考えた戦略的視点が見られる
評価： B（79～70 点）	2/3 以上出席に加えて、授業・グループディスカッションに参画して発言、または最終レポートに自ら考えた戦略的視点が見られる
評価： C（69～60 点）	2/3 以上出席しているが、最終レポートに自らの戦略的な視点があまり見られない
評価： F（59 点～）	出席不良かつ、最終レポート未提出
留意点 /Additional Information	積極的にディスカッションに参加してください。 財務、マーケティングの基礎知識を有していると理解しやすい部分があります 最終レポートについては後でフィードバックを送ります。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	実践アントレプレナーシップ		
サブタイトル/Sub Title	事業創造の理論と演習		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Entrepreneurial Management		
教員/Instructor	本荘 修二	E-mail	shuji@honjo.biz
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ベンチャー企業、大企業の新事業（新製品・サービス、事業転換を含む）など事業創造のための基礎としての知識、技術、思考法を学ぶ。アイデアなどシーズ（種）づくり、そこから実行に値する事業案に練り上げるための力を養う。対象は、起業家、社内起業家からチーム･メンバー、投資家、支援者まで事業創造に関わる、あるいはそれを志す人。

到達目標/Course Goals

DP4:「表現と技能」に資する理論的バックボーン習得とともに、新事業の立案や既存事業への戦略的代替案の策定を試み、受講生による発表とディスカッションなど演習を行い、事業創造の実践力を養う。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし（仮説検証は学外を含む）
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容の復習と指定文献の独修、演習の準備（新事業の立案、仮説の構築と検証、グループワーク、プレゼンテーション作成・練習）。講義では事前準備に 1 時間、復習に 1 時間程度。演習では事前準備に 2-3 時間程度。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	アントレプレナーシップ概論
事前、事後学習ポイント	事業創造とは何か、事業創造を実現する人材と関係者、事業創造の学習法
詳細	新事業とイノベーション、起業人材、ベンチャーのコミュニティなどのアントレプレナーシップ実践のための基礎知識を整理し、双方向の議論を行う。また、事業創造の（準備が要らない）予行演習を行う。 宿題：ゲスト講義以外に、第 6 講までの講義を一人一回以上、講義レポートとして提出する（受講者とシェアしフィードバックを行う）。
第 2 講	
概要	事業創造の技術
事前、事後学習ポイント	事業機会特定、リーン・スタートアップ、新事業マーケティング、事業転換
詳細	事業機会の特定（Opportunity Recognition）について講義とともに双方向の議論を行う。これを踏まえて、リーン･スタートアップの方法論と新事業マーケティングについて学習する。さらに、事例を交えて既存事業の転換について双方向の議論を行う。 宿題：グループ演習のテーマの提案。
第 3 講	
概要	新事業のモデリング
事前、事後学習ポイント	ビジネスモデル、事業評価 グループ演習 I
詳細	各種ツールとともにビジネスモデルづくり、そして事業評価について学び、双方向の議論を行う。 また、グループ演習の班分けを行い、各班でグループディスカッションし、テーマ設定、プレゼンテーションへの準備などのグループワークを行う。 宿題：第 5 講でのプレゼンテーションに向けて、各班はグループワークで準備する。
第 4 講	
概要	個人演習 I、ゲスト講義
事前、事後学習ポイント	個人演習の準備　、ゲスト講義
詳細	個人の研究課題として立案したテーマのショート・プレゼンテーションと双方向の議論ならびに全員参加のグループディスカッションを行う（事前に発表準備、事後にテーマ練り上げ・練り直し）。 ゲスト講義（経営者・新事業マネジャーによる）は、双方向の質疑応答も行う（事前に質問準備、事後に学びの整理）。 宿題：妥当となったテーマは、事業コンセプトに発展させ、仮説の構築と検証に着手する。 宿題：ゲスト講義レポートを全員提出する（講師からのコメントと追加議論を次回に）。

第 5 講	
概要	グループ演習 II、起業の方法論
事前、事後学習ポイント	グループ演習発表 ビジネスプラニング、実践新事業マーケティング
詳細	グループ演習のテーマについて、各班がプレゼンテーションし、双方向の議論ならびに全員参加のグループディスカッションを行う。グループ演習では、異なる経験・専門性を持つメンバーとのグループワークを通して、自己に閉じないアイデアの発展のさせ方や視点の持ち方、他力をいかに活用するか、といった事業創造のスキル獲得を図る。 新事業におけるビジネスプラニングについて、そして起業のための実践的なマーケティングについて学び、切り口や視点の持ち方について双方向に議論する。
第 6 講	
概要	個人演習 II、起業のファイナンス
事前、事後学習ポイント	個人演習の準備 ベンチャーキャピタルとファイナンス
詳細	個人の研究課題（事業案）のプレゼンテーションを実施し、中間レビューを双方向の議論ならびに全員参加のグループディスカッションで行う。なお、発表内容を問うものでなく、最終プレゼンテーションに向けて事業案を練り上げることをねらう。したがって、他の受講者の事業案の改善・転換や発展への貢献が期待される。 また、ベンチャーキャピタルと起業のファイナンスについて学び、双方向に議論を行う。 宿題：事業案を練り上げ、仮説の構築と検証を進め、改善・転換（Pivot）する。
第 7 講	
概要	個人演習 IIIa
事前、事後学習ポイント	個人演習最終プレゼンテーションの準備
詳細	個人の研究課題（事業案）の最終プレゼンテーションと双方向の議論ならびに全員参加のグループディスカッションを行う。プレゼンの内容とともに、それに至る事業案の改善や転換（Pivot）ならびに仮説検証についても考察し、議論する。
第 8 講	
概要	個人演習 IIIb、総括
事前、事後学習ポイント	個人演習最終プレゼンテーションの準備、本講座トータルのおさらい
詳細	個人の研究課題（事業案）の最終プレゼンテーションと双方向の議論ならびに全員参加のグループディスカッションを行う。プレゼンの内容とともに、それに至る事業案の改善や転換（Pivot）ならびに仮説検証についても考察し、議論する。 また、講義全体を振り返っての総括を行う。
教科書 /Textbook	適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	オンライン記事『インキュベーションの虚と実』 http://diamond.jp/category/s-incubation （読む箇所を指定）
参考文献・参考 URL /Reference List	「成功するビジネスプラン」伊藤良二著、「Running Lean ―実践リーンスタートアップ」アッシュ・マウリャ著、「なぜ新規事業は成功しないのか―「仮説のマネジメント」の理論と実践」大江建著。また、必要に応じて追加の参考文献を紹介。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席(25%)、授業での議論参加ならびに貢献度(25%)、講義レポート（10%）、グループ演習(10%)、個人演習（30%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	事業創造の理論を応用し、授業での参加・貢献、演習の内容が特に充実している。
評価： A（89～80 点）	事業創造の理論を理解し、授業での参加・貢献、演習の内容が充実している。
評価： B（79～70 点）	授業での参加・貢献、演習の内容が、おおむね良好である。
評価： C（69～60 点）	授業での参加・貢献、演習の内容が、最低限の水準を満たしている。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業での参加・貢献、演習の内容が不十分。
留意点 /Additional Information	メーリングリスト（あるいは Facebook グループ）で継続的にコミュニケーションを行う（講義レポートのフィードバックを含む）。なお、受講者の特性に応じて講義内容は調整を試みる。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	グローバル技術経営論		
サブタイトル/Sub Title	グローバル視点でのイノベーション・マネージメントおよび定石論		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Global Management of Technology		
教員/Instructor	楠田 幸久	E-mail	kusuda@tama.sc.jp
科目群/Course Classification	イノベーション	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

近年グローバル化、IT 化、製品のデジタル化が著しく進み、産業・製品の構造が大きく変わりつつある。過去、日本が得意であった「インテグレーション（すり合わせ）」から「モジュラー（組み合わせ）」技術・製品・ビジネスモデルへシフトし、日本の製造業全体の凋落が起こってしまった。一方、グローバルの視点からみれば技術・製品・ビジネスモデルのイノベーションは益々重要となり、変革・発展し続けている。

本講義では、このような現状を踏まえ、その基本的な考え方である「グローバル経営論」「イノベーション論」「研究開発論」を整理する。これらの中から「定石」ともいうべき本質的考え方をピックアップし、実際例について議論することで理解してもらう。またお呼びしたゲストによる業界例の紹介、受講者自身のプロダクトに関するディスカッションによって、受講者各位に理解を深めてもらう。

到達目標/Course Goals

ディプロマシーでの「DP1：知識と理解」を達成するため、「グローバル企業経営」、「製品戦略の基礎」、「イノベーションの考え方」、「ビジネスモデルの重要性」等について学ぶ。また講義での議論およびゲストとの議論を通じて、これらを「定石」として学生自身のプロダクト戦略に活用できる力を養成する。

授業形態 /Form of Class	講義、プレゼンテーション、ディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：予習に十分な時間をとる（2 時間程度） 事後学習：講義内容の整理および指定図書の精読（2 時間程度）、並びに指定課題に関するプレゼンテーション準備（3-4 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション。
事前、事後学習ポイント	本講義の全体像の説明。グローバル化、デジタル・モジュラー化、オープン化の概論。グローバル化の大潮流。
詳細	本講義の全体像を説明する。主としてグローバル経営論、プロダクト論、イノベーション論の概要を説明し、本講義の全体像を把握する。 課題：受講者各位に課題を出し、第 4 講にてプレゼンテーションを行ってもらう。
第 2 講	
概要	グローバル経営論
事前、事後学習ポイント	グローバル経営論の基礎、「I-R フレームワーク」「トランスナショナル経営論」。
詳細	グローバルに展開する企業の考え方について整理する。主としてトランスナショナル経営論とその基礎である I-R フレームワークを説明する。現実の企業事例について討議する。 ゲストプレゼンテーション及びディスカッション。
第 3 講	
概要	プロダクト論
事前、事後学習ポイント	製品のアーキテクチャー論、「モジュラー」と「インテグラル」論。
詳細	最も有名なプロダクトのアーキテクチャー論を説明する。これは「組み合わせ」と「擦り合わせ」技術論とも呼ばれ、日本の製造業の強みを説明する理論であり、その概要を説明し、受講者各位の製品についてのディスカッションを行う。 ゲストプレゼンテーション及びディスカッション。
第 4 講	
概要	イノベーション論 1
事前、事後学習ポイント	クリステンセンの「イノベーションのジレンマ」、製品のライフサイクル・イノベーション論。キャズム論。
詳細	製品の下克上を説明したクリステンセンの破壊的イノベーション論、事業が生まれてから死ぬまでの経緯を示すライフサイクル・イノベーションを中心に説明し、具体的事例についてディスカッションを行う。課題の発表：第 1 講で出した課題について受講者のプレゼンテーション及びディスカッション。

第 5 講	
概要	イノベーション論２
事前、事後学習ポイント	「オープンイノベーション」と「クローズドイノベーション」。
詳細	イノベーションの加速のための「オープン」、自らの強みを作り込むための「クローズ」。これらのイノベーション論の説明と、どうバランスを取りながらどのように進めて行くべきかについてディスカッションする。 ゲストプレゼンテーションおよびディスカッション。
第 6 講	
概要	研究開発論
事前、事後学習ポイント	研究開発から事業化までの道のり。「死の谷」、「魔の川」、「ダーウィンの海」。
詳細	MOT（技術経営論）で一般的に言われる研究開発から事業化までの道のりについて説明する。この考え方は企業の研究開発の根幹になっているものであり、新商品、新技術の研究開発の進め方、考え方、問題点について整理する。具体的事例に関するディスカッション。 課題：最終講義の際に報告する課題のテーマを提示する。 ゲストプレゼンテーション及びディスカッション。
第 7 講	
概要	アジアの市場動向
事前、事後学習ポイント	中国・アジア市場の現状と今後
詳細	日本にとって重要なアジア市場の現状と今後について紹介する。アジア市場で実際に仕事されているゲストをお呼びし、現実に起こっている事等を紹介して頂き、ディスカッションを行う。ゲストプレゼンテーション及びディスカッション。
第 8 講	
概要	本講義のまとめ
事前、事後学習ポイント	ビジネスモデルの定石論と学生各位のレポート発表。
詳細	本講義のまとめ(イノベーションにおける定石とは)を行い、第 6 講の際に示した課題②についての学生各位のレポート発表及びディスカッションを行う。
教科書 /Textbook	毎回講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	浅川和宏「グローバル経営入門」（日本経済新聞社） 延岡健太郎「MOT 技術経営入門」（日本経済新聞社）
参考文献・参考 URL /Reference List	クレイトン・クリステンセン　「イノベーションのジレンマ」（翔泳社） ジェフリー・ムーア　「ライフサイクル・イノベーション」（翔泳社） ヘンリー・チェスブロー　「OPEN　INNOVATION」（産能大出版部）
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(30%)、授業内での積極的議論参加(30%)、課題プレゼンテーション及びレポートの内容(40%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	イノベーション論の理解、討論およびプレゼンテーションが優れていることに加え、自らの意見、考え方を提案できる。
評価： A（89～80 点）	イノベーション論を良く理解し、討論およびプレゼンテーションが優れている。
評価： B（79～70 点）	授業内議論及び課題プレゼンテーションの内容が良い。
評価： C（69～60 点）	授業内議論及び課題プレゼンテーションの内容が不十分。
評価： F（59 点～）	出席不良、授業内議論及び課題プレゼンテーションの内容が不十分。
留意点 /Additional Information	プロダクトのイノベーションを中心にその「定石」となる考え方を整理し、各位が自らの業務に役立てることができることを目標とする。 ゲストをお呼びするが、その内容、日程については変更の可能性がある。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	マーケティングマネジメント概論		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Marketing Management		
教員/Instructor	河野 龍太	E-mail	kono-r@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	顧客創造	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

マネジメントの父である故ドラッカー博士はあらゆる組織に必須の最も重要な２つの機能としてマーケティングとイノベーションをあげた。激しい競争と市場の成熟化が進む今日において、顧客を創造し事業を成長に導く経営戦略のカギとしてマーケティング戦略の重要性はさらに増している。本講義では、21 世紀の経営環境に適応するための新しいコンセプトも織り込みながら、現代におけるマーケティング・マネジメントの基本と本質を理解し、実際の問題解決に応用できる実践的な知識とスキルの修得を目指す。

到達目標/Course Goals

DP2:「思考と判断」と「知の再武装」を達成するために、デジタルテクノロジーとソーシャルメディア時代のマーケティング・マネジメントの理論と 3C、STP、4P などの基本フレームワークとそれらを実践で活用する実践知とスキルを習得する。

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容の咀嚼と指定図書、資料の熟読 予習２時間程度、復習１時間程度。

講義概要/Course Description　全８講　第１講～第７講は各 90 分×2 講座 第８講は 90 分

第１講	
概要	顧客視点の経営戦略の論理
事前、事後学習ポイント	マーケティングの経営における目的と役割について調べる
詳細	経営におけるマーケティングの本質について理解を深める。21 世紀において市場が成熟化する中で差別化が容易ではなくなっている。供給者サイドの論理ではなく顧客側の視点で価値を考えて商品サービスをデザインすることが一層重要になっている。今日の企業経営におけるマーケティングの本質的役割や意義をセオリー、事例を元にクラスディスカッションをしながら双方向かつ主体的に認識を深める。
第２講	
概要	事業環境を認識する
事前、事後学習ポイント	3C、SWOT、5F など代表的フレームワークと分析方法について調べる
詳細	マーケティング戦略を構築する上では、マクロ経済、市場、政治や社会動向、競合動向、テクノロジーなど事業環境における様々な事実に基づいた客観的認識を持つことが欠かせない。事業環境分析の方法、基本的フレームワークを理解し分析から戦略的洞察の導き方までを事例分析とクラスディスカッションを交えながら双方向かつ主体的に認識を深める。
第３講	
概要	顧客を深く理解する
事前、事後学習ポイント	顧客と市場を深く理解し経営に活かして成功している企業の実例を調べておく
詳細	顧客視点での価値創造のポイントは、顧客を深く理解することにある。マーケティング戦略の起点が顧客への深い理解にあることを認識した上で、どうすれば顧客への深い理解や洞察を得ることができるのかをセオリー及び具体的な経営の事例を元に考察する。さらにクラスディスカッションを交え、双方向かつ主体的に認識を深める。
第４講	
概要	マーケティングの基幹戦略をデザインする（１）
事前、事後学習ポイント	セグメンテーション、ターゲティング、ポジショニングについて調べる
詳細	マーケティング戦略の根幹であるセグメンテーション、ターゲティング、ポジショニング、コンセプトデザインについて理解を深める。STP 戦略の基本セオリーを学び具体的な経営の事例を交えながらクラスディスカッションを行い、その本質と戦略構築の実践方法について双方向かつ主体的に理解をする。
第５講	
概要	マーケティングの基幹戦略をデザインする（２）
事前、事後学習ポイント	セグメンテーション、ターゲティング、ポジショニングの実務での応用例について調べる

詳細	マーケティング戦略の根幹であるセグメンテーション、ターゲティング、ポジショニング、コンセプトデザインについて理解を深める。STP 戦略の基本セオリーを学び具体的な経営の事例を交えながらクラスディスカッションを行いその本質と戦略構築の実践方法について理解をする。
第 6 講	
概要	統合的マーケティング戦略のデザインと実施
事前、事後学習ポイント	STP 戦略を 4P に落とし込み統合的にマーケティングを実行する方法を調べる
詳細	STP やコンセプトに代表されるマーケティング戦略の基幹的な方針を相互に一貫性のある形で組み上げ 4 P（商品、価格、流通、プロモーション）の各具体的施作に落とし込んで実行する。このような戦略デザインから戦術への具体化と実行、成果の診断とフィードバックまでのマーケティング戦略の全体サイクルについて理解する。顧客価値を創造する上でサービスの役割重要になっている。サービスのマーケティングの基本についても学ぶ。
第 7 講	
概要	顧客価値を維持発展させる
事前、事後学習ポイント	ブランド戦略の論理と実践方法について調べる
詳細	マーケティング・マネジメントの発展的目的としてブランド戦略について理解をする。ブランドエクイティ論に代表されるように今日の企業経営においてブランド・マネジメントは極めて重要な役割を担っている。企業経営におけるブランド・マネジメントの本質について考察し、ブランド戦略を構築するための基本セオリー、フレームワーク、実践的方法について、事例とクラスディスカッションを交えて理解を深める。これらテーマについて各種事例を随時に交えながらクラスディスカッションを行う。
第 8 講	
概要	顧客視点の経営戦略の課題と実践：まとめとディスカッション
事前、事後学習ポイント	これまでの講義を振り返りマーケティング・マネジメントの全体像を理解する
詳細	顧客起点の経営戦略を具体化する上で要となるマーケティング戦略は、市場が成熟化し競争がグローバルレベルでますます激化する現代の企業経営において重要性が増している。本講義で取り上げたマーケティング・マネジメントの基本的なコンセプトと本質について改めてクラスディスカッションを交えながら振り返り理解を深める。
教科書 /Textbook	「コトラーのマーケティング 3.0」フィリップ・コトラー著、朝日出版
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	「コトラーの戦略的マーケティング」フィリップ・コトラー著、ダイヤモンド社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席（20%）、グループワーク、クラスディカッションへの貢献（40%）、修了課題レポート（40%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	マーケティング・マネジメントのセオリーを十分に理解し自らの実務で応用可能なレベルの知識、スキルを身につけている。それらを実際に自分自身のビジネスの現実の問題解決に活用した。課題レポートにおいてマーケティング・マネジメントのセオリーと実践スキルを適切に活用し卓越した分析と提言を行った。
評価： A（89～80 点）	マーケティング・マネジメントのセオリーを理解し自らの実務で活用可能なレベルの知識、スキルを身につけている。課題レポートにおいてマーケティング・マネジメントのセオリーと実践スキルを活用し的確な分析と提言を行った。
評価： B（79～70 点）	マーケティング・マネジメントの基本的なセオリーを理解している。それらを実務で応用できる基本的スキルを習得している。課題レポートにおいてマーケティング・マネジメントの基本的セオリーを理解し分析と提言を行っている。
評価： C（69～60 点）	マーケティング・マネジメントの基本的なセオリーを理解している。課題レポートにおいてマーケティング・マネジメントの基本的セオリーを理解し分析を行っているが内容及び理解が不十分な点がある。
評価： F（59 点～）	マーケティング・マネジメントの基本的なセオリーを理解している。課題レポートにおいてマーケティング・マネジメントの分析を行っているが内容及び理解が不十分な点が少なくない。
留意点 /Additional Information	クラスでの発表やディスカッションなどに積極的に参加しクラス全体の学びの向上に貢献すること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	インサイトコミュニケーション		
サブタイトル/Sub Title	図解コミュニケーション力を身につけ洞察力を磨く		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Insight Communication		
教員/Instructor	久恒　啓一	E-mail	hisatsune@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	顧客創造	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

文章と箇条書きを中心とするコミュニケーションの欠如と混乱を克服する「図解コミュニケーション」の考え方と技術を学ぶ。時代認識と世界認識を題材に、ビジネスの現場で生起する様々の問題を解決する論理的思考力と洞察力を、実践を通じて身に付け、知の再武装のための武器を身につける。

到達目標/Course Goals

時代認識と世界認識に対する深い理解と技術を身につけることによって知的課題解決力を獲得する。具体的には、新聞の社説や「日本の論点」（文藝春秋）の論文などを１枚の図解として表現できるまでになる。DP2:「思考と判断」、DP4:「表現と技能」に関連。

授業形態 /Form of Class	講義・グループディスカッション・グループワーク・プレゼンテーション・双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	予習：前回作成した図解の修正作業。1時間 復習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。1時間		

講義概要/Course Description　全８講　第１講～第７講は各 90 分×2 講座 第８講は 90 分

第１講	
概要	図解コミュニケーション概要 図解コミュニケーションの理論を学ぶ
事前、事後学習ポイント	事後学習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。制作した図解の修正。
詳細	文章と箇条書きの問題点。図解思考の有効性。具体例の提示。 マルと矢印の使い方。
第２講	
概要	私の仕事 受講者自身の仕事を題材に、図解の技術を学ぶ。
事前、事後学習ポイント	事後学習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。制作した図解の修正。
詳細	各人が取り組んでいる仕事を図解で表現する実習。 個人作業。グループディスカッション。全体発表。発表者に図解について講評を行う。
第３講	
概要	政治 主要４紙・新聞の政治記事を図解しグループディスカッション、プレゼン。
事前、事後学習ポイント	事後学習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。制作した図解の修正。
詳細	割り当てられた政治記事を図解で表現する。 個人作業。グループでのプレゼンと議論。全体発表。発表者に図解について講評を行う。
第４講	
概要	経済 主要４紙の経済記事を図解し、グループディスカッション、プレゼンテーション。
事前、事後学習ポイント	事後学習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。制作した図解の修正。
詳細	割り当てられた経済記事を図解で理解し表現する。 個人ワーク、グループプレゼン、ディスカッション。全体発表。発表者に図解について講評を行う。
第５講	
概要	図解文章法 図解を用いた修士論文の書き方講座。
事前、事後学習ポイント	事後学習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。制作した図解の修正。
詳細	図解で論文全体の構想と関係を把握する。 完成した図解を見ながら文章化する作業を体験する。

第 6 講	
概要	文化 日本文化に関する資料を題材に図解に取り組み、プレゼンテーション。
事前、事後学習ポイント	事後学習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。制作した図解の修正。
詳細	割り当てられた日本文化に関する記事を題材に図解で表現する。 個人ワーク、グループプレゼン、ディスカッション。全体発表。発表者に図解について講評を行う。
第 7 講	
概要	政党の綱領・公約を図解し、プレゼンと議論。
事前、事後学習ポイント	事後学習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。制作した図解の修正。
詳細	割り当てられた公約を題材に図解で表現する。 個人ワーク、グループプレゼン、ディスカッション。全体発表。発表者に図解について講評を行う。
第 8 講	
概要	「日本の論点」（文藝春秋）を題材に図解、プレゼン、議論。
事前、事後学習ポイント	事後学習：まとめ･気づき・感想などの Facebook への書き込み。制作した図解の修正。
詳細	割り当てられた小論文を理解しながら図解で表現する。 個人ワーク。グループワーク。全体発表。発表者に図解について講評を行う。
教科書 /Textbook	毎回資料を配付
指定図書 /Course Readings	「図で考える人は仕事ができる」（日本経済新聞出版社）
参考文献・参考 URL /Reference List	久恒啓一の著作 久恒啓一図解 Web ： http://www.hisatune.net
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率 30%／講義議論参画度 40%／最終レポート 30%　3 点の総合評価 インサイトコミュニケーション 2020 の Facebook において、評価のコメントを返す。
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内での議論への参画度が高く、図解作品とプレゼンも極めてレベルが高い。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論への参画度が高く、図解作品とプレゼンもレベルが高い。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論に積極的に参加している。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論への参加ができている。
評価： F（59 点～）	出席不良。授業への取り組みが芳しくない。
留意点 /Additional Information	・コミュニケーションスキルの育成が経営実践のキーであるので議論には積極的に参画すること。 ・毎回実習を行うなかで力をつけていくので、毎回の出席が望ましい。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	Web マーケティング戦略		
サブタイトル/Sub Title	デジタルマーケティングの理解と活用		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Marketing Theory		
教員/Instructor	土屋　有	E-mail	happy@cc.miyazaki-u.ac.jp
科目群/Course Classification	顧客創造	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

受講生の担当事業及び企業戦略、デジタルシフトを理解、活用を前提としたマーケティングの視点から構想、構築する力を身につける。デジタル・マーケティングの本質を理解し、事業成功のための要諦の理解と実現性の高い事業計画をたてるための実践理論および実現力を習得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマ・ポリシーでの DP1:「知識と理解」と DP2:「思考と判断」を達成するために、「マーケティング戦略」をもとに上記目的に資する「顧客視点理解」と「デジタルシフト」を利活用して、実践的な事業経営に必要な判断ができるようになる。そのために、マーケティング基礎からモデルケースとなるデジタルビジネスを実践する企業担当者をゲストに迎えてのケース・ディスカッション、プレゼンテーションを通じて事業計画の設計及び提案できる力を修得する。

授業形態 /Form of Class	グループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：予習に十分な時間をとること（2 時間程度） 事後学修：毎授業後に復習及びレポートを提出すること（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション　デジタルマーケティングの振り返りと生態系
事前、事後学習ポイント	自社及び自らのキャリア、ライフスタイルの変化を 10 年 3 年 5 年 10 年で変化してきた点を確認しておく。
詳細	自らの受講動機及び大学院修了時のゴール設定を再確認した上で、受講へ向けた問題意識を言語化しておくことを求める。
第 2 講	
概要	デジタルマーケティング、ダイレクトマーケティングの基礎理解　1
事前、事後学習ポイント	直接・間接に関わらずデジタル化に伴う社内業務、社外業務の変化について言語化し、変化を起因とするプラス/マイナスの効果について確認しておく。
詳細	事業に携わる立場だけでなく、一消費者として消費行動の変化及び企業の置かれるマーケット環境の変化を理解する。
第 3 講	
概要	デジタルマーケティング、ダイレクトマーケティングの基礎理解　2
事前、事後学習ポイント	直接・間接に関わらずデジタル化に伴う社内業務、社外業務の変化について言語化し、変化を起因とするプラス/マイナスの効果について確認しておく。
詳細	事業に携わる立場だけでなく、一消費者として消費行動の変化及び企業の置かれるマーケット環境の変化を理解する。
第 4 講	
概要	カスタマーサクセスからとらえるマーケティングの変化
事前、事後学習ポイント	事前に設定された自社の顧客との接点及び顧客への提供価値（提供側、顧客側）の変化を事前に確認しておく。
詳細	カスタマーサクセスの変遷と現在のトレンドと方向性を捉え、事業課題についてカスタマーサクセスの視点から解決するアプローチを理解する。
第 5 講	
概要	カスタマーサクセスからとらえるマーケティングの変化
事前、事後学習ポイント	指定されたケース企業・サービスについて分析を行い、強み、課題について分析をしてくる。
詳細	カスタマーサクセス観点によるマーケティング分析力を学修する。
第 6 講	
概要	最新のマーケティング事例の理解とケースディスカッション
事前、事後学習ポイント	招聘するゲスト経営者の事業について分析しておく。
詳細	過去から現在までの変化を踏まえ、今後の顧客及び市場環境の変化を捉えたマーケティング戦略について知識獲得及びケースディスカッションを行う。

第 7 講	
概要	ケースワークを前提としたマーケティング分析の実施
事前、事後学習ポイント	取り扱うケースについての読み込みと理解、仮説設計を行う
詳細	学修した理論を活用し、実践的アプローチによる分析を行う。
第 8 講	
概要	受講生の事業課題へのマーケティング理論活用による改善企画の発表
事前、事後学習ポイント	過去の受講により得た知識とアプローチによる事業課題整理と施策について資料化して準備すること。
詳細	本講義において学修した点を自社事業と連結させアウトプットさせることを目標とする。 講義において提出されたレポートのフィードバックを行う。
教科書 /Textbook	講義資料を適宜配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	「コトラー＆ケラーのマーケティング・マネジメント第 12 版」2014,丸善出版 「コトラーのマーケティング 4.0 スマートフォン時代の究極法則」2017,朝日新聞出版
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席：ディスカッション：レポート：プレゼンテーション　25:25:25:25
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	自社の事業課題についてデジタルシフトを前提としたマーケティング計画が提案できる
評価： A（89～80 点）	自社の事業課題についてデジタルシフトを前提としての課題分析ができる
評価： B（79～70 点）	自社の事業課題について課題分析ができる
評価： C（69～60 点）	自社の事業課題について市場環境について分析ができる
評価： F（59 点～）	自社の事業課題を特定できない
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	日本の流通構造とサプライチェーン・マネジメントのメガトレンド		
サブタイトル/Sub Title	流通構造と小売業の形成過程を理解し、今後のメガトレンドを考える		
英文科目名/Course Title(Eng.)	The distribution structure and mega-trend of Supplychain management		
教員/Instructor	西田邦生	E-mail	k.nishida@kpost.kokubu.co.jp
科目群/Course Classification	顧客創造	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ライフラインともいえる「流通」は様々な要件で成り立っています。流通を理解するには、歴史や制度の中で形成されるベーシックな流通構造を理解し、さらに生産計画やサプライチェーンといった工学的な要素と、消費者行動にアプローチするための人文学的な要素の両方を学ぶことが必要となります。今、流通は効率と規模を追求するパラダイムから、持続可能な社会インフラへシフトする大転換期にさしかかっています。本講ではまず流通の基礎知識とそれらが形成されてきた歴史や背景を学ぶことで、新なメガトレンドに関してその要件や本質をしっかり捉え、広い視野で社会や流通を認識して解決ができる力の養成を目指します。また流通の素養がない人でも理解できるよう授業計画を作っています。

到達目標/Course Goals

ディプロマシーの DP1:「知識と理解」と DP2:「思考と判断」を達成するために、①小売やＥコマース等の最新の事例をもとに流通に関する知識を深め、② 社会や消費者意識の変化が流通に及ぼす影響のメカニズムを理解し、今後の社会構造や技術革新を本質的にとらえ思考する態度を身に着けて、これからの流通ならびにサプライチェーンの方向性と課題を発表できる力の習得を目標とします。

授業形態 /Form of Class	グループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	1月に物流センターの視察
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前に配布する講義資料による予習。(1時間程度) 授業で提起するテーマの検討・発表。(2時間程度)		

講義概要/Course Description　全8講　第1講～第7講は各90分×2講座 第8講は90分

第1講	
概要	「ロジスティクス」と「サプライチェーン・マネジメント」および、「流通」の概念
事前、事後学習ポイント	配布資料の理解　とくにマーガレット・ホールの理論と日本の流通構造の理解
詳細	①本講の目標と授業計画②ロジスティクスとサプライチェーン・マネジメントの概念と形成のプロセス③流通の概念と日本の流通構造の特徴とその必然性をディスカッション
第2講	
概要	組織小売業の基礎知識
事前、事後学習ポイント	事前配布資料で「本部主導のマーケティング」、「EDI システムによる補充発注」、「POS によるマーチャンダイジング」の組織小売業の３つの基本オペレーションの内容をおさえる。
詳細	組織小売業のベーシックなオペレーションの利点と、それが形成される背景となった社会やテクノロジーを解説、さらに利点に内在する限界について検証しディスカッションをする。
第3講	
概要	戦後の流通の変遷とＳＣＭ（2010年まで）
事前、事後学習ポイント	戦後における第1次から第3次の流通革命の特徴を事前配布資料より把握する。
詳細	組織小売業の誕生から幾多の変遷の意義とその背景を解説。流通変革の本質を見抜く洞察力を高めると伴に、マーケットの変化や技術革新によって変化するメカニズムを理解する。
第4講	
概要	業態別小売業と2010年以降の流通の課題
事前、事後学習ポイント	セブンとセコマ（北海道コンビニ）の資料を事前配布するので、ビジネスモデルの相違と従来型コンビニの行き詰まりをSDGｓの観点から事前に考察して参加
詳細	従来の小売業態の崩壊とマーケティングの変化を解説し、その背景と本質を洞察してメガトレンドとなる人間中心の経営を考える。ケーススタデイとしてコンビニを取り上げ、セブン型ビジネスモデルの行き詰まりをセコマと比較して、各人の発表を交えて討議する。。
第5講	
概要	Ｔポイントを運営するグループ企業CCCマーケティング㈱の森雄一郎社長室戦略部長を招いて電子決済の本質とデジタルマーケティングについての問題提起を森氏と西田のパネルディスカッションで行う。
事前、事後学習ポイント	
詳細	森氏のプレゼンテーションの後、森氏と西田がディスカッションにより問題提起を行う。問題提起を受けて2030年の社会、小売、消費者、流通についてグループディスカッションを行いグループごとにプレゼンテーションを行う。

第 6 講	
概要	配送センターの視察
事前、事後学習ポイント	事前に配布する「ロジスティクスの取り組み」より形態別配送センターの相違を事前に理解する。
詳細	国分川口配送センター（給食、高齢者施設、外食向けセンター）の視察と解説及び質疑応答
第 7 講	
概要	今後の流通メガトレンド
事前、事後学習ポイント	事前に配布する IT ロードマップ、5G と IOT、電子決済とデジタル X の資料を予習する。
詳細	① サプライチェーンと Web の 2 つの流通体系 ② e コマースとラストワンマイル ③ デジタルネイティブのＯＭＯ（Online Marged off line）と流通デジタルＸ ④ 人間中心の社会、持続可能な社会の本質と IOT によるスマートライフ／ソサエティー実現の課題の考察や、その実現による働き方及び労働市場に対する影響についての見解を論議し、その中で明るい未来を支えるために流通が果たすべき役割につて考える。
第 8 講	
概要	日本の流通の歴史
事前、事後学習ポイント	講義用参考資料「江戸システム」（ＭＥＭＯ）をよく読んで授業に参加
詳細	江戸以降の流通の歴史と日本型流通構造の形成について
教科書 /Textbook	事前配布の講義資料をもとに授業を行う
指定図書 /Course Readings	「ロジスティクス・イノベーション」高橋輝夫＋ネオロジスティクス共同研究会　第 8 章 卸の経営と日本型サプライチェーン・マネジメントへの道（西田邦生担当）　白桃社 「第四の消費」三浦展箸　朝日出版
参考文献・参考 URL /Reference List	「卸売業のロジスティクス戦略」監修田島義博　同友館刊 講談社日本の歴史 19「文明としての江戸システム」　鬼頭宏　講談社刊 「宅配がなくなる日」松岡真宏他箸　日本経済新聞社刊
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席（30%）　授業での討議、発表（40%）　レポートの内容（30%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	到達目標の①～③をしっかり習得し、新たなテーマも論議できレポートが優れている。
評価： A（89～80 点）	到達目標の①～③を理解し、授業の討議に参加し、レポートが満足できる水準にある。
評価： B（79～70 点）	到達目標の①、②を理解し、討議、レポートの内容が一定水準にある。
評価： C（69～60 点）	到達目標の①を理解し、②についてもほぼ理解し、レポートの内容が可のレベルにある。
評価： F（59 点～）	出席不良で到達目標の理解、授業の討議への参加及びレポートの内容が不十分。
留意点 /Additional Information	レポートは 1 回（参考資料配布）、その他グループプレゼン 1 回、各人プレゼン 1 回を予定

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	最新ロジスティクス戦略		
サブタイトル/Sub Title	アマゾン、アリババ、ザラ、ニトリなどの物流戦略を研究する		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Super Logistics Strategies		
教員/Instructor	角井　亮一	E-mail	rio@e-logit.com
科目群/Course Classification	顧客創造	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

戦略物流（ロジスティクス）をベースに、成長ビジネスモデルを構築させている事例を学び、理解、研究し、『イノベーターシップ』を養成する。

到達目標/Course Goals

１．DP1:「知識と理解」を、多くの身近にある流通やネット通販など小売の最新物流事例から学び、高めてもらうと同時に、日々の生活の中で物流を意識してもらう
２．「物流思考」の視点での『問題解決』(DP2:「思考と判断」)ができるようになってもらうのが最終目的。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、事前課題、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	ネット通販での購入体験や生活の中で発見した物流工程の情報整理（６時間）、指定図書の熟読（４時間）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	戦略物流の基本を学ぶ①（物流思考）
事前、事後学習ポイント	指定書籍の熟読
詳細	物流思考と戦略物流思考の２つの考え方の中の１つ、「物流思考」を理解する。また、日常の中でどんな物流が存在しているのかに気づけるようにする。発表重視のディスカッションを実施。 宿題①：ネット通販で書籍を買う体験（２社以上）の比較・発表する（１回のみ） 宿題②：日常生活で気づいた物流工程を情報整理し、それを発表する（毎回）
第 2 講	
概要	ファーストフードなどから学ぶ物流効率化
事前、事後学習ポイント	日常で、どこでどんな物流があるのかを観察。指定書籍の熟読
詳細	ファーストフードのお店での、物流を発見・解説。店内オペレーション、食材調達などを物流視点で考える。発言重視のディスカッションを実施。 宿題①を数人が発表し、宿題②を全員が発表
第 3 講	
概要	戦略物流の基本を学ぶ②（戦略物流思考） 物流が、どう商品の売上アップに繋がるか？　どう企業力アップにつながるか？
事前、事後学習ポイント	前回のファーストフードでの物流のヒントから、日常で店舗観測。指定書籍の熟読
詳細	「戦略物流思考」を理解する。アマゾンやアリババが、なぜ物流を重視するのか、企業がどう物流で成長するのかを事例から理解する。発言重視のディスカッションを実施。 宿題①を数人が発表し、宿題②を全員が発表
第 4 講	
概要	消費者行動の変化、流通の変化、ロジスティクスの変化 「流通が物流を変える」
事前、事後学習ポイント	物流で成長している会社を、文献（インターネット、雑誌、書籍など）で研究。 指定書籍の熟読
詳細	個人商店→総合スーパー・百貨店→専門店（カテゴリーキラー）→ネット通販→オムニチャネルという、流通の進化における、物流の進化を学ぶ。なぜ進化することになったかの背景を学ぶ。発言重視のディスカッションを実施。宿題①を数人が発表し、宿題②を全員が発表
第 5 講	
概要	国内ネット通販企業の物流競争 Amazon 対楽天、Yahoo!&アスクル
事前、事後学習ポイント	買い物で訪問した店舗の物流を詳しく観察。写真でも報告と提出。指定書籍の熟読
詳細	国内のネット通販の競争を物流視点で整理し、「なぜ物流に強い会社が、ネット通販でも強いのか」を理論的に理解する。発言重視のディスカッションを実施。 宿題①を数人が発表し、宿題②を全員が発表
第 6 講	

概要	ラストワンマイルが勝負の宅配ビジネスとロジスティクス セブン&アイグループのオムニ7、カクヤス、宅弁ビジネス、ネットスーパー、UberEATS
事前、事後学習ポイント	ネット通販での購入体験を、比較。物流の違いを理解する。指定書籍の熟読
詳細	なんとなく理解している宅配ビジネスを、整理建てて理解する。また競争ポイントの理解を深める。発言重視のディスカッションを実施。 宿題①を数人が発表し、宿題②を全員が発表
第 7 講	
概要	米国オムニチャネル事例と最新物流ビジネス事例の紹介　米国流通事例、ネット＆リアルの競争、アマゾンの対抗戦略、UBER、Instacart、Curbside、Google Express
事前、事後学習ポイント	宅配を体験。授業中に宅配（フードデリバリー）を注文して、実体験する。指定書籍の熟読
詳細	オムニチャネルはサプライチェーンだという本質を理解する。新しく生まれている物流ビジネスを知ってもらう。発言重視のディスカッションを実施。 宿題①を数人が発表し、宿題②を全員が発表
第 8 講	
概要	成長企業のサプライチェーンを学ぶ 事例研究「ザラ、ニトリ、アイリスオーヤマ」
事前、事後学習ポイント	世界展開する３社を事前にインターネット、雑誌、書籍などで研究。指定書籍の熟読
詳細	ザラ、ニトリ、アイリスオーヤマなどの物流戦略を学び、成長する企業の物流戦略の共通項を討論する。発言重視のディスカッションを実施。 宿題①を数人が発表し、宿題②を全員が発表
教科書 /Textbook	特になし。テキストは、GoogleDrive より後日ダウンロード
指定図書 /Course Readings	「すごい物流戦略」（PHP 新書）
参考文献・参考 URL /Reference List	「アマゾンと物流大戦争」（NHK 出版）、「オムニチャネル戦略」（日本経済新聞社）、「図解 基本からよくわかる物流のしくみ」（日本実業出版社）、「物流がわかる」（日本経済新聞社）、「物流革命２０２０」（日本経済新聞社） ＜中国語＞ 「物流致勝」角井亮一/商業周刊台灣正版 「精益制造 014:物流管理」(日)角井亮一著作/东方出版社 「精益制造 057：物流全解」(日)角井亮一著作/东方出版社 「新零售全渠道战略」(日)角井亮一著/东方出版社 「服务的细节 081：与零售巨头亚马逊共生」(日)角井亮一著/东方出版社 「IT 物流」(日)角井亮一著/海天出版社 ＜英語＞ Amazon: A Comparative Analysis of U.S. and Japan Logistics / Complete Edition Strategic Logistics in Japan: Complete Edition: A Comparative Report on U.S. Businesses Omni-Channel Strategies in U.S. and Japan
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率 30%／講義議論参画度 30%／発言と発表の内容 40%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	７回以上以上の出席。毎回発言。毎回の宿題に創意工夫。発表内容が深く調査され、受講生に伝わるプレゼン（話と資料）ができている。
評価： A（89～80 点）	５回以上の出席。毎回発言。毎回の宿題に創意工夫。発表内容が深く調査されている。
評価： B（79～70 点）	６回以上の出席（２回までの欠席）。毎回発言。毎回宿題の事前提出
評価： C（69～60 点）	３回以上の欠席（５回以下の出席）、または、発言が毎回でない。
評価： F（59 点～）	４回以上の欠席（４回以下の出席）、または、発言が不十分。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	経営視点からのコンタクトセンターの活用		
サブタイトル/Sub Title	顧客経験(CX: Customer Experience)を創り出す顧客接点を経営に活用する		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Innovation through Contact Center Transformation		
教員/Instructor	宮﨑　義文	E-mail	miyay@ep-next.com
科目群/Course Classification	顧客創造	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

デジタルシフトが進む中、人のこころを動かす顧客経験(CX: Customer Experience)を創り出すには、お客様とのヒューマンな関わりが欠かせない。コンタクトセンターの顧客接点は、Web をはじめとするデジタル接点にはない「お客様と直接コンタクトできる」貴重な顧客接点であり、顧客戦略の重要拠点として企業変革の起点ともなりうる。顧客接点/コンタクトセンターの経営活用は、これから経営を担う人材にとって、デジタル技術の経営活用と同等な必須知識である。本講義では、高い価値を実現する顧客接点/コンタクトセンターの企業経営への活用方法を実践的に習得する。

到達目標/Course Goals

DP1:「知識と理解(最新ビジネス環境への理解)」の獲得を目標とし、時代の文脈の中で顧客接点/コンタクトセンターをとらえ、人工知能(AI)等の IT 活用の方向性を見据えた上で、その基礎的な考え方を学ぶ。DP2:「思考と判断」及び DP4:「表現と技能」獲得を目標に、事例研究及び演習により、コンタクトセンターを中心に顧客接点を企業経営に活かす方法論と実践能力を習得する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカション、グループワーク、ディベート、プレゼンテーション、フィールドワーク、双方向、PBL 型学習、ワークショップ	学外学習 /Off-Campus Learning	コンタクトセンターの現場見学
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義や演習に沿って検討した内容の資料作成や考察した内容のレポート提出(2－4時間程度)		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	時代の文脈で捉えるコンタクトセンターの顧客接点/人工知能活用の方向性
事前、事後学習ポイント	デジタルシフトが進む中でのコンタクトセンター/顧客接点の価値、及び、AI と人との違いを自ら考え、レポートする。(1-2H)
詳細	・デジタルシフトが進む中でのコンタクトセンター/顧客接点の価値を議論する。 ・顧客接点における人工知能の活用と方向性を議論する。 -AI と人間との違い、人が得意とする領域と人工知能が得意とする領域の理解 -顧客接点における人工知能の活用と方向性
第 2 講	
概要	顧客接点/コンタクトセンターの基礎となる考え方
事前、事後学習ポイント	先進事例の論文を読み、コンタクトセンターをどのように経営に活かしているかを発見学習しレポートする。(2-3H)
詳細	顧客接点/コンタクトセンターの基礎となる考え方を次の 3 つの観点から学習する。 1) お客様から見た価値と企業収益 顧客満足(CS)と顧客経験(CX：カスタマーエクスペリエンス)、顧客ロイヤルティ 2) 従業員から見た価値とお客様から見た価値 及び企業収益 従業員満足(ES)と従業員経験(EX)、サービス・プロフィットチェーン 3) 企業(経営)から見た価値とＫＰＩツリーによる経営貢献の見える化
第 3 講	
概要	コンタクトセンターの価値を創り出すモデルデザイン ＆外部講師による先進事例講演
事前事後学習ポイント	自社のビジネスモデルを描き、顧客接点の関連部分を明確化する。(1-2H)
詳細	・企業のビジネスモデルの中での顧客接点の位置付けを演習で認識し、顧客接点/コンタクトセンターの価値を高めるデザイン方法を学習する。 ・外部講師による先進事例講演（カスタマジャーニマップ探索型モデル）を聴講する。 コンタクセンタ活用によりプロセス改善を図りロイヤルティを高め収益を UP した事例
第 4 講	
概要	経営に活用するコンタクトセンターの基本モデル　＆　事例研究
事前事後学習ポイント	外部講師による先進事例に、どの基本モデルが使われているかをレポートする。(1-2H)
詳細	・経営貢献度の高い先進事例を分析し抽出された 17 の基本モデルを概説する。 先進事例の多くは、これらの基本モデルを複数組合せており、基本モデルを学ぶことで、コンタクトセンターの経営への活用力を身につける。 ・外部講師による先進事例を研究し、それを構成する基本モデルについて議論する。
第 5 講	

概要	外部講師による先進事例講演　&　演習１．コンタクトセンターの価値モデルの作成
事前,事後学習ポイント	演習対象の現行コンタクトセンターの価値モデルをブラッシュアップする。(1-2H)
詳細	・外部講師による先進事例講演（VOC マーケティング型モデル） コンタクトセンターにより収集した、VOC(Voice of Customer:お客さまの声)から顧客像を把握し、高い成果を上げた先進事例の講演を実務者から聞き、マーケティング型の活用モデルを理解する。(昨年度実績：情報工房社長 宮脇様よりご講演) ・演習対象のコンタクトセンターのお客様から見た価値、経営から見た価値、従業員から見た価値をグループディスカションにより分析、コンタクトセンターの価値モデルを作成する。
第 6 講	
概要	演習２．現行の価値モデルの問題点抽出と問題の構造化　&　基本モデルとの比較
事前,事後学習ポイント	現行価値モデルの問題構造図 及び基本モデルとの比較表を作成する。(2-3H)
詳細	・演習対象の企業(自社)のコンタクトセンターの現行価値モデルのままで、継続的なビジネス成長を図ることができるか？できないとすれば、その問題点は何かをグループディスカションにより抽出し、問題構造図を作成する。 ・経営貢献度の高い先進事例の分析から抽出された 17 の基本モデルと現行価値モデルとの比較を行い、現行モデルへの組込みの可能性を検討する。
第 7 講	
概要	演習３．目標とする価値モデル作成
事前,事後学習ポイント	第 6-7 講で策定したあるべき価値モデルのプレゼンテーションを準備する。(2-3H)
詳細	・第 6 講で抽出した問題の全体構造図から問題のグループ化を行い、現行価値モデルの価値を高めるための改革ポイントを抽出する。 ・現行モデルからの変革ビジョンを策定し、あるべき価値モデルの作成を行う。
第 8 講	
概要	経営に貢献するコンタクトセンターへの改革プランを発表する。
事前,事後学習ポイント	最終レポートの提出 (3-4H)
詳細	・第 6-7 講の演習結果　(現行モデル、問題の全体構造図、問題点のグループ化、現行センターの対する改革ポイント、変革ビジョン、あるべき価値モデル)をプレゼンテーションする。 ・フィードバックやグループディスカションを通じて改革プランをブラッシュアップし、最終レポートとして提出する。
教科書/Textbook	適宜資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	情報処理学会　ディジタルプラクティス論文誌　コンタクトセンター特集号 ２０１１年７月号「進化を続けるコンタクトセンター」、２０１４年１月号「経営に貢献するコンタクトセンター」、　２０１８年４月号「価値を創造するコンタクトセンター」
参考文献・参考 URL /Reference List	顧客はサービスを買っている」諏訪良武著、ダイヤモンド社、「サービスの価値を高めて豊かになる」諏訪良武著、リックテレコム社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席（30%)、授業内での議論参加(35%)、プレゼンテーション内容とレポート（35%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	コンタクトセンターを経営に活用して優れた成果を出し、授業内での議論参加やプレゼンテーション内容が特に優れており、到達目標に十分達している。
評価： A（89～80 点）	コンタクトセンターを経営に活用して成果を出し、授業内での議論参加やプレゼンテーション内容が優れており、到達目標に達している。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加やプレゼンテーション内容が良く、到達目標に達している。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加やプレゼンテーション内容が普通で、到達目標にほぼ達している。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での議論参加やプレゼンテーション内容が不十分で、目標に達せず。
留意点 /Additional Information	特になし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	観光インバウンドマネジメント		
サブタイトル/Sub Title	観光マーケティング		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Management for the inbound tourism		
教員/Instructor	中山こずゑ	E-mail	kozurunrun4290@icloud.com
科目群/Course Classification	顧客創造	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

人口減少社会或いは成熟社会において、交流人口を増やすことが、今後の国の基幹産業となっていく。この背景を他先進国の一つのベンチマークとしながら、日本において何をやることがマーケティングマネジメント上、優先事項なのかを授業を通し理解し、各受講生の出身母体でやるべきことを明確化する実践的な内容とする。またインバウンド数をＫＰＩにおいている現在の国の施策の妥当性に対する議論を通じ将来的インバウンドのあり方を考える力を養成する。

到達目標/Course Goals

今後観光 MICE（meeting，incentive，convention，exhibition を総称する国交省が定めた略語）分野における District Management を担える人材の育成と当該分野におけるイノベーションを可能にする人材の育成。特にディプロマポリシー DP4:「表現と技能」を第一義の到達目標にするのは、本領域でのわが国で唯一足りない部分であるからである。また二次的には新たな産業のため DP1:「知識と理解」を習得が前提となる。

授業形態 /Form of Class	講義　グループワーク　グループディスカッション　ディベート、プレゼンテーション　双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：各テーマに関する自分の問題意識をまとめてくること（１時間程度） 事後学習：中間期に一度まとめたレポート提出（PPT or word） 最終講義後全体のレポート提出するための準備 （１時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	データで見る世界の inbound/outbound/MICE
事前、事後学習ポイント	ラグビーワールドカップ 2019、東京 2020 オリンピックパラリンピック、2025 年日本国際博覧会（略称　大阪・関西万博）などで期待されている公表された情報は掴んでおくこと。
詳細	「産業としての観光」「地域と観光」「文化と観光」の３つの側面からのアプローチと観光が液状学問であることの認識
第 2 講	
概要	IR　各国ビジネス事情と日本の現況
事前、事後学習ポイント	日本の候補地の地域特性及び各国の現状について情報を集めておくこと
詳細	世界の IR ビジネスモデルなど、基本情報を与えつつ日本におけるプロス・コンスをディスカッションする
第 3 講	
概要	観光の形の歴史的変遷及び今後求められるニーズの発掘
事前、事後学習ポイント	現在求められているニーズ（外国人、日本人などのセグメンテーションで）、将来起こりうるだろうニーズについて事前に仮説を立てる
詳細	日本のみならず、世界において観光に求められるニーズの歴史的変遷から、今後どのようなアンメットニーズがあるか。その求め方を考える
第 4 講	
概要	マーケティング理論に基づいたオポチュニティ
事前、事後学習ポイント	Kindle の拙書「地方創生を成功させる５つの法則」を読んでおくこと
詳細	マーケティング理論から考えた時、いくつかの都市或いは国をビジネスケースとして捉え今後のオポチュニティを探る
第 5 講	
概要	スポーツツーリズム、クルーズツーリズム、アートツーリズム、フィルムツーリズム
事前、事後学習ポイント	ラグビー世界大会、オリパラで作られているツーリズムを調べておくこと
詳細	それぞれにおけるツーリズムの現状と課題について、講義（情報提供）をもとにオリパラの課題抽出を行う

第 6 講	
概要	Industry 4.0, Society 5.0 から見るオポチュニティ
事前、事後学習ポイント	上記ドイツや日本の基本計画を知っておくこと
詳細	キーワードの抽出をグループディスカッションで行いながら、日本の観光産業の未来を描く
第 7 講	
概要	観光を担う組織のあり方
事前、事後学習ポイント	組織論から考えた時のあるべき姿を、ビジネスケースをベースにして議論する
詳細	現状の DMC、DMO、観光協会、観光コンベンションビューローなどの組織の課題を明確にしながら、新たな組織として必要な要素を明確にしていく
第 8 講	
概要	Presentation
事前、事後学習ポイント	Presentation の準備
詳細	今後観光を担うべき組織のあり方を 5 minutes MAX でプレゼンテーションする。 （受講人数にもよる）
教科書 /Textbook	[地方創生を成功させるための 5 つの法則]KDP 観光白書
指定図書 /Course Readings	「新観光立国論」デビッド・アトキンソン著 「新観光立国論ものづくり国家を超えて」寺島実郎著
参考文献・参考 URL /Reference List	JNTO 各種統計、UIO 統計、観光白書
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席、ディスカッション、グループワーク、レポート、プレゼンテーション （10:25:20:20:25）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	課題を明確にし、その解決策を未熟ながらもデータを伴い提示でき、人との議論に耐えられること
評価： A（89～80 点）	課題を明確にし、その解決策を未熟ながらもデータを伴い提示できること
評価： B（79～70 点）	課題設定を明確にし、その解決策が朧げながらも提示できること
評価： C（69～60 点）	課題設定のみが明確であること
評価： F（59 点～）	課題の設定が曖昧であること、また論理的根拠が薄いこと
留意点 /Additional Information	ディスカッションを積極的にできるためにはどうするべきか、準備しておくこと。配点を多く取っております

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	商品ブランドマネジメント		
サブタイトル/Sub Title	実際的ブランドマネジメント入門(概論)		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Introduction to practical brand management		
教員/Instructor	佐野　扶美枝	E-mail	sanofumie0514@gmail.com
科目群/Course Classification	顧客創造	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

多くの企業で、「うちはマーケティングができていないから」とよく耳にする。が、マーケティングができたら、その企業にとってどのようなメリットがあるのかは理解されていないことも多い。そもそも「マーケティング」の定義自体も学者によって様々な言い方がされており、漠然としていると感じている人も多いと思われる。この講義では、企業の「マーケティングの現場」で 25 年以上の経験から「マーケティングとは」「ブランドとは」「強いブランドを作るにはどうすればいいか」を様々に例証し、ブランドマネジメントとは何か？を理解することを目的とする。

到達目標/Course Goals

ディプロポリシーでの DP2:「思考と判断」を身に着けブランド軸での事業戦略の構築ができるようになる。企業活動にとって、どうして『ブランド』が必要か納得し、ブランドマネジメントに必要な実践的スキルを理解、習熟し、自身の業務課題について、ブラをド価値向上の観点から戦略構築できるようになる

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション グループワーク、ディベート、 プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自社のマーケティング部門の業務内容を把握しておく		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	なぜ「ブランド」「マーケティング」が必要なのか
事前、事後学習ポイント	自身の所属する企業、団体では「ブランド」を活用しているか、どのような活用をしているか考えておく（事前 20 分）
詳細	企業活動において、「ブランド」の必要性と「ブランド」と「マーケティング」の関係を明らかにする。
第 2 講	
概要	ブランドの管理者「ブランドマネージャー」がやるべきこと
事前、事後学習ポイント	同じカテゴリの商品(サービス)で「ブランド」と思うものと思わないものの違いは何か、考えておく（事前 20 分）
詳細	強いブランド構築のために、ブランドマネージャーが果たすべき役割はなにか、ブランドがぶれないために必要なことは何か、ブランドポジションを把握するために何が必要かなど事例を交えて講義する
第 3 講	
概要	マーケティングリサーチ
事前、事後学習ポイント	簡単な WEB 調査を設計、実施し、結果をレポートする(事後 2 時間)
詳細	ブランドの起点である商品を企画開発するためには、市場、消費者を理解しなければならないが、そのための消費者調査の種類と手法、具体的な調査設計のポイントなどを理解する。
第 4 講	
概要	ブランドマネジメントと商品開発の実際
事前、事後学習ポイント	3 講後実施した調査の結果を基に新しい商品やサービスを考えて、レポートとする（事前 1 時間）
詳細	実際の商品開発の過程、発売の背景、ターゲットの選定、商品コンセプト、ネーミング、パッケージデザインの決定などを事例として解説。強いブランを作るために何が必要かを理解する。
第 5 講	
概要	ブランドマネジメントとコミュニケーションの実際
事前、事後学習ポイント	自社の商品やサービスのコミュニケーション施策でうまくいっていると思われる施策とその理由を考えておく（20 分程度）
詳細	強いブランドを育成するためにはコミュニケーション戦略は極めて重要である。 いくつかの成功事例、失敗事例を基に、ブランドを育成するためのコミュニケーション戦略の立案について理解する。

第 6 講	
概要	ブランドを創るデジタルマーケティング
事前、事後学習ポイント	講演からの学びをレポートする（当日事後 20 分）
詳細	ブランドコミュニケーションの最大の媒体となったデジタル媒体を活用したブランドマーケティングをテーマに、ゲスト講師が「最新のデジタルマーケティングの実際」を講演する
第 7 講	
概要	前半：ブランドマネジメントと販売戦略　　後半：ブランド設計書について
事前、事後学習ポイント	自身の業務のブランド設計、もしくは市場のサービス(商品)から、ブランド設計書を作成し、第 8 講の 3 日前までに提出する(最終課題)　(3 時間)
詳細	前半：ほとんどの企業で販売部門とブランドマネジメント部門は別々の組織であるが、強いブランドを構築するためには、ブランドマネジメントの考え方にもとづく販売戦略立案遂行が必須である。ブランドの考え方を浸透させた売場を実現するために何が必要か事例を解説する 後半:ブランドマネジメントの核となる「ブランド設計書」について改めて解説し、最終課題である「ブランド設計書」の作成にかかる
第 8 講	
概要	ブランド設計書のプレゼンテーションとディスカッション
事前、事後学習ポイント	
詳細	事前に提出されたブランド設計書の中からピックアップしてプレゼンテーションしてもらい、よかったところや改善点をディスカッションすることで ブランド設計書への理解を深める。
教科書 /Textbook	適宜資料を配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	新しいマーケティングの理論と実際
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席（14%）講義内での議論参加（36%）、 最終レポートもしくはプレゼンテーション（50％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	企業活動におけるブランドの果たす役割、ブランドマネ^ジャーの役割を理解し、明確なブランド設計書を作成できる。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が極めて良い。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が良い。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ヒューマンリソース概論 I―A		
サブタイトル/Sub Title	知識創造型企業の人事戦略		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Human resources strategy of knowledge-creating company　I―A		
教員/Instructor	徳岡 晃一郎	E-mail	tokuoka@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

変化とスピードの時代を迎えて、企業にはイノベーションやグローバル化、ダイバーシティを軸にした成長戦略を実現するダイナミックな経営が求められている。その一方で、社内のモチベーションや求心力は危機に瀕している。この壁を乗り越えるには、社員の成長と企業の成長を両輪とした成果主義中心の人事戦略を再構築しなくてはならない。そのような新たな人事のあり方を知識経営の文脈の中で検討し、知識創造型企業への転換にどのように人事が貢献できるのか、経営戦略を実行に移すための鍵となる人事戦略の基本および知識経営時代の新しい人事戦略について理論と事例を基に考える。

到達目標/Course Goals

知識創造型企業への転換に向けて徹底した議論と自社の課題の分析を通じて、ディプロマポリシーでの DP1「知識と理解」DP2「思考と判断」を身に着け、知を創造するための人事戦略を実践する「志」（DP５）および DP4「表現と技能」を獲得することを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション グループワーク、ディベート、 プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：指定図書予習及び宿題資料の読み込みなどで毎回 2 時間程度 事後学習：講義内容の振り返りで 1 時間程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	人事戦略の基礎 1
事前、事後学習ポイント	自社の問題点を整理しておく。人事管理の目的、主な領域と課題、これまでの主な人事戦略のフレームワークを整理する
詳細	伝統的な人事管理や、雇用管理、人間関係管理、労使関係管理を学ぶ。また、人事部の役割、人事のあり方、課題を学ぶとともに、グループディスカッションで、人事の役割を再認識する。 宿題：自社の人事組織について調べ、パワーポイントでまとめてくること。 第 8 講までに全員が発表する。
第 2 講	
概要	人事戦略の基礎 2
事前、事後学習ポイント	経営戦略論と人事戦略の関係、知識創造と人事戦略の関係を事前に考えてくる
詳細	IBR model による戦略スタイルと人事戦略、戦略スタイルと人材マネジメント手法の学習。7S モデルによる人事機能の学習。また、グループワークにより動機づけについて学習し、発表する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション①。
第 3 講	
概要	人事戦略の基礎 3
事前、事後学習ポイント	評価制度:これまでの評価制度の概要（年功制と成果主義）と功罪。なぜ知が創造されなくなったのかを自社に照らして考察してくる
詳細	人事を考える各種フレームワークをさらに深掘りし、知識創造のプロセス（SECI）を学ぶ。知識創造の観点から各種フレームワークを比較する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション②。
第 4 講	
概要	知識創造企業のための切り口：人事機能を別の角度から見てみる 1
事前、事後学習ポイント	職能資格制度の課題を自社の現状に照らして考えてみる
詳細	日本の代表的な人事制度である職能資格制度の功罪及び問題点について学ぶとともに、知識創造の観点から日本の人事制度を対照し、違いを明らかにする。 2 回にわたる講義を踏まえ、知識創造の観点から見た日本の人事制度について、グループディスカッションをしてもらう。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション③。

第 5 講	
概要	知識創造企業のための切り口：人事機能を別の角度から見てみる 2
事前、事後学習ポイント	成果主義の課題と知識創造を自社に即して考えてくる
詳細	成果主義のしくみを抑え、その功罪及び問題点、疑問点について解説する。 そのことを踏まえ、自分たちの現状に照らして、成果主義の問題点をグループディスカッションし、まとめ、発表する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション④。
第 6 講	
概要	知識創造企業のための切り口：人事機能を別の角度から見てみる 3
事前、事後学習ポイント	自社の評価基準、コンピテンシーを把握してくる
詳細	コンピテンシーの概念を理解し、その功罪及び問題点について解説する。 また、コンピテンシーの新しい役割をもとに、新しい事例を研究し、新たな役割について発表、討議する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑤。
第 7 講	
概要	知識創造企業のための切り口：人事機能を別の角度から見てみる 4
事前、事後学習ポイント	ゲストスピーカーセッション：知識創造を実践している企業の人事部長を招いて
詳細	コンピテンシーの新しい役割をもとに、新評価基準の構成を学び、「自分の大事にするコンピテンシー」を作成し、発表、討議する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑥。
第 8 講	
概要	知識創造型人事部のまとめ
事前、事後学習ポイント	知識創造型人事部とはどうあるべきか、自らの考えを総合してくる
詳細	第 1 講から 7 講までの視点を踏まえて、知識創造企業を構築していく上での人事部の役割とその推進の諸条件について、グループディスカッションする。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑦。
教科書 /Textbook	なし。適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	「MBB：思いのマネジメント」一條和生、徳岡晃一郎、野中郁次郎著、東洋経済新報社（中国語の翻訳あり「信念」） 「人事異動」徳岡晃一郎著、新潮社
参考文献・参考 URL /Reference List	「AI x ビッグデータ人事を変える」福原正大、徳岡晃一郎著、朝日新聞出版社 「40 代からのライフシフト実践ハンドブック」徳岡晃一郎著、東洋経済新報社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(30％)、授業内での議論参加(35％)、プレゼンテーション内容(15％)、最終レポート（20％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A＋（100～90 点）	人事戦略に関して、自らの企画が行える。
評価： A（89～80 点）	人事戦略論を深く理解し、自社の制度への改善案が描ける
評価： B（79～70 点）	人事戦略論の概要が理解でき、自社の制度の課題を指摘できる。
評価： C（69～60 点）	人事戦略の概要が理解できている。
評価： F（59 点～）	人事戦略の理解が不十分で、出席も不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	秋学期に開講するヒューマンリソース概論 II を受講するには、ヒューマンリソース概論 I―A、I―B のどちらかの単位修得が必須となる。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ヒューマンリソース概論 II		
サブタイトル/Sub Title	知識創造型企業の人事戦略		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Human resources strategy of knowledge-creating company　II		
教員/Instructor	徳岡 晃一郎	E-mail	tokuoka@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

変化とスピードの時代を迎えて、企業にはイノベーションやグローバル化、ダイバーシティを軸にした成長戦略を実現するダイナミックな経営が求められている。その一方で、社内のモチベーションや求心力は危機に瀕している。この壁を乗り越えるには、社員の成長と企業の成長を両輪とした成果主義中心の人事戦略を再構築しなくてはならない。ヒューマンリソース概論 I に続き、そのような新たな人事のあり方を知識経営の文脈の中で検討し、新しい人事の役割を、MBB（Management by Belief）を中心に議論する。

到達目標/Course Goals

知識創造型企業への転換に不可欠な最新の人事戦略である MBB を理解し、企業変革へ向けてディプロマポリシーの DP3:「関心と意欲」をしっかり持ち、DP5:「志」にまで高め、それを実行する DP4:「表現と技能」を身に着け、イノベーターとしての知の再武装を目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション グループワーク、ディベート、 プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習:指定図書予習及び宿題資料の読み込みなどで 2 時間程度 事後学習：講義内容の整理で 1 時間程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	ポスト成果主義の MBB
事前、事後学習ポイント	新しい資本主義と知識経営について概観しておく
詳細	春学期開講のヒューマンリソース概論 I の振り返りを行い、春学期の学習内容を確認する。それを踏まえ、MBO 思考の問題をあげながら、新しい人事の型である MBB を学ぶ。 宿題：自社の人事評価制度の課題をパワーポイントでまとめてくること。 第 8 講までに全員が発表する。
第 2 講	
概要	ポスト成果主義の MBB とシャドーワーク
事前、事後学習ポイント	新しい資本主義と知識経営について事前配布資料を読み込む
詳細	第 1 講に続き、MBB について学ぶ。MBB を促進するシャドーワークを学習し、自身のシャドーワーク経験について語り合ったのち、社内で促進する方法をグループディスカッションする。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション①。
第 3 講	
概要	MBB（Management by Belief）概論 1：「思い」のマネジメント－個人－
事前、事後学習ポイント	新しい資本主義と知識経営について事前配布資料を読み込む
詳細	MBB が個人にもたらす価値－仕事の喜び、自己表現－について解説し、ビジョンを持つことや未来を切り開く思考の重要性を理解する。 その後、講義を踏まえた内容をグループディスカッションにて共有し、まとめ、発表する。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション②。
第 4 講	
概要	MBB（Management by Belief）概論 2：「思い」のマネジメント－経営－
事前、事後学習ポイント	新しい資本主義と知識経営について事前配布資料を読み込む
詳細	MBB が経営にもたらす価値－高い志、知の創造と共有－について解説し、「思い」をベースに動く MBB 経営の枠組みを理解する。 その後、講義を踏まえた内容を自社に落とし込み、グループディスカッションし、発表する。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション③。
第 5 講	
概要	MBB を実践するためのガイド 1 ：セルフコーチング演習

事前、事後学習ポイント	新しい資本主義と知識経営について事前配布資料を読み込む
詳細	「思いのピラミッド」を作る基礎となる、「思い」を持つための重要性について、著名なリーダーを題材に開設する。 その後、セルフコーチング演習を行い、グループワーク（グループコーチング）を行う。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション④。
第 6 講	
概要	MBB を実践するためのガイド 2 ：「思い」のピラミッド演習
事前、事後学習ポイント	新しい資本主義と知識経営について事前配布資料を読み込む
詳細	「思い」の 7 段階レベルを学んだ後、思いのピラミッド（ビジョン、背景、ストーリー、壁・しがらみ、突破するポリシー・具体策）の構造を解説する。 その後、自身の「思いのピラミッド」を各自作成し、グループディスカッションにて確認する。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑤。
第 7 講	
概要	MBB 実践企業の人事部の実践事例検討：ゲストスピーカーセッション
事前、事後学習ポイント	ゲスト企業の会社概要を把握しておく
詳細	MBB を実践している企業の人事部長を招いての講義。 講義後は、ゲストスピーカーと院生によるセッション（双方向）を行い、現場を理解する。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑥。
第 8 講	
概要	知識創造型人事部のまとめ
事前、事後学習ポイント	知識創造型人事部とはどうあるべきか、自らの考えをまとめておく
詳細	第 1 講から 7 講までの視点を踏まえて、知識創造企業を構築していく上での人事部の役割とその推進の諸条件について、グループディスカッションする。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑦。
教科書 /Textbook	なし。適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	「MBB：思いのマネジメント実践ハンドブック」徳岡晃一郎、舞田竜宣著、東洋経済新報社 「イノベーターシップ」徳岡晃一郎著、東洋経済新報社「シャドーワーク」一條和生、徳岡晃一郎著、東洋経済新報社 ※ヒューマンリソース I-A を取ったものは「MBB：思いのマネジメント」一條和生、徳岡晃一郎、野中郁次郎著 東洋経済新報社（中国語翻訳あり「信念」）
参考文献・参考 URL /Reference List	「40 代からのライフシフト実践ハンドブック」徳岡晃一郎著、東洋経済新報社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(30％)、授業内での議論参加(35％)、プレゼンテーション内容(15％)、最終レポート（20％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A+（100～90 点）	MBB を十分理解し、MBB に基づく新たな人事制度の企画ができる。
評価： A（89～80 点）	MBB を理解し、現状の人事制度を改善する案を作成できる。
評価： B（79～70 点）	自分の思いを明確化するツールや伝えるコミュニケーションを活用できる。
評価： C（69～60 点）	MBB の基礎を理解して、ツール類の使い方を理解している。
評価： F（59 点～）	MBB を理解できておらず、出席も不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	ヒューマンリソース概論 II を受講するには、ヒューマンリソース概論 I-A または I-B の履修が必須となる。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	インナーコミュニケーション		
サブタイトル/Sub Title	組織変革を進めるチェンジマネジメントコミュニケーション		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Internal communication strategy		
教員/Instructor	徳岡 晃一郎	E-mail	tokuoka@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

変化とスピードの時代を迎えて、企業はイノベーションや戦略の転換、M＆Aやリストラなどさまざまな変革を迫られているが、社員の意識がついてこないために失敗する例は枚挙に暇がない。社員を的確に動機づけ、変革へ向けて意識改革を行い、行動に駆り立てるか。その成否を握る社内コミュニケーションのあり方について事例を基に研究する。

到達目標/Course Goals

社内コミュニケーションのあり方を理解し、ディプロマポリシーにある DP1:「知識と理解」を確実なものとした上で、DP3:「関心と意欲」を高め、DP2:「思考と判断」、DP4:「表現と技能」を身に着ける。各種演習を通じて、DP5:「志」を醸成して、イノベーターとしてコミュニケーションを発揮してみなを巻き込む優れたリーダーとして実践できることを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション グループワーク、ディベート、 プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：教科書、指定図書予習及び宿題資料の読み込みなどで毎回 2 時間程度 事後学習：講義内容の整理で 1 時間程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	社内コミュニケーションの基礎(1) 社内コミュニケーションの目的、主な領域と課題
事前、事後学習ポイント	コミュニケーションについての自社の課題を整理しておく
詳細	社内コミュニケーションのあり方、目的を学ぶとともに、その必要性について解説する。 また、グループディスカッションで、社内コミュニケーションの役割を再認識する。 宿題：自社の社内コミュニケーションについて、第 1 講の講義内容を踏まえ、パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する。
第 2 講	
概要	社内コミュニケーションの基礎(2) 社内コミュニケーションのフレームワーク
事前、事後学習ポイント	第一講で学習したフレームに沿ってコミュニケーションについての自社の課題を整理しておく
詳細	第 1 講に続き、社内コミュニケーションの様々な手法を学ぶとともに、その具体例について解説する。また、社内におけるコミュニケーションの重要性を学び、リーダーの役割についてグループディスカッションする。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション①。
第 3 講	
概要	社内コミュニケーションの基礎(3) コーポレートコミュニケーション戦略と社内コミュニケーション
事前、事後学習ポイント	第二講で学習したフレームに沿ってコミュニケーションについての自社の課題を整理しておく
詳細	第 1 講、第 2 講に続き、社内コミュニケーションの実践事例を学ぶとともに、よくある問題点について解説する。また、社外コミュニケーション戦略を学び、現実の問題についてソリューションを考え、グループディスカッションする。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション②。
第 4 講	
概要	コミュニケーションスキル(1) モチベーションを高める場づくりのコミュニケーションスキル演習
事前、事後学習ポイント	自社のマネジメント層のコミュニケーションの課題を概観してくる
詳細	コミュニケーション力の 3 つの柱、「発信力」、「受信力」、「質問力」について、演習を中心に、個人でのワーク及びグループワークを多めに設けて学ぶ。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション③。

第 5 講	
概要	コミュニケーションスキル⑵ 変革を推進するチェンジマネジメントコミュニケーション戦略
事前、事後学習ポイント	自社のマネジメント層のコミュニケーションの原因を調査してくる
詳細	思考の型（インプット→セルフコーチング→マイポリシー）について、演習を中心に、個人でのワーク及びグループワークを多めに設けて学ぶ。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション④。
第 6 講	
概要	リーダーシップコミュニケーション⑴ コミュニティ開拓者
事前、事後学習ポイント	教科書の指定箇所を読み込んでくる
詳細	リーダーの役割とリーダーシップ・コミュニケーションについて学ぶ。コミュニティ構築者としてのリーダーの役割について学ぶ。個人ワーク後、グループディスカッションにて「自分の理解」を深める。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑤。
第 7 講	
概要	リーダーシップコミュニケーション⑵ 針路設定者
事前、事後学習ポイント	教科書の指定箇所を読み込んでくる
詳細	ナビゲーター（針路設定者）の役割と重要性について解説する。履修者数によっては、教員と院生によるセッション（双方向）を行い、講義内容の理解を深める。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑥。
第 8 講	
概要	リーダーシップコミュニケーション⑶ 変革の仕掛け人
事前、事後学習ポイント	教科書の指定箇所を読み込んでくる
詳細	組織の活性化を促す変革の仕掛け人（批評者、扇動者、学習推進者、イノベーション・コーチ）について学ぶ。 それぞれの役割について、グループディスカッションをし、自社内に落とし込んで考えてみる。
教科書 /Textbook	「リーダーシップ･コミュニケーション」ロバート･メイ、アラン・エイカーソン、徳岡晃一郎訳、ダイヤモンド社（初回講義で注文を受けます） 適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	「ミドルの対話型勉強法」徳岡晃一郎、ダイヤモンド社 「世界の知で創る」野中郁次郎、徳岡晃一郎著、東洋経済新報社 「本気の集団を作るチームコーチングの技術」徳岡晃一郎著、ダイヤモンド社
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(30％)、授業内での議論参加(35％)、プレゼンテーション内容(15％)、最終レポート（20％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A＋（100～90 点）	社内コミュニケーション戦略、リーダーシップコミュニケーションのあり方を理解し、優れた実践ができる。
評価： A（89～80 点）	社内コミュニケーション、リーダーシップコミュニケーションを理解し、社内での改善を企画できる。
評価： B（79～70 点）	社内コミュニケーション、リーダーシップコミュニケーション、を理解し、社内の問題を分析できる。
評価： C（69～60 点）	社内コミュニケーション、リーダーシップコミュニケーションの基礎が理解できている。
評価： F（59 点～）	理解が不十分であり、出席も不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	カルチャーベースマネジメント		
サブタイトル/Sub Title	知識創造の企業文化戦略		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Corporate Culture Management		
教員/Instructor	徳岡 晃一郎	E-mail	tokuoka@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

強欲、株主価値至上主義などが問われ、新たな資本主義のあり様が模索されるなか、これまでの論理分析主体の左脳経営の時代は終わりを告げ、真に豊かなイノベーションを求めて人のつながりや組織的知識創造が重要になってきている。そのカギは自律的行動を促す濃密な企業文化だ。一人ひとりが、共通善に向けたよりよい成長を志向する価値観を共有する企業文化がないところによい戦略は描けない。イノベーションの時代の企業文化の価値とマネジメント手法について考える。実際の事例研究を行うため、スターバックス、マイクロソフト、オムロンなどとパートナーを組んで講義を行う

到達目標/Course Goals

企業文化が戦略の成功や企業の成長にもたらす効果について理解し、ディプロマポリシーにある DP1:「知識と理解」を確実にした上で、DP3:「関心と意欲」を高め、DP2:「思考と判断」を身に着ける。他社事例の研究を通じて、DP4:「表現と技能」を学び、DP5:「志」を醸成して、イノベーターとして社員のエンゲージメントを高めるカルチャーのマネジメントを自社内で実践できることを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション グループワーク、ディベート、 プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：指定図書予習及び宿題資料の読み込みなどで毎回 2 時間程度 事後学習：講義内容の整理で 1 時間程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	企業文化とは何か
事前、事後学習ポイント	企業文化についての一般情報を概観してくる
詳細	企業文化及び組織文化について学ぶとともに、経営戦略スタイルと人事戦略の視点から考察する。また、グループディスカッションで、日本企業と米国企業の文化違いを再認識する。 宿題：指定した企業の企業文化と組織文化について調べ、パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する。
第 2 講	
概要	企業文化のマネジメント 1：企業文化のマネジメントとマネジメントスタイル診断
事前、事後学習ポイント	企業文化について特定企業を選び研究してくる
詳細	第 1 講に続き、企業文化及び組織文化について学ぶとともに、経営戦略スタイルと人事戦略の視点から考察する。 授業後半はマネジメントスタイル診断を行い、個人の特性と組織のカルチャーの関係について、グループディスカッションする。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション①。
第 3 講	
概要	スターバックスの企業文化戦略 1（仮）スターバックスからのゲストとの共同セッション
事前、事後学習ポイント	指定図書の熟読、スターバックス社のサービスの体験
詳細	スターバックスの方を招いての講義。（1 回目） 講義後は、ゲストスピーカーと院生によるセッション（双方向）を行い、現場を理解する。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション②。
第 4 講	
概要	スターバックスの企業文化戦略 2（仮）スターバックスからのゲストとの共同セッション第２回
事前、事後学習ポイント	スターバックス社のサービスの体験
詳細	スターバックスの方を招いての講義。（2 回目） 講義後は、ゲストスピーカーと院生によるセッション（双方向）を行い、現場を理解する。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション③。

第 5 講	
概要	マイクロソフトの企業文化戦略（仮）マイクロソフトからのゲストとの共同セッション
事前、事後学習ポイント	指定図書の熟読
詳細	マイクロソフトの方を招いての講義。 講義後は、ゲストスピーカーと院生によるセッション（双方向）を行い、現場を理解する。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション④。
第 6 講	
概要	オムロンの企業文化戦略（仮）オムロンからのゲストとの共同セッション
事前、事後学習ポイント	オムロンの統合報告書の熟読
詳細	オムロンの方を招いての講義。（2 回目） 講義後は、ゲストスピーカーと院生によるセッション（双方向）を行い、現場を理解する。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑤。
第 7 講	
概要	企業文化のマネジメント 2：社内のカルチャーのマネジメント
事前、事後学習ポイント	事例研究各社からの学びを整理してくる
詳細	企業文化のマネジメントにおける社内のそれぞれのポジションの役割を学び、社内の風土と風土改革、チェンジマネジメントについて考察する。 また、人事戦略の位置づけについてグループディスカッションする。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑥。
第 8 講	
概要	企業文化とグローバル化：日本の企業文化はどう変わるべきか
事前、事後学習ポイント	自社の文化の変革について考えてくる
詳細	ソーシャルビジネスの流れについて学び、「思い」を語り、文化を創るリーダーとチーフカルチャーオフィサーの役割を考える。 イノベーターシップ・コンピテンシーを各自行い、結果についてグループディスカッションする。第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション⑦。
教科書/Textbook	適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	「スターバックス成功物語」ハワード・シュルツ著、大川修二他訳、日経 BP 社 「スターバックス再生物語」ハワード・シュルツ著、月沢李歌子、徳間書店 「ヒット・リフレッシュ」サティア・ナデラ、日経ＢＰ社
参考文献・参考 URL /Reference List	「ボールド：突き抜ける力」ピーター・ディアマンディスほか著、土方奈美訳、日経 BP 社 「本田宗一郎」野中郁次郎著、ＰＨＰ 「世界で闘う仲間のつくり方」ジェニー・チャン著、中川友訳、ダイヤモンド社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(30％)、授業内での議論参加(40％)、最終レポート（30％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：　A＋（100～90 点）	企業文化が戦略の成功や企業の成長にもたらす効果について理解し、自社の企業文化の効果的な改善施策をまとめられる。
評価：　A（89～80 点）	企業文化が戦略の成功や企業の成長にもたらす効果について理解し、自社の課題について深く分析でき、改善の方向性を検討できる。
評価：　B（79～70 点）	企業文化が戦略の成功や企業の成長にもたらす効果について理解し、他社のベストプラクティスを自分の言葉で説明できる。
評価：　C（69～60 点）	企業文化が戦略の成功や企業の成長にもたらす効果について基本的な理解ができている。
評価：　F（59 点～）	企業文化とそのマネジメントに関して理解が不十分であり、出席も不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	ゲスト(仮)は 2019 年の実績であり、秋学期開始前に変更になる可能性があります。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ヒューマンリソース概論 I―B		
サブタイトル/Sub Title	人事戦略の基本と実践研究		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Human resources strategy of knowledge-creating company I―B		
教員/Instructor	佐々木　弘明	E-mail	sasaki-hi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ヒューマンリソース概論Ⅰ-B では、VUCA 時代の企業は経営戦略に資する人事戦略が求められてり、人事の 4 つの機能である採用・育成・評価・配置を駆使し、イノベーションやグローバル化、ダイバーシティを軸にした成長戦略を実現するダイナミックな人事戦略が求められている。その一方で、社内のモチベーションや求心力は危機に瀕している。この壁を乗り越えるには、社員の成長と企業の成長を両輪とした成果主義中心の人事戦略を再策定しなくてはならない。そのような新たな人事のあり方を知識経営の文脈の中で検討し、知識創造型企業への転換にどのように人事が貢献できるのか、経営戦略を実行に移すための鍵となる人事戦略の基本および人事戦略について理論と実践事例を基に考える。

到達目標/Course Goals

知識創造型企業への転換に向けて徹底した議論と自社の課題の分析を通じて、ディプロマポリシーでの DP1「知識と理解」DP2「思考と判断」を身に着け、知を創造するための人事戦略を実践する「志」(DP５）および DP4「表現と技能」を獲得することを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：指定図書予習及び宿題資料の読み込み(毎回２時間程度) 事後学習：講義内容の振り返り(毎回１時間程度)		

講義概要/Course Description　全８講　第１講～第７講は各 90 分×2 講座 第８講は 90 分

第１講	
概要	人事戦略の基礎①
事前、事後学習ポイント	自社の問題点を整理しておく。人事戦略の目的、主な人事制度と課題、これまでの主な人事戦略のフレームワークを整理する
詳細	伝統的な人事制度や人事システム、(採用・育成・評価・配置の関係)を学ぶ。また、人事部の役割、人事のあり方、:現状の課題を学ぶとともに、グループディスカッションで、人事の役割を再認識する。
第２講	
概要	人事戦略の基礎②
事前、事後学習ポイント	経営戦略論と人事戦略の関係、知識創造型人事の役割を考える
詳細	戦略スタイルと人事戦略スタイル、人材マネジメント手法の学習。マッキンゼーの 7S モデルによる人事機能の学習。また、グループワークにより動機づけについて学習し、発表する。 課題：自社の人事組織について調べ、問題点・疑問点をパワーポイントでまとめてくる。第８講までに全員が発表する
第３講	
概要	人事戦略の基礎③採用について考える
事前、事後学習ポイント	採用戦略:最近の採用のトレンドを知る。各社の採用方法を探求する。人材パイプラインについて考える。自社に照らして考察する
詳細	自社の採用制度を調べまとめてきたものを発表しあい、人事を考える各種フレームワークをさらに深掘りし、理想の採用戦略を検討する。ex.先端企業事例紹介。 第１講で出された課題のプレゼンテーション①。
第４講	
概要	人事戦略の基礎④育成について考える
事前、事後学習ポイント	育成戦略:最近の育成のトレンドを知る。各社の育成方法を探求する。知の創造を作る人材パイプラインについて考える。自社に照らし考察する。第３講と第４講を通して、理想の採用・育成戦略を検討する
詳細	自社の育成制度を調べまとめてきたものを発表しあい、人事を考える各種フレームワークをさらに深掘りし、理想の育成戦略を検討する。ex 先端企業事例紹介。 第１講で出された課題のプレゼンテーション②。
第５講	
概要	人事戦略の基礎⑤評価について考える
事前、事後学習ポイント	評価戦略:最近の評価のトレンドを知る。各社の評価方法を探求する。職能主義、成果主義等の事例や自社に照らし考察する。第５講と第６講を通して、理想の評価戦略を検討する

詳細	自社の評価制度を調べまとめてきたものを発表しあい、人事を考える各種フレームワークをさらに深掘りし、理想の評価戦略を検討する。ex 先端企業事例紹介。 第１講で出された課題のプレゼンテーション③。
第 6 講	
概要	人事戦略の基礎⑥配置について考える
事前、事後学習ポイント	配置戦略:最近の配置のトレンドを知る。各社の配置方法を探求する。ジョブチャレンジ、フリーエージェント制等の事例や自社に照らし考察する。第 5 講と第 6 講を通して、理想の評価・配置戦略を検討する
詳細	自社の育成制度を調べまとめてきたものを発表しあい、人事を考える各種フレームワークをさらに深掘りし、理想の評価・配置戦略を検討する。ex 先端企業事例紹介。 第１講で出された課題のプレゼンテーション④。
第 7 講	
概要	人事戦略の基礎⑦タレントマネジメントについて考える
事前、事後学習ポイント	ゲストスピーカーセッション：知識創造を実践している企業の人事部長を招聘しディスカッション
詳細	知識創造企業から、人事シスシステムの構成を学び、「人事部として大事にしたいポイント」を作成し、発表、討議する。 第１講で出された課題のプレゼンテーション⑤。
第 8 講	
概要	人事戦略の基礎⑧知識創造型人事戦略のまとめ
事前、事後学習ポイント	知識創造型人事部とはどうあるべきか、自らの考えを統合する
詳細	第１講から７講までの視点を踏まえて、知識創造企業を構築していく上での人事部の役割とその推進の諸条件について、グループディスカッションする。 第１講で出された課題のプレゼンテーション⑦。
教科書 /Textbook	適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	「MBB：思いのマネジメント」一條和生、徳岡晃一郎、野中郁次郎著、東洋経済新報社（中国語の翻訳あり「信念」）「戦略人事のビジョン」八木洋介、金井壽宏、光文社新書 「人事異動」徳岡晃一郎著、新潮社
参考文献・参考 URL /Reference List	「部下を動かす人事戦略」金井壽宏、高橋俊介著、PHP 新書 「40 代からのライフシフト実践ハンドブック」徳岡晃一郎著、東洋経済新報社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席 (30%)、授業内での議論参加 (35%)、プレゼンテーション内容 (15%)、最終レポート (20%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	人事戦略に関して、自らの企画が行える。
評価： A（89～80 点）	人事戦略論を深く理解し、自社の制度への改善案が描ける
評価： B（79～70 点）	人事戦略論の概要が理解でき、自社の制度の課題を指摘できる。
評価： C（69～60 点）	人事戦略の概要が理解できている。
評価： F（59 点～）	人事戦略の理解が不十分で、出席も不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	秋学期に開講するヒューマンリソース概論 II を受講するには、ヒューマンリソース概論 I―A、I―B のどちらかの単位修得が必須となる。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ストレスマネジメントと精神回復力		
サブタイトル/Sub Title	心身医学・行動科学的観点からみたストレスマネジメントと意識改革		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Stress Management and Resilience		
教員/Instructor	水木さとみ	E-mail	smizuki@mhi-inc.jp
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

心理・社会的ストレスは身体に影響を及ぼし、様々な症状を誘発することは医学的にも明らかになっている。仕事をしていく上で、予期せぬ出来事やハプニングに遭遇しながらも高い目的に向かって進まなくてはならない。逆境の中、自己のもつ能力を最大限に発揮する手段にストレスマネジメントがある。本講座は、心理学・行動科学、さらに心身医学を交え、ストレスマネジメントと精神回復力を養うノウハウを実践的に習得すると共に、組織力向上を目指し、部下のメンタルヘルスにも触れる。労働契約法第５条安全配慮義務に位置づける予見可能性では、部下の変化や不調をいかに速やかに感知できるかが問われ、リスクマネジメントの流れを変える。それは、部下を守り、自身を守り、そして会社を守ることを意味する。職場のストレスマネジメントを軸とし、より良い組織構築に向け、実践的に問題解決力を養うことを目指す。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにおける DP1:「知識と理解」を達成するために、ストレスが招く身体化のメカニズムを理解し、心理学・行動科学・心身医学に基づき、上記目的に資する職場のストレスマネジメントに関して、ケースを交え、洞察力を養い、状況に応じた適切な判断力と解決手法を習得する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：復習および課題に時間をとる（2 時間程度） 事後学習：講義内容を実践し、分析する（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	心理・社会的ストレスが招く身体化のメカニズム　～思考と感情が身体に与える影響～
事前、事後学習ポイント	身体化のメカニズムを理解した上で、ストレスマネジメントの意義を理解する
詳細	適度なストレスは良い刺激となり自己成長を促すが、過度なストレスは身体に影響を与え、疾患を招くことが知られている。ストレスマネジメントの意義を理解し、メンタルヘルスへの正しい認識と意識を高める。ストレスが招く身体化のメカニズムを知り、自らの体験や職場の社員の体験を振り返り、グループディスカッションを通して気づきを得る。
第 2 講	
概要	心理学・行動科学的観点からみる他者理解　～対人関係ストレスをミニマムにするには～
事前、事後学習ポイント	科学的観点から他者理解を深める手法を身につけ、職場における対人関係の問題に向き合う
詳細	対話なくして仕事は成立しない。しかし残念ながら、職場における対人関係に悩む社員は少なくない。厚生労働省が実施する健康調査によると、ストレス要因の上位には、毎回“職場の人間関係問題”が挙がる。本講座では、対人関係ストレスをミニマムにし、良好な対人関係を構築するために、心理学・行動科学に基づき他者理解を深める。ケースを交えグループディスカッション、ロールプレイングを通して新たなコミュニケーション術を習得する。 宿題：可能な限り、職場で生じた対人関係問題に触れ、心理パターンを分析、行動理由を探り、関係性の改善に向けたアプローチを考える。発表者を募り、第 3 講でケースを発表、事例検討を行う。
第 3 講	
概要	逆境に立ち向かうストレスマネジメント　～自己効力感 レジリエンスを交えて～
事前、事後学習ポイント	自己効力感・レジリエンスの意味を理解し、行動拡大・自己成長に向けた取り組みを行う
詳細	第 2 講の課題：発表者による事例検討会 古くから“病は気から”ということわざがある。今や医学的、科学的にもその根拠は実証されている。逆境の中、困難な状況にあっても克服する人、過酷な状況にも左右されず良い結果をもたらす人がいる。そうした心理状態と精神回復力に焦点を当てる。米国心理学会では、こうした力は、誰もが学習する可能性があり発展させることができるとした。理論、手法の他、レジリエンス力を強化するために、自身が大学病院にてストレス性疾患の患者に向けて実施した独自のリラクセーション法を合わせて紹介する。自律神経系のバランスを整え、平常心を養う手段として、ストレスマネジメントの一環として導入されたい。
第 4 講	
概要	組織強化と育成　～ラポールとモチベーション、フロー心理を交えて～

事前、事後学習ポイント	部下の行動特性を考慮したモチベーションへの取り組みを実践、ケーススタディに繋げる
詳細	部下の育成にあたって信頼関係なくしては語れない。相手の印象を決定づける情報とは、言葉よりもむしろ、言葉以外からなるノンバーバル・コミュニケーションが大きな割合を占めることが知られている。本講座では、心理学を交えた面談法と行動科学を交え行動特性を考慮したモチベーションを紹介する。ケースを挙げ、グループワークを通して発表。
第 5 講	
概要	マインドアップと行動変容　～行動変容ステージからみる意識改革～
事前、事後学習ポイント	職場におけるモチベーションの低い社員へのアプローチを試み、次回、議論へと繋げる
詳細	本講義では、部下の自己成長に向けた適切なアプローチを考える。部下は行動するべき意味を理解していないため実行しないのか、あるいは頭の中では理解しているものの、実行するに至らないのか。部下の行動理由、心理、抱える問題を理解し、行動変容ステージからアプローチ法を検討する。ケースを交えたグループディスカッション、問題解決へと導く（発表）。
第 6 講	
概要	現代社会におけるストレス性疾患　～早期発見と適切なとり組み～
事前、事後学習ポイント	部下の些細な変化や不調を迅速に感知するための洞察力と面談法を身につける
詳細	ストレス社会を背景に、企業では社員のストレスチェックやメンタルヘルス研修の実地など、様々な取り組みがなされている。安全配慮義務に示す予見可能性は、メンタルヘルスの流れを変える早期発見の重要な位置づけとなる。部下の些細な変化や不調を迅速に感知する観察法および面談法を紹介すると同時に、状態に合わせた適切な対応を学ぶ。ケースを交えグループディスカッションを通して検討し、発表する。
第 7 講	
概要	精神的な問題を抱える社員の対応法　～社員を救うメンタルサポート～
事前、事後学習ポイント	情緒的支援をするにあたり、状況に応じた適切な判断と対応を身につける
詳細	失業者を対象に、情緒的支援の有無と疾患率や死亡率に関して、研究者らが調査したところ、明らかに相関が認められたことが報告された。このことは、周囲の精神的なサポートは非常に有効であることを意味づけている。本講座では、事例を通して、支援が有効なケースと専門家にリファーしなくてはならないケースの見極め方を紹介し、適切な支援法について紹介する。職場の休職者や復職者の支援にも、是非、活用していただきたい。
第 8 講	
概要	本講座のフィードバックと新たなとり組み ～本講座を通して何を学んだか？　今後の活かし方を考える～
事前、事後学習ポイント	講義で学んだことを、今後、どのように活かしていくのかをシエアする
詳細	全講座を通して学んだこと、気づきを得たことなどをシェアし、各自が今後の活かし方を発表する　　宿題：最終レポート
教科書 / Textbook	適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	無し
参考文献・参考 URL /Reference List	「不安・うつは必ず治る」山田和夫著　勉誠出版、「MBB：思いのマネジメント」一條和生　徳岡晃一郎　中野郁次郎著　東洋経済新報社日経 BP 社ヒューマンキャピタル Online 水木さとみ「ストレスマネジメントのすすめ」「やさしい心理学から学ぶストレスマネジメント実践法」
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席 / プレゼンテーション / ディスカッション / レポート　　各 25%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：A＋（100～90 点）	ストレスマネジメントの意義を十分に理解し、状態に応じた問題解決力が養われている
評価：A　（89～80 点）	とり巻く環境のなかで、解決に向けた具体的かつ実践的な対策を提案できる
評価：B　（79～70 点）	ケースにおける分析と適切な判断ができる
評価：C　（69～60 点）	ディスカッションでは積極的に意見を発信できる
評価：F　（59 点以下 ）	発表、ディスカッションには消極的で、ストレスマネジメントの意義を理解できていない
留意点 /Additional Information	評価方法にあるレポートに関しては、メールでフィードバックを行う

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	実践組織変革		
サブタイトル/Sub Title	組織変革のリーダーシップと技術（知考具）		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Organizational Change		
教員/Instructor	浜田 正幸	E-mail	hamada-m@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

① 組織論・組織マネジメント・組織イノベーションに関する基本的な知識と理論・モデルを学修する。② 組織変革の事例研究によって、組織を分析する軸と多様性を知る。

到達目標/Course Goals

DP2:「思考と判断」、DP4:「表現と技能」

授業形態 /Form of Class	講義、プレゼンテーション、グループワーク、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	資料・参考書籍の精読・整理（毎回 2 時間）。プレゼンテーション資料作成（10 時間）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション。組織変革事例研究 1。
事前、事後学習ポイント	組織論、リーダーシップ論に関する代表的な文献を入手し，精読する。
詳細	講義の進め方。事例研究の方法について説明。
第 2 講	
概要	事例研究とそれに関するディスカッション
事前、事後学習ポイント	事例研究に関する資料作成とプレゼンの準備。
詳細	組織変革トピックス 1。組織変革事例研究 2, 3。
第 3 講	
概要	事例研究とそれに関するディスカッション
事前、事後学習ポイント	事例研究に関する資料作成とプレゼンの準備。
詳細	組織変革トピックス 2。組織変革事例研究 4, 5。
第 4 講	
概要	事例研究とそれに関するディスカッション
事前、事後学習ポイント	事例研究に関する資料作成とプレゼンの準備。
詳細	組織変革トピックス 3。組織変革事例研究 6, 7。
第 5 講	
概要	事例研究とそれに関するディスカッション
事前、事後学習ポイント	事例研究に関する資料作成とプレゼンの準備。
詳細	組織変革トピックス 4。組織変革事例研究 8, 9。
第 6 講	
概要	事例研究とそれに関するディスカッション
事前、事後学習ポイント	事例研究に関する資料作成とプレゼンの準備。
詳細	組織変革トピックス 5。組織変革事例研究 10,11。
第 7 講	
概要	事例研究とそれに関するディスカッション
事前、事後学習ポイント	事例研究に関する資料作成とプレゼンの準備。
詳細	組織変革トピックス 6。組織変革事例研究 12, 13。
第 8 講	

概要	事例研究とそれに関するディスカッション
事前、事後学習ポイント	事例研究に関する資料作成とプレゼンの準備。
詳細	組織変革事例研究 12 全体の学修
教科書 /Textbook	なし
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	ロバート・キーガン他（2013）. なぜ人と組織は変われないのか　英治出版 ロバート・キーガン他（2017）. なぜ弱さを見せあえる組織が強いのか　英治出版
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	組織変革の事例研究発表・課題提出（50%）　平常点・議論への参加（50%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	事例研究発表・課題提出の内容が優れている、かつ議論への参加が積極的である。
評価： A（89～80 点）	事例研究発表・課題提出の内容が優れているが、議論への参加が少ない。
評価： B（79～70 点）	事例研究発表・課題提出の内容が薄いが、議論へは参加している。
評価： C（69～60 点）	事例研究発表・課題提出があるが内容が薄い、議論への参加も少ない。
評価： F（59 点～）	事例研究発表・課題提出がない、あるいは議論への参加が少ない。
留意点 /Additional Information	事例研究について濃密なディスカッションを行うので、クラスディスカッションに積極的に参加することができ、知的なバトルに対する耐性を有していること。 連絡先：hamada-m@tama.ac.jp

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	キャリアマネジメントとモチベーション		
サブタイトル/Sub Title	人生 100 年時代を生きるキャリア創造戦略		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Career Management & Motivation		
教員/Instructor	片岡　裕司	E-mail	kataoka@fkpractice.jp
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

本講義の目的は、院生の今後のキャリアマネジメントに重要な指針を提供するとともに、企業内のキャリアパスの在り方、またそれをベースとしたモチベーション戦略に根本的な変革が迫られていることを理解することにある。日本型の雇用システムについては、年金財政の破綻から近い将来定年は 70 歳まで引き上げられるとも言われており、一方、日本の定年制はグローバル経営の観点からは、極めて非合理的な年齢による差別的制度という指摘もある。このような環境を洞察し、個人としてのキャリアマネジメントと、企業としてのモチベーション戦略の在り方は、その前提となる価値観から根本的に転換する必要があるが、多くのビジネスパーソンや企業は延長線上での思考から脱却することができていない。本講義では、新たな時代に向かってのキャリアマネジメントとモチベーション戦略がどうあるべきか。そこに向けて個人レベルと企業レベルで何を変革してかなければならないか、について考察を深める。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」、自らのキャリアをどう切り開くかという DP5:「志」の達成に向け、キャリアとモチベーションという観点から人と組織の本質について考察する。イノベーターとして自分のキャリアを主体的にデザインする能力を身に付けると共に、自分が関与する組織において適切な動機付けシステムを設計する能力を身に付ける。

授業形態 /Form of Class	講義 グループディスカッション グループワーク　プレゼンテーション 双方向　ワークショップ	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：予習に十分な時間をとること（2 時間程度） 事後学習：講義、演習内容を整理し深める（1 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	モチベーション理論　基礎編～人はなぜやる気になるのか～
事前、事後学習ポイント	モチベーション理論の原点、変遷を理解する 自分の動機と強みを探求する
詳細	モチベーション理論の変遷を紐解く。特に、テイラーの合理的経済人モデルとメイヨーの社会人モデルについて考え、グループディスカッションを行う。 キャリアデザインのリソースとなる、価値観、動機、強みの 3 つの要素を理解し、自分の動機についてグループワークを通じて理解を深める
第 2 講	
概要	キャリア理論　基礎編
事前、事後学習ポイント	キャリア理論の変遷からこれからのあるべき姿について考える
詳細	高橋俊介「21 世紀のキャリア論」（東洋経済）の課題設定に基づき、キャリアマネジメントの課題についてグループワークにより意見をまとめる。キャリアケースについてグループディスカッションを行い、キャリアデザインの重要性を理解する
第 3 講	
概要	モチベーション理論
事前、事後学習ポイント	モチベーション理論の展開を知り、組織人事マネジメントの課題を理解する
詳細	ダニエル・ピンク「モチベーション 3.0」（講談社）、金井壽宏「働くみんなのモチベーション論」（NTT 出版）に基づき、企業レベル、個人レベルの課題を抽出し、モチベーション戦略の今後についてグループワークにより意見をまとめ、発表する。「一皮むけた経験」という概念を理解し、自分の価値観を探求する。
第 4 講	
概要	幸福から考えるキャリアとモチベーション
事前、事後学習ポイント	近年注目が高まる「幸福学」の観点からキャリアとモチベーションを捉える
詳細	ゲスト講師を予定。個人の幸福、ウェルビーイングという観点からキャリアとモチベーションについて掘り下げて考えていく。幸福の因子から自分の現状を分析しグループディスカッションを行い、様々な視点について議論を行う。
第 5 講	
概要	日本企業におけるキャリアマネジメントとモチベーション戦略の課題

事前、事後学習ポイント	今後の日本企業が抱えるキャリアマネジメントの課題を理解する
詳細	伝統的な日本企業のキャリアマネジメントとキャリアパスの現状と、少子高齢化が生み出す環境課題を抽出し、根本的な課題が何かを検討する。またグループディスカッション通じ、多様な意見をまとめ発表する。キャリアアンカーテストを受診し、自分のアンカーを知る。
第 6 講	
概要	自己認識力と変容学習
事前、事後学習ポイント	キャリア開発とモチベーションマネジメントのコアとなる自己認識力について理解する
詳細	ゲスト講師を予定。大人の学習、成長理論を理解し、そのコアとなる自己認識力の重要性についてグループディスカッションを通じて理解を深める。変容学習理論を理解し自分自身の成長に向けた鍵を知る。
第 7 講	
概要	デザイン思考とキャリアマネジメント
事前、事後学習ポイント	自分自身のキャリアマネジメントのまとめと、今日的な組織課題を深める
詳細	変化の激しい時代のキャリアでデザイン、マネジメントについてグループワークを通じ理解を深める。ここまでの講義をまとめグループディスカッションを通じ思考を深める。課題：上記グループディスカッションを踏まえ、自分の考えを第 8 講までにまとめレポートを作成、提出する
第 8 講	
概要	キャリアマネジメントとモチベーション戦略のまとめ
事前、事後学習ポイント	個と組織は今後どうあるべきか
詳細	第 1 講から 7 講までの視点を踏まえて、個人のキャリアマネジメントと企業のモチベーション戦略について、グループワークを行い発表する。
教科書 /Textbook	適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	Daniel H・Pink（2010）「モチベーション 3.0」（講談社） 高橋俊介(2012)「21 世紀のキャリア論」（東洋経済）
参考文献・参考 URL /Reference List	Lynda Gratton　Andrew Scott（2016）「ライフシフト」（東洋経済） 片岡裕司（2016）「何とかしたいベテラン社員がイキイキ動き出すマネジメント」（日本経済新聞出版） 金井壽宏（2006）「働くみんなのモチベーション理論」（NTT 出版） Robert Kegan Lisa Laskow Lahey（2013）「なぜ人と組織は変われないのか」（英治出版）
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席(30%)、授業内での議論参加(50%)、最終レポート内容(20%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	テーマを明確に理解し、授業内での議論をリードしている。その上で、レポート内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	テーマを一定程度理解し、授業内での議論に積極的に参加がしている。その上で、レポート内容が良い。
評価： B（79～70 点）	テーマを一定程度理解し、授業内での議論参加ができている。レポート内容は講義でのポイントは押さえられている。
評価： C（69～60 点）	テーマの理解が不十分で適切な議論参加ができてない。レポート内容は講義でのポイントが一部押さえられていない。
評価： F（59 点～）	出席不良で、テーマの理解が不十分で議論参加できていない。レポート内容が不十分。
留意点 /Additional Information	特になし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	実践ポジティブ心理学		
サブタイトル/Sub Title	個人・組織のウェルビーイング（幸せ感）を高める方法		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Practice of Positive Psychology		
教員/Instructor	三田真美	E-mail	qhronicles@gmail.com
科目群/Course Classification	リーダーシップと人事	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

新しい心理学の分野であるポジティブ心理学について、その学際的な背景から様々な応用範囲までを概論します。健康な人の精神状態に焦点をあてるポジティブ心理学は、人間にとって本当の幸せとは何かを追求するものです。本講座を踏まえ、自身の成長促進ならびに組織の課題解決の手がかりとして、日頃から活用いただくことを目的としています。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP3:「関心と意欲」を獲得し、DP4:「表現と技能」を向上するために、①理論を踏まえ、ポジティブ心理学の各種エクササイズ（ポジティブ介入）を習得しながら、何らかの自己変容を体感する、②各自が所属する組織、場の課題解決において、ポジティブ心理学の応用可能性を考え、具体的な介入計画を立て、さらなる実践につなげていただきます。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、双方向、ワークショップ	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：指定する文献の熟読（２時間程度） 事後学習：講義のまとめ、宿題ミニレポート（実践）の作成、プレゼン準備（２時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	ポジティブ心理学とは何か―「幸せの５条件」
事前、事後学習ポイント	ポジティブ心理学の目的と位置付けを知る
詳細	ポジティブ心理学の成り立ち、学問的位置づけから、その主たる考え方、用語について概説する。ポジティブ心理学の実践において重要な役割を果たすエクササイズをいくつか紹介し、簡単なエクササイズの実践を課題として課す。
第 2 講	
概要	快・不快・ポジティブな感情・経験から人生の満足度を考える
事前、事後学習ポイント	興味のある文献を読み、ポジティブ心理学の基礎的な考え方を把握し、エクササイズを実践してみる
詳細	１ヶ月の振り返りから始める。ピークエンド理論やフレドリクソン「拡張―形成理論」などポジティブな感情にまつわる主要理論や人生の満足度にまつわる重要尺度について学び、ポジティブ感情とウェルビーイングの関係について理解を深める。宿題：簡単なエクササイズの実践を課す。
第 3 講	
概要	自分と組織の「強み」を意識する―キャラクターストレングス
事前、事後学習ポイント	興味のある文献を読み、より内省的にポジティブ心理学を捉えつつ、エクササイズを実践してみる
詳細	１ヶ月の振り返りから始める。幸福感を高める上で重視される「強み（キャラクターストレングス）」について理解を深める。強みを測定する幾つかの手法について学び、自身の強みも測定する。強みを認識し、組織において個々人の強みの活かし方についても考える。宿題：簡単なエクササイズの実践を課す。
第 4 講	
概要	レジリエンスとマインドセット―ストレスと成長、達成の深い関係
事前、事後学習ポイント	興味のある文献を読み、ポジティブ心理学の応用可能性について考える
詳細	１ヶ月の振り返りから始める。ストレスマネジメントにおいても注目されるレジリエンス（再起する力）は、ポジティブ心理学においても多方面で研究され、様々な介入方法が開発されている。レジリエンスについて、互いの体験も共有しながら、ポジティブ介入によるレジリエンストレーニング、リーダーシップと「成長マインドセット」について考える。宿題：簡単なエクササイズの実践を課す。

第 5 講	
概要	フローと意志力、意味―ポジティブは創造の始まり
事前、事後学習ポイント	興味のある文献を読み、ポジティブ心理学の応用可能性について考える
詳細	1 ヶ月の振り返りから始める。没頭が深い高揚感につながることを説いた「フロー理論」を手掛かりに、創造性とポジティビティの関係について各自の体験も共有しながら考える。フロー状態につなげるために求められる「意志」「意味」についても考える。宿題：簡単なエクササイズの実践を課す。
第 6 講	
概要	ポジティブな人間関係――「情けは人のためならず」を科学する
事前、事後学習ポイント	興味のある文献を読み、ポジティブ心理学の応用可能性について考える
詳細	1 ヶ月の振り返りから始める。誰しも独りでは幸せにはなれない。ポジティブ心理学においても「対人関係（アザー・ピープルマター）」を重視。よりよい人間関係について「積極的–建設的反応」などを例に考え、利他的な行為の効用に関する科学的なエビデンスについても触れる。宿題：簡単なエクササイズの実践を課す。
第 7 講	
概要	ポジティブな職場づくり―熱い組織、冷たい組織
事前、事後学習ポイント	興味のある文献を読み、ポジティブ心理学の組織への応用可能性について考える
詳細	1 ヶ月の振り返りから始める。 1 講から 6 講で得たポジティブ心理学の知見を踏まえ、幸せな職場について議論する。ポジティブな組織変革の事例紹介も交える予定。宿題：簡単なエクササイズの実践を課す。
第 8 講	
概要	幸せのために何を残すべきか？――ポジティブ心理学からポジティブ・コンピューティングへ
事前、事後学習ポイント	最終レポートをまとめる
詳細	ポジティブ心理学をゲームやセンサリングにも応用する「ポジティブ・コンピューティング」の可能性について触れ、これからの AI 全盛時代にあって個人や組織に幸せをもたらすものについて議論しながらイメージを共有し、各自にとってのウェルビーイングを考え、最終レポートとしてまとめる。最終講義では瞑想の専門家によるマインドフルネスワークショップを実施。
教科書 /Textbook	適宜、指示し、資料を配布します。
指定図書 /Course Readings	「ポジティブ心理学が 1 冊でわかる本」イローナ・ボニウェル著（国書刊行会） 「ポジティブ心理学の挑戦 “幸福”から“持続的幸福”へ」マーティン・セリグマン著（ディスカヴァー・トゥエンティワン）
参考文献・参考 URL /Reference List	「マインドセット “やればできる！”の研究」キャロル・ドゥエック著（草思社）、 「しあわせ仮説」ジョナサン・ハイト著（新曜社）
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席（30%） 授業内での議論参加（40%） レポート内容（30%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	出席率が良好。問題意識をもち積極的な議論参加、発表内容・レポート内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論参加と発表内容・レポート内容が良い。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加と発表内容・レポート内容が普通。
評価： C（69～60 点）	出席率が不良。授業内での議論参加と発表内容・レポート内容が意欲的ではない。
評価： F（59 点～）	出席率が著しく不良。授業内での議論参加と発表内容・レポート内容が不十分。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ファイナンス基礎Ⅰ（経営財務）		
サブタイトル/Sub Title	ファイナンス（企業金融）の基礎を学ぶ		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Corporate Finance Ⅰ		
教員/Instructor	宇佐美　洋	E-mail	usami@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

企業金融に関する問題発見とその解決のアプローチを学びます。現在価値、ポートフォリオ理論、投資、資本調達、資本構成など、ファイナンスの基礎知識に習熟し課題解決に利用できる技術を習得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでのDP1:「知識と理解」および「知の再武装」を達成するために、企業金融や財務分析の背景にある基礎知識や重要な概念を丁寧に説明する。また、金融、財務、会計、事業評価、リスクマネジメントの「仕組み」も把握し、資金調達や投資判断の応用力も身につける。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、ディベート	学外学習 /Off-Campus Learning	取引所等、取引現場フィールドワーク
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	教科書の該当する章を読み、併せて使われているファイナンスの基礎概念も確認して予習し（約90分）、教科書章末問題により復習（約30分）をする。		

講義概要/Course Description　全8講　第1講～第7講は各90分×2講座 第8講は90分

第1講	
概要	パーソナルファイナンスとコーポレートファイナンス 会社と財務諸表分析入門
事前、事後学習ポイント	教科書まえがきおよび第1章と2章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　企業の4形態、企業の所有と支配 ②　株式市場 ③　財務諸表入門（貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書）
第2講	
概要	無裁定価格と財務意思決定 意思決定の評価法、貨幣の時間的価値
事前、事後学習ポイント	教科書第3章および4章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　裁定と一物一価の法則　リスクの価格、取引費用と裁定 ②　お金の時間的価値、キャッシュフロー流列 ③　現在価値、将来価値
第3講	
概要	利子率、投資の意思決定法 利子率の表示と調整、決定要素、現在価値法ほか
事前、事後学習ポイント	教科書第5章および6章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　利子率の決定要素、リスクおよび税金 ②　資本の機会費用 ③　ＮＰＶと独立したプロジェクト ④　内部収益率法　回収期間法
第4講	
概要	資本予算の基礎、債券評価 利益の予測、フリーキャッシュフロー、債券価格および利回り、イールドカーブ
事前、事後学習ポイント	教科書第7章および8章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　収益と費用の推定、増分利益予測、 ②　サンクコスト、 ③　債券価格の動的変化　イールドカーブと裁定取引
第5講	
概要	株式評価 資本市場のリスクの価格付け、情報と株価
事前、事後学習ポイント	教科書第9章および１０章に目を通して予習、演習問題による復習

詳細	①　配当割引モデルの適用、 ②　総還元モデル、フリーキャッシュフローモデル ③　リスクとリターン ④　システマティックリスク
第６講	
概要	最適ポートフォリオの選択と資本資産評価モデル、資本コストの推定 ポートフォリオの期待収益率、無リスク預金と借入、資本資産評価モデル
事前、事後学習ポイント	教科書第１１章および１２章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　ポートフォリオの期待収益率、無リスク預金と借入、 ②　資本資産評価モデル、 ③　リスクプレミアムの決定、ベータの推定
第７講	
概要	投資行動と資本市場の効率性 市場の効率性
事前、事後学習ポイント	教科書第１３章および１４章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　情報と合理的期待、 ②　個人投資家の行動とシステマティックな取引バイアス ③　市場ポートフォリオの効率性 ④　マルティファクターモデル
第８講	
概要	負債と税 支払利息と税金控除
事前、事後学習ポイント	教科書第１５章に目を通し予習、演習問題による復習
詳細	①　支払利息節税枠の評価 ②　税の下での最適資本構成
教科書 /Textbook	「コーポレートファイナンス：入門編」バーク・ディマーゾ著、ピアソン、2011年 “Corporate Finance,2nd.Ed” Berk/DeMarzo, Pearson Education,2011
指定図書 /Course Readings	「コーポレート・ファイナンス」荒井・高橋・芹田著、中央経済社、２０１６年、
参考文献・参考 URL /Reference List	「パーソナルファイナンス」アルトフェスト著伊藤他訳、日本経済新聞社、 「ＦＰテキスト　パーソナルファイナンス」日本ＦＰ協会
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席（３０%）プレゼンテーション（４０%）、ディスカッション（３０%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：　A+（100～90 点）	企業金融の知識を利用し問題抽出、課題設定、定式化、分析、提案が行える。
評価：　A（89～80 点）	企業金融の知識を利用し問題抽出、課題設定、定式化、分析が行える。
評価：　B（79～70 点）	企業金融の知識を利用し問題抽出、課題設定、定式化が行える。
評価：　C（69～60 点）	企業金融の知識を利用し問題抽出、課題設定が行える。
評価：　F(59 点～)	企業金融の知識を利用し問題抽出か課題設定のいずれかしかできない。
留意点 /Additional Information	【ＦＰ資格必修】 秋学期の「ファイナンス基礎Ⅱ」と連続して受講するのが望ましい。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ファイナンス基礎 II（リスクマネジメント）		
サブタイトル/Sub Title	企業金融の新しい考え方を学ぶ		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Corporate Finance II		
教員/Instructor	宇佐美　洋	E-mail	usami@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ファイナンス＆ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

企業金融とリスクマネジメントに関する問題発見と解決の応用アプローチを学ぶ。応用のケーススタディとしてはＭ＆Ａ、企業再編、コーポレートガバナンスの例を考える。リスクマネジメントでは、保険やデリバティブを使った解決策を身につける。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」および「知の再武装」を達成するために、事業判断およびリスクマネジメントの新しい方法を学ぶ。コーポレートガバナンス、企業再編、Ｍ＆Ａの実務に習熟し、保険、先物、スワップ、オプションなどを利用したリスク管理手段を身につける。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、ディベート	学外学習 /Off-Campus Learning	取引所など取引現場フィールドワーク
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	教科書の該当する章を読み、併せて使われているファイナンスの基礎概念も確認して予習し（約 90 分）、教科書章末問題により復習（約 30 分）をする。		

講義概要/Course Description　全８講　第１講～第７講は各 90 分×2 講座 第８講は 90 分

第１講	
概要	財務危機、インセンティブ、情報、シグナリング
事前、事後学習ポイント	教科書の第１６章と１７章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　財務危機と経営者のインセンティブ、 ②　情報の非対称性とエイジェンシー問題、 ③　配当政策、 ④　配当のシグナリング効果
第２講	
概要	資本予算と企業評価 加重平均資本コスト法（ＷＡＣＣ法）、ＡＰＶ法
事前、事後学習ポイント	教科書第１８章および１９章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　加重平均資本コスト法（ＷＡＣＣ法）の使い方 ②　ＡＰＶ法の使い方 ③　ファイナンスモデルの作成法
第３講	
概要	オプション 金融オプション、プット・コール・パリティ、オプション価格評価
事前、事後学習ポイント	教科書第２０章および２１章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　金融オプションの基礎 ②　プット・コール・パリティの理解 ③　オプション価格評価の基礎 ④　二項モデル、ブラック・ショールズ・モデル
第４講	
概要	リアルオプション、リース契約 決定樹による分析
事前、事後学習ポイント	教科書第２２章および２５章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　リアルオプションとは、決定樹による分析、 ②　延期オプション、成長オプション、撤退オプション ③　リース契約のエッセンス
第５講	
概要	運転資本管理、短期ファイナンスプラニング 企業間信用、銀行融資

事前、事後学習ポイント	教科書第２６章および２７章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　運転資本管理、 ②　企業間信用、売掛金・買掛金管理、棚卸資産・現金管理 ③　銀行融資による短期資金調達、 ④　コマーシャルペーパー
第６講	
概要	Ｍ＆Ａ、コーポレートガバナンス Ｍ＆Ａの歴史、買収プロセス、買収防衛策
事前、事後学習ポイント	教科書第２８章および２９章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　Ｍ＆Ａの歴史 ②　買収に対する市場反応 ③　買収プロセス、買収防衛策 ④　コーポレート・ガバーナンス
第７講	
概要	リスクマネジメント 保険、商品価格変動リスク、為替リスク、金利リスク情報
事前、事後学習ポイント	教科書第３０章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　保険の仕組みと保険料の算出 ②　商品価格変動リスク管理と先物 ③　為替リスク管理と先渡しとオプション ④　金利リスク管理とイールドカーブ
第８講	
概要	国際コーポレートファイナンス 国際的に統合された資本市場
事前、事後学習ポイント	教科書第３１章に目を通し予習、演習問題による復習
詳細	①　外貨建てキャッシュフローの評価 ②　価値評価と国際税制 ③　為替リスクを伴う資本予算
教科書 /Textbook	「コーポレートファイナンス：応用編」バーク・ディマーゾ著、ピアソン、2011年、 “Corporate Finance,2nd.Ed” Berk/DeMarzo, Pearson Education,2011
指定図書 /Course Readings	「コーポレート・ファイナンス」荒井・高橋・芹田著、中央経済社、２０１６年、
参考文献・参考 URL /Reference List	「パーソナルファイナンス」アルトフェスト著伊藤他訳、日本経済新聞社、 「ＦＰテキスト　リスクマネジメント」日本ＦＰ協会
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席（３０％）プレゼンテーション（４０％）、ディスカッション（３０％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：　A+（100～90 点）	事業評価およびリスクマネジメント手法を利用し、問題設定、課題設定、定式化、分析、提案が行える。
評価：　A（89～80 点）	事業評価およびリスクマネジメント手法を利用し、問題設定、課題設定、定式化、分析が行える。
評価：　B（79～70 点）	事業評価およびリスクマネジメント手法を利用し、問題設定、課題設定、定式化が行える。
評価：　C（69～60 点）	事業評価およびリスクマネジメント手法を利用し、問題設定、課題設定が行える。
評価：　F（59 点～）	事業評価あるいはリスクマネジメント手法を利用し、問題設定か課題設定のいずれかしかできない。
留意点 /Additional Information	【ＦＰ資格必修】 春学期の「ファイナンス基礎 I」と連続して受講するのが望ましい。春学期受講してない場合は、上記指定図書にて同時並行的に基礎概念を学ぶこと。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	法の経済分析入門		
サブタイトル/Sub Title	経営者のためのルール学習法とその基礎知識		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Law & Economics		
教員/Instructor	宇佐美　洋	E-mail	usami@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

経営に関連する法律・ルール・組織・ガバナンスなどのビジネス取引実務の「OS　（オペレーション・システム）」とも呼ぶべき基盤に対する洞察力を得るための新しいアプローチを学ぶ。経営者がこのようなシステムを理解するためには、（一見、法律・ルールと経済は無関係にもみえるが、実は）新しい経済学の考え方を使って分析することがきわめて有効な武器となる。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーのDP1:「知識と理解」および「知の再武装」の一環として、本講義ではまず、経営者・ビジネスマンにとっては必須であり、ＭＢＡの学習にとってもなくてはならない経済学、会計、ファイナンス、統計などの基礎知識を学ぶ。またそれを応用した、法律・制度・ルールの構造を読み解く手法である「法の経済分析」に習熟する。

授業形態 /Form of Class	講義、発見学習、グループディスカッション、プレゼンテーション、ディベート、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	取引現場のフィールドワーク予定
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	テキストの読解に必要な経済学、法律、ファイナンス、会計の基礎概念を含めた予習（約 90 分）と、テキストのケーススタディにより復習（約 30 分）する。		

講義概要/Course Description　全８講　第１講～第７講は各 90 分×2 講座 第８講は 90 分

第１講	
概要	「法と経済学」入門 法律や組織や制度など広い意味でのルールを理解するために、「経済学的」視点が、なぜ必要なのか？
事前、事後学習ポイント	教科書第１章に目を通して予習、下記指定図書「法と経済学入門」でポイントの復習
詳細	①経済学の「取引費用」を使った契約、不法行為、所有権、株式会社など具体事例を使った説明。 ②「決定分析」を使った経営の意思決定の方法の学習。
第２講	
概要	新しい経済学 ゲーム理論、取引費用の経済学、情報の経済学、契約の経済学、行動経済学
事前、事後学習ポイント	教科書第２章に目を通して予習、講義後はポイントの整理・復習
詳細	①　「囚人のジレンマ」などゲーム理論の基礎、 ②　「逆選択」「モラルハザード」など情報の経済学の基礎 ③　 2016 年ノーベル経済学賞と契約の経済学
第３講	
概要	契約の実際、簿記・会計・財務分析の基礎 必要最低限の簿記・会計の知識
事前、事後学習ポイント	教科書第３章および４章に目を通して予習、講義後はポイントの整理・復習
詳細	①　契約作成の基本原則など具体的契約の実際 ②　簿記・会計の基礎知識の習得・ ③　財務分析の基礎
第４講	
概要	ファイナンスの基礎、ミクロ経済学のエッセンス 企業経営、投資分析、ファイナンス・ミクロ経済学の基本
事前、事後学習ポイント	教科書第５章および６章に目を通して予習、また講義後はポイントの整理・復習
詳細	①　投資評価や企業評価などファイナンスの基礎、 ②　市場分析、価格分析などミクロ経済学のエッセンス
第５講	
概要	ミクロ経済とルール分析（外部性、公共財、厚生経済学）、財産法の経済分析

事前、事後学習ポイント	教科書Ｐ．３２３－３６５に目を通して予習、講義後はポイントの整理・復習
詳細	① ミクロ経済学の概念である外部性、公共財、厚生経済学などとルール分析の関係 ② 財産法（知的財産法を含む）の経済分析
第６講	
概要	不法行為法の経済分析、契約の経済分析 経済活動と不法行為法の経済分析、完備契約と不完備契約
事前、事後学習ポイント	教科書Ｐ．３６６－４０３に目を通して予習、講義後はポイントの整理・復習
詳細	① ビジネスおよび経済活動と不法行為法の関係の経済分析、 ② 不完備契約理論を使った契約の本質
第７講	
概要	民事訴訟法の経済分析、公的機関による法の実現、刑法の経済分析、統計分析その他の法律分野の経済分析、一変数の統計分析
事前、事後学習ポイント	教科書Ｐ．４０３－４７４に目を通して予習、講義後はポイントの整理・復習
詳細	① 訴訟の提起から判決まで（民事訴訟法の経済分析） ② 公的機関による法の実現（罰金刑、自由系、隔離）と刑法 ③ 法の経済分析のための統計分析の基礎
第８講	
概要	多変数統計法 の経済分析のための統計分析応用
事前、事後学習ポイント	教科書Ｐ．４７５－５１７に目を通し予習、講義後はポイントの整理・習
詳細	二変数統計、重回帰分析など統計分析応用編
教科書 /Textbook	「数理法務概論」H.ジャクソン／S.シャベル他著、有斐閣、2014 年、 ”ANALYTICAL METHODS FOR LAWYERS，2ND. ED.” Jackson／Kaplow，West Academic Publication、2003
指定図書 /Course Readings	「法律家をめざす人のための経済学」常木淳著、岩波書店、２０１５年 「法と経済学入門」神田・小林著、弘文堂、1987 年
参考文献・参考 URL /Reference List	「ＦＰテキスト　不動産運用設計」日本ＦＰ協会
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席（３０%）プレゼンテーション（４０%）、ディスカッション（３０%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A+（100～90 点）	法の経済分析を利用し、問題抽出、課題設定、分析、評価、提案が行える。
評価： A（89～80 点）	法の経済分析を利用し、問題抽出、課題設定、分析、評価が行える。
評価： B（79～70 点）	法の経済分析を利用し、問題抽出、課題設定、分析が行える。
評価： C（69～60 点）	法の経済分析を利用し、問題抽出、課題設定が行える。
評価： F（59 点～）	法の経済分析を利用し、問題抽出か課題設定のいずれかしかできない。
留意点 /Additional Information	【ＦＰ資格必修】 とくに履修の前提となる法律や経済学の基礎知識は求めない。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	組織と戦略の経済学		
サブタイトル/Sub Title	組織設計と戦略策定のための理論		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Economic Concepts for Strategy & Governance		
教員/Instructor	宇佐美　洋	E-mail	usami@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

経営の組織、戦略、ガバナンスといった中心的課題についての経済学の新しいアプローチを学ぶ。経済学の視点から「企業」や「組織」や「戦略」や「ガバナンス」といった重要課題はどう捉えられるかを学び、経済理論と経営実務の両方の視点から経営の実際のとらえ方に習熟する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーの DP2:「思考と判断」および「知の再武装」の強力な武器として、経済学の視点を使った戦略や組織やガバナンスに対する新しい見方を習得し、経営実践に生かす技術に習熟する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、ディベート	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	テキストの読解に必要な経済学基礎概念の学習を含めた予習（約 90 分）とテキスト章末の問題を復習（約 30 分）することが必要である。		

講義概要/Course Description　全８講　第１講～第７講は各 90 分×2 講座 第８講は 90 分

第１講	
概要	経営戦略のための経済学、企業の水平境界 企業理論を経済学と結びつける
事前、事後学習ポイント	教科書まえがきおよび第１章と２章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	④　近代企業の発展を歴史的に振り返る。 ⑤　企業の水平境界とは何か ⑥　規模の経済性と範囲の経済性
第２講　企	
概要	業の垂直境界、市場での取引費用 企業の基礎、経済学的な「取引費用」概念の準用性
事前、事後学習ポイント	教科書第３章および４章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　外部市場を使うコストと企業の垂直境界 ②　技術革新と企業の境界の進化 ③　経済学的な「取引費用」 ④　契約と市場取引
第３講	
概要	垂直境界の編成、多角化 技術効率、エイジェンシー効率、資産の所有権、多角化
事前、事後学習ポイント	教科書第５章および６章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　技術効率とエイジェンシー効率 ②　垂直統合と資産の所有権 ③　多角化の程度と合理性
第４講	
概要	市場と競争戦略 競争相手と競争、戦略的コミットメント
事前、事後学習ポイント	教科書第７章および８章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　競争相手の特定と市場の定義 ②　市場構造の測定 ③　戦略的コミットメント ④　柔軟性とオプションの価値
第５講	
概要	価格競争のダイナミクス、参入と撤退
事前、事後学習ポイント	教科書第９章および１０章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　動的な価格競争 ②　品質競争 ③　参入阻止戦略

	④　撤退促進戦略
第 6 講	
概要	業界分析、競争優位の戦略ポジショニング
事前、事後学習ポイント	教科書第１１章および１２章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　５つの競争要因分析 ②　コーペティションとバリューネット ③　競争優位の戦略ポジショニング ④　市場セグメンテーション
第 7 講	
概要	持続的競争優位、競争優位の源泉 模倣可能性とイノベーション
事前、事後学習ポイント	教科書第１３章および１４章に目を通して予習、演習問題による復習
詳細	①　不完全な模倣可能性と業界の均衡 ②　イノベーションへのインセンティブ ③　進化経済学と動的ケイパビリティ
第 8 講	
概要	社内労働市場とエイジェンシー関係 組織は戦略に従う
事前、事後学習ポイント	教科書第１５章に目を通し予習、演習問題による復習
詳細	
教科書 /Textbook	「戦略の経済学」ベサンコ・ラノブ・シャンリー著、ダイヤモンド社、2002 年 “Economics of Strategy, 2nd. Ed.” Besanko/Dranove/Shsanley, John Wiley & Sons,2000
指定図書 /Course Readings	「組織の経済学」ミルグロム／ロバーツ、ＮＴＴ出版、 「経営の経済学；第 3 版」丸山著、有斐閣
参考文献・参考 URL /Reference List	「会社法入門」田中亘著、東京大学出版会、2016 年、 「パーソナルファイナンス」アルトフェスト著伊藤他訳、日本経済新聞社、 「ＦＰテキスト　相続・事業承継設計」日本ＦＰ協会
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席（３０％）プレゼンテーション（４０％）、ディスカッション（３０％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：　A＋(100～90 点)	経営学と経済学の両方の視点から問題抽出、課題設定、分析、評価、提案が行える。
評価：　A(89～80 点)	経営学と経済学の両方の視点から問題抽出、課題設定、分析、評価が行える。
評価：　B（79～70 点）	経営学と経済学の両方の視点から問題抽出、課題設定、分析が行える。
評価：　C（69～60 点）	経営学と経済学の両方の視点から問題抽出、課題設定が行える。
評価：　F（59 点～）	経営学カ経済学の片方の視点かしか問題抽出あるいは課題設定しか行えない。
留意点 /Additional Information	【ＦＰ資格必修】 履修の前提となる経済学、ファイナンス、会計の基礎知識は求めない。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	企業会計・簿記入門		
サブタイトル/Sub Title	社会人のための会計基礎知識		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Basic and practical knowledge of accounting for business person		
教員/Instructor	井村順子	E-mail	imura-j@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

現代の社会人にとって、企業会計及び簿記の基礎的な知識は、不可欠な要素となっている。本講義を通じて企業会計の基礎と実務上の論点を同時に学ぶ。

到達目標/Course Goals

財務諸表の基本的な理解に始まり、重要論点を各回に学ぶとともに、最終的にはディスクロージャー制度を理解し、財そこで得た財務情報を活用する能力を身につける。
有用に財務情報を利用するための基礎知識を身につけることで、ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」及び DP2:「思考と判断」を達成し、知の再武装を図る。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：事前課題について、塾考すること（30 分） 事後学習：各回のポイントを確認及び整理すること（30 分）により、関連する講義に応用すること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	財務諸表とは何か
事前、事後学習ポイント	教科書を通読し、基本的な財務諸表の役割を理解する
詳細	➢ 貸借対照表と損益計算書を理解する ➢ 勘定科目の連動を理解する グループディスカッション：現時点での各自の業務における財務諸表の有用な活用方法
第 2 講	
概要	個別論点～収益認識
事前、事後学習ポイント	教科書を通読し、なぜ収益認識が重要なのかを考える
詳細	➢ 典型的な収益認識の基準を理解する ➢ 新たな収益認識基準について、理解する グループディスカッション：関心のある上場会社における収益の認識、疑問を持った点について発表し、収益認識の重要性について考える
第 3 講	
概要	個別論点～棚卸資産、原価計算の基礎
事前、事後学習ポイント	教科書を通読し、棚卸資産にかかる論点を考える
詳細	➢ 棚卸資産の取得価額の構成と流れを理解する ➢ 購入の場合と、自社生産の場合の違いを理解する ➢ 棚卸資産の払出数量の把握方法及び払出単価の決定方法を理解する グループディスカッション：関心のある上場会社の棚卸資産の種類、どのような項目で構成されているか発表し、論点を把握する
第 4 講	
概要	個別論点～固定資産にかかる会計と固定資産の減損
事前、事後学習ポイント	教科書を通読し、固定資産にかかる論点を考える
詳細	➢ 固定資産の種類を理解する ➢ 有形固定資産の減価償却方法を理解する ➢ 減損会計の概要を理解する グループディスカッション：固定資産の種類及び減損会計の意義について考えたことを発表し、固定資産会計の論点を把握する
第 5 講	
概要	個別論点～引当金, キャッシュ・フロー計算書
事前、事後学習ポイント	教科書を通読し、引当金の概要にかかる論点を考える キャッシュ・フロー計算書の役割を考える

詳細	➢ 引当金の要件を理解する ➢ キャッシュ・フロー計算書と損益計算書の違いを理解するとともにキャッシュ・フロー計算書の作成方法の基礎を理解する グループディスカッション：引当金の意義について考えたことを発表し、引当金の論点について考える。キャッシュ・フロー計算書の活用方法について共有する
第 6 講	
概要	個別論点～税効果会計、タックスプランニング
事前、事後学習ポイント	教科書を通読し、税効果の概要にかかる論点を考える
詳細	➢ 税効果会計の必要性及び主要な論点を理解する ➢ 繰延税金資産の回収可能性について理解する ➢ タックスプラニングと会計について理解する グループディスカッション：会計上と税務上の処理の相違点について考えたことを発表し、税効果会計の意義を把握する
第 7 講	
概要	連結財務諸表
事前、事後学習ポイント	教科書を通読し、連結財務諸表の役割を考える
詳細	これまで学習した個別論点を総括するとともに、自社または関心のある上場会社における連結財務諸表を活用して、以下の学習をする ➢ 連結財務諸表とは何かを理解する グループディスカッション：連結財務諸表と個別財務諸表の相違点、連結財務諸表の活用法と意義について考えたことを発表し、共有する
第 8 講	
概要	ディスクロージャー制度
事前、事後学習ポイント	最近のディスクロージャー制度の動向を把握するとともに、財務会計の意義について考える
詳細	➢ディスクロージャー制度の体系を理解する ➢最近のディスクロージャー制度の動向を理解する グループディスカッション:ディスクロージャー制度の有効な活用方法について考えたことを発表し、共有する
教科書 /Textbook	財務会計講義　桜井久勝（中央経済社）
指定図書 /Course Readings	タックスプランニング（日本ＦＰ協会）
参考文献・参考 URL /Reference List	ＥＤＩＮＥＴ(金融商品取引法に基づく有価証券報告書等の開示書類に関する電子開示システム)　http://disclosure.edinet-fsa.go.jp/ 財務会計・入門　桜井久勝/須田一幸（有斐閣アルマ）、テキスト会計学講義　原俊雄／高橋賢（中央経済社）、会社「経理・財務」入門　金児昭（日本経済新聞出版社）、実学　稲盛和夫（日本経済新聞社）
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席(30%)、授業内での議論参加(40%)、レポートの内容(30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	重要な会計上の論点を的確にとらえ、関連する実務上の課題を自らの視点で考察することができる。
評価： A（89～80 点）	重要な会計上の論点について理解し、関連する実務上の課題の一部を理解することができる。
評価： B（79～70 点）	重要な会計上の論点について理解することができる。
評価： C（69～60 点）	重要な会計上の論点について理解することができる。
評価： F（59 点～）	いくつかの重要な会計上の論点について理解することができる
留意点 /Additional Information	本授業は【FP 資格必修】である。 レポートについてはメールでフィードバックを行う。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	行動経済学		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Behavioral Economics		
教員/Instructor	真壁　昭夫	E-mail	makabe.akio@gmail.com
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

本講義は、世界的に注目を集めている行動経済学の主要な理論を学ぶことを目的とする。本理論を学習し、ディスカッションなどを行うことを通して、現実に起きている経済（個人の消費や企業経営など）金融市場の変化や、個人の資産形成の在り方などを受講生自ら考察し、見解を提示することを目指す。また、得られた知見を実務、日常生活などに役立てることも重視する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」を達成するために 行動経済学の主要な理論（具体的にはプロスペクト理論など）を理解する。また、ノーベル経済学賞を受賞したナッジの理論なども紹介する。習得した理論をもとに、実際に経済・金融市場などで発生している現象を分析し、経済・金融市場環境などの洞察力を高め、実務上の意思決定などに応用すること等を目指す。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション グループワーク、プレゼンテーション、双方向、ゲストスピーカー	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：予習に十分な時間をとること（2 時間程度） 事後学習：毎授業後に受講者間で当日、および次回のプレゼンテーションの内容を確認、準備を行うこと（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	イントロダクションと行動経済学の基本概念
事前、事後学習ポイント	行動経済学の基本的な概念、目的の確認
詳細	イントロダクションとして受講生の問題意識などを確認する。 日々の経済活動や金融市場の変化には、人間の“心理”が大きく影響している。行動経済学の基本的な考え方、中核となる理論などを紹介する。また、伝統的な経済学の理論との相違点なども確認する。その上で行動経済学の理論が日常の業務などにどう役立つと考えられるか、グループディスカッションを行う。
第 2 講	
概要	行動経済学発展の歴史
事前、事後学習ポイント	行動経済学の理論がどのように発展してきたかを確認
詳細	いつ、誰が、どのように行動経済学の理論構築に取り組み、理論が発展してきた、また、そうした研究がどのように評価され、ビジネスで実践されているかといった点を、発表を通して確認する。また、グループディスカッションなどを通して、理論発展の歴史と現在の状況への理解を深める。また、ナッジの理論も紹介する。
第 3 講	
概要	行動経済学の最新理論とその応用①プロスペクト理論
事前、事後学習ポイント	プロスペクト理論を確認
詳細	行動経済学の中核的理論であるプロスペクト理論を学ぶ。プロスペクト理論を用いて金融市場や日常生活における実際の意思決定のあり方を具体的に考察し、グループディスカッションなどを通して理解を深める。
第 4 講	
概要	行動経済学の最新理論とその応用②メンタル・アカウンティング
事前、事後学習ポイント	メンタル・アカウンティングに関する理論を確認
詳細	プロスペクト理論の内容を復習しつつ、メンタル・アカウンティング＝心理会計の理論を確認する。なぜ損失が出ているプロジェクトを続けてしまうかといったビジネス上の課題などに心理がどう影響しているかなどをグループディスカッションなどを通して考える。
第 5 講	
概要	行動経済学の最新理論とその応用③ヒューリスティック
事前、事後学習ポイント	ヒューリスティックに関する理論を確認

詳細	行動経済学におけるヒューリスティックに関する理論を確認する。また、日常生活やビジネスの中でヒューリスティックに影響されているケースなどを受講者間で確認し、行動経済学が個人の行動様式を見直すことに役立つことなどグループディスカッションなどを通して考える。
第 6 講	
概要	行動経済学（ファイナンス）と金融市場の動き
事前、事後学習ポイント	バブルの歴史などを確認
詳細	行動経済学の長所は、バブルの発生過程を客観的に説明可能なことである。バブルの歴史を受講者間で確認し、行動経済学の理論を用いてどのように金融市場を分析するかを、グループディスカッションなどを通して議論する。
第 7 講	
概要	行動経済学と資金（資産）の運用
事前、事後学習ポイント	株式投資など資金の運用に関する理論を確認
詳細	“人生 100 年時代”を迎え、人生を安心して送るために、一人一人が自らの資金を積極的に運用する重要性は高まっている。行動経済学を用いた資産運用の考え方、それを応用した政策などを紹介する。また、グループディスカッションなどを通して行動経済学の理論がより良い投資の意思決定のためにどう役立つかなどを議論する。
第 8 講	
概要	まとめ
事前、事後学習ポイント	講義の総括を行い、疑問点、今後の行動経済学の展開を議論する
詳細	講義で取り上げた行動経済学の主要な理論を再度確認し、今後の企業経営などにおいてどのような活用が考えられるか受講者間で議論する。また、現在注目を集めている行動経済学の研究などを紹介する。
教科書 /Textbook	イントロダクションで、受講者と相談して参考図書や論文などを選択する。
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	授業の進展に伴い、適切な参考図書等を選択する。拙著「行動経済学入門」（ダイヤモンド社）は有効な選択肢と考える。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席:ディスカッション:プレゼンテーション：クラス・パーティシペーション＝10:30:30:30
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	行動経済学の理論を理解－プレゼンテーションなどの課題設定－理論を用いた経済･金融市場の分析－課題に対する見解の提示－実務への応用の検討が行える
評価： A（89～80 点）	行動経済学の理論を理解－プレゼンテーションなどの課題設定－理論を用いた経済･金融市場の分析－課題に対する見解の提示が行える
評価： B（79～70 点）	行動経済学の理論を理解－プレゼンテーションなどの課題設定－理論を用いた経済･金融市場の分析が行える
評価： C（69～60 点）	行動経済学の理論を理解－プレゼンテーションなどの課題設定が行える
評価： F（59 点～）	行動経済学の理論の理解が不十分（単位不可）
留意点 /Additional Information	《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルがビジネスのキーであるので議論には積極的に参画すること。初回の講義で受講者の要望等を確認し、フレキシブルに対応する。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	M&A 戦略と実践企業ファイナンス		
サブタイトル/Sub Title	企業価値創造と M&A 戦略のためのファイナンス		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Corporate Finance for Value Creation and M&A Strategy		
教員/Instructor	中岡 英隆	E-mail	nakaoka@tmu.ac.jp
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

企業のグローバル化が進み，日本企業においても国内外での M&A 戦略が経営上の最重要課題となっている．こうした企業の戦略的な投資や企業価値創造に関わる意思決定には，オプション理論を取り入れた最新の企業価値評価の手法が不可欠である．本講義では，伝統的なコーポレート・ファイナンスの基礎を概観した上で，会社法や契約，ビジネスモデルに織り込まれたオプションの仕組みを解き明かして，オプション理論を活用した投資戦略や株主価値，負債価値，資産価値，信用リスクの評価の手法を学ぶ．さらに，その実践的な応用を目指して，Excel を用いた演習として，事例に基づくオプション戦略の評価を行い，さらに，ケース・ワークにより企業の財務分析を行った上で，企業価値，負債コスト,デフォルト確率などを測定する演習を行う．また，最前線の企業活動のケースを読み解きながら，ファイナンスや経営資源，コーポレート・ガバナンスの視点から，マネジメントによる企業価値創造力や M&A に対する市場の評価を理論的・実証的に分析し，M&A の戦略・経済性について洞察を深める．

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーの DP2:「思考と判断」と「知の再武装」，「情報収集能力と分析能力」を達成するために，伝統的なコーポレート・ファイナンスとコーポレート・ガバナンスや Resource-Based View の経営戦略論などの視点を融合して，オプション理論を活用した投資戦略や株主価値，負債価値，企業価値，信用リスクの評価の手法を学ぶことにより，不確実性下における企業価値の評価や M&A 戦略，マネジメントの価値創造力についての洞察力・実践力を高め，論理的思考力，総合的問題解決力を高める．さらに，ケース・ワークによる演習を通じて情報活用能力を高めるため，実際の企業買収や買収防衛策など最前線の企業活動にフォーカスして，自身で Web データの収集や有価証券報告書の分析を行い，それらのデータとオプション評価モデルを使って投資戦略や企業価値，信用リスクの評価ができるようになることを目指す．また，マネジメントによる企業価値創造力や M&A に対する市場の評価を理論的に分析し，実際のケースを通じて M&A の戦略・経済性についての洞察を深めて，総合的問題解決力を高める．

授業形態 /Form of Class	講義，プレゼンテーション，ディベート，財務分析・データ解析の演習	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	レジュメ・資料・文献の熟読，プレゼン資料の作成，財務分析・データ解析の下調べ・復習，レポート作成． （事前学習：2 時間程度，事後学習：2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	M&A の経済性と事業価値，　資本構成と配当政策
事前、事後学習ポイント	レジュメの熟読，関連知識の予習・復習
詳細	①M&A の事例に基づく経済性評価，②事業価値の定義，③節税効果と最適資本構成，配当政策
第 2 講	
概要	企業金融とガバナンス論，　オプションと企業価値
事前、事後学習ポイント	レジュメの熟読，関連知識の予習・復習
詳細	①ファイナンスの視点から解くコーポレート・ガバナンス，②会社法に潜むオプションの仕組みと企業価値の分析（発見学習，問題解決学習）
第 3 講	
概要	M&A と買収防衛策の事例研究，　M&A 戦略と経営資源
事前、事後学習ポイント	レジュメの熟読，関連知識の予習・復習
詳細	①M&A 戦略と買収防衛策の事例研究のプレゼンとディベート,②経営資源の視点で解く成功するための M&A 戦略
第 4 講	
概要	離散時間モデルとリスク中立化法，　離散時間モデルの Excel 演習
事前、事後学習ポイント	レジュメの熟読，関連知識の予習・復習，配布された Excel プログラムの習熟
詳細	①離散時間モデルによるオプション理論の本質的方法論，②Excel を用いたオプション戦略事例の評価の演習（問題解決学習）
第 5 講	

概要	Merton モデルと負債・資産の市場価値・信用リスク評価，　演習「TBS の買収防衛策と株主価値・負債価値・信用リスク」
事前、事後学習ポイント	レジュメの熟読，関連知識の予習・復習，配布された Excel プログラムの習熟
詳細	①Merton モデルによる企業価値・負債価値・信用リスク評価，②TBS の買収防衛策の事例研究を通じた Merton モデルの実証分析
第 6 講	
概要	演習「買収対象企業の財務分析」，　演習「市場データに基づく負債・資産価値・信用リスクの測定」
事前、事後学習ポイント	レジュメの熟読，関連知識の予習・復習，財務分析の下調べと市場データの収集.
詳細	①事例研究を通じた企業の財務分析演習，②Excel を用いた Merton モデルの演習（問題解決学習）
第 7 講	
概要	演習「日本の優秀企業の株主価値・負債価値・q レシオ」，　事例研究「マネジメントの経営価値創造力とイベントスタディ」
事前、事後学習ポイント	レジュメの熟読，関連知識の予習・復習，財務分析・データ解析の問題点整理.
詳細	①日本の優秀企業の財務分析，②Merton モデルを用いた Excel による日本の優秀企業の企業価値・マネジメント力の分析（問題解決学習，経験学習）
第 8 講	
概要	ファイナンス理論の現状と課題
事前、事後学習ポイント	レジュメの熟読，関連知識の予習・復習，財務分析・データ解析のまとめ.
詳細	①講義のまとめ，②Excel を使った財務分析・データ解析・モデル演習のまとめ（問題解決学習，経験学習）
教科書 /Textbook	毎回配布のレジュメによる.
指定図書 /Course Readings	[1]　中岡英隆［2009]，「企業における資源開発事業の統合リスク評価」『ジャフィー・ジャーナル：ベイズ統計学とファイナンス』日本金融・証券計量・工学学会，179-205，朝倉書店. [2]　中岡英隆［2011]，「マネジメントの価値創造力と M&A の評価」『ジャフィー・ジャーナル：バリュエーション』日本金融・証券計量・工学学会，114-133，朝倉書店. [3]　リチャード・ブリーリー，スチュワート・マイヤーズ，藤井真理子他訳［2002]，『コーポレート・ファイナンス　上・下』日経 BP 社. [4]　木島正明，中岡英隆，芝田隆志［2008]，『リアルオプションと投資戦略』朝倉書店. [5]　シェル・クルーイ，ダン・ガライ，ロバート・マーク，三浦良造他訳[2004]，『リスクマネジメント』共立出版.
参考文献・参考 URL /Reference List	講義の中で適宜紹介する.
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率および授業への参画姿勢（30%），プレゼンおよびレポート（70%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	不確実性下の実践企業ファイナンスへの洞察力・論理的思考力・問題解決力に優れている.
評価： A（89～80 点）	不確実性下のファイナンスへの洞察力・論理的思考力が良く，問題解決力がある.
評価： B（79～70 点）	不確実性下のファイナンスへの洞察力・論理的思考力がある.
評価： C（69～60 点）	不確実性下のファイナンスへの取組に意欲があり，論理的思考力が平均程度.
評価： F（59 点～）	出席不良で，洞察力・論理的思考力・問題解決力に課題が多い.
留意点 /Additional Information	概ね文系レベルの数学と EXCEL の知見，会計の初歩的な知見（または実務経験）を前提とする．レポートに関しては，講義内またはメールでフィードバックを行う.

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	夢をかなえる実践リスクマネジメント		
サブタイトル/Sub Title	なし		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Practical Risk Management for Realizing Dreams		
教員/Instructor	樋渡淳二	E-mail	hiwatash@msn.com
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

個人や企業・金融機関では、様々な不確実性（リスク）に直面しているが、①夢や経営理念を実現するために、リスクをどのようにしてコントロールすればよいのか、②リスクマネジメントの知見から学ぶことを通じてどのようにして社会的な課題を解決できるか、について、それぞれ学び、皆で議論を深める。

到達目標/Course Goals

講義・議論等を通じて、①DP5:「志」や問題意識を共有するほか、②多くの人々に働きかけながら問題を解決するために、DP1:「知識と理解」を深めながら、DP2:「思考と判断」を取得することを目指す。

授業形態/Form of Class	講義、双方向、ディスカッション、プレゼンテーション	学外学習/Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前準備：予習のために2時間程度。 事後学習：理解を深めるほか、疑問点・課題を自分で整理し、思考を続けるために2時間程度。		

講義概要/Course Description　全8講　第1講～第7講は各90分×2講座 第8講は90分

第1講	
概要	総論
事前、事後学習ポイント	リスク、リスクマネジメントに関する関心事項、わかったこと、疑問点を整理しておく。
詳細	リスク、リスクマネジメントとは何か。なぜ、リスクを取るのか。一緒に考えて行く。
第2講	
概要	実践リスクマネジメント
事前、事後学習ポイント	リスクマネジメントを実践していく上で、心配なこと、留意すること、わかったこと、疑問点を整理しておく。
詳細	実践的なリスクマネジメントの方法、考え方を学ぶ。また、保険と宝くじを例にして、リスクやリスクマネジメントを身近に考えて行く。
第3講	
概要	戦後日本と環境変化
事前、事後学習ポイント	環境変化により、前提条件が変わることを踏まえ、リスクマネジメントをするうえでどのようことに留意する必要があるか、整理しておく。
詳細	戦後日本は如何に環境変化に対応したか。一方で、バブル生成・崩壊等どのよう変化の中で、信用リスクを中心としたリスクマネジメントの教訓を考える。
第4講	
概要	100年シフトに向けて、政府の役割、自身でできること
事前、事後学習ポイント	100年シフトを踏まえ、自分が将来やりたいことをどのように実現するとよいか、整理しておく。
詳細	長生きすることのメリットと課題を考える。その際、政府の役割をどのように想定するのか。自身でできるリスクマネジメントは何か。一緒に考えて行く。
第5講	
概要	リスクマネジメントと業務継続計画
事前、事後学習ポイント	過去の災害等の影響を踏まえ、何を守るために、業務継続をする必要があるのか、問題意識を深めておく。
詳細	業務を継続できないリスクとはどういうことか。業務を継続することはなぜ重要か。一緒に考えて行く。
第6講	
概要	集中リスクと分散するとは
事前、事後学習ポイント	１つのことに集中するメリットとその裏腹の危険性について、身近な例を通じて、問題意識を深めておく。

詳細	１つに集中することは効率的である。しかし、なぜ、問題なのか。どのように分散するとよいのか。一緒に考えて行く。
第７講	
概要	個人のリスクマネジメント レポートの発表、プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	自分が将来やりたいことを実現するために、どのようなリスクに立ち向かっていく必要があるか、どのような準備をすべきか、自身の課題として、問題意識を整理する。
詳細	これまで学習してきた組織の理念を実現するリスクマネジメントについて、個人の夢をかなえることに応用する。レポートの発表、プレゼンテーションを通じて、問題意識を共有して、議論を深めて行く。
第８講	
概要	総括
事前、事後学習ポイント	講義を通じて、わかったことと、考え続けることを、区別する。わかった気になってしまい思考停止となり、自身の成長が止まらないように留意する。
詳細	誰のために、何のために、リスクを取り、コントロールするのか。改めて、議論を通じて、問題意識を深堀して行く。
教科書 /Textbook	講義資料は用意する。 仁木一彦[2016]『図解ひとめでわかるリスクマネジメント第２版]東洋経済新報社 企業広報戦略研究所編[2016]『戦略思考のリスクマネジメント―業績向上につながる５つの危機管理力の磨き方』日経ＢＰコンサルティング
指定図書 /Course Readings	なし。
参考文献・参考 URL /Reference List	テーマに応じて説明する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	①50%（ディスカッション内容）、②50%（レポート・プレゼンテーション内容）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	ディスカッション等にしっかりとした問題意識を持ってとても意欲的に取り組み、レポート・プレゼンテーション内容も極めて優秀である。
評価： A（89～80 点）	ディスカッション等に問題意識を持って積極的に取り組み、レポート・プレゼンテーション内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	ディスカッション等に前向きに取り組み、レポート・プレゼンテーション内容が良好である。
評価： C（69～60 点）	ディスカッション等に参加し、レポート・プレゼンテーション内容が一定のレベルに到達している。
評価： F（59 点～）	ディスカッション等に参加せず、レポート・プレゼンテーション内容が不十分である。
留意点 /Additional Information	なし。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ファイナンスイノベーション実践		
サブタイトル/Sub Title	ビジネスのためのデリバティブ		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Derivatives for Business		
教員/Instructor	伊藤　祐輔	E-mail	itoy@simplexinst.com
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

金融で開発されたデリバティブは、ビジネスでも必要な武器として存在感を発揮している。例えば海外との取引を行う場合、為替ヘッジによって収益の安定性を図ることが可能となる。今後の経営者にとってデリバティブの理解は必須であり、経営リスク管理の観点からは「知らない」では済まされない。本講義はデリバティブの基本的な理解と、金融・ビジネスにおける応用について解説していく。

到達目標/Course Goals

DP2:「思考と判断」ビジネスのリスクを分解し、リスク・ヘッジの伴う戦略を考えうる知的課題解決力の取得

授業形態/Form of Class	講義・実習（シミュレーション実施）・グループディスカッション	学外学習/Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	予習：OSE 先物・オプションシミュレータでの学習（2 時間程度） 復習：OSE 先物・オプションシミュレータで学習と市場データの分析（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	先物の概念と使い方
事前、事後学習ポイント	事前：OSE 先物・オプションシミュレータ No.1～No.4 の実施 事後：OSE 先物・オプションシミュレータ No.5 の実施と市場分析
詳細	先物の概念とそれが投資やビジネスにおいてどう使われているかを学習する
第 2 講	
概要	オプションの概念
事前、事後学習ポイント	事前：OSE 先物・オプションシミュレータ No.6～No.9 の実施 事後：OSE 先物・オプションシミュレータ No.13～No.16 の実施と市場分析
詳細	オプションの概念とそれが投資やビジネスにおいてどう使われているかを学習する
第 3 講	
概要	オプションの価格特性（定性）
事前、事後学習ポイント	事前：OSE 先物・オプションシミュレータ No.10～No.12 の実施 事後：OSE 先物・オプションシミュレータ No.13～No.16 の再実施と市場分析
詳細	オプションの価格特性の学習
第 4 講	
概要	オプションのリスク・パラメータ 1
事前、事後学習ポイント	事前：OSE 先物・オプションシミュレータ No.17,No.18，No.20,No.21 の実施 事後：OSE 先物・オプションシミュレータ No.25 の実施と市場分析
詳細	デルタ・ガンマ・ベガ・シータについての学習 1：価格変化の理解
第 5 講	
概要	オプションのリスク・パラメータ 2
事前、事後学習ポイント	事前：OSE 先物・オプションシミュレータ No.17,No.18，No.20,No.21 の再実施 事後：OSE 先物・オプションシミュレータ No.19 の実施と市場分析
詳細	デルタ・ガンマ・ベガ・シータについての学習 2：価格予想の計算
第 6 講	
概要	オプションのリスク・ヘッジ 1
事前、事後学習ポイント	事前：OSE 先物・オプションシミュレータ No.22 の実施 事後：OSE 先物・オプションシミュレータ No.27 の実施と市場分析

詳細	デルタ・ヘッジの学習
第 7 講	
概要	オプションのリスク・ヘッジ 2
事前、事後学習ポイント	事前：OSE 先物・オプションシミュレータ No.22 の再実施 事後：OSE 先物・オプションシミュレータ No.28 の実施と市場分析
詳細	ダイナミック・ヘッジの学習
第 8 講	
概要	オプション戦略とビジネスのリスク・ヘッジ
事前、事後学習ポイント	事前：OSE 先物・オプションシミュレータ No.23,No.24 の実施 事後：OSE 先物・オプションシミュレータ No.29 の実施と市場分析
詳細	オプション戦略とビジネス戦略との関連についての学習 ビジネスのリスク・ヘッジへのデリバティブの応用
教科書 /Textbook	講義資料は適宜用意する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	安藤希著「かぶオプの教科書」：ビジネス社 https://www.fopstudy.com/
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席：実習：レポート＝10：50：40
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	デリバティブの概念・リスク管理・分析・戦略について理解していること
評価： A（89～80 点）	デリバティブの概念・リスク管理・分析について理解していること
評価： B（79～70 点）	デリバティブの概念・リスク管理について理解していること
評価： C（69～60 点）	デリバティブの概念を理解していること
評価： F（59 点～）	デリバティブの概念を理解していない
留意点 /Additional Information	授業ではデリバティブ・シミュレータを使用するため、受講のためにはネット環境に適合した個人のノート PC の持ち込みが必須となる。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	中小企業の価値創造と事業承継		
サブタイトル/Sub Title	事業承継について習熟し、日本を支える中小企業の価値を創造する		
英文科目名/Course Title(Eng.)	innovation and business succession of small and medium enterprises		
教員/Instructor	藤本江里子	E-mail	fujimoto-e@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ファイナンス&ガバナンス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

「事業に成功して 50 点、承継に成功して 100 点」という言葉があるように、継続企業を前提としたとき、事業承継は経営者にとり最も重要な意思決定の１つといえる。さらに事業承継はわが国日本において喫緊の課題にもなっている。本講義では、ビジネスの変革期にさしかかる中小企業の価値創造と事業承継の課題解決者として活躍できるような実践知を学び、必要に応じてゲストスピーカーを招いて“生きた”事例を多数取り上げる。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーの DP2:「思考と判断」と DP4:「表現と技能」を達成するために、本講義では、中小企業の事業承継の問題や課題の分析と本質的な解決に必要となる法律上の知識を学び、事業承継計画の立案と実践力、課題解決力を身につける。また、ケーススタディにより、ファミリービジネス（同族経営）の特徴や課題、イノベーションについて検討し、事業承継問題に取り組む場合の実践的手法を身につける。受講者は、総合的な経営力向上と円滑な事業承継を目指す中小企業の後継者候補等を想定している。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	グループディスカッション用資料作成等の事前準備（2 時間程度）。各自講義内容の復習（1.5 時間程度）。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション
事前、事後学習ポイント	事後学習：講義内容の復習
詳細	受講生・教員の自己紹介とオリエンテーションを行ったあと、中小企業を取り巻く現状と課題、事業承継の問題について概観する。また、中小企業が生き残るための企業価値の向上と、事業承継計画の早期かつ適切な設計・実行の必要性について学ぶ。
第 2 講	
概要	事業承継の法律と税務①
事前、事後学習ポイント	事後学習：講義内容の復習
詳細	世界のファミリービジネス研究について紹介し、日本における同族企業の親族内承継を進める場合の相続などの基本的捉え方と具体的な手順について講ずる。 事業承継計画を作成するうえで、最低限必要な、民法（相続法）、会社法などの基礎的法律について学ぶ。
第 3 講	
概要	親族内承継の事例研究
事前、事後学習ポイント	事後学習：講義内容の復習
詳細	ゲストスピーカーへのインタビュー又はケーススタディにより、親族内承継の手法や事例について研究する。ゲストスピーカーを招く場合、講義の実施が前後する可能性がある。
第 4 講	
概要	事業承継の税務②
事前、事後学習ポイント	事後学習：講義内容の復習
詳細	事業承継計画を作成するうえで、最低限必要な、税法（相続税法、所得税法等）の基礎知識について学ぶ。
第 5 講	
概要	後継者育成の事例研究
事前、事後学習ポイント	事後学習：講義内容の復習
詳細	ゲストスピーカーへのインタビュー又はケーススタディにより、後継者育成の手法や実際の事例について学習する。ゲストスピーカーを招く場合、講義の実施が前後する可能性がある。
第 6 講	

概要	M&A など第三者への承継手続と組織再編・信託などの手続き他
事前、事後学習ポイント	事前学習：具体的なイノベーション計画や事業承継計画書の作成準備 事後学習：講義内容の復習
詳細	中小企業を第三者へ承継する M&A などの応用的な具体的事例と手順について講ずる。事業承継と組織再編成、信託や従業員持株会の活用、生命保険の利用、金融施策の紹介など、事業承継の応用的論点についても踏み込んで講ずる。
第 7 講	
概要	M&A の事例研究
事前、事後学習ポイント	事前学習：具体的なイノベーション計画や事業承継計画書の作成準備 事後学習：講義内容の復習
詳細	ゲストスピーカーへのインタビュー又はケーススタディにより、日本のＭ＆Ａ市場について、事業承継の出口としてのＭ＆Ａがどのように行われているのか、Ｍ＆Ａの最新事例について学習する。ゲストスピーカーを招く場合、講義の実施が前後する可能性がある。
第 8 講	
概要	事業承継計画書の作成・発表と本講義のまとめ
事前、事後学習ポイント	事前学習：具体的な事業承継計画書の作成準備
詳細	中小企業の価値創造と事業承継の難しさを整理し、具体的な事業承継計画書を作成して深く学ぶ。最後に本講義のまとめとして全体を振り返る。
教科書 /Textbook	適宜資料配布予定。
指定図書 /Course Readings	なし。
参考文献・参考 URL /Reference List	【参考文献】 『FP テキスト 6 相続・事業承継設計』日本 FP 協会、2019. 日経トップリーダー編著『星野佳路と考えるファミリービジネスの教科書』2019 税理士法人タクトコンサルティング編『改訂版 法務・税務のすべてがわかる! 事業承継実務全書』日本法令、2018 岡本祐子他著『世代継承性研究の展望: アイデンティティから世代継承性へ（世代継承性シリーズ)』2018　他 【参考 URL】 中小企業庁「事業承継ガイドライン」（2018 年 12 月） http://www.chusho.meti.go.jp/zaimu/shoukei/2016/161205shoukei.htm
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席（30%）、授業内でのグループディスカッション・議論（40%）、事業承継計画書（30%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	中小企業の価値創造と事業承継について、議論・グループディスカッション内容・イノベーション計画や事業承継計画書が特に優れている。
評価： A（89～80 点）	中小企業の価値創造と事業承継について、議論・グループディスカッション内容・イノベーション計画や事業承継計画書が優れている。
評価： B（79～70 点）	中小企業の価値創造と事業承継について、議論・グループディスカッション内容・イノベーション計画や事業承継計画書が良い。
評価： C（69～60 点）	中小企業の価値創造と事業承継について、議論・グループディスカッション内容・イノベーション計画や事業承継計画書が平均程度。
評価： F（59 点～）	出席不良で、議論・グループディスカッション内容・イノベーション計画や事業承継計画書に課題が多い。
留意点 /Additional Information	本講義は CFP®認定教育プログラムとなっている。 受講当初は、事業承継についての知識がなくても問題ない。受講者の人数、所属、希望、事前知識等をふまえて講義内容を柔軟にアレンジする。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	データ活用入門		
サブタイトル/Sub Title	ビジネスのためのデータ分析入門		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Introduction to Data Analusis for Business		
教員/Instructor	今泉　忠	E-mail	imaizumi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ビジネスインテリジェンスに代表されるように，ビジネスにおいてデータをもとに解決案を提案することが求 め ら れる．その場合，統計学の活用力や知識が必須である．この講義では、統計的思考をもとに実際のビジネス現場でデータをもとに統計学を利活用して課題解決ができるデータ分析実践力を修得できることを目指す。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」と「知の再武装」を達成するために，「デジタル技術」をもとに上記目的に資する「課題解決のためのモデル構築」と「データ分析」で統計学を 利活用して実践的なデータ分析と提案ができるようになる.そのために、調査設計，データ収集，データモニタリング，データ分析，分析結果の発表を行える力を修得する.

授業形態 /Form of Class	グループワーク，グループディスカッション，プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習:予習に十分な時間をとること(2 時間程度）事後学習:毎授業後にチーム毎に協議し、レポートを提出すること（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	データの要約と分布
事前、事後学習ポイント	EXCEL の操作を復習しておくこと
詳細	分析のフレームを活用できる力を修得するために，PDSA と統計で扱う変数の型について学ぶ.分布に関しても学修する。分析ソフトのインストールも行う
第 2 講	
概要	仮説構築，データ収集と分析入門
事前、事後学習ポイント	データについて調べておく 分析ソフトのインストールを行っておくこと
詳細	討議力や仮説構築力を修得するために，実データについて，チームで仮説を構築し，基礎分析で検討する.データ収集法や箱ひげ図などの視覚化についても講義する
第 3 講	
概要	量的変数間の関係を探る:相関関係からの構造発見
事前、事後学習ポイント	相関係数について整理しておく
詳細	相関関係と因果関係の違い，および相関関係から因果関係を検討する.
第 4 講	
概要	質的要因の効果評価:区間推定を活用する
事前、事後学習ポイント	推測について理解しておく
詳細	仮説検証力を修得するために，仮説の検証や区間推定について学修する.中心極限定理に ついての知識も学修する.
第 5 講	
概要	線形モデルの活用:主効果と残差分析
事前、事後学習ポイント	説明変数と目的変数について整理しておく
詳細	要因効果を評価できる力を修得するために，重回帰モデルや分散分析などの活用について学修する.残差の分析の重要性についても学修する.
第 6 講	
概要	交互作用
事前、事後学習ポイント	仮説の表現とその評価

詳細	複数の要因がある場合のモデルを比較検討する力を修得するために，モデルの適合度やついて学修する．
第 7 講	
概要	発表資料作成
事前、事後学習ポイント	無し
詳細	データプレゼンテーション力を修得するために実際のデータについて PDSA をもとに分析レポートを作成する
第 8 講	
概要	発表
事前、事後学習ポイント	無し
詳細	チーム別の分析結果発表を行う レポートへのフィードバックを行う．
教科書 /Textbook	講義資料は適宜用意する．
指定図書 /Course Readings	無し
参考文献・参考 URL /Reference List	無し
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	平常点:ディスカッション:グループワーク:小テスト:レポート:プレゼンテーション = 20:20:20:0:20:20
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	課題設定―データ収集―分析―仮説の検証―提案が行える
評価： A（89～80 点）	課題設定―データ収集―分析―仮説の検証が行える
評価： B（79～70 点）	課題設定―データ収集―分析を行える
評価： C（69～60 点）	課題設定―データ収集を行える
評価： F（59 点～）	課題設定か調査設計かデータ収集のいずれかしかできない
留意点 /Additional Information	Google Classroom または tnext を用いても資料の配布などを行う．チームでの学習となるので，積極的にディスカッションなどに参加すること．

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	集中ゼミ（統計検定）		
サブタイトル/Sub Title	統計的データの分析入門		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Introduction to Statistics (Intensive Course)		
教員/Instructor	今泉　忠	E-mail	imaizumi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ビジネスでのデータサイエンスにおいては、適切な統計的処理を必須である．そのための基礎となるデータの分析に関しての統計活用力を修得する．

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解(最新ビジネス環境への理解)」 と「知の再武装」を達成するために，以下の力について修得する．
(1) 基本的な用語や概念の定義に関して理解できる統計リテラシー力を修得する
(2) 用語の基礎的な解釈や２つ以上の用語や概念の関連性を理解できる統計的推論力を修得する
(3) 具体的な文脈に基づいて統計の活用ができる統計的思考力を修得する
統計検定 2 級または 3 級に合格する

授業形態 /Form of Class	講義，グループワーク	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前にテキストを読んでおくこと		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	データの変数とグラフでの表現
事前、事後学習ポイント	データについて理解する（1.5 時間）
詳細	データ行列を扱える力を修得するために，データで扱う変数について理解する．データの図的表現力を修得するために，データの散らばりのグラフ表現（ヒストグラム，箱ひげ図，折れ線グラフ，幹葉図）について学ぶ
第 2 講	
概要	データの要約
事前、事後学習ポイント	分布の代表値による把握（2.0 時間）
詳細	データで要因を比較できる力を修得するために，特徴量の違いを理解するデータの特徴量（中央値，平均値，最頻値）について学ぶ
第 3 講	
概要	散らばり
事前、事後学習ポイント	特徴量との関係を理解する（2.0 時間）
詳細	リスクを評価できる力を修得するために，データの散らばりの指標（四分位数，四分位範囲（四分位偏差））について学ぶ
第 4 講	
概要	相関関係
事前、事後学習ポイント	相関係数（2.0 時間）
詳細	変数間の関係を量的に理解できる力を修得するために，データの標準化と 2 変数の相関（相関，散布図（相関図），相関係数）について学ぶ
第 5 講	
概要	確率基礎
事前、事後学習ポイント	ベン図（3.0 時間）
詳細	事象の生起について，確率分布を通じて理解する力を修得するために，確率（独立な試行）について学ぶ．複数の事象の同時生起について理解するために確率（条件付き確率）やベイズの定理について学ぶ
第 6 講	
概要	分布
事前、事後学習ポイント	期待値（3.0 時間）
詳細	代表的ないくつかの分布（二項分布，正規分布，ポアソン分布）について学ぶ．標本分布に

	ついても学ぶ
第 7 講	
概要	平均の推定
事前、事後学習ポイント	区間推定，中心極限定理（3.0 時間）
詳細	標本平均の分布について学ぶ．特に，信頼区間の構成について学ぶ
第 8 講	
概要	まとめ
事前、事後学習ポイント	過誤(3.0 時間)
詳細	仮説検定について学ぶ．
教科書 /Textbook	講義時に指定する
指定図書 /Course Readings	無し
参考文献・参考 URL /Reference List	無し
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	平常点：確認テスト＝60：40
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	統計検定 2 級か 3 級に合格か，統計リテラシー力・統計的推論力・統計的思考力・仮説構築力を修得
評価： A（89～80 点）	統計検定 2 級か 3 級に合格に近い点数を得たか，統計リテラシー力・統計的推論力・統計的思考力・仮説構築力のいづれか 3 つの力を修得
評価： B（79～70 点）	統計検定 3 級で一定の評価を得たか，統計リテラシー力・統計的推論力・統計的思考力のいづれか 2 つの力を修得
評価： C（69～60 点）	統計検定 3 級で一定の評価を得たか，統計リテラシー力・統計的推論力・統計的思考力のいづれか 1 つの力を修得
評価： F（59 点～）	いずれも修得できない
留意点 /Additional Information	PC により演習も行う

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	マーケティングリサーチ		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Marketing Research		
教員/Instructor	今泉　忠	E-mail	imaizumi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

マーケティングにおいて市場創造活動のための情報を提供することがマーケティングリサーチですが，ディジタル化に伴い，きちんとデータを収集することが減ってきている．この講義では，マーケティングリサーチでの目的と手段の点かマーケティングリサーチに関して講義する．

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」と「知の再武装」を達成するために，エビジンスベースで考え，リサーチの目的に沿った手法を理解して活用にできるようになる．特に，仮説設定型アプローチの修得と収集したデータが複数の集団からのデータである場合にも適切な手法を適用できるようになる．また，質的データも分析できるようになることも目標の 1 つである．

授業形態 /Form of Class	グループワーク，グループディスカッション，プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	分析を含めた事前課題レポート作成		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	マーケティングリサーチでのデータ
事前、事後学習ポイント	EXCEL の操作を復習しておくこと 特に，グラフ化とピボットテーブル作成（1.5 時間）
詳細	マーケティングリサーチの目的と扱うデータの種類および基礎的な手法について講義する
第 2 講	
概要	サンプリングと調査方法
事前、事後学習ポイント	分析ソフトをインストールしておくこと．事前に配布した資料を整理してサンプリングや収集方法の特徴を理解しておく(2.0 時間)
詳細	マーケティングリサーチでの基本的な調査方法について講義する．特にデータ品質についても学ぶ
第 3 講	
概要	仮説設定と調査データの整理
事前、事後学習ポイント	外れ値や層化などについて整理しておく(2.0 時間)
詳細	リサーチのための仮説設定と，あるテーマについて収集してデータについて分析できるように整理する．
第 4 講	
概要	マーケティング分析の手法　基礎　データの層別
事前、事後学習ポイント	ソフトを持ち分析できるように習熟しておくこと（2.0 時間）
詳細	マーケティングリサーチの目的に応じた基礎的な手法について講義する．ピボット集計やグループ別ヒストグラムの活用について講義する．
第 5 講	
概要	マーケティング分析の手法　Ⅰ　要因効果の整理
事前、事後学習ポイント	相関係数や質的変数の連関係数について整理する(2.0 時間)
詳細	質的要因の効果を分析する手法について講義する．主効果モデルを扱うコンジョイント分析について講義する．
第 6 講	
概要	マーケティング分析の手法　Ⅱ　潜在変数の想定
事前、事後学習ポイント	潜在変数および因子の直交について整理しておく．
詳細	潜在変数を仮定する因子分析について講義する．

第 7 講	
概要	マーケティングデータの分析
事前、事後学習ポイント	分析目的や分析データを整理しておく(3.0 時間)
詳細	目的を設定して，対応するマーケティングデータを分析して，まとめる
第 8 講	
概要	分析発表
事前、事後学習ポイント	発表資料作成（3.0 時間）
詳細	目的に応じて分析して結果を発表する
教科書 /Textbook	資料を配布する
指定図書 /Course Readings	無し
参考文献・参考 URL /Reference List	確率思考の戦略論，「欲しい」の本質～人を動かす隠れた心理「インサイト」の見つけ方
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	平常点：ディスカッション：演習：発表＝30：20：30：20
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	目的を明確にして，適切な分析とシミュレーションをもとにそこからの提案を行うことができる
評価： A（89～80 点）	目的を明確にして，適切な分析をもとにそこからの提案を行うことができる
評価： B（79～70 点）	目的を明確にして，適切な分析を行うことができる
評価： C（69～60 点）	目的を明確にして，適切な基礎分析を行うことができる
評価： F（59 点～）	目的が明確でもなく，または，適切な基礎分析ができない
留意点 /Additional Information	データ活用入門や統計的データ分析を履修することが望ましい

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	データドリブンの戦略構築		
サブタイトル/Sub Title	データ技術が書き換える現代の経営戦略の思考法と実践		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Data-driven Strategy Planning		
教員/Instructor	栗山　実	E-mail	kuriyama-m@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

データサイエンスなどテクノロジーがビジネスの世界の常識を一変させている現代を前提に、企業経営を担うビジネスリーダーとして今や欠かせない思考技術として、データ起点の発想や思考方法で経営戦略の設計や意思決定を行う方法論の理解を深め、実践できるようになることを目指します。

ビッグデータや機械学習・人工知能などが流行する現在、個々のデータ技術を熱心に勉強する人は増えていますが、企業の戦略策定・意思決定とデータ技術とを的確に結び付けられる人材は未だ不足しており、グローバル競争力や次世代の事業創造力を求める企業の多くがその人材育成・獲得に苦戦しています。

本講では、データサイエンスに立脚して経営上の戦略策定や意思決定、事業創造や変革を行うための実践的な思考法、発想の着眼点などを、ビジネスケースを踏まえた議論を交えながら深めていきます。統計学や分析手法、情報取得手法、ビッグデータ解析、データ表現技術、機械学習などを具体的手法として扱いますが、それらはあくまで道具であり、経営視点での戦略構築や判断をどのように行えるかを議論の中心に置いて進めます。

主に、企業経営の具体的な状況を設定したワークショップ型の演習を行い、グループに分かれて取り組むなどして自らの気づきを発言し議論を重ねる時間を取ります。それにより、小手先のデータいじり技術ではなく、データに基づく意思決定・戦略策定の根底にある発想を自分なりに消化し、自律的に実践する感覚を養い、新しい時代を創るビジネスリーダーとしての自分なりの思考法・視座を得ることを目指します。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの『DP2：思考と判断（知的課題解決力）』の現代的手法として、データサイエンスを活用するなどデータ起点での戦略思考・判断についての概要理解を得ることを目標とします。

また、講義・ディスカッションを通して、データによる市場理解の手法やデータ表現手法など、『DP1：知識と理解（最新ビジネス環境の洞察力）』、『DP4：表現と技能（周囲を巻き込みイノベーションを実現する力）』に寄与する実践的手法も扱います。データサイエンス時代における大企業組織の限界と変革の必要性、スタートアップ的なイノベーション手法など、『DP3：関心と意欲（現状を変革しようとする意志力）』、『DP5：高い志（よりよいイノベーション起こす生き方）』に関連する話題も、受講者の関心に応じて議論が発展することを期待します。

講義での具体的な到達目標として以下を想定します。

- データサイエンス・AI などの技術の進展・普及によって一変するビジネス環境のなかで、新時代のビジネスリーダーとして求められる新しい技術知識・ビジネス知識や考え方などの道具立てについて、自分なりに理解した構成を持つこと
- グローバル×デジタルの競争環境のもと、旧来の手法・考え方の継続は通用しないという「危機感」と、新旧交代の中で、未来を形作る仕事を手掛けられるタイミングに居合わせているという「ワクワク感」の両方を持ち、新たな挑戦への意欲・志を自ら認識すること

授業形態 /Form of Class	講義 グループディスカッション グループワーク　プレゼンテーション 双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	予定なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	予習：次回講義に関連する事柄の事前学習。 数時間程度目安 復習：当回講義の要点の復習まとめ、自主的実践。 数時間程度目安		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	導入：経営戦略策定とビジネスデータの概観
事前、事後学習ポイント	戦略／戦術、意思決定、定量情報、ビッグデータ
詳細	そもそも「戦略」とは何か、「データ」とは何か、経営の意思決定のために「戦略×データ」を語る上で必要な要素は何か、講義、グループワーク等を通じて気づきと動機づけを得て本講義全体の概観の導入とする
第 2 講	
概要	技術<1>：データの表現
事前、事後学習ポイント	グラフ、メッセージ、フレームワーク、論理思考・構造思考
詳細	戦略思考・決断のためのデータ表現を設計する（例：情報の構造、グラフ表現、戦略のための可視化）。要点の講義ののち、グループワークを通じて実践上の洋書を体感し、全体でのディスカッションを深める
第 3 講	

概要	思考<1>：手段と結果
事前、事後学習ポイント	経営の目的、打ち手、因果関係、定量化、相関、検定、尺度
詳細	経営目的達成のための行動決定を下す思考を理解する（例：4P 施策の選択、因果関係の特定、効果測定、予測と最適化）。要点の講義・グループワーク・ディスカッション。
第 4 講	
概要	技術<2>：データの取得
事前、事後学習ポイント	データベース、市場調査、インタビュー、質問票
詳細	戦略策定のためのデータ取得を設計する（例：販売履歴 DB、会員制度、ウェブサーベイ、FGI）。要点の講義・グループワーク・ディスカッション。
第 5 講	
概要	思考<2>：経営の地図
事前、事後学習ポイント	経営の方針判断、顧客の分布、クラスタリング、市場シェア、ペルソナ
詳細	戦略的な経営指針を空間的に描き出す（例：市場の可視化、顧客の特徴把握、クラスタリング）。要点の講義・グループワーク・ディスカッション。
第 6 講	
概要	発展<1>：データドリブンのビジネス革新とイノベーション
事前、事後学習ポイント	機械学習/AI、最適化、プラットフォーマー、ディスラプティブイノベーション
詳細	データ起点の着想を活用し、既存ビジネス革新や新規ビジネス創造を考える。要点の講義・グループワーク・ディスカッション。
第 7 講	
概要	発展<2>：データ時代のキャリア論、質疑応答
事前、事後学習ポイント	データサイエンティスト、DX、スタートアップ、スペシャリスト/ジェネラリスト
詳細	データサイエンス・テクノロジーイノベーションの時代の組織論・キャリア論を考える。グループディスカッション。第 1 講から全体を通しての質問と回答。
第 8 講	
概要	まとめ
事前、事後学習ポイント	発表の準備
詳細	各自より、この講義を通じて学んだこと、今後の実践、継続的な学び等を発表。発表内容へのフィードバックや今後へのアドバイスなど、ディスカッションを深める
教科書 /Textbook	講義の際にテキスト・ワークシート配布
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	講義中に適宜提示
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席(30%)、授業内での議論参加(50%)、レポート・発表(20%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内での議論参加の貢献が特に優れて『データサイエンスによる知的課題解決力』を発揮し、発表内容も優れている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論参加の貢献が A⁺に準じて大きい、発表内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加、発表内容が良い。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加、発表内容が最低限を満たす。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での議論参加が不十分。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	クリティカルシンキング		
サブタイトル/Sub Title	ビジネスにおける「価値創造」「課題解決」に求められる論理思考、頭の使い方		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Critical Thinking		
教員/Instructor	柏木吉基	E-mail	kashiwagi@data-story.net
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

実務における課題解決および企画・提案を行う際の「マインド」「思考プロセス」「手法（ツール）」などを身に着けます。単に“論理学”を学ぶのではなく、組織の中で、多くの人の納得・共感を得て、人や組織を動かすことができる人材となることを目指します。

到達目標/Course Goals

思い付きや勘と経験で方策や意見を言う思考の癖を取り払い、DP2：「 思考と判断（実践知考具をもとにした知的課題解決力）」などを達成するために、ロジカルな根拠に基づいて結論を述べたり、本質的な問題解決ができるスキルを身に付けること。更に、これらのスキルを活用し、チームの合意形成をリードする人材となること。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション　グループワーク、ディート、　プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：演習問題が課された場合、その取り組み（2時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論理構築のための論理思考 1 課題・論点の設定（定義）
事前、事後学習ポイント	なし
詳細	自分が言うべき内容、解くべき課題の具体性は、その後のプロセスや精度、結論の質に大きなインパクトを与えます。これらを防ぐための注意点や考え方、ポイントを学びます。
第 2 講	
概要	論理構築のための論理思考 2 演繹・帰納法、論理構造（ピラミッドストラクチャー） 1
事前、事後学習ポイント	【宿題】共通の課題（テーマ）に沿って、自らの主張を作ります
詳細	演繹法や帰納法などの論理学を”ツール“として使いながら、自分の論理性のチェックを行い、主張を適切に作り上げるスキルを身に付けます。
第 3 講	
概要	論理構築のための論理思考 3 演繹・帰納法、論理構造（ピラミッドストラクチャー） 2
事前、事後学習ポイント	なし
詳細	宿題のアウトプットをクラス内で共有、改善点、問題点を協議します。
第 4 講	
概要	課題解決のための論理思考 1
事前、事後学習ポイント	なし
詳細	課題定義～課題ポイントの特定までのプロセスについて学びます。具体的には課題を具体化した後、適切な切り口で課題分解し、具体性を高めるスキルを身に付けます。
第 5 講	
概要	課題解決のための論理思考 2
事前、事後学習ポイント	なし
詳細	課題要因の特定～方策案の絞り込みまでのプロセスについて学びます。具体的には、漏れのない要因候補をどう出すか、挙がった対策案にどう優先度をつけるかなどのテクニックや思考法を身に付けます。（参加者の意向、講義の進捗などにより、ケーススタディを導入する可能性もあり）
第 6 講	
概要	組織・チームで論点を整理する技術 1

事前、事後学習ポイント	なし
詳細	チームでの合意を得るために必要なファシリテーションの技術を身に付けます。
第 7 講	
概要	組織・チームで論点を整理する技術２
事前、事後学習ポイント	試験課題の発表
詳細	第 1 回～5 回までで個人で身に付けたスキルをチームリーディングに応用し、チームで合理的な結論を出すためのテクニックを身に付けます
第 8 講	
概要	まとめと試験
事前、事後学習ポイント	なし
詳細	プログラム全体を通したレビューと個人ワークの発表と評価。原則としてプレゼン発表時にフィードバックを予定
教科書 /Textbook	適宜配布します。
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	『人は勘定より感情で決める』柏木吉基著（技術評論社） https://www.amazon.co.jp/柏木吉基/e/B0042SL1HM 『武器としてのデータ活用術』柏木吉基著（翔泳社） https://www.amazon.co.jp/dp/4798160466 『上司から YES を引き出す-「即決される」資料作成術』（KADOKAWA） https://www.amazon.co.jp/dp/4046020172
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席率(10%)／講義議論参画度(30%)／最終レポート(60%)　3 点の総合評価
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	講義内容を十分に理解し、授業内での議論に積極的に参加、プレゼンテーション内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	講義内容を理解し、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	講義内容を理解し、プレゼンテーション内容が優れている。
評価： C（69～60 点）	講義内容を理解している。
評価： F（59 点～）	講義内容の理解が十分ではない
留意点 /Additional Information	特に無し

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	サービスサイエンス		
サブタイトル/Sub Title	インタビュー調査、分析からの実践知考察		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Service science		
教員/Instructor	中野 未知子	E-mail	nakano-m@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

付加価値としてのサービスが、あらゆる産業に入り込んでいる今日「サービスをどのように変革していくか」は、セクターや業種を問わず組織における重大な経営課題のひとつである。サービス自体がコモディティ化してしまうという課題を乗り越え、消費者・生活者にとって価値ある存在であり続けるためには、サービス現場で働く人々と消費者・生活者との間に起こる相互作用をしっかり見つめ続けることが大切だ。

そこで重要になってくるのが、質的データのハンドリングスキルである。現場の傾聴や観察によって獲得した質的データから「何が起きているのか」を一定のモデルとして可視化し、量的データから得られる知見とも組み合わせながら考察することは、現状を改善したり良いところを伸ばしたりするための仕組みをつくっていく足掛かりとなってくれる。

本講義は、サービスサイエンスの実践への第一歩である。インタビューデータから実践知を導出する過程を体験的に学ぶことを目的とする。よって個人課題に取り組んでいただくことが前提となる。分析手法として、質的データ分析手法のひとつである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いる。修士論文執筆で質的データ分析を予定する人にとっても本講義が一助になれば幸いである。

授業では理論より実践に重きを置くが、理解してもらいたい理論については参考図書や文献を紹介する。尚、一部ケーススタディ講義として、協力企業であるトランスコスモス・アナリティクス株式会社からゲスト講師の登壇を予定している。

到達目標/Course Goals

1）ディプロマポリシーDP2:「思考と判断」を達成するために、講義で扱う質的データ分析手法を用いて「サービス」の現状分析を行い、一定のモデルを導出・説明できること

2）ディプロマシーポリシーDP5:「志」を達成するために、1）で獲得した実践知を自分の研究・実務においてどのように活用しうるか、具体例を用いて説明できること

授業形態 /Form of Class	フィールドワーク、グループディスカッション、講義、ダイアローグ、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	有
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	学期前半：学習内容整理、指定図書精読（平均毎回 2 時間程度） 学期後半：上記に加えて個人課題実践（=フィールドワーク）、 最終日プレゼンテーション準備(平均毎回 4 時間程度)		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	【イントロダクション】対人サービスをデータで語る
事前、事後学習ポイント	サービス、サービスサイエンス、質的データ 宿題：学びの振返り
詳細	● 形態：講義、グループディスカッション ● 内容：インタビュー回答やアンケートの自由回答等質的データを用いた対人サービス分析事例紹介／サービスやサービスサイエンス等、基本用語の定義
第 2 講	
概要	【ゲスト講義】企業におけるサービスサイエンス実践
事前、事後学習ポイント	アナリティクス、マーケティング 宿題：学びの振返り／指定図書担当箇所の精読と要約
詳細	● 形態：ゲスト講義（予定）、質疑応答 ● 内容：企業内実践の成果や過程の紹介と質疑応答による学びの確認
第 3 講	
概要	【指定図書精読】対人サービスを質的データで語ろう　①　-実践に備えた予行演習-
事前、事後学習ポイント	フィールドワーク、質的分析手法、M-GTA、リサーチクエスチョン 宿題：学びの振返り／個人課題：調査対象者と RQ の検討
詳細	● 形態：プレゼンテーション、質疑応答 ● 内容：指定図書輪読による質的研究手法、M-GTA の理解
第 4 講	
概要	【インタビュー観察】対人サービスを質的データで語ろう　②　-実践に備えた予行演習-
事前、事後学習ポイント	M-GTA、半構造化インタビュー、ダイアローグ 宿題：学びの振返り／個人課題：設問項目の考案

詳細	● 形態：グループディスカッション、講義 ● 内容：インタビューデモンストレーションの傾聴、RQ の精査
第 5 講	
概要	【個人課題進捗共有】対人サービスを質的データで語ろう　③　- 実践-
事前、事後学習ポイント	M-GTA、仮説探索、仮説検証 宿題：学びの振返り／個人課題：実査、分析ワークシート作成
詳細	● 形態：グループディスカッション、講義 ● 内容：インタビューシミュレーション、設問項目の精査
第 6～7 講	
概要	【個人課題進捗共有】対人サービスを質的データで語ろう　④　- 実践-
事前、事後学習ポイント	M-GTA、概念化 宿題：学びの振返り／個人課題：分析ワークシート作成、モデル作成
詳細	● 形態：グループディスカッション ● 内容：成果物イメージ検討、作成
第 8 講	
概要	【個人課題プレゼンテーション】学びの総まとめ
事前、事後学習ポイント	半年間の学びと、自分の研究・実務との紐づけ
詳細	● 形態：プレゼンテーション、質疑応答 ● 内容：インタビューから導出したモデルの個別プレゼンテーション／授業全体からの学びの振返りとフィードバック
教科書 /Textbook	西條剛央（2007）『ライブ講義・質的研究とは何か（SCQRM ベーシック編）』新曜社 その他、適宜、資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	西條剛央（2007）『ライブ講義・質的研究とは何か（SCQRM ベーシック編）』新曜社（教科書と同じ）
参考文献・参考 URL /Reference List	近藤隆雄（2012）『サービス・イノベーションの理論と方法』生産性出版 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂 佐藤郁哉（2002）『組織と経営について知るための実践フィールドワーク入門』有斐閣 その他、適宜、講義中に紹介、または資料を配布する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	授業出席と参加姿勢（30%）、毎回講義振返りレポート・個人課題実施状況(40%)、最終講成果物と発表内容(30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A+（100～90 点）	授業に出席且つ積極参加し、出席回について振返りレポート・個人課題を提出し、到達目標の 1)、2）両方の面において優れたプレゼンテーションを行った
評価： A（89～80 点）	授業に出席且つ積極参加し、出席回について振返りレポート・個人課題を提出し、到達目標の 1)、2）どちらかの面において優れたプレゼンテーションを行った
評価： B（79～70 点）	授業に出席且つ積極参加し、個人課題を提出し、到達目標の 1)、2）についてプレゼンテーションを行った
評価： C（69～60 点）	授業に出席且つ参加し、個人課題を提出し、プレゼンテーションを行った
評価： F（59 点～）	授業への出席が不十分、個人課題が未提出だった
留意点 /Additional Information	体験から学ぶ点が大きいため、第 4～8 講の期間中に学外時間外でインタビュー実査とその結果のまとめ、第 8 講でまとめた内容のプレゼンテーションをしていただくことを必須とする。進め方は教員から指示する

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	データビジネス活用		
サブタイトル/Sub Title	一流の問題解決者になる、良い研究者のための「問題解決モデリング」		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Practice of Business Data Science III		
教員/Instructor	志賀 敏宏	E-mail	shiga+gs@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

「①リサーチクエスチョン（RQ.）⇒②仮説立案⇒③仮説検証⇒④モデル構築と考察（⇒結論と課題）」が問題解決、あるいは研究の過程です。この過程と現実をつなぐ能力⑤「現実のまとめ方（厚い記述、データ、論理）」もこの過程と不即不離です。講義目的は、これらの能力を高め、発見的な問題解決力、研究力を高めることです。そのため①～⑤の論理学び、シミュレーション（実践練習）を行います。皆さんの研究・論文執筆に直結した講義とします。

到達目標/Course Goals

到達目標は、受講生各位の抱える課題（修論テーマ候補等）の解決に十分、一流のビジネスマン、研究に必要な「知的問題解決力」（本大学院のディプロマポリシーDP2:「思考と判断」）を修得することです。

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、双方向、ディベート、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	授業ごとの復習を踏まえて、次回授業でのプレゼンテーションの資料作成。関連資料・図書の検討・参照。計 2～5 時間程度。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション
事前、事後学習ポイント	次回への宿題（①RQ.のプレゼン準備）
詳細	i)オリエンテーション、ii)発見的な問題解決・研究過程の理論と本質要素、iii)データドリブンの吟味
第 2 講	
概要	①RQ.のプレゼン
事前、事後学習ポイント	次回への宿題（②仮説立案と⑤現実のまとめ方のプレゼン準備）
詳細	・①RQ.のプレゼン（ i)テーマ設定、ii)目的の明確化、iii)RQ.とその理由） ・上記のディスカッション（プレゼンに対する受講者同士のディスカッション、教員からのフィードバック含む、以下同じ）
第 3 講	
概要	②仮説立案と⑤現実のまとめ方のプレゼン
事前、事後学習ポイント	次回への宿題（中間プレゼン準備）
詳細	・②仮説立案（ i)仮説、ii)理由）と⑤現実のまとめ方（厚い記述、データ、論理）の方針と見通し（得られそうな結果）のプレゼン ・上記のディスカッション
第 4 講	
概要	中間プレゼン
事前、事後学習ポイント	次回への宿題（③仮説検証のプレゼン準備）
詳細	・中間プレゼン（①、②、⑤） ・上記のディスカッション
第 5 講	
概要	③仮説検証のプレゼン
事前、事後学習ポイント	事後の宿題（最終プレゼン準備）
詳細	・③仮説検証の方針と見通し（得られそうな結果）のプレゼン ・上記のディスカッション
第 6 講	
概要	最終プレゼン（１回目、受講者の半数プレゼン）

事前、事後学習ポイント	総復習（学びの結果、今後の課題）
詳細	・最終プレゼン（①～⑤、④はできれば） ・上記のディスカッション
第 7 講	
概要	最終プレゼン（２回目、受講者の残り半数プレゼン）
事前、事後学習ポイント	総復習（学びの結果、今後の課題）
詳細	・最終プレゼン（①～⑤、④はできれば） ・上記のディスカッション
第 8 講	
概要	本講義のまとめ
事前、事後学習ポイント	事前準備：総復習結果のコメント準備
詳細	i)学びの結果、今後の課題（受講生全員） ii)講師まとめと更なる学びの向けての意見交換
教科書 /Textbook	伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣 伊藤修一郎（2011）『政策リサーチ入門―仮説検証による問題解決の技法』東京大学出版会、その他講師よりの資料配布
指定図書 /Course Readings	G.M.ワインバーグ（1991）『スーパーエンジニアへの道―技術リーダーシップの人間学』共立出版 G.M.ワインバーグ（1990）『コンサルタントの秘密-技術アドバイスの人間学』共立出版
参考文献・参考 URL /Reference List	新堀聡（2002）『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』同文舘出版 藤沢晃治（2004）『「分かりやすい文章」の技術―読み手を説得する 18 のテクニック』講談社 ※適宜、図書を紹介しますので、上記教科書・指定図書等を入手される場合、それ以降でかまいません。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席(30%)、プレゼン内容(35%)、授業内での議論（35%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	問題解決/研究過程の思考能力、議論・プレゼン内容が特に優れている。
評価： A（89～80 点）	問題解決/研究過程の思考能力、議論・プレゼン内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	問題解決/研究過程の思考力、議論・プレゼン内容が良い。
評価： C（69～60 点）	問題解決/研究過程の思考意欲があり、議論・プレゼンが可能である。
評価： F（59 点～）	問題解決/研究過程の思考意欲が不足、議論・プレゼンが困難である。
留意点 /Additional Information	高度な思考・研究・問題解決の前提・基盤となる導入科目と考えています。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	統計的データ分析		
サブタイトル/Sub Title	なし		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Statistical Data Analysis		
教員/Instructor	久保田　貴文	E-mail	kubota@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ビジネスデータ分析するための最低限のスキルを身につける。統計ソフトウエアの中でも特に R の radiant というパッケージを用いて入門的な内容と、それをデータ分析に活かす為の準備、そして実際の場面で必要な考え方を学ぶ。

到達目標/Course Goals

R 言語のパッケージである radiant を用いて、データのハンドリング、グラフの作成、レポートやプレゼンテーションの作成のスキルを修得する。特に、ビジネスにおけるデータを分析するためのスキルを習得する。
なお，特に達成しようとするディプロマポリシーは，DP2:「思考と判断」であり，また，次に達成しようとするディプロマポリシーは DP3:「関心と意欲」である。

授業形態 /Form of Class	講義・グループディスカッション・プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	次回のキーワードを 2 講目以降分については示すので関連する項目について調べること（90 分） 各講において不明な部分を確認する（90 分）とともに、実施したソフトウエアの操作についても復習する(90 分)		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション、インストール
事前、事後学習ポイント	事後学修として授業の中で実行した radiant の操作を実際に実施し，演習として実際のデータに応用すること。
詳細	R 入門，パッケージのインストール，radiant によるデータのインポート，1 変数データの記述統計，さらにベクトルや行列の演算、並べ替え、データの読み込み・書き出し、さらに繰り返し処理等を学ぶ
第 2 講	
概要	比率の検定，比率の差の検定
事前、事後学習ポイント	事後学修として，比率の差の検定を行うこと。
詳細	比率の検定，比率の差の検定
第 3 講	
概要	平均の検定，平均の差の検定
事前、事後学習ポイント	事後学修として，平均の差の検定を行うこと。
詳細	平均の検定，平均の差の検定
第 4 講	
概要	単回帰分析
事前、事後学習ポイント	事後学修として授業の中で実行した radiant の操作を実際に実施し，演習として実際のデータに応用すること。
詳細	市場反応を分析する：R により相関分析や回帰分析などにより関連性を分析する。 回帰分析のモデルについて、決定係数について、残差について、特に説明変数が 1 つの場合の単回帰分析を学修する。
第 5 講	
概要	重回帰分析
事前、事後学習ポイント	事後学修として授業の中で実行した radiant の操作を実際に実施し，演習として実際のデータに応用すること。
詳細	市場反応を分析する：R により相関分析や回帰分析などにより関連性を分析する。 説明変数が質的変数の場合や、複数の変数の場合などについてすなわち、重回帰分析について学修する。説明変数間の共線性や変数選択についても学修する。
第 6 講	
概要	ロジスティック回帰分析

事前、事後学習ポイント	事後学修として授業の中で実行した radiant の操作を実際に実施し，演習として実際のデータに応用すること。
詳細	判断する：R によりロジスティック回帰分析を行いスパムメールの判別や施策の実施の有無について判断するような分析を行う。
第 7 講	
概要	独立性の検定、最終課題予告
事前、事後学習ポイント	事後学修として授業の中で実行した radiant の操作を実際に実施し，演習として実際のデータに応用すること。
詳細	クロス集計，質的データの適合度検定，カテゴリー間の関連性の検定を学修する。 また、次回の予告として、第 1 講～第 7 講までの内容をふまえて、課題を課す。
第 8 講	
概要	総合演習・最終課題の発表会
事前、事後学習ポイント	事後学修として授業の中で実行した radiant の操作を実際に実施し，演習として実際のデータに応用すること。
詳細	前回に課した最終課題について、個人でプレゼンテーションを行う。
教科書 /Textbook	毎回資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	毎回資料を配布する。
参考文献・参考 URL /Reference List	毎回資料を配布する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	平常点（20%），ディスカッション（20%），グループワーク（20%），小テスト（0%），レポート（20%），プレゼンテーション（20%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	統計的データ分析を実施するための課題設定（仮説の設定），データ収集，データ分析，仮説の検証，課題解決（改善）のための提案が行える。
評価： A（89～80 点）	統計的データ分析を実施するための課題設定（仮説の設定），データ収集，データ分析，仮説の検証が行える。
評価： B（79～70 点）	統計的データ分析を実施するための課題設定（仮説の設定），データ収集，データ分析が行える。
評価： C（69～60 点）	統計的データ分析を実施するための課題設定（仮説の設定）が行え，データ収集もしくはデータ分析が行える。
評価： F（59 点～）	統計的データ分析を実施するための課題設定（仮説の設定）しか行えない。
留意点 /Additional Information	R およびその拡張パッケージである radiant をインストールするために、１．インストールする権限を持ったノート PC を持参すること。２．Windows のノート PC 利用者においては、日本語などの 2 バイト文字を含まないユーザー（例えば、「久保田」ではなく「kubota」）を作成しておくこと。以上を踏まえて、初回にインストールの補助を行うので、必ず初回から PC を持参すること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	マーケティング実践		
サブタイトル/Sub Title	マーケティングデータサイエンスの本質		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Practice of Data Science in Marketing		
教員/Instructor	佐藤 洋行	E-mail	sato-h@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

近年、マーケティングにおいてデータ活用は欠くべからざるものとなっている。一方で、取得できるデータの種類も量も膨大になっていく中、意思決定に貢献しないレポートが生産され続けているような現場も見られる。本講義では、マーケティングにおけるデータ活用プロジェクトに数多く携わってきた講師の実践知を体系的に学んでもらうことで、マーケティングにおけるデータサイエンスを用いた創造的思考力を高めるために必要な知識を幅広く身につけてもらう。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーの DP2:「思考と判断」を、データドリブン経営の視点で達成するために、マーケティング分野でデータサイエンスを活用するために必要な高い実践知を身につけてもらうこと

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	毎回の授業で、次の授業で取り扱う例題を提示し、次の授業までにその解決策を考えてもらう（2 時間程度）。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	イントロダクション：　意思決定はどのようにして行われるのか
事前、事後学習ポイント	経済学的な意思決定とデータサイエンス
詳細	マーケターがデータと向き合ったときに陥りがちな間違いについて、なぜそれが起こるのかを考えることで、意思決定とはどのようなもので、データサイエンスとどのようなつながりがあるのかを論じる。それによって、データ活用に関する実践知を身つけてもらう。
第 2 講	
概要	データサイエンスの可能性と限界①　情報とデータ、実験計画
事前、事後学習ポイント	データの不完全性、実験計画の重要性
詳細	マーケティングに関するデータが種類も量も膨大になる中で忘れられがちな、データの不完全性と、実験計画の重要性について改めて認識してもらうとともに、マーケターはそれらとどのように向き合うべきかについて論じる。それによって、エビデンスベースドインサイト力を高めるための実践知を身につけてもらう。
第 3 講	
概要	データサイエンスの可能性と限界②　データ分析と意思決定
事前、事後学習ポイント	データ分析と意思決定の間の溝
詳細	データ分析の結果を読み解く際に注意すべきことについて論じるとともに、それが意思決定に及ぼす影響について考える。それによって、エビデンスベースドインサイト力を高めるための実践知を身につけてもらう。
第 4 講	
概要	データサイエンスの可能性と限界③　データ分析の効用
事前、事後学習ポイント	効用価値説、選好、完備性
詳細	効用価値説から眺めたときのデータ分析がどのようなものかを議論する。その上で、データ分析の真の価値について考察し、分析結果の他者への説明力を高めるための実践知を身につけてもらう。
第 5 講	
概要	マーケティングデータの広がり
事前、事後学習ポイント	DMP、CDP、オムニチャネル、センサー、RFID
詳細	マーケティングに活用可能なデータは質も量も増加の一途をたどっている。そのトレンドについて整理し、データ品質管理やデータ整理・編集についての実践知を身につけてもらう。
第 6 講	
概要	顧客獲得とデータサイエンス
事前、事後学習ポイント	顧客獲得コスト、ブランド、シェア

詳細	自社データをマーケティングに活用する際に忘れられがちな、ブランド力や市場シェアと獲得顧客数との関係性について改めて認識してもらうとともに、そのような視座から見たときの顧客獲得コストに与えられる意味について議論する。それによって、データに基づく創造的思考力を高めるための実践知を身につけてもらう。
第 7 講	
概要	CRM とデータサイエンス
事前、事後学習ポイント	顧客努力、モーメント、コミュニケーションの一貫性
詳細	マーケターは顧客とのコミュニケーションでフリークエンシーを気にすべきか否か、というテーマについて、顧客努力やモーメントというキーワードから議論する。それによって、エビデンスベースドインサイト力を高めるための実践知を身につけてもらう。
第 8 講	
概要	マーケティングと AI
事前、事後学習ポイント	深層強化学習、状態、行動選択、報酬
詳細	AI の基本技術として隆盛を極める深層強化学習について、概要を理解し、そのマーケティングへの応用可能性を探る。翻って、マーケターが何をすべきかを考え、プレゼンテーションをし、フィードバックをもらう。また、そのフィードバックに基づいて改善を行ったものを最終レポートにまとめてもらう。
教科書 /Textbook	無
指定図書 /Course Readings	会社を変える分析の力（河本 薫（2013））、統計学が最強の学問である【実践編】（西内啓（2014））、AI 時代の意思決定とデータサイエンス（佐藤洋行（2019））
参考文献・参考 URL /Reference List	不確実性下の意思決定理論（イツァーク・ギルボア（2014））
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席率（30%）／講義議論参画度（20%）／最終レポート（50%）　3 点の総合評価
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	マーケティングにおけるデータサイエンスの役割について理解し、その利用をプロジェクト化できるだけの整理された知識をレポートとしてまとめることができる
評価： A（89～80 点）	マーケティングにおけるデータサイエンスの役割について理解し、その利用に関してアイディアをプレゼンテーションできるほどに知識が整理されている
評価： B（79～70 点）	マーケティングにおけるデータサイエンスの役割について理解し、その利用に関してアイディアをもっている
評価： C（69～60 点）	マーケティングにおけるデータサイエンスの役割について理解している
評価： F（59 点～）	マーケティングにおけるデータサイエンスの役割について理解していない
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ＤＸ変革:ＡＩ/Ｗａｔｓｏｎに学ぶ知のデジタル化の実践知		
サブタイトル/Sub Title	『DX/デジタル戦略から AI・コグニティブへのユースケースの落とし込み』		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Practical Approach for Digital Transformation by deployment of AI/Watson		
教員/Instructor	鈴木　至	E-mail	suzuki-i@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

デジタル変革時代の企業経営の戦略・シナリオの中で、テクノロジーによるデータ活用を推進することが競争力の源泉になる。知のデジタル活用の一つである人工知能を題材に、その理解と活用ユースケース検討、データ評価・整備について、プロジェクト現場で利用されている検討手法・テンプレートに基づいて実践することで学習する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP3:「関心と意欲」を達成するために、人工知能もとに上記目的に資する「業務検討(ユースケース)」と「データ評価」を通じて、変革に向けた提案が出来るようになる。

授業形態 /Form of Class	講義、個人ワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	あり (第５講 AI デモ見学予定
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	中間・最終プレゼンテーション資料作成。 （中間：4 時間程度、最終：6 時間程度） 事後学習：資料・図書・文献の熟読とユースケース、データアセスメントのまとめ。（第２講、第３講　事前各２時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション（人口知能の理解と活用事例、ユースケース検討ステップ概論）
事前、事後学習ポイント	事前学習：
詳細	①受講生・教員の自己紹介とオリエンテーション、②人工知能の事例紹介と企業のケーパビリティ(講義)、③人口知能の活用アイディア出し、④次回への課題提示（AI 活用のアイディア候補の抽出）
第 2 講	
概要	ユースケース候補の抽出と選定
事前、事後学習ポイント	事前学習(課題)：アイディア候補の作成
詳細	①活用アイディアからユースケースを導出、②ユースケースの評価、優先順位付、③シナリオ作り、④対象データ候補の検討、⑤次回の課題提示(ユースケース詳細化)
第 3 講	
概要	価値を最大化するシナリオの詳細化
事前、事後学習ポイント	事前準備：ユースケースの準備（一覧と候補）
詳細	①人工知能活用のシナリオ詳細化(講義)、②シナリオ詳細化の実践、③必要となるデータ検討、④次回の課題提示(データの調査と課題)
第 4 講	
概要	データアセスメント(評価と整備)の実践
事前、事後学習ポイント	-
詳細	①データアセスメント手法(講義)、②設定シナリオに基づきデータアセスメントの実践と結果プレゼン、③次回の課題提示(中間レポート作成の指針)
第 5 講	
概要	中間レポートのプレゼンおよび人工知能デモ見学（校外学習を予定）
事前、事後学習ポイント	事前準備：中間レポート作成
詳細	①人工知能活用のユースケースのプレゼンと相互評価、③次回の課題提示(学習モデル設計)
第 6 講	
概要	学習モデルの設計と人工知能の性能評価
事前、事後学習ポイント	-
詳細	①学習モデル設計(講義)、②人工知能の性能評価(講義)、③学習モデル設計と性能評価の実践、④最終レポートの作成指針

第 7 講	
概要	最終レポートのプレゼン
事前、事後学習ポイント	事前学習：最終レポート、プレゼン準備
詳細	①最終レポートのプレゼン、②活用モデル実践における課題・提言の検討
第 8 講	
概要	本講義のまとめ
事前、事後学習ポイント	事前学習：最終レポートの追加・修正
詳細	①本講義のまとめ、②人工知能、データ活用における課題・提言の意見交換
教科書 /Textbook	適宜資料配布
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(20%)、個人ワーク(30%)、プレゼン内容(50%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	人工知能によるデータ活用を実践する能力が高く、プレゼン内容が課題解決に寄与してるとともに、提言とその解決策を具体的に提示できている
評価： A（89～80 点）	人工知能によるデータ活用の実践手法を理解しており、プレゼン内容が課題解決に寄与している
評価： B（79～70 点）	人工知能を活用した解決策を定義できる
評価： C（69～60 点）	人工知能を活用した解決策に課題がある
評価： F（59 点～）	出席不良で、人工知能を活用した解決策を導き出せない
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	DX 変革：データサイエンスによる企業変革		
サブタイトル/Sub Title	『DX/デジタル戦略への展開』		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Enterprise Transformation driven by Data Science		
教員/Instructor	前田英志	E-mail	hideshi@jp.ibm.com
科目群/Course Classification	データドリブン経営	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

データサイエンスは手段であり、目的は企業を変革し大きなビジネス価値を実現することです。データサイエンスを用いた企業の変革には、①ビジネス課題をデータサイエンスを用いて解くこと　②データサイエンスの力を活用するためのデータ基盤、ガバナンスを整備すること　③データサイエンスを推進するための組織を立ち上げること（CDO: Chief Data Office）　④データサイエンスに関わる高度データ人材を育成すること　の 4 つが必要となります。これら 4 つが、融合して初めて大きなビジネス価値を実現できます。当学では、これら 4 つを自身に関連する企業を用いて具体的に学び、データサイエンスを用いた企業変革が行えるようになることを目指します。また、基礎能力として、A 論理力 B 発想力 C 統計活用力 D 表現力の 4 つを、講義を通じて学ぶことで、これらの提言をより効果的に行えるようにします。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」と DP2:「思考と判断」を達成するために，上記目的に資する「データサイエンスによるビジネス課題の解決検討」、「データ基盤・ガバナンス検討」、「データ推進組織の設計」、「データに関わる高度人材の育成方法の検討」を通じて、データサイエンスを用いた企業変革を体系的にご自身で提言できるようになることを目標とします。

授業形態 /Form of Class	講義、個人ワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：なし 事後学習：毎授業後に宿題を個人で準備し、次の授業に持ってくること（1 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション
事前、事後学習ポイント	事前：なし 事後：自社もしくは他企業が、データドリブン経営の成熟度マップでいうとどのセグメントにいるのかを調査する（調査結果を次講で議論する）
詳細	①オリエンテーションと教員、受講生の自己紹介　②「データドリブン経営とは？」（講義とディスカッション）③データ思考力（論理、発想、基礎統計、グラフ）に関わる現状の能力把握のための演習（結果は、各受講生の成績に反映するものではなく、この先の講義でどこを重点的に実施すべきかを判断するために活用する）
第 2 講	
概要	データサイエンスを用いた変革プロジェクトの理解
事前、事後学習ポイント	事前：なし 事後：データサイエンスを用いた変革プロジェクトで自社もしくは他企業に適用できるものを体系的に洗い出す　（調査結果を次講で議論する）
詳細	①「データドリブン経営の成熟度」の調査結果の発表とディスカッション　②データサイエンスを用いた変革プロジェクトの講義とディスカッション　③データ思考力（論理、発想、基礎統計、グラフ）の講義
第 3 講	
概要	データサイエンスを支えるシステムアーキテクチャーの理解
事前、事後学習ポイント	事前：なし 事後：データサイエンスを支えるシステムアーキテクチャーのが、自社もしくは他企業において、具体的にどうなっているかを調査する（調査結果を次講で議論する）
詳細	①「データサイエンスを用いた変革プロジェクト」の調査結果発表とディスカッション　②データサイエンスを支えるシステムアーキテクチャーの講義とディスカッション　③データ思考力（論理、発想、基礎統計、グラフ）の講義
第 4 講	
概要	データサイエンスを支える組織の理解
事前、事後学習ポイント	事前：なし 事後：データサイエンスを支える組織が、自社もしくは他企業において、具体的にどの部門が担っているかを調査する（調査結果を次講で議論する）、
詳細	①「データサイエンスを用いたシステム」に関する調査結果発表とディスカッション　②データサイエンスを支える組織の講義とディスカッション　③データ思考力（論理、発想、基礎統計、グラフ）の講義

第 5 講	
概要	データサイエンスを活用するために必要な人材の理解
事前、事後学習ポイント	事前：事後：データサイエンスを活用するために必要な人材が、自社もしくは他企業において、具体的にどこにいるかを調査する（調査結果を次講で議論する）
詳細	①「データサイエンスを支える組織」の調査結果の発表とディスカッション　②データサイエンスを活用するために必要な人材の講義とディスカッション　③最終プレゼンテーションのやり方の説明とフォーマットの配布
第 6 講	
概要	中間プレゼンテーション及び最新 DX 事例の紹介
事前、事後学習ポイント	事前：データサイエンスを用いた企業変革をプレゼンテーションとしてまとめてくる 事後：
詳細	①「データサイエンスを支える人材」の調査結果の発表と議論　②データサイエンスを用いた企業変革の中間プレゼンと議論（プレゼンに対してはフィードバックがあります。）③世の中で進んでいる DX 事例の紹介（外部ゲストを呼ぶ予定です。）
第 7 講	
概要	最終プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	事前：中間発表のコメントを元に、データサイエンスを用いた企業変革をプレゼンテーションとしてまとめてくる 事後：
詳細	①データサイエンスを用いた企業変革の最終プレゼンと議論（プレゼンに対してはフィードバックがあります。）
第 8 講	
概要	ふりかえりと明日への一歩
事前、事後学習ポイント	事後：今後ご自身が実施するとコミットした内容を実務の中で意識する
詳細	①受講生のふりかえり　②今後に向けたディスカッション
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(30%)、授業内での議論参加(40%)、プレゼン内容(30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	データサイエンスを用いた企業変革に関わる議論、プレゼン内容が非常に優れている。
評価： A（89～80 点）	データサイエンスを用いた企業変革に関わる議論、プレゼン内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	データサイエンスを用いた企業変革に関わる議論、プレゼン内容が良い。
評価： C（69～60 点）	データサイエンスを用いた企業変革に関わる議論、プレゼン内容が平均程度。
評価： F（59 点～）	出席不良で、議論、プレゼン内容に問題が多い。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	日本の製薬企業の未来		
サブタイトル/Sub Title	日本発の創薬企業としての再興		
英文科目名/Course Title(Eng.)	The future of Japanese pharmaceutical companies		
教員/Instructor	佐々木　弘明	E-mail	sasaki-hi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ヘルスケア	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

日本はこれまで世界第三位の新薬創生国。アジアでは日本が唯一であり、世界の中で高い評価を得てきました。研究開発費の増加等、新薬創生の難易度は年々上昇しています。IPS 細胞や再生医療の出現から、製薬企業の未来を探求する。

到達目標/Course Goals

医薬品業界は、新薬開発までの莫大な資金がかかる中、毎年の薬価切り下げが行われるなど、厳しい外部環境は続いており、まさに業界変動の兆しが窺える。また医薬品業界は、政府が掲げる「新成長戦略」の 7 つの戦略分野に位置付けられており、日本経済にも多くの影響を与える分野であり、MBA 生にも関心が高い分野と考える。製薬企業経営の難しさや特殊性を理解しながら、様々な製薬企業の取り組みを深堀りしながら、自社での活用ポイントを明らかにし、自らの課題解決を実践することを到達目標とする。ディプロマポリシーにある DP1:「知識と理解」を確実にした上で、DP2:「思考と判断」を身に着ける。DP3:「関心と意欲」を高め、医薬品業界の事例の研究を通じて、DP4:「表現と技能」を学び、DP5:「志」を磨き、課題解決力を向上させ、社内外で活躍できることを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：指定図書予習及び宿題資料の読み込み(毎回 2 時間程度) 事後学習：講義内容の振り返り(毎回 1 時間程度)		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	製薬業界の特徴である、研究・開発・技術・生産・営業のバリューチェーン、直接販売はできない日本の流通制度等のその特徴、環境変化から各社が何を取り組んでいるかを学ぶ
事前、事後学習ポイント	世界及び国内の製薬企業の売上高、営業利益等分析し、ダイアローグできるよう整理する
詳細	医療用医薬品のハイリスクハイリターン構造や国内製薬企業の環境変化に対する製薬会社の経営戦略と人事戦略。イノベーション起こすための組織開発をどう構築しているのか探求する。
第 2 講	
概要	製薬業界で起きている薬価切り下げ、グローバル化、新規参入企業動向や、予防・未病・治療・停滞・終末医療や再生医療等の環境変化を整理し、今後の製薬業界の在り方を考察する。
事前、事後学習ポイント	今、製薬業界で何が起こっているのかを調べ、クラスでダイアローグできるように整理する
詳細	国内最大手の武田薬品工業の M&A をどう評価するのか、クラスでダイアローグ 課題：製薬業界を考察し、自組織に活用できるポイントをまとめてくる。第 8 講までに全員が発表する。
第 3 講	
概要	企業研究 A.アステラス製薬の動向を深く探求する①
事前、事後学習ポイント	合併当時のアステラス製薬の経営戦略と人事戦略、ステークホルダーの関係を考える
詳細	山之内製薬と藤沢薬品工業による国内最初の大型合併の舞台裏を探求し、どう評価するのか、クラスでダイアローグする。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション①
第 4 講	
概要	企業研究 A.アステラス製薬の動向を深く探求する②
事前、事後学習ポイント	現在のアステラス製薬の経営戦略と人事戦略、ステークホルダーの関係を考える
詳細	武田薬品工業、アステラス製薬、第一三共を比較探求し、どう評価するのか、クラスでダイアローグする。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション②
第 5 講	
概要	企業研究 B.合併当時の田辺三菱製薬の動向を深く探求する①
事前、事後学習ポイント	合併当時の田辺三菱製薬の経営戦略と人事戦略、ステークホルダーの関係を考える
詳細	三菱ウェルファーマと田辺製薬による内資同士の合併の舞台裏を探求し、どう評価するのか、クラスでダイアローグする。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション③

第 6 講	
概要	企業研究 B.現在の田辺三菱製薬の動向を深く探求する②
事前、事後学習ポイント	現在の田辺三菱製薬の経営戦略と人事戦略、ステークホルダーの関係を考える
詳細	田辺三菱製薬、中外製薬、塩野義製薬を比較探求し、どう評価するのか、クラスでダイアローグする。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション④
第 7 講	
概要	まとめ①ゲスト講演　日本の製薬企業の未来を考える・・・医師または企業研究先等の経営企画や創薬関係者を招聘予定
事前、事後学習ポイント	現在の日本の製薬企業の課題を検討する
詳細	日本の製薬企業の課題を探求し、どう優先順位をつけるか、クラスでダイアローグする。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション⑤
第 8 講	
概要	まとめ②日本の製薬企業の未来についてダイアローグ
事前、事後学習ポイント	日本の製薬企業の未来について検討する (第 7 講で考えた課題の解決策含め)
詳細	日本の製薬企業の未来を探求し、どう解決していくのか、クラスでダイアローグする。 第 1 講で出された課題のプレゼンテーション⑥
教科書 /Textbook	適宜、講義資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	よくわかる医薬品業界　長尾剛司著　日本実業出版社 医薬品業界の動向とカラクリがわかる本　荒川博之著　秀和システム
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席 (30%)、授業内での議論参加 (35%)、プレゼンテーション内容 (15%)、最終レポート (20%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	日本の製薬企業の未来を自らの言葉で語り、社内外で活用できる。
評価： A（89～80 点）	日本の製薬企業の未来を深く理解し、自社への改善案が描ける。
評価： B（79～70 点）	日本の製薬企業の未来の概要が理解でき、自社の課題点を指摘できる。
評価： C（69～60 点）	日本の製薬企業の未来の概要が理解できている。
評価： F（59 点～）	日本の製薬企業の未来の理解が不十分、出席不良で、授業内の議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	第 7 講のゲスト講演は、医師または国内製薬会社の方を招聘予定です。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	医療・介護経営Ⅰ		
サブタイトル/Sub Title	毎年2兆円弱成長する分野とは		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Healthcare and Long term Care Management Theory (I)		
教員/Instructor	真野俊樹	メールアドレス	mano@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ヘルスケア	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

医療はコアの国民医療費の部分のみで40兆円超、周辺を入れればその2倍にもなろうかという巨大な産業分野になっている。介護ももはや10兆円産業である。
本講座では、医療/介護のコア部分、医療/介護周辺産業について経営学の視点で論じる。 その時々の環境変化・政策変化に応じてトピックスは柔軟に対応する。並行される医療介護オムニパス講座の補完の意味もあり、そちらで議論しきれなかった点を深めることも可能である。
秋学期に開講される医療介護オムニパス講座の補完の意味もあり、そちらで議論しきれない点を深めることも目的としている。

到達目標/Course Goals

最近の医療/介護の状況を展望し今後を考える。ディプロマポリシーで DP1:「知識と理解」を達成するために、各自1回のプレゼンテーションにおいて、この業界についての問題意識をまとめることができるようになること。

授業形態/Form of Class	講義、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習/Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の担当部分について発表準備するだけでなく、メンバーの発表についても理解し、アドバイスできるようにする、最低1講座1時間準備すること。		

講義概要/Course Description　全8講　第1講～第7講は各90分×2講座 第8講は90分

第1講	
概要	自己紹介、医療介護制度概要
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	自分の持つ問題点を明らかにする
第2講	
概要	海外の医療
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	国際比較を行う。
第3講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）により理解を深める
第4講	
概要	受講生の選択トピックスによる演習
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
第5講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて外部講師が講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）により理解を深める

第 6 講	
概要	受講生の選択トピックスによる演習
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する
第 7 講	
概要	受講生の選択トピックスによる演習
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8 講までに全員が発表する
第 8 講	
概要	受講生の選択トピックスによる演習
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する
教科書 /Textbook	資料を適宜配布する
指定図書 /Course Readings	真野俊樹著「こんな医者ならかかりたい」(朝日新書)、「入門医療経済学」(中公新書)、「入門医療政策」(中公新書)、「医療が日本の主力商品になる」(ディスカバー携書)、「命の値段はいくらなのか？」(角川新書)、「医療危機」（中公新書）
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	授業参加（30%）、個人の発表（70%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：A＋（100～90点）	課題設定―データ収集―分析―仮説の検証―提案が行える
評価：A（89～80点）	課題設定―データ収集―分析―仮説の検証が行える
評価：B（79～70点）	課題設定―データ収集―分析を行える
評価：C（69～60点）	課題設定―データ収集を行える
評価：F（59点～）	課題設定か調査設計かデータ収集のいずれかしかできない
留意点 /Additional Information	《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルが経営実践のキーであるので、議論には積極的に参画すること

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	医療・介護経営 II		
サブタイトル/Sub Title	毎年 2 兆円弱成長する分野とは		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Healthcare and Long term Care Management Theory (II)		
教員/Instructor	真野俊樹	メールアドレス	mano@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ヘルスケア	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

年々の医療介護費用の増加は 2 兆円を超す。これをコストとみればマイナスであるが、市場の広がりとみれば大きなチャンスともいえる。一方、倫理的な部分や規制が多い業種であるがゆえに、その中で生きていくにはかなりの修練が必要になる。当該講座では、医療や介護事業者あるいはその分野に外部から関心を持つ者を対象にし、複雑な業界を解きほぐして現業や新たなチャンスを探る機会とする。議論を多く行い、また外部講師も以前とは異なるために、前期後期の連続履修が理解を深めることになると考える。

到達目標/Course Goals

医療介護業界を解きほぐして現業や新たなチャンスを探る機会とする。ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」を達成するために、各自 1 回のプレゼンテーションにおいて、この業界についての問題意識をまとめることができるようになること。

授業形態/Form of Class	講義、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習/Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の担当部分について発表準備するだけでなく、メンバーの発表についても理解し、アドバイスできるようにすること。最低 1 講座 1 時間準備すること。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	自己紹介、医療介護制度概要
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	自分の持つ問題点を明らかにする
第 2 講	
概要	海外の医療
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	国際比較を行う。
第 3 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）により理解を深める
第 4 講	
概要	受講生の選択トピックスによる演習
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する
第 5 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）により理解を深める
第 6 講	
概要	受講生の選択トピックスによる演習
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する

詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する
第 7 講	
概要	受講生の選択トピックスによる演習
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
第 8 講	
概要	受講生の選択トピックスによる演習
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する
教科書 /Textbook	資料を適宜配布する
指定図書 /Course Readings	真野俊樹著「こんな医者ならかかりたい」（朝日新書）、「医療危機」（中公新書）、「入門医療政策」(中公新書)、「医療が日本の主力商品になる」(ディスカバー携書)、「日本の医療　比べてみたら 10 勝 5 敗 3 分けで日本の勝ち」（講談社新書）
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	授業参加（30%）、個人の発表（70%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：A＋（100～90点）	課題設定―データ収集―分析―仮説の検証―提案が行える
評価：A（89～80点）	課題設定―データ収集―分析―仮説の検証が行える
評価：B（79～70点）	課題設定―データ収集―分析を行える
評価：C（69～60点）	課題設定―データ収集を行える
評価：F（59点～）	課題設定か調査設計かデータ収集のいずれかしかできない
留意点 /Additional Information	《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルが経営実践のキーであるので、議論には積極的に参画すること

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	医療・介護マネジメントの実践知		
サブタイトル/Sub Title	事例から積み上げよう		
英文科目名/Course Title(Eng.)	How to make a real business for healthcare and long term care		
教員/Instructor	真野俊樹	メールアドレス	mano@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ヘルスケア	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

医療介護分野は、もはや制度の変更だけではなく、民間からの新しいイノベーションがなければ解決できない問題を多く抱えているのではないか。このオムニバス講義では、多摩大学大学院の OB/OG あるいは現場で実践知を持っている方にプレゼンテーションをしていただき、それに対しての議論を行うことで、深めていきたい。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」を達成するために、医療介護分野での様々な取り組みを知ることで、自らの問題解決や特定課題論文の作成に役立てることを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	最新の情報について毎回資料が配られるので、1 講義最低 1 時間十分な復習が望まれる。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて理解し議論する 最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）、ディベートにより理解を深める
第 2 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）、ディベートにより理解を深める
第 3 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）、ディベートにより理解を深める
第 4 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）、ディベートにより理解を深める
第 5 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）、ディベートにより理解を深める
第 6 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）、ディベートにより理解を深める
第 7 講	
概要	外部講師の講義と議論

事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）、ディベートにより理解を深める
第 8 講	
概要	外部講師の講義と議論
事前、事後学習ポイント	問題の設定から考え方、解き方を理解する
詳細	最新のトピックスについて講義を行い、ディスカッション及び教員や外部講師との対話（双方向）、ディベートにより理解を深める
教科書 /Textbook	資料を適宜配布する
指定図書 /Course Readings	真野俊樹著「こんな医者ならかかりたい」（朝日新書）、「入門医療経済学」（中公新書）、「入門医療政策」（中公新書）、「医療が日本の主力商品になる」（ディスカバー携書）、「命の値段はいくらなのか？」（角川新書）「日本の医療　比べてみたら 10 勝 5 敗 3 分けで日本の勝ち」（講談社新書）
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	授業参加（30%）、レポート（70％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：A＋（100～90点）	課題設定―データ収集―分析―仮説の検証―提案が行える
評価：A（89～80点）	課題設定―データ収集―分析―仮説の検証が行える
評価：B（79～70点）	課題設定―データ収集―分析を行える
評価：C（69～60点）	課題設定―データ収集を行える
評価：F（59点～）	課題設定か調査設計かデータ収集のいずれかしかできない
留意点 /Additional Information	《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルが経営実践のキーであるので、議論には積極的に参画すること

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	高齢社会のまちづくり		
サブタイトル/Sub Title	21 世紀の産業連関と地域の内発的発展モデルの創造		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Community planning of the aged society		
教員/Instructor	川井　真	E-mail	kawai1026jp@nifty.com
科目群/Course Classification	ヘルスケア	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

さらなるグローバル化の進展が予想される 21 世紀であるが、日本は国際社会において「高齢社会先進国」としての責務も負っている。人口減少を伴う高齢社会では人々の行動範囲・経済活動は、すくなからず縮小するであろうし、加齢とともに身体は虚弱になり、リタイアすれば収入も減る。したがって、これからは GDP 成長率に代わる新たな豊かさの指標が必要となってくるだろう。本講義においては、このような新時代における産業連関の仕組みと地域経済の内発的発展モデルを提示することのできる人材の養成、すなわち 21 世紀の「まちづくり」を担うソーシャルアントレプレナーやイントラプレナーの育成を目指す。

到達目標/Course Goals

日本の 21 世紀は生活の内実を豊かにする「まちづくり」の世紀であると仮定し、DP1:「知識と理解」を深め、DP2:「思考と判断」を養い、DP 3 :「関心と意欲」を高めながら「知の再武装」を達成する。これにより DP4:「表現と技能」すなわち文化を再創造していく能力を身につけ、「イノベーターシップ」に基づき、経済のフレーム・オブ・リファレンスを再考しながら上記目的に資する「問題解決のためのモデル」をつくり、実践していく。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：事前に資料に目を通し、講義の主題となる部分を押さえておく（1 時間程度） 事後学習：得た知識を実践知へと昇華させるため、思考に集中できる時間を確保しておく（90 分程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	導入・要点整理（社会的想像と創発へのアプローチ）
事前、事後学習ポイント	わたしたちはどこから来て、どこへ向かうのか。時代認識を共有する。
詳細	世界の動き、日本の現状を、文明論や歴史人口学的な観点から分析し、固定観念を取り払いながら、来るべき経済、来るべき未来の姿をイメージする。 宿題：講義内容を整理し、自身の見解をまとめる。参考文献一覧から関連する書籍を選択し、内容を整理し、報告する。
第 2 講	
概要	まちづくりの思想（サスティナビリティという視点）
事前、事後学習ポイント	政治・経済・社会という多角的観点から「まちづくり」の意義と意味を検証する。
詳細	さらなるグローバル化の進展が予想される 21 世紀にあって、なにゆえ「まちづくり」に着目するのか、その意義と意味について、ディスカッションを通して理解を深めていく。 第 1 講で得た情報と知識を報告し、くわえて第 2 講の「まちづくり」との関連性についての私見を述べる。選択した参考文献によって得られた知識を報告する。
第 3 講	
概要	近代経済思想と福祉レジーム（社会保障と雇用保障を再考する）
事前、事後学習ポイント	福祉レジームの一角に地域包括ケアという概念が登場した時代背景を知る。
詳細	福祉国家の成立から今日までの推移を確認し、それを踏まえて、死生学や老年学あるいは社会学や文化人類学などから発信される知見をもとに、超少子高齢人口減少時代に求められる保健・医療・介護・福祉の構造を考えていく。 中央集権システムと地域政策を対比し、グループディスカッションによって議論を深め、地域のあるべき政策について、それぞれ見解を述べる。
第 4 講	
概要	ローカリズムと内発的発展論（来るべき経済と働き方の革新）
事前、事後学習ポイント	21 世紀の地域主義とグローバル化した世界における内発的発展論について考察する。
詳細	地球資源の有限性に着目したローマクラブによる「成長の限界」や、「地域主義」ならびに「内発的発展論」といった生命系の思想的潮流が過去に存在したことを確認し、持続可能性というテーマを織り込みながら、これからの「まち・ひと・しごと」について考えていく。 グループディスカッションで理解を深め、これからの「まち・ひと・しごと」に関する意見

	を発表する。
第 5 講	
概要	論理的思考とプラグマティズム（近代科学と人間の学～高齢社会のアクションリサーチ）
事前、事後学習ポイント	課題解決に必要な思考力と行動力を養う。
詳細	固定観念から意識を解き放ち柔軟な発想へと思考を導くために、プラグマティズムを手掛かりに「ゆらぎ」の科学について考察し、新たなビジネス構想や社会イノベーションをデザインするために役立つ、論理的思考やアブダクションについて理解を深める。 具体的な事例をもとにグループディスカッションを行い、発表する。
第 6 講	
概要	社会システム理論・貨幣論（コミュニケーションと共通善）
事前、事後学習ポイント	構造主義の理解と社会的行動主義心理学ならびに認知科学を手掛かりに社会を検証する。
詳細	G.H ミードの自我論やニクラス・ルーマンの社会システム理論（オートポイエーシス的システム理論）を手掛かりに社会の構造を分析し、社会学的想像力と柔軟な思考を養いながら、新たな事業を創造し、展開するための具体的な戦略を検討する。 グループディスカッションで理解を深め、発表し、さらに具体的な事業展開の方法について討議する。
第 7 講	
概要	地域デザイン（食・エネルギー・ケアを基盤にネットワーク化する地域内産業連関の仕組み）
事前、事後学習ポイント	事例検討（贈与論の再考）
詳細	人間活動の基盤を支える「食」、「エネルギー」、「ケア」を事業の中心に据えて、新たな地域内産業連関を構成しようとしている地域を紹介する。このような事例を参考にしながら、ディスカッションを通して、地域における社会的意義や本質的価値について考える。 第 5 講、第 6 講の知見を織り込みながら自身の見解を整理し、発表する。
第 8 講	
概要	まとめ（インテグレーテッド・ソーシャルビジネス・ネットワークの構造とデザイン）
事前、事後学習ポイント	パブリックとプライベートをシームレスに連結する、来るべきソーシャル・ビジネス、コミュニティ・ビジネスの可能性について考える。
詳細	ソーシャル・ビジネスやコミュニティ・ビジネスと呼ばれるものは、多くの場合、市場の論理に従って、単独で、事業を発展させていくことは難しい。そこで共有価値を創造し、新たな関係性を構築し、社会的課題を解決しながら、地域とともに発展する新たなソーシャル・ビジネス、コミュニティ・ビジネスの可能性について、いくつかの仮説をもとに検証する。 グループワークにより意見を集約し、とりまとめ、発表する。
教科書 /Textbook	必要な資料を毎回（テーマごとに）作成し配布する。
指定図書 /Course Readings	なし（参考文献の中から自ら選択し、熟読する）
参考文献・参考 URL /Reference List	参考文献一覧を別途作成し配布する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率 30%／講義議論参画度 30%／最終レポート 40%（最終講義でフィードバックを行う）による総合評価
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A＋（100～90 点）	バランスのとれた理解、授業内での議論参加、レポートの内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	バランスのとれた理解、授業内での議論参加、レポートの内容が良い。
評価： B（79～70 点）	理解力、授業内での議論参加、レポートの内容が期待したレベルに到達している。
評価： C（69～60 点）	授業内での発言、レポートの内容が期待したレベルに到達している。
評価： F（59 点～）	評価項目すべてにおいて不十分である。
留意点 /Additional Information	本授業は思考の柔軟性を求めています。したがって、経営学・経済学・政治学のような社会科学に属する学問のみならず、人文科学や自然科学、あるいは死生学や認知科学など新しい学問領域から発信される情報にも耳を傾け、常識にとらわれず、思考を飛躍させることを心がけてください。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	異業種間のコミュニケーション術		
サブタイトル/Sub Title	～これからのイノベーションを起こすために～		
英文科目名/Course Title(Eng.)	The Art of Communication among different departments		
教員/Instructor	白井　雅弓	E-mail	shirai-a@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ヘルスケア	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

医療業界をはじめ、急速な技術革新を伴う業界において、様々な専門的分野の最先端の知識を有した人々が協力して仕事をする機会が増えている。こうした機会で円滑なコミュニケーションを行うために、I. 多様な専門的分野が入り組んだ複雑な現状を分析する技術、II. 専門的知識の共有が困難な中での情報の共有・理解
III. 共有した情報を用いてチームとして意思決定をする技術が必要とされている。

本講義では、これらの技術を身に着ける第一歩として、会話の基本的構造に理解を深め、自分の意見の構造や相手の意見の妥当性に考慮する能力を習得する。さらに、企画分析法、仕事等で施行する企画の根拠となる論文の妥当性の分析を実際に講義内で行い、最初に学んだ基本的論理構造の理解を深める。演習と並行して、自分の考えの構成の仕方、考えの根拠となる専門的情報(学術論文等)の妥当性の判断方法、情報から自分の考えを導く過程の妥当性の判断方法等を学ぶ。

最後に、論文等よりも複雑性の高い、実際の変化する現場へ対応する能力を向上するため、オペレーション等の改善方法をシステム思考等の概論を学ぶ。
本講義の対象者として、医療業界等、技術革新・政策の変化により変化する業界に興味のあるもの・論文等の専門的文書に苦手意識があるものを想定する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」を実現するために、受講生自身の企画・課題を円滑に意見交換できるよう、「情報収集能力と分析力」、「実践的教養」を身につける。

授業形態 /Form of Class	講義、発見学習、グループワーク、グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	講義開講後 要検討
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	資料・図書の熟読：30 分程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション、意見の解釈・構築方法 I
事前、事後学習ポイント	事前準備：本講義の復習
詳細	自己紹介・オリエンテーション 意見提示や相手の意見の評価解釈を円滑にする要素についての検討 前提・想定・結論についての学習①
第 2 講	
概要	意見の解釈・構築方法 II 論理的思考に基づく学術論文の読み方(演習)の予告
事前、事後学習ポイント	事前準備：これまでの講義内容の復習 論理的思考に基づく学術論文の読み方(演習)のテーマ探し
詳細	前提・想定・結論についての学習② 論理的思考に基づく学術論文の読み方(演習)の詳細説明・質疑応答
第 3 講	
概要	意見の解釈・構築方法 III 論文の構造について
事前、事後学習ポイント	事前準備：これまでの講義内容の復習 論理的思考に基づく学術論文の読み方(演習)のテーマ探し
詳細	前提・想定・結論についての学習② 論理的思考に基づく学術論文の読み方(演習)の詳細説明・質疑応答
第 4 講	
概要	論理的思考に基づく学術論文の読み方
事前、事後学習ポイント	事前準備：これまでの講義内容の復習
詳細	専門的情報を吟味する必要性について 論文の基本的構造・エビデンスのレベルをはじめとした論文の質の判断法について受講者の理解度により内容を適宜変更予定

第 5 講	
概要	企画のための論理思考に基づく学術論文の読み方(演習)I
事前、事後学習ポイント	事前準備:これまでの講義内容の復習
詳細	受講者の理解度により、内容を適宜変更予定
第 6 講	
概要	企画のための論理思考に基づく学術論文の読み方(演習)II
事前、事後学習ポイント	事前準備:これまでの講義内容の復習
詳細	受講者の理解度により、内容を適宜変更予定
第 7 講	
概要	システム思考等の概論 組織でのイノベーションの考え方
事前、事後学習ポイント	事前準備:これまでの講義内容の復習
詳細	システム思考等、現場の複雑性に対するアプローチについて概説・検討 授業進行・受講生の希望により内容を決定
第 8 講	
概要	本講義のまとめ
事前、事後学習ポイント	事前準備:これまでの講義内容の復習
詳細	本講義全体を振り返り、異業種間で働く際の留意点について検討、意見交換
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	真野俊樹 (2006)『入門　医療経済学』 Marc Roberts 他 (2010)『実践ガイド　医療改革をどう実現すべきか』 福原俊一 (2013)『臨床研究の道標－７つのステップで学ぶ研究デザイン』 Peter M. Senge (2011)『学習する組織　システム思考で未来を創造する』 Trisha Greenhalgh (2016)『読む技術　論文の価値を見抜くための基礎知識』他
評価方法/Method of Evaluation	
配分 (合計 100%)	出席(30%)、授業内での議論・グループワーク・プレゼンテーション(70%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺ (100～90 点)	論点の指摘が鋭く、議論が優れている
評価： A (89～80 点)	指摘すべき論点に考慮することができ、議論が良い
評価： B (79～70 点)	時に論点を考慮するでき、議論が平均程度
評価： C (69～60 点)	論点を考慮する意欲があり、議論が平均程度
評価： F (59 点～)	出席不良で、議論に課題が多い
留意点 /Additional Information	本講義では医療業界を主に取り上げますが、他業界における異業種間の連携についても役立つように授業を構成しています。 対象者として、医療業界等、技術革新や政策の変化により変化する業界に興味のあるもの・論文等の専門的文書に苦手意識があるものを想定しています。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	地域包括ケアのビジネスモデル		
サブタイトル/Sub Title	SDGs の GOAL11 住み続けられるまちづくりを医療介護ビジネスで支える		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Business method of the Community- based Integrated Care System		
教員/Instructor	石井　富美	E-mail	ishii-f@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ヘルスケア	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

地域包括ケアシステムにおける医療介護の専門職の役割を知り、持続可能なビジネスモデルを構築する。

到達目標/Course Goals

地域包括ケアシステムの本質を知り、医療介護の専門職の役割を知ることで、新しい価値観を持つことができる。ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」を達成するために、社会保障制度改革の展望を知る。ヘルスケア分野のデータを新たなビジネスモデルに活かし、人口減少社会の中でのまちづくり、コミュニティづくりをプランニングすることでディプロマポリシーの関心と意欲（社会を変革しようとする力）を身につける。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：講義資料、参考資料の確認（1 時間程度） 事後学習：授業後のレポート（1 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	社会保障制度改革と地域包括ケアシステム
事前、事後学習ポイント	厚生労働省の HP、地域包括ケアシステムについて事前に目を通しておく。
詳細	社会保障制度改革の流れと地域包括ケアシステムの概要について説明します。多様性を受け入れる社会のあり方についてグループディスカションを行います。
第 2 講	
概要	地域包括ケアシステムにおける「医療」の役割
事前、事後学習ポイント	グループディスカッションを踏まえて、自分の考えを事後レポートとして提出していただきます。レポートの講評はメールで返信します。
詳細	地域包括ケアシステムのフィールドである地域での「暮らし」、少子高齢化社会の「暮らし」をささえる医療の役割を共に考えます。また、地域の中での多世代、様々なハンディキャップを越えて交流する仕組みを作り、医療・介護の専門職が関わりながら地域の暮らしの中で生き、暮らしの中で看取る仕組みを先進事例から学びます。
第 3 講	
概要	社会保障制度の将来像
事前、事後学習ポイント	保険医療 2035、2040 年を展望した医療提供体制等の参考資料に事前に目を通しておく。
詳細	人口減少社会における社会保障制度の在り方を示した保健医療 2035、さらに 2040 年の展望を読み解き、今から 20 年かけてヘルスケアに携わる専門職は何をしていく必要があるのか、行政、企業、民間団体に求められている役割を共に考えます。
第 4 講	
概要	個人の尊厳とＱＯＬ・ＱＯＤ　人生会議のあり方
事前、事後学習ポイント	人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドラインに事前に目を通しておく。。
詳細	人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会の資料から、ＡＣＰのあり方、死生観の多様性への対応を考えていきます
第 5 講	
概要	ヘルスケア分野の IT 化、情報利活用の可能性
事前、事後学習ポイント	グループディスカッションを踏まえて、自分の考えを事後レポートとして提出していただきます。レポートの講評はメールで返信します。
詳細	AI、ロボティクスなど医療介護分野の技術革新が進む中、科学的介護という考え方も進んできている。医療介護健康などのヘルスケアデータの利活用の可能性を考え、新たなビジネスを考えていきます。

第 6 講	
概要	地域包括ケア時代の「連携」　、　新規事業の資金調達
事前、事後学習ポイント	これまでの講義、ディスカッションを参考に、新規ビジネスモデルを作成し、発表の準備をしてください。
詳細	地域包括ケア時代の「連携」　医療機関・企業・研究機関・行政などの新しい連携の形、専門分野での連携だけではなく、リビングラボも視野に入れた幅広い連携について、事例を紹介しながら、自分たちのリソースを活用した新しい取り組みを共に考えます。また、新規事業を立ち上げる際の資金調達方法、事業計画の立て方について事例を紹介しながら説明します。
第 7 講	
概要	受講生による発表
事前、事後学習ポイント	他の受講生の発表についても自分の意見をまとめ、今後の参考としてください。
詳細	これまでの講義、ディスカッションから考えたビジネスモデルの発表をしていただきます。
第 8 講	
概要	受講生による発表の講評と先行事例紹介
事前、事後学習ポイント	講義に参加できず、発表ができなかった場合は、自らのビジネスモデルをレポートとして提出していただきます。
詳細	すでに実装されている地域包括ケアモデル、新規ビジネスなどを紹介し、現状と課題、可能性などについて情報提供を行います
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	医療・介護制度改革へ向けた病院経営戦略　石井富美著　出版社：日本医療企画　ISBN978-4-86439-607-3
参考文献・参考 URL /Reference List	内閣府、経文済産業省、厚生労働省などのホームページから下記のキーワードの資料を参考献とします。講義の中でも最新情報を適宜紹介していきます。 ・地域包括ケアシステム　・次世代ヘルスケア産業協議会 ・認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）・保健医療２０３５ ・未来投資戦略　・次世代医療基盤法 ・2040 年を展望した医療提供体制 ・人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	ビジネスモデル発表（30%）、ディスカッションへの参加(20%)、各回のレポート（30%）授業への参加(20%) となるように重み付けをして、満点が１００点になるように合計得点を算出する。
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	上記合計得点で９０点以上で、持続可能なビジネスモデルを構築できる
評価： A（89～80 点）	上記合計得点で８０点以上で、持続可能なビジネスモデルを構築できる
評価： B（79～70 点）	上記合計得点で７０点以上で、地域包括ケアシステムでの医療介護の役割を理解できる
評価： C（69～60 点）	上記合計得点で６０点以上で、地域包括ケアシステムを理解できる
評価： F（59 点～）	上記合計得点で５９点以下
留意点 /Additional Information	各回のグループディスカッションでは積極的に参加、発言してください。講義の中でビジネスモデル発表ができなかった場合、レポートの提出により採点を行いますが、配分は 20%となります。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	アジアビジネス戦略とグローバル共創		
サブタイトル/Sub Title	“アジアの世紀”に勝ち抜く経営を探る		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Business Strategy in Asia(ASEAN)and Global Knowledge Synthesizing		
教員/Instructor	佐藤勝彦	E-mail	satou-k@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	アジアビジネス戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

2015 年 ASEAN 経済共同体が発足し、中国の発展とともに 21 世紀は”アジアの世紀“といわれている。
日本企業が経済のグローバル化、ますます進むデジタル化の中でアジアとりわけ ASEAN でどう存在感を示していくか、ASEAN の歴史や経済発展を睨みながらグローバル知の共創を考える

到達目標/Course Goals

ASEAN の経済発展の歴史や現状と課題を整理するとともに、これから日本の企業のグローバル化とは何かを知識創造視点で捉え、グローバルビジネスリーダーとして DP1:「知識と理解」を修得する

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	課題図書や関連する図書・記事研究 毎回小レポートを作成すること（最低 2 時間程度）

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	経済活動のグローバル化と企業経営
事前、事後学習ポイント	課題図書：杉山伸也著『グローバル経済史入門』を読んでおくこと 簡単なレポート提出を課します
詳細	18 世紀半ばの産業革命以降現在までの経済のグローバル化の流れと現状および 1990 年初頭から進展した”グローバリゼーション“とは何か？を整理する
第 2 講	
概要	ASEAN 経済の歴史と現状と課題
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します ASEAN 諸国から関心のある国を選び、日本とその国の経済発展についてレポートを作成し、講義内で順次プレゼンテーションしていただきます（第 3 講以降）
詳細	ASEAN の諸国は経済のグローバル化の中でどう生き抜いてきたか？ また日本（日本企業）はどう関わりあってきたか？
第 3 講	
概要	日本企業のグローバル化と ASEAN
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します 参考図書：野中郁次郎・徳岡晃一郎著『世界の知で創る』
詳細	日本の自動車産業を例にそのグローバル化展開を考える。 またその中で ASEAN にどう進出したか？
第 4 講	
概要	日本のモノつくりノウハウはアジアの発展に寄与できるか？
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します
詳細	クロス講義：柿内幸夫客員教授　「日本のモノつくり」 日本のお家芸の“モノつくり”は ASEAN の発展に寄与するか議論を深める
第 5 講	
概要	グローバル組織運営と知の共創、人材育成
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します
詳細	グローバル経営の中心となる組織運営と人材育成について実例も紹介しながら学ぶ
第 6 講	
概要	グローバルビジネスリーダーシップとコミュニケーション
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します
詳細	グローバル経営でのリーダーの役割及びリーダーのコミュニケーション力について real story を交え理解を深める

第 7 講	
概要	受講者レポートの発表とディスカッション
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します
詳細	事前課題であった個人別 ASEAN 諸国経済研究発表とディスカッションを通して ASEAN の共通課題を探る
第 8 講	
概要	まとめ
事前、事後学習ポイント	これまでの講義、ディスカッションでの疑問などを整理しておくこと
詳細	これまでの講座での疑問に関する発展的ディスカッション
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	杉山伸也著『グローバル経済史入門』 進藤榮一著『アジアの世紀』
参考文献・参考 URL /Reference List	岩崎育夫著『入門　東南アジア近現代史』 野中郁次郎・徳岡晃一郎著『世界の知で創る』
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率 25%、クラスでの積極的な発言とその内容 25%、プレゼンテーション 25%、レポート 25%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	高い出席率でクラスでの発言が積極的でしかもその内容がクラスをリードしている。 レポート・プレゼンが独自性もあり内容が非常に優れている
評価： A（89～80 点）	高い出席率でクラスでの発言が積極的で、レポート・プレゼンが優れている
評価： B（79～70 点）	出席率が良く、クラスでの発言はあるが、その内容がやや限定的。 レポート・プレゼンが良い
評価： C（69～60 点）	出席率クラスでの発言が限定的。レポート・プレゼンが今一つ
評価： F（59 点～）	どの項目も低く、授業内容に理解も薄い
留意点 /Additional Information	講義内容は履修者数や履修生の要望などを考慮し、変えることもあります。 レポートは提出後、授業などで個別にフィードバックいたします。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	世界潮流と企業戦略		
サブタイトル/Sub Title	-時代認識に基づくアジア戦略と組織イノベーション-		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Global Trends and Corporate Strategy		
教員/Instructor	金　美徳	E-mail	kim-m@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	アジアビジネス戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

寺島実郎学長は、「経営とは、時代認識だ」と述べている。成功した多くの経営者は、「時代が良かった」「時代が味方した」、「時代が追い風となった」、「時代に欠落したことを補っただけ」などと要因分析している。したがって「新しい時代を創る志を持つ」、「時代と向き合う」「時代と戦う」ことが、大切である。

本講義は、激動する国際情勢、躍動するアジア経済、グローバルヒストリーなどの考察を通じて、時代認識を深めると共に、リベラルアーツ(国際教養)を身に付ける。また、これからの日本企業のアジア戦略、アジアビジネス、インバウンドビジネス、組織イノベーション、グローバル人材育成の在り方を考察する。

到達目標/Course Goals

21 世紀のアジアは、巨大な市場規模や豊富な天然資源など高い経済的潜在性を背景に、世界経済を牽引する。アジア開発銀行(ADB)によるとアジア GDP は、世界 GDP に占める割合が 2030 年代には 50%を超えると予測されている。まさしく「アジア経済＝世界経済」、「リバース・イノベーション(先進国でなく、アジア新興国の製品やビジネスモデルがグローバルビジネスを牽引)」の時代である。日本は、すでに対アジア貿易が総貿易の 50%、対アジア・ユーラシア貿易は 74%にも達する。

したがって日本企業は、①いかにアジア・ユーラシアダイナミズムを中心とした世界経済の構造変化と国際秩序の再編など時代の変化に対応するか、②いかにアジア・新興国市場で販路を開拓するか、③いかにアジアのヒト・モノ・カネ・情報やインバウンド需要を取り込むかが、切迫した経営課題となっている。

本講義では、世界潮流やアジア・ユーラシアダイナミズムを俯瞰してグランドデザインを構想し、グローバル戦略を描く地政学的知(ゲオ ポリティカルな視点)を養う。また、日本企業の課題や履修者の職場の課題について、組織イノベーション、グローバル人材育成、インバウンド戦略、アジア・新興国ビジネスモデルなどの観点からその解決策を考える。

この教育目標を実現することにより、ディプロマポリシー(DP：学位授与方針)「深い時代認識と世界認識に基づいて、高い志を育み、新しい時代での事業機会、社会構想機会を見極める実践的教養を習得して、イノベーションを提起できる」の実質化を目指す。とりわけ DP1:「知識と理解」と DP5:「志」の達成を図る。

授業形態 /Form of Class	講義、双方向、プレゼンテーション、ディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：各テーマに関する文献や教科書・指定図書などを通読する(2 時間程度)。 事後学習：次回授業時に報告するアジア情報の準備。最終レポートのテーマ設定や作成に着手する(2 時間程度)。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	世界潮流とアジア・ユーラシアダイナミズム
事前、事後学習ポイント	『これからの日中韓経済学』を通読する。
詳細	ガイダンス。各講義の最初にアジアに関するビジネス・時事・問題意識を簡単に報告して頂くため事前調査を行うこと。報告内容をもってディスカッションも行う。
第 2 講	
概要	アジアパラドックスとグローバルビジネス
事前、事後学習ポイント	『これからの日中韓経済学』を通読する。
詳細	アジア・ユーラシアダイナミズムとは何か、その実態を解説する。 また、アジア・ユーラシアダイナミズム時代といかに向き合うかをディスカッションする。
第 3 講	
概要	日本企業の現状と課題
事前、事後学習ポイント	『これからの日中韓経済学』を通読する。
詳細	アジア企業を鏡にして、日本企業の等身大の姿を映し出す。そして日本企業の強みと弱みを再検討する。 日本企業の今後の経営課題や経営戦略についてディスカッションする。

第 4 講	
概要	地政学的知を活かしたグローバル戦略①
事前、事後学習ポイント	『これからの日中韓経済学』を通読する。
詳細	ビジネスパーソンや経営者が、平和に敏感でなければならい理由について解説する。 また、ビジネス教養やグローバル組織・人材育成について考える。 日本の立ち位置や平和についてディスカッションする。
第 5 講	
概要	地政学的知を活かしたグローバル戦略②
事前、事後学習ポイント	『これからの日中韓経済学』を通読する。
詳細	豊富なエネルギー資源やユーラシア大陸を繋ぐ国際物流拠点など北東アジア経済圏の地政学的優位性について解説する。 日本企業の地政学的戦略についてディスカッションする。
第 6 講	
概要	アジア・新興国ビジネスモデル
事前、事後学習ポイント	『これからの日中韓経済学』を通読する。
詳細	日本・中国・韓国・台湾企業の強みや知恵を生かしたビジネスモデルを考える。 今後のアジアビジネスやインバウンド戦略についてディスカッションする。
第 7 講	
概要	戦略レポートのプレゼンテーション①
事前、事後学習ポイント	戦略レポートのプレゼンテーションの準備をする。
詳細	戦略レポートのテーマは、自社もしくは関心企業のアジア・新興国戦略や独自のグローバルビジネスモデルとする。または、履修者の職場の問題・課題について組織イノベーション、グローバル組織・人材育成、インバウンド戦略などの観点からその解決策を提案すること。具体的に問題や課題を発見し、解決策(改善・改革・革新・事業構想)を提案すること。
第 8 講	
概要	戦略レポートのプレゼンテーション②および総括
事前、事後学習ポイント	戦略レポートのプレゼンテーションの準備をする。
詳細	戦略レポートのテーマは、自社もしくは関心企業のアジア・新興国戦略や独自のグローバルビジネスモデルとする。または、履修者の職場の問題・課題について組織イノベーション、グローバル組織・人材育成、インバウンド戦略などの観点からその解決策を提案すること。具体的に問題や課題を発見し、解決策(改善・改革・革新・事業構想)を提案すること。
教科書 /Textbook	『これからの日中韓経済学』(編著：岡山大/田口雅弘、多摩大/金美徳、えにし書房、2018 年)
指定図書 /Course Readings	①『なぜ韓国企業は世界で勝てるのか-新興国ビジネス最前線-』(金美徳、PHP 新書、2012 年) ②『日本企業没落の真実-日本再浮上 27 核心-』(金美徳、中経出版、2013 年) ③『図解 韓国四大財閥早わかり』(金美徳、中経出版、2012 年) ④『中東・エネルギー・地政学』(寺島実郎、東洋経済新報社、2016 年) ⑤『ユニオンジャックの矢-大英帝国のネットワーク戦略-』(寺島実郎、NHK 出版、2017)
参考文献・参考 URL /Reference List	①『世界を知る力』(寺島実郎、PHP 新書、2010 年) ②『世界を知る力 日本創生編』(寺島実郎、PHP 新書、2011 年) ③『何のために働くのか 自分を創る生き方』(寺島実郎、文藝春秋、2013 年)

評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	議論参画度 70%、最終発表(戦略レポート)30%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：A＋（100～90 点）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、90 点以上の場合。
評価：A（89～80 点）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、80～89 点の場合。
評価：B（79～70 点）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、70～79 点の場合。
評価：C（69～60 点）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、60～69 点の場合。
評価：F（59 点～）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、59 点以下の場合。
留意点 /Additional Information	①戦略レポートの最終発表は、5 つの項目に沿って相互評価を行う。 ②戦略レポートは、最終発表後に担当教員にメールで提出すること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	日本企業の中国ビジネス		
サブタイトル/Sub Title	～インバウンド、越境 EC、貿易衝突、5G や EV への突入など、これからの中国市場との付き合い方を一緒に考えて学ぼう		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Case Study of Japanese business in China		
教員/Instructor	徐 向東	E-mail	xu@cm-rc.com
科目群/Course Classification	アジアビジネス戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

米中貿易衝突の行き先が不明瞭なまま、世界は新しい年に入っている。インバウンドの拡大によって日本人が身近で中国人の消費力の影響を感じている。5G や EV など次の時代に向ける中国企業のプレゼンスが高まっている。この授業では、現場の最新情報をもとにこれからの中国ビジネスの戦略と実践を学習する。

到達目標/Course Goals

DP1「知識と理解（最新ビジネス環境への理解）」およびDP2「思考と判断（実践知考具をもとにした知的課題解決力）」を達成するために、中国ビジネスの基礎を身に付けながら、具体的な最新事例を通して、新興市場に対する知の再武装、そして新興市場に取り組む問題解決力を養い、情報収集から、情報分析、分析結果の発表を行う力を習得する。

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、プレゼンテーション、グループワーク	学外学習 /Off-Campus Learning	なし

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：事前に関係資料を検索・整理（2 時間程度） 事後学習：毎授業にレポートを提出すること（2 時間程度）

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	「正しいポジション」をつかむ～中国市場の基礎を理解する
事前、事後学習ポイント	人口規模、行政区分、収入水準などの基礎知識
詳細	日本と大きく異なる中国のような新興市場の基本事情を理解するうえで、新しい新興市場におけるポジショニング戦略の基本知識を学ぶ
第 2 講	
概要	ターゲットのニーズをきちんと押さえる～中国のような新興市場の「ニーズ」を理解する
事前、事後学習ポイント	日本とは文化も生活習慣も社会事情も違う国や地域の消費者ニーズのつかめ方を学ぶ
詳細	消費者ニーズをつかむための定量、定性分析や観察のノウハウを学ぶ
第 3 講	
概要	正しいチャネルの展開～中国など新興国の流通を理解する
事前、事後学習ポイント	伝統チャネルから EC チャネルへの進行や、ビッグデーター、キャッシュレスの進化の激しい中国の事例から、新しい「モノ・カネ」流通の仕組みを学ぶ。
詳細	日本の先に進んだスマホ決済や越境 EC など中国の新しい金融や流通事情を学ぶ
第 4 講	
概要	新興国への正しい情報発信やコミュニケーション手法
事前、事後学習ポイント	ネット時代における口コミなどの情報拡散の施策を学ぶ、特に日本とは文化やメディア事情が大きく違う中国のような新興市場の情報拡散のコツを理解する
詳細	フェイスブックや Twitter ではなく、微博、微信など中国の SNS 事情を学ぶ
第 5 講	
概要	体験など販促活動の展開
事前、事後学習ポイント	日本商品を理解するための消費者体験、ダブルイレブンなど中国の重要な販促事情を理解する
詳細	消費者体験、ダブルイレブンなど
第 6 講	
概要	ビジネスモデルの構築～日本と海外の相違を理解する
事前、事後学習ポイント	花王、資生堂、ユニクロ、無印良品等々、中国市場に取り込む企業のビジネスモデルを検証
詳細	日本以外の市場を取り込む新しいビジネスモデルの構築を学ぶ

第 7 講	
概要	4 倍速のスピードの行動力を身に着ける
事前、事後学習ポイント	海外市場に勝つためのスピード感、素早く正しい判断を下すための肌感覚の培い方を学ぶ
詳細	行動に移す実践力を学ぶ
第 8 講	
概要	総括
事前、事後学習ポイント	授業から開始後の半年の対中ビジネスの新たな状況と今後の変化の傾向
詳細	受講生のプレゼンテーションやレポートから見えてきたこれからの改善や学習ポイントのフィードバックなど
教科書 /Textbook	『「爆買い」中国人に売る方法』（日本経済新聞出版社 2015）
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	『中国人にネットで売る～2 つの“ネット”の正しい使い方、つくり方』（東洋経済新報社 2011）、『中国人に売る時代！巨大市場開拓の成功の法則』（日本経済新聞出版社 2009）
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率　／講義議論参画度　／最終レポート　3 点の総合評価。そのうち、出席(30%)、授業内での議論・グループワーク参加(30%)、プレゼン内容(40%)の構成で評価を行う。
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	毎回積極的に議論に参加し、小レポート（つまりゼミ発表）は少なくとも 1 回やっていて、プレゼン内容も優秀であること。
評価： A（89～80 点）	毎回積極的に議論に参加し、小レポート（つまりゼミ発表）は少なくとも 1 回やっていて、プレゼン内容はしっかり準備していること。
評価： B（79～70 点）	毎回積極的に議論に参加し、小レポート（つまりゼミ発表）は少なくとも 1 回やっていること。プレゼンには具体的な内容があること。
評価： C（69～60 点）	毎回積極的に議論に参加し、小レポート（つまりゼミ発表）は少なくとも 1 回やっていること。
評価： F（59 点～）	議論に参加せず、小レポートもレポートといえるほどの内容としてできていない。
留意点 /Additional Information	講義内でフィードバックやメールでフィードバックを行う

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	Fall semester
科目名/Course Title	Business in Globalized India		
サブタイトル/Sub Title	A young, vibrant, progressive and economically strong India provides a lot to learn from in the contexts of global business, leadership and innovation.		
英文科目名/Course Title(Eng.)			
教員/Instructor	Aniruddha Mallik	E-mail	aniruddha@ageraconsulting.com
科目群/Course Classification	Contemporary Business Practices / Asian Business Strategy	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

Through my sessions, I aim to present various aspects of global business, leadership, innovation and management in India and the lessons that we can learn from globally successful Indian leaders and entrepreneurs.

到達目標/Course Goals

To achieve DP1 of the Diploma Policy – Insight into the latest business environment, we shall explore various aspects of global business, management, leadership, entrepreneurship and innovation, keeping a focus on India and the global perspective.
India is an excellent example of a rapidly globalizing world, where traditional superpowers are being pushed back and emerging economies are becoming more and more powerful. There's a lot to learn from how Indian business leaders have evolved new and more globally successful business models and management strategies to ensure that their companies stay ahead of the competition.

授業形態 /Form of Class	Interactive classroom sessions (English Only)	学外学習 /Off-Campus Learning	None
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	None		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	Introduction to the Fundamentals of India
事前、事後学習ポイント	Prior learning required: None Key Learnings from the class: Country profile, common misconceptions, advantage India
詳細	Introduction to the Fundamentals of India: Country profile, common misconceptions, advantage India
第 2 講	
概要	Advantage India (Part 1)
事前、事後学習ポイント	Prior learning required: None Key Learnings from the class: What makes Indian business leaders globally successful? What gives them the edge over others as they expand beyond India and go global?
詳細	Advantage India (Part 1): What makes Indian business leaders globally successful? What gives them the edge over others as they expand beyond India and go global?
第 3 講	
概要	Advantage India (Part 2)
事前、事後学習ポイント	Prior learning required: None Key Learnings from the class: Showcase of successful Indian professionals who have become global business leaders. A look at their profiles, careers and accomplishments and what we can learn from them.
詳細	Advantage India (Part 2): Showcase of successful Indian professionals who have become global business leaders. A look at their profiles, careers and accomplishments and what we can learn from them.
第 4 講	
概要	Corporate India
事前、事後学習ポイント	Prior learning required: None Key Learnings from the class: The modern corporate world in India and what are the expectations of companies from their employees; the keys to success in a rapidly growing and extremely competitive environment
詳細	Corporate India: Exploring the modern corporate world in India and what are the expectations of companies from their employees; the keys to success in a rapidly growing and extremely competitive environment

第 5 講	
概要	Innovation in India: “JUGAAD”
事前、事後学習ポイント	Prior learning required: None Key Learnings from the class: “Frugal Innovation” is a concept that India has mastered and it’s commonly called as “JUGAAD”. From space to daily life, innovation in India is happening everywhere.
詳細	“Frugal Innovation” is a concept that India has mastered, and it’s commonly called as “JUGAAD”. From space to daily life, innovation in India is happening everywhere.
第 6 講	
概要	Entrepreneurship in India
事前、事後学習ポイント	Prior learning required: None Key Learnings from the class: Various topics related to entrepreneurship in India, covering business both small and big, looking at both traditional and modern entrepreneurial case studies and success stories.
詳細	Entrepreneurship in India: Exploring various topics related to entrepreneurship in India, covering business both small and big, looking at both traditional and modern entrepreneurial case studies and success stories.
第 7 講	
概要	Think, Organize, Present... Make an Impact
事前、事後学習ポイント	Prior learning required: None Key Learnings from the class: Develop your thought process, compile and consolidate key points, develop the skills to present your points of view with confidence and high impact
詳細	Think, Organize, Present... Make an Impact: Develop your thought process, compile and consolidate key points, develop the skills to present your points of view with confidence and high impact
第 8 講	
概要	Presentation of Assignment by Students
事前、事後学習ポイント	None
詳細	Students make a presentation based on the assignment given earlier. Also, we do a wrap-up of our course with key points and discussions.
教科書 /Textbook	None
指定図書 /Course Readings	None
参考文献・参考 URL /Reference List	None
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	Attendance, Class Participation, Presentation Assignments
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	Participation in the classes and quality of assignment presentations were excellent. They were able to effectively analyze course contents and provide ideas, comments and useful insight.
評価： A（89～80 点）	Participation in the classes and quality of assignment presentations were excellent.
評価： B（79～70 点）	Participation in the classes and quality of assignment presentations were good. They were able to analyze course contents.
評価： C（69～60 点）	Participation in the classes and quality of assignment presentations were average.
評価： F（59 点～）	Participation in the classes and quality of assignment presentations were inadequate.
留意点 /Additional Information	English Only

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	日中企業比較論		
サブタイトル/Sub Title	中国マクロ経済とビジネスモデルのあり方に関する分析		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Chinese development model and theory		
教員/Instructor	柯　隆	E-mail	ke@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	アジアビジネス戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

世界の工場と世界の市場の中国の開発モデルと多国籍企業の中国ビジネスモデルを詳しく考察し、それに内包されている構造問題とリスクを理論的に分析する。アプローチの仕方は、制度分析、データに基づく実証分析に加え、ケーススタディを行うとともに、中国経済、中国社会と中国政治を多面的に捉えることにする

到達目標/Course Goals

DP1:「知識と理解」に沿って、グローバルビジネスのあり方を理解しビジネスモデルを構築することを目標とする。目的論だけでなく、方法論的に、中国経済、中国社会と中国政治の内面を独自で考察することができることを目指す

授業形態 /Form of Class	グループワーク・ディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	あり
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：課題予習、reading list に基づく準備 事後学習：レポートの提出など（合計 2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講 第 1 講～第 7 講は各 180 分 第 8 講は 90 分でも可

第 1 講	
概要	中国マクロ経済の歴史的捉え方
事前、事後学習ポイント	関連の参考書を予習
詳細	中国の経済史、産業史、「改革・開放」以降の歩みを時系列で整理する
第 2 講	
概要	中国経済の開発モデル
事前、事後学習ポイント	Reading list を事前に通知し、それに基づいて予習すること
詳細	東南アジア諸国の開発モデルと比較し、中国経済の開発モデルの特徴を明らかにする
第 3 講	
概要	中国の人口動態と社会保障制度
事前、事後学習ポイント	Reading list を事前に通知し、それに基づいて予習すること
詳細	一人っ子政策、比較優位戦略、少子高齢化、社会保障制度の未整備などさまざまな課題を明らかにする
第 4 講	
概要	中国の自動車産業のキャッチアップと課題
事前、事後学習ポイント	Reading list を事前に通知し、それに基づいて予習すること
詳細	中国産業史と自動車産業の育成政策と現状についてディスカッション
第 5 講	
概要	企業見学・中国と関係の深いスマートファクトリーを見学
事前、事後学習ポイント	関連資料を事前に配布し予習する
詳細	企業の中国ビジネスの取り組み方を考察する
第 6 講	
概要	中国の金融システム
事前、事後学習ポイント	関連書籍を事前に予習する
詳細	中国金融制度の変遷、人民元の国際化、中国の仮想通貨、中国金融制度の課題を明らかにする
第 7 講	
概要	「一帯一路」プロジェクトとグローバルサプライチェーンの再形成
事前、事後学習ポイント	関連の課題を事前に予習する
詳細	「一帯一路」プロジェクトの背景と狙い、グローバルサプライチェーンのあり方と米中対立の行方を考察する

第 8 講	
概要	日本企業の中国ビジネス戦略のあり方
事前、事後学習ポイント	主要産業の中国進出について先行研究をサーベイ
詳細	家電、機械、自動車、半導体など日本企業の中国進出と対中ビジネス戦略のあり方をグループディスカッションを行う
教科書 /Textbook	適宜配布
指定図書 /Course Readings	別途、講義中配布
参考文献・参考 URL /Reference List	別途、講義中配布
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	レポート（40%）、ディスカッション（30%）、プレゼンテーション（30%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	課題設定と解決法の提示、先行研究のサーベイが非常に優れており、独自性がある。
評価： A（89～80 点）	課題設定と解決法の提示、先行研究のサーベイが優れている。
評価： B（79～70 点）	課題設定と論点整理、先行研究のサーベイができている。
評価： C（69～60 点）	課題設定と取り組み方の提示、先行研究のサーベイができている。
評価： F（59 点～）	課題設定と先行研究のサーベイが不十分。
留意点 /Additional Information	自ら課題を見つけ、それを解決する方法を身につけること

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	非営利法人のファイナンス		
サブタイトル/Sub Title	営利法人である株式会社以外の非営利法人（NPO、学校法人、財団法人、医療法人等）の資金調達方法と、クラウドファンディングなど新たな資金調達手法の研究		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Finance for Not-for-Profit Organizations		
教員/Instructor	堀内勉	E-mail	t-horiuchi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ソーシャルインパクトビジネス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

営利法人である株式会社のコーポレートファイナンスは、既に世界的に確立された学問分野であり、世界共通の物差しがあり、教科書も多数発行されている。他方、NPO に代表される非営利法人のファイナンス（資金調達）手法についてはいまだ発展途上で、寄付金や公的補助金やクラウドファンディングなども含めて、今後、体系立てて研究していく必要がある。開講 5 年目である本講義では、こうした新しいファイナンス分野である、「非営利法人のファイナンス」について、受講生自らがまず問題意識を持ち、その上で体系立てて理解し、実際の資金調達ができるようなレベルにまで到達することを目的とする。

2018 年に設立された多摩大学社会的投資研究所が開催するインパクトサロンへの参加を推奨すると共に、研究所の連携機関（ルール戦略形成研究所、社会変革推進財団、新経済連盟、ESG 推進コンソーシアム、Asian Venture Philanthropy Network）などのコンファレンスに、日程調整の上、クラス全体で参加することも検討。また、本講座修了生には、研究所の客員研究員として研究活動を継続することも推奨している。

到達目標/Course Goals

非営利法人の資金調達手段の特徴を理解し、ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」を達成するために、自らが NPO などの非営利法人を立ち上げた時に、実際の資金調達ができるようになることに加え、「問題解決のためのモデル」作りができる「実践知」のレベルにまで到達することを目標とする。その前提として、ソーシャルビジネスの分野において、DP1:「知識と理解」を達成するために、国連 SDGs や ESG の最新動向などを理解した上で、社会を取り巻く環境変化とこれからの進むべき方向性について、自ら理解し考える力を習得する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	外部コンファレンスへの参加を検討

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：前回講義内容の整理と指定図書の熟読（2 時間程度）、アサインメントを受けた講義について、事前学習した内容をクラスで発表（一人一回担当） 事後学習：最終二回の講義で、各自で考える社会的事業についてレポートを提出（5 時間程度）

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	非営利法人の資金調達の概要と社会的投資の新潮流
事前、事後学習ポイント	非営利法人の資金調達の枠組みについてのソーシャルファイナンスの観点からの概観
詳細	1. 受講生の自己紹介と本講義受講に当たっての問題意識の説明、教員の自己紹介とオリエンテーション　2. 本講座講師による社会的投資などのソーシャルファイナンスの講義（資料は当日配布）　3. 二回目以降の講義の進め方、受講生のプレゼンテーション、提出レポートの作成方法などについてのすり合わせ 宿題：指定図書をよく読んでくること。
第 2 講	
概要	地域金融と公的支援制度（政策金融）
事前、事後学習ポイント	非営利法人への地域金融機関の融資スタンスと公的支援の枠組みの理解
詳細	1. 受講生の自己紹介と本講義受講に当たっての問題意識の説明、教員の自己紹介とオリエンテーション　2. 事前に割り当てられた担当者による、当日ゲストスピーカーの仕事についての事前調査・質問発表　3. ゲストスピーカー： 多摩信用金庫/日本政策金融公庫（仮） 宿題：前回の講義内容をよく復習してくること。
第 3 講	
概要	公的支援制度（財団助成）
事前、事後学習ポイント	非営利法人の資金調達の公的支援の枠組みの理解
詳細	1. 事前に割り当てられた担当者による、当日ゲストスピーカーの仕事についての事前調査・質問発表　2. ゲストスピーカー： 日本財団/社会変革推進財団（仮） 宿題：前回の講義内容をよく復習してくること。

第 4 講	
概要	資金調達の手法①（寄附）
事前、事後学習ポイント	非営利法人の資金調達（寄附）の手法の理解
詳細	1. 事前に割り当てられた担当者による、当日ゲストスピーカーの仕事についての事前調査・質問発表　2. ゲストスピーカー： ファンドレイジング協会（仮） 宿題：前回の講義内容をよく復習してくること。
第 5 講	
概要	資金調達の手法②（クラウドファンディング）
事前、事後学習ポイント	非営利法人の資金調達（クラウドファンディング）の手法の理解
詳細	1. 事前に割り当てられた担当者による、当日ゲストスピーカーの仕事についての事前調査・質問発表　2. ゲストスピーカー： Readyfor（仮） 宿題：前回の講義内容をよく復習してくること。
第 6 講	
概要	資金調達の手法③（ソーシャルベンチャーフィランソロピー）
事前、事後学習ポイント	非営利法人の資金調達（ソーシャルベンチャーフィランソロピー）の手法の理解
詳細	1. 事前に割り当てられた担当者による、当日ゲストスピーカーの仕事についての事前調査・質問発表　2. ゲストスピーカー： ソーシャル・ベンチャー・フィランソロピー（仮） 宿題：前回の講義内容をよく復習してくること。
第 7 講	
概要	資金調達の方法④（社会的投資ファンド）
事前、事後学習ポイント	非営利法人の資金調達（社会投資ファンド）の手法の理解
詳細	1. 事前に割り当てられた担当者による、当日ゲストスピーカーの仕事についての事前調査・質問発表　2. ゲストスピーカー： KIBOW 社会投資（仮） 宿題：前回の講義内容をよく復習してくること。
第 8 講	
概要	事業構想発表会
事前、事後学習ポイント	具体的事業構想に基づく講義全体を通したディスカッション
詳細	1. 受講生各人が考えた社会事業に関する事業計画の説明と金融機関融資実務担当者による講評（その場でのフィードバック） 宿題：前回の講義内容をよく復習してくること。
教科書 /Textbook	講義の都度配布
指定図書 /Course Readings	『日本における社会的インパクト投資の現状 2019』（G8 社会的インパクト投資タスクフォース国内諮問委員会） 『社会的投資市場形成に向けたロードマップ』（日本ファンドレイジング協会 伊藤健）
参考文献・参考 URL /Reference List	『ソーシャルファイナンスの教科書』（生産性出版 河口真理子） 『非営利団体の資金調達ハンドブック』（時事通信社 徳永洋子）
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席(30%)、授業内での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容(30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	講義内容を理解し、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が良い。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が普通。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が一応の水準を満たしている。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	新しい事業分野であり、教科書的な回答は存在しないので、ディスカッションに積極的に参加して自らの力で考えること。多摩大学社会的投資研究所のインパクトサロンへの出席も併用して理解をより深めることを推奨する。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	トライセクターリーダー論		
サブタイトル/Sub Title	ポスト・マネー資本主義時代のリーダーシップ・マネジメント		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Tri-Sector Leaders		
教員/Instructor	金野索一	E-mail	skonno212@gmail.com
科目群/Course Classification	ソーシャルインパクトビジネス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

トライセクターリーダーとは、政治行政・企業ビジネス・NPO の３つのセクターのすべてに通用するリーダー、あるいは、３つのセクターの枠を越えてより良き社会を実現していくリーダーである。この講義は、より多くのトライセクター・リーダーが輩出されることを目的とする。なお、このテーマは、既知のものがすぐに陳腐化してしまう高速変化が常ですので、最先端の学びのために、このシラバスの内容を一部変更して、実際の講義を行うことがありますので、了承いただければ幸いです。

到達目標/Course Goals

受講生自身の抱える課題に関して、ディプロマポリシーでの、DP5:「志」を持ち、DP2:「思考と判断」、DP3:「関心と意欲」、DP4:「表現と技能」を実践するために、上記目的に資する下記２つを到達目標とする。
１）日本社会で稀有なトライセクター・リーダーシップの発揮こそが、自身の目前の仕事、キャリア、会社、そして社会のイノベーション実現への最適な差別化要因であることを実行レベルで認識する。
・人類は、公共・企業・NPO の３つのセクターの水平ボーダレス化に直面している。言い換えれば、少子高齢化と多国籍企業台頭、IT/AI 革命に伴う国家の影響力低下・相対化である。このポスト・マネー資本主義＝国民国家と利益至上企業の影響力低下社会において、もはやトライセクターリーダーこそが、企業、政治、NPO 他あらゆる組織で必然であることについての熟議する。
２）トライセクター・リーダーとしての実践の開始
・トライセクター・リーダーへの具体的プランを各自作成し、実践につなげる
・国内外の先駆的トライセクターリーダー&プロジェクトのケースをベンチマーク・指針とし、実践につなげる。

授業形態 /Form of Class	講義、ディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容の整理と指定文献の熟読１時間程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	トライセクターリーダーの必然１：３つのセクターの水平ボーダレス化
事前、事後学習ポイント	・ポスト・マネー資本主義とは　・３つのセクターボーダレス化の根本原因は少子高齢化
詳細	・全ての消費社会が進んだ国において、少子高齢化を逃れられないことから到来しているポスト・マネー資本主義社会への理解と、公共・企業・NPO の３つのセクターの水平ボーダレス化を学ぶとともに、ディスカッションで熟議を進める。
第 2 講	
概要	トライセクター・リーダーの必然 2：IT 革命と AI 革命
事前、事後学習ポイント	・IT・AI は社会や組織の透明化・双方向化推進ツールである
詳細	・次の点について、講義とディスカッションを進める。 １）IT/AI 革命によって、中央集権的大組織（国家、伝統的大企業）は弱体化し、 DAO （ Decentralized Autonomous Organization、分散型自律組織）が必然となる ２）IT・AI こそ、トライセクター・リーダーに相応しいイノベーション・ツールである
第 3 講	
概要	トライセクターリーダーの必然 3：国民国家と多国籍企業
事前、事後学習ポイント	・国民国家の影響力低下によるグローバル組織とローカル組織の２極化
詳細	・次の点について、講義とディスカッションを進める。 １）無限責任・国家と有限責任・企業とのギャップ。２）国民国家の規模をしのぐ多国籍・無国籍大企業が数多く台頭した社会における社会機能のギャップ。３）ギャップこそ新規事業、ベンチャーの起業、社会起業の好機である
第 4 講	
概要	ジャパニーズ・トライセクターリーダーの必然 4：戦略的日本人
事前、事後学習ポイント	・唯一無二の日本人４つの中立ポジションは、最強の戦略を可能にする

詳細	・次の点について、講義とディスカッションを進める。 1）日本人の４つの中立ポジション「宗教、人種、軍事、経済」と最適戦略とは 2）日本人は唯一無二のポジションを活かせば、世界のトライセクターリーダーに相応しい
第 5 講	
概要	トライセクターリーダー・プロジェクト　ケーススタディ
事前、事後学習ポイント	実際のトライセクターリーダー・プロジェクトのケースを学び、自分の現在地点と目指すべき到達地点を我究する
詳細	実際のトライセクターリーダー・プロジェクトのケースを、講義、ディスカッション、グループワークを通じて学ぶ。
第 6 講	
概要	実在のトライセクターリーダー・プロジェクトをロールモデルとする
事前、事後学習ポイント	実際のトライセクターリーダー・プロジェクトを自身のリサーチ・プレゼンテーションを通じて学び、自分の現在地点と目指すべき到達地点を我究する
詳細	・下記について、講義、プレゼンテーション、ディスカッション、グループワークを進める。 1）実在するトライセクターリーダー・プロジェクトをリサーチ、ベンチマークし、プレゼンテーションを行う 2）第 5 講までの理解を元に、自身の解決すべき問題、目指すべきテーマの明確化への仮説・検証の取り組み方を習得する ・未来がどうなるかではなく、自分たちが未来を創る。Cross-Disciplinary こそトライセクターリーダー ・ディスカッションによりあぶりだされた、自身の解決すべき問題への取り組み ・自身の抱える問題とその真因、解決策の策定、他メンバーへの共有とフィードバック
第 7 講	
概要	ゲスト講師・先輩トライセクター・リーダーの実践を講義・討論で学ぶ
事前、事後学習ポイント	社会・ビジネスの新たな地平を拓く、先輩トライセクター・リーダー“仕事の流儀“
詳細	先輩トライセクター・リーダーの「原体験」「力の源泉」「実践の現場」「未来への戦略」等を講義とディスカッションで学ぶ
第 8 講	
概要	トライセクター・リーダー実践計画　最終プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	実践計画の教員・他メンバーへの共有とフィードバック、自身の振り返り
詳細	各自作成した実践計画最終プレゼンテーションとディカッション・グループワーク トライセクター・リーダーシップ・ジャーニー出発への決意表明
教科書 /Textbook	なし。
指定図書 /Course Readings	『未来の選択～僕らの将来は、政策でどう変わる？』(金野索一 著 /ディスカヴァー21 社)
参考文献・参考 URL /Reference List	WEB 日経ビジネス・カンパネラ連載『トライセクター・リーダーの時代』(金野索一著/日経 BP 社) http://business.nikkeibp.co.jp/atclcmp/15/071700001/
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	評価方法 出席: ディスカッション: リサーチプレゼンテーション: 実践計画＝25: 20: 25: 30
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	トライセクター・リーダーを理解し、授業内でのプレゼン＆議論参加、実践計画内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	トライセクター・リーダーを理解し、授業内でのプレゼン＆議論参加、実践計画内容が良い。
評価： B（79～70 点）	トライセクター・リーダーを理解し、授業内でのプレゼン＆議論参加、実践計画内容が普通。
評価： C（69～60 点）	トライセクター・リーダーを理解し、授業内でのプレゼン＆議論参加、実践計画内容のいずれかが普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、トライセクター・リーダーの理解、授業内でのプレゼン＆議論参加、実践計画内容が不十分。
留意点 /Additional Information	・《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルがリーダー/イノベーターのキーであるので議論には積極的に参画すること ・実際の先駆的トライセクターリーダー＆プロジェクトのいずれを、自分自身のロールモデルにするかを探究する

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	SDGS(社会課題)×Tech ビジネス		
サブタイトル/Sub Title	SDGS/貧困と紛争を、Tech ビジネスで解決する		
英文科目名/Course Title(Eng.)	SDGS Tech Business		
教員/Instructor	金野索一	E-mail	skonno212@gmail.com
科目群/Course Classification	テクノロジー&ベンチャー	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

IT 革命は、人を本当に幸せにしているのか？インタネットが普及して 20 年。ロケットで人が宇宙に行き、SNS が隆盛し、人工知能や IoT(Internet of Things)が登場しても、殺し合いも飢餓も 21 世紀を迎えた今も厳然と存在しています。「人類の科学技術の多くが、軍事のため、戦争の勝利を目的に発展してきた」この悲痛な負の歴史を、根源から変えなくてはなりません。情報技術が人間の幸福に多大に貢献し得るかは、勃興する起業家の IT 産業のみならず、時代を越えた課題である SDGS 等の戦争と飢餓の根絶のために活かされてこそ、人類叡智の極みに達すると言えます。世界中が未だ道筋を見いだしていない、この深遠なるテーマに対して、グローバルビジネスと国際協力/紛争解決の最前線の知見と、先端テクノロジーの知見を結集し、飢餓と紛争がなく、SDGS17 項目が解決された世界を実現するために Tech を活かしたビジネスを探究していきます。さらに、IT を活用した社会課題解決の事業をプランニングし、アフリカをはじめとするブルーオーシャン市場や、日本市場において、日本企業が人々と Win-Win で寄り添っていく、“アンバンクド”向けビジネス、“ラスト１マイル”ビジネスとしての“ポストマネー資本主義”のビジネスモデルを確立し、それを実践する人材を輩出する場とします。また、SDGS(社会課題)×Tech ビジネスの最先端の理論と実践を往来し、企業と自分自身のソーシャルイノベーションを推進します。

到達目標/Course Goals

“イノベーションの源泉は、テクノロジーとリベラルアーツの交差点にある。”自身の抱える課題に関して、ディプロマポリシーでの、DP1:「知識と理解」、DP2:「思考と判断」、DP3:「関心と意欲」を獲得し、DP4:「表現と技能」を実践するために、上記目的に資する SGDS 全体を俯瞰し,世界の貧困・紛争の現場と“最新の IT・先端技術を理解した上で、その分析と実現性の高い SDGS ビジネス立案・提案を行える力を修得する。

授業形態/Form of Class	講義、ディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容関してのリサーチ・整理と指定文献の熟読 1 時間程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	SDGS(社会課題)×Tech ビジネス　総論
事前、事後学習ポイント	あらゆる社会課題、SDGS, 貧困・紛争撲滅に活かせるツールとしての IT、先端技術を理解
詳細	下記テーマについての講義とディスカション 1）IT 革命とは、IT 産業隆盛だけでなく、IT で人類の課題を解決してこそ、真の革命と言える。 2）「Peace Tech」とは、情報技術を核とした先端技術により、社会課題を解決し、戦争や飢餓をなくし世界平和を実現することである 3）SDGS×Tech ビジネスこそ、アメリカでもない中国でもない,日本の差別化戦略である
第 2 講	
概要	War and Poverty Case Study①：世界の貧困紛争現場
事前、事後学習ポイント	世界の貧困飢餓、紛争の原因を理解する
詳細	下記についての講義とリサーチ、プレゼンテーション、ディスカッションを進める ・ルワンダ、旧ユーゴ、シリア、モザンビーク、インド、ロヒンギャ族の紛争・貧困の原因と現状について学び理解する。また、今後の課題について論考する
第 3 講	
概要	War and Poverty Case Study②： FLEC8 分野別の世界の貧困紛争現場
事前、事後学習ポイント	世界の貧困飢餓、紛争の原因を FLEC8 分野別に理解する
詳細	下記について、講義とリサーチ、プレゼンテーション、ディスカッションを進める 1）FLEC8 分野 F：①Food/Agri , ②Finance　L：③Logistics-Tech,　E：④Education, ⑤ Environment, ⑥Energy, C: ⑦social Care , ⑧health Care 各 8 分野別に、世界の貧困飢餓、紛争の原因を理解する 2）地域別に世界の貧困飢餓、紛争の原因を理解する：北米、南米、東アジア、西アジア、欧州、アフリカ等
第 4 講	
概要	War and Poverty Case Study③： 日本の貧困

事前、事後学習ポイント	日本の貧困飢餓の原因を FLEC8 分野別に理解する
詳細	下記について、講義とリサーチ、プレゼンテーション、ディスカッションを進める 1）FLEC8 分野 F：①Food/Agri，②Finance　L：③Logistics-Tech，　E：④Education，⑥ Environment，⑥Energy，C：⑦social Care，⑧health Care 各 8 分野別に、日本の貧困飢餓の原因を理解する 2）地域別に日本の貧困飢餓、紛争の原因を理解する
第 5 講	
概要	SDGS Tech ビジネス Case Study ①： IT を活かす
事前、事後学習ポイント	IT を活かした SDGS Tech ビジネスを理解する
詳細	IT を活かした SDGS Tech ビジネスを調査研究し、SDGS Tech 事業計画づくりに活かす
第 6 講	
概要	SDGS Tech ビジネス Case Study ②： AI/先端技術を活かす
事前、事後学習ポイント	AI/先端技術をを活かした SDGS Tech ビジネスを理解する
詳細	AI/先端技術をを活かした SDGS Tech ビジネスを調査研究し、SDGS Tech 事業計画づくりに活かす
第 7 講	
概要	近未来の SDGS Tech ビジネス：破壊的先端戦略
事前、事後学習ポイント	高速進歩変化する SDGS Tech ビジネス戦略を予測理解し、実践可能なポジションを獲得する
詳細	近未来の SDGS Tech ビジネスと戦略を見通し、今後の自身・自社のアドバンテージを得るための講義とディスカッション
第 8 講	
概要	SDGS Tech ビジネス計画プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	自身・自社が特化すべき原理・戦略を明確化する
詳細	自身・自社の SDGS Tech ビジネス計画を各自プレゼンテーションし、ディカッション・グループワークを通じて教員・他メンバーへの共有とフィードバック、自身の振り返りを進める
教科書/Textbook	WEB 「Forbes Japan」連載『テックで資本主義をアップデートする』（金野索一著） https://forbesjapan.com/author/detail/1810 WEB 日経 IT プロ連載『出でよ！Peace Tech イノベーター』（金野索一著/日経 BP 社） https://tech.nikkeibp.co.jp/it/atcl/column/17/030200062/
指定図書/Course Readings	適宜、指定図書を紹介する。
参考文献・参考 URL /Reference List	WEB 日経ビジネス・カンパネラ連載『トライセクター・リーダーの時代』（金野索一著/日経 BP 社）http://business.nikkeibp.co.jp/atclcmp/15/071700001/
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席：ディスカッション：リサーチプレゼンテーション：事業計画＝25：20：25：30
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	SDGS と社会課題に精通している―分析―実現性の高い SDGS×Tech ビジネス立案を行える
評価： A（89～80 点）	SDGS と社会課題に精通している―分析―SDGS×Tech ビジネス立案を行える
評価： B（79～70 点）	SDGS と社会課題に精通している―分析を行える
評価： C（69～60 点）	SDGS と社会課題に精通している
評価： F（59 点～）	SDGS と社会課題の理解不十分
留意点 /Additional Information	・春学期に開講する「最新テクノロジーと AI の世界」、秋学期に開講する「IT ビジネス原理と事業創出演習」をあわせて履修すると学びの効果が大きい。 ・《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルがリーダー/イノベーターのキーであるのでプレゼンテーションや議論には積極的に参画すること

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ベンチャーCFO 養成講座		
サブタイトル/Sub Title	経営者としてのベンチャーCFO を目指すための入門講義		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Startup CFO Training Program		
教員/Instructor	新村　和大	E-mail	kazuhiro@startupleadership.com
科目群/Course Classification	ソーシャルインパクトビジネス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

近年、ベンチャー企業に注目が集まっており、IPO 市場も活況を呈していますが、一方で日本のベンチャー業界では財務経理・経営管理の責任者である CFO が不足しており、ベンチャー企業の成長ネックになっています。本講では、ベンチャー企業の成長を加速させる CFO 人材の養成のため、各回に実務家・専門家を招き、ベンチャーにおける機関設計、事業計画の策定、資本政策などを体系的に学びます。創業期から急成長期までの起業ステージ、初期ラウンドの資金調達から売却までを対象とします（上場に係る準備・審査対応や、上場後の IR などは本講の対象としません）。本講は一般社団法人日本 CFO 協会による寄附講座であり、同協会との共同開催になります。多摩大学大学院 MBA の大学院生に加え、同協会の個人会員も受講可能です。多様なバックグラウンドを持つ受講生による積極的なディスカッションを期待します。なお、実務家・専門家の都合により、講義の順番が入れ替わる可能性がありますので、留意して下さい。

到達目標/Course Goals

受講生自身の抱える課題に関して、ディプロマポリシーにおける DP1:「知識と理解」と DP2：「思考と判断」を達成するために、上記目的に資するベンチャービジネスにおける CFO 実務に必要となる基本的な知識を学習し、思考力と判断力を涵養します。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	出席レポート（A4 で 1 枚程度。各回に約 2 時間） 最終レポート（A4 で 10 枚まで。約 20 時間）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	ベンチャーと CFO
事前、事後学習ポイント	出席レポート。「本講に期待すること」（A4 で 1 枚程度）を第 1 講の当日に提出。
詳細	ベンチャーという特殊な経営環境での CFO の役割を知り、CFO の基本知識である株式会社の機関設計、整備すべき書類、決算や納税について理解します。外部講師を招きます。
第 2 講	
概要	事業計画の策定
事前、事後学習ポイント	出席レポート。「前回の振り返りと学んだこと」（A4 で 1 枚程度）を第 2 講の当日に提出。
詳細	CFO の主要業務である事業計画の作成を理解します。損益計算書、貸借対照表、キャッシュフロー計算書の内容と関係性を知り、ベンチャーの戦略や事業構造に則した事業計画を策定する方法を学びます。外部講師を招きます。
第 3 講	
概要	ファイナンスと企業価値算定
事前、事後学習ポイント	出席レポート。「前回の振り返りと学んだこと」（A4 で 1 枚程度）を第 3 講の当日に提出。
詳細	ベンチャーが実施できるファイナンスの種類と、それぞれの特徴を学びます。また、ベンチャーの株式発行による資金調達で必要になる企業価値の算定方法を理解します。外部講師を招きます。
第 4 講	
概要	資本政策
事前、事後学習ポイント	出席レポート。「前回の振り返りと学んだこと」（A4 で 1 枚程度）を第 4 講の当日に提出。
詳細	ベンチャーのファイナンスで特に重要であり、かつ難度が高い株式発行による資金調達について、長期計画である資本政策のあり方を学びます。外部講師を招きます。
第 5 講	
概要	企業法務と重要契約
事前、事後学習ポイント	出席レポート。「前回の振り返りと学んだこと」（A4 で 1 枚程度）を第 5 講の当日に提出。
詳細	株式発行や M&A による売却時には、関係者の権利義務関係を規定する契約書の作成と締結が必要となります。企業ステージごとの企業法務と重要契約を学びます。外部講師を招きます。

第 6 講	
概要	その他の重要な論点
事前、事後学習ポイント	出席レポート。「前回の振り返りと学んだこと」（A4 で 1 枚程度）を第 6 講の当日に提出。
詳細	第 1 講から第 6 講でカバーできなかった項目や、補足が必要な項目について学習します。また最終講義のプレゼンテーションについて詳細を確認します。必要に応じ、外部講師を招きます。
第 7 講	
概要	CFO の経営実務
事前、事後学習ポイント	出席レポート。「前回の振り返りと学んだこと」（A4 で 1 枚程度）を第 7 講の当日に提出。
詳細	ベンチャーを経営する局面で CFO が直面する様々な経営課題について理解します。また、実際にベンチャーの CFO として活躍する講師を招き、実務的な観点から講演を実施し、議論します。外部講師を招きます。
第 8 講	
概要	プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	出席レポート。「前回の振り返りと学んだこと」（A4 で 1 枚程度）と、最終レポート（A4 で 10 枚まで）を第 8 講の当日に提出。
詳細	第 8 講に最終レポートを提出しますが、希望者を募り、レポートのプレゼンテーションを実施します。発表者は成績に加点します。レポートのテーマは、①自社の経営計画　②起業のための事業プラン　②任意のベンチャーの経営の分析　などを想定しています。
教科書 /Textbook	適宜、資料を配布します。
指定図書 /Course Readings	なし。
参考文献・参考 URL /Reference List	参考文献は、適宜、授業中に紹介します。 過去に実施された講座の内容は、一般社団法人日本 CFO 協会の以下のウェブサイトをご参考下さい。 ベンチャーCFO 育成講座（第 1 期）　http://www.cfo.jp/event/9657/ ベンチャーCFO 育成講座（第 2 期）　http://www.cfo.jp/event/11925/ ベンチャーCFO 育成講座（第 3 期）　http://www.cfo.jp/event/12671/ ベンチャーCFO 育成講座（第 4 期）　http://www.cfo.jp/seminar/venture_cfo/
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席レポート 40%・授業内での議論 20%・最終レポート 25%・発表 15%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	CFO の実務に必要な知識・能力を深く習得し、議論・レポート内容が非常に優れている。
評価： A（89～80 点）	CFO の実務に必要な知識・能力を良く習得し、議論・レポート内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	CFO の実務に必要な知識・能力を十分に取得し、議論・レポート内容が平均以上である。
評価： C（69～60 点）	CFO の実務に必要な知識・能力を最低限、習得し、議論・レポート内容が平均程度である。
評価： F（59 点～）	出席不良で、議論・レポート内容に課題が多い。
留意点 /Additional Information	一般社団法人日本 CFO 協会による寄付講座で、同協会との共同開催です。 実務家・専門家の都合により、講義の順番が入れ替わる可能性があります。 出席レポート・最終レポートは、A4 の紙に印刷して提出して下さい。 出席レポート・最終レポートは、原則として、返却しません。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ソーシャル・ファイナンス		
サブタイトル/Sub Title	社会的課題解決のための新たなファイナンス手法		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Introduction to Social Finance		
教員/Instructor	小林 立明	E-mail	kobayashi-t@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ソーシャルインパクトビジネス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

現代日本が抱える多様な課題を解決するためには、ソーシャル・ビジネスやコミュニティ・ビジネスなど、ビジネス手法の活用が求められる。このために必要な資金を調達するためには、通常の企業ファイナンスとは異なるソーシャル・ファイナンスについての知識とノウハウが必要である。この講義では、ソーシャル・ファイナンス市場の特性を理解し、社会的課題解決に必要な資金調達手法であるソーシャル・ファイナンスの考え方と実践手法を修得することを目指す。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」を達成するために、内外のソーシャル・ファイナンス市場の規模、分野、投資団体及び革新的な投資手法に関する知識を習得する。その上で、DP3:「関心と意欲」を涵養するため「ソーシャル・ファイナンス」手法を活用して社会課題解決に取り組む際の実践的な資金調達手法として、戦略策定、資金調達、インパクト評価・報告、スケールアップ戦略などを実践的能力を習得する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	プレゼンテーション資料の作成（全体で５～6 時間程度） 資料・図書の熟読・まとめ（週 1 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	ソーシャル・ファイナンスとは何か
事前、事後学習ポイント	ソーシャル・ファイナンス、社会的インパクト、SDGs 目標
詳細	① 受講生・教員の自己紹介とオリエンテーション ② ソーシャル・ファイナンスとは何か。グローバルなマーケットの動向と主要分野の概観 ③ コース修了時のプレゼンテーション内容を提示
第 2 講	
概要	ソーシャル・ファイナンスの基礎
事前、事後学習ポイント	ソーシャル・ファイナンス手法（案件探索、審査、契約、モニタリング・評価・報告、出口戦略）
詳細	①資金提供者の視点からみたソーシャル・ファイナンスの手法を、戦略策定から出口戦略に至る各段階において理解する。その上で、ソーシャル・ファイナンス分野における主要プレイヤーの行動特性をグループ・ワークで検討する。 ② ケース・スタディ： ソーシャル・バンクの事例分析
第 3 講	
概要	ソーシャル・ファイナンスの実践Ⅰ：戦略策定
事前、事後学習ポイント	ソーシャル・ビジネス戦略（セオリー・オブ・チェンジ、ロジックモデル、KPI、インパクト評価）、法人格（非営利、営利、ハイブリッド）、スケールアップ戦略
詳細	①事業者の視点から、社会的課題解決に向けたビジネス戦略策定に必要な基本手法を理解する。さらに、法人格選択やスケールアップ・モデルを通じたソーシャル・インパクト・ビジネス発展戦略の精緻化をグループ・ワークで検討する。 ② ケース・スタディ：社会的インパクト評価の事例分析
第 4 講	
概要	ソーシャル・ファイナンスの実践Ⅱ：主要資金調達手法
事前、事後学習ポイント	寄付、助成金・補助金、デット・ファイナンス、エクイティ・ファイナンス、ストラクチャード・ファイナンス
詳細	① 事業者の視点から、現在の日本において利用可能なソーシャル・ファイナンス手法を概観し、それぞれの特性を理解する。これを踏まえて、ソーシャル・インパクト・ビジネス発展戦略における最適なソーシャル・ファイナンス・モデルのあり方をグループ・ワークで検討する。 ②ケース・スタディ：社会的インパクト投資の事例分析
第 5 講	
概要	ソーシャル・ファイナンスの実践Ⅲ：革新的資金調達手法

事前、事後学習ポイント	ソーシャル・インパクト・ボンド、クラウドファンディング、市民ファンド、コミュニティ・ファンド、ソーシャル IPO、ICO
詳細	①現在、国内外で発展途上にある革新的なソーシャル・ファイナンス手法やインフラを概観し、それぞれの特性を理解する。これを踏まえて、ソーシャル・インパクト・ビジネス発展戦略における各手法の活用可能性をグループワークで検討する。 ②　ケース・スタディ：ソーシャル・インパクト・ボンドの事例分析
第 6 講	
概要	ソーシャル・ファイナンスのエコシステム
事前、事後学習ポイント	ソーシャル・ファイナンス市場の整備、ソーシャル・ファイナンスのリスク要因
詳細	① 市場という観点から見たソーシャル・ファイナンスの特性を理解する。その上で、市場拡大に向けた内外の諸施策（中間支援組織育成、公的ファンド、税制優遇、評価・格付け制度整備、新たな法人格の整備等）を概観する。 ③　ケース・スタディ：ソーシャル・ファイナンスのエコシステム構築事例分析
第 7 講	
概要	最終プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	プレゼンテーション準備
詳細	①受講生によるソーシャル・インパクト・ビジネス発展戦略とソーシャル・ファイナンス・モデルについてのプレゼンテーション ②各プレゼンテーションについてのグループ・ディスカッション
第 8 講	
概要	総括セッション
事前、事後学習ポイント	最終プレゼンテーションへの追加・修正
詳細	①プレゼンテーションに対する講師のフィードバック ②本講義のまとめ
教科書 /Textbook	適宜、資料を配付。
指定図書 /Course Readings	L.M.サラモン（2014）「フィランソロピーのニューフロンティア」（ミネルヴァ書房）
参考文献・参考 URL /Reference List	紫牟田伸子他編（2016）「日本のシビックエコノミー」（フィルムアート社） 金子郁容他編（2016）「ソーシャル・インパクト・ボンドとは何か」（ミネルヴァ書房） マーク・J・エプスタイン他（2015）「社会的インパクトとは何か」（英治出版） G8 社会的インパクト投資タスクフォース国内諮問委員会（2018）「日本における社会的インパクト投資の現状 2018」 （http://www.siif.or.jp/wp-content/uploads/2019/04/G8-Impact_Investment_2018-2.pdf）
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席（30%）、グループ・ディスカッション参加（30%）、プレゼン内容（40%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	講義内容の理解度と実践に向けての意欲が極めて高く、議論・プレゼン内容がすぐれている
評価： A（89～80 点）	講義内容の理解度と実践に向けての意欲が高く、議論・プレゼン内容がすぐれている
評価： B（79～70 点）	講義内容を理解し、実践に向けての意欲があり、議論・プレゼン内容が良い。
評価： C（69～60 点）	講義内容を一定程度理解し、議論・プレゼン内容が平均程度
評価： F（59 点～）	出席不良で、議論・プレゼン内容に課題がある。
留意点 /Additional Information	外部講師によるケース・スタディとディスカッションの内容については開講時に提示する。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	まちづくり最新事情		
サブタイトル/Sub Title	地域のまちづくりのヒント		
英文科目名/Course Title(Eng.)	The latest situation of town development		
教員/Instructor	長島剛	E-mail	nagashima-t@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ソーシャルインパクトビジネス	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

主に東京多摩エリア、神奈川エリアをフィールドに、行政や企業、NPO などが実践しているまちづくりの事例を通じて、「つなぐ力」を軸に多彩なステークホルダーによるこれからのまちづくりを考察する。

到達目標/Course Goals

地域で何らかの形でまちづくりに関わる際のイメージを理解することを目標とする。また、受講生自身がまちづくりに関わる場合の実践的なネットワークの構築にもつなげる。
ディプロマポリシーでの DP3:「関心と意欲」を達成するために、たくさんの事例に触れ、議論することで、関心と意欲を高め、地域社会を豊かにしていく力を習得する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、双方向、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	無
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習:予習に十分な時間をとること（2 時間程度） 事後学習:毎授業後につながりシート（レポート）を提出すること（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	まちづくり最新事情
事前、事後学習ポイント	東京多摩地域及び神奈川県の概要、そこで行われているまちづくり最新事情の共有
詳細	1. 受講生の自己紹介と教員の自己紹介 2. 東京多摩地域及び神奈川県の概要、まちづくりについて等の講義 3. 第 2 講以降の講義の進め方などについての説明
第 2 講	
概要	行政によるまちづくり・つなぐ力①
事前、事後学習ポイント	行政のまちづくりの概要と最新事情の共有（都市整備）
詳細	1. ゲストスピーカーによる講義　武蔵野市 2. グループディスカッション、双方向 宿題：つながりシート（レポート）の提出（ゲストとの共有、フィードバックあり）
第 3 講	
概要	行政によるまちづくり・つなぐ力②
事前、事後学習ポイント	行政のまちづくりの概要と最新事情の共有（ポストベッドタウン）
詳細	1. ゲストスピーカーによる講義　日野市 2. グループディスカッション、双方向 宿題：つながりシート（レポート）の提出（ゲストとの共有、フィードバックあり）
第 4 講	
概要	行政によるまちづくり・つなぐ力③
事前、事後学習ポイント	行政のまちづくりの概要と最新事情の共有（共創）
詳細	1. ゲストスピーカーによる講義　横浜市 2. グループディスカッション、双方向 宿題：つながりシート（レポート）の提出（ゲストとの共有、フィードバックあり）
第 5 講	
概要	企業・ＮＰＯ・市民によるまちづくり・つなぐ力①
事前、事後学習ポイント	金融機関によるまちづくりの概要と最新事情の共有（よい仕事おこしネットワーク等）
詳細	1. ゲストスピーカーによる講義　城南信用金庫（品川区） 2. グループディスカッション、双方向 宿題：つながりシート（レポート）の提出（ゲストとの共有、フィードバックあり）
第 6 講	
概要	企業・ＮＰＯ・市民によるまちづくり・つなぐ力②

事前、事後学習ポイント	企業によるまちづくりの概要と最新事情の共有（全国の地方創生・テレワーク事業）
詳細	1. ゲストスピーカーによる講義　株式会社コミクリ（三鷹市） 2. グループディスカッション、双方向 宿題：つながりシート（レポート）の提出（ゲストとの共有、フィードバックあり）
第 7 講	
概要	企業・ＮＰＯ・市民によるまちづくり・つなぐ力③
事前、事後学習ポイント	市民によるまちづくりの概要と最新事情の共有（縁をつなぐ文化施設、百才（ももとせ））
詳細	1. ゲストスピーカーによる講義　合同会社ハチコク社（東村山市） 2. グループディスカッション、双方向 宿題：つながりシート（レポート）の提出（ゲストとの共有、フィードバックあり）
第 8 講	
概要	総括・プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	受講生によるプレゼンテーションとディスカッション
詳細	1. 受講生によるまちづくりに関する事業アイデアをプレゼンテーション 2. 講評、ディスカッション
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	『まちづくりの仕事ガイドブック：まちの未来をつくる 63 の働き方』（学芸出版社）
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(25％)、グループディスカッション（25％）レポート（25％)、プレゼンテーション（25％）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	事例をよく学び、まちづくりの最新事情を理解し、地域の未来を考察することができる。
評価： A（89～80 点）	事例をよく学び、まちづくりの最新事情について、深く理解している。
評価： B（79～70 点）	事例をよく学び、まちづくりの最新事情について、一定の理解をしている。
評価： C（69～60 点）	一部不十分な部分はあるものの、まちづくりの最新事情を理解している。
評価： F（59 点～）	まちづくりの最新事情について理解していない。
留意点 /Additional Information	新しいビジネス分野であり、教科書的な回答は存在しないので、ディスカッションに積極的に参加して自らの力で考えること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	最新テクノロジーと AI の世界		
サブタイトル/Sub Title	文系知（人間）が、理系知(最新テクノロジー)を活かす		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Advanced Technology and Artificial Intelligence		
教員/Instructor	金野索一	E-mail	skonno212@gmail.com
科目群/Course Classification	テクノロジー&ベンチャー	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

この講義は、最新技術を修得するのではなく、先端技術は何に活かせるのかを学びます。そして AI（人工知能）革命、IT 革命によって、多くの仕事が消失するといわれる中、目的・価値そのものを創り出す文系知により、理系知＝最新技術（AI、ロボテックス等）を、自分のビジネス、企業、そして社会や人間のためにどう活用するかを探究し実践につなげます。
なお、先端技術や AI 分野は、既知のものがすぐに陳腐化してしまう高速変化が常ですので、最先端の学びのために、このシラバスの内容を一部変更して、実際の講義を行うことがありますので、了承いただければ幸いです。

到達目標/Course Goals

「技術」と「既存の知見」の「新しい組み合わせ」によりイノベーションは生まれる。イノベーションの源泉は、テクノロジーとリベラルアーツの交差点にある。受講生自身の抱える課題に関して、ディプロマポリシーでの DP1:「知識と理解」 、DP2:「思考と判断」、DP3:「関心と意欲」を獲得し、DP4:「表現と技能」を実践するために、上記目的に資するビジネスセクター全体を俯瞰した最新技術とそのビジネス実践の知見を得ることで、先端技術を活かした仕事を通じてイノベーションを実現し得るビジネスパーソンとなることを目標とします。

授業形態 /Form of Class	講義、ディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容のリサーチ・整理と指定文献の熟読 1 時間程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	最新テクノロジーと AI 総論
事前、事後学習ポイント	未来や技術がどうなるかではなく、自分自身が技術を活かし未来を創るために何を為すか。
詳細	下記テーマについての講義とディスカッションを進めます ・最新テクノロジーの基本フレームワーク ・文系知（＝人間）によって、理系知（＝最新技術）を活かすとは ・「技術」と「既存の知見」の「新しい組み合わせ」によりイノベーションは生まれる
第 2 講	
概要	AI とは何か
事前、事後学習ポイント	AI の基本フレームワークの理解
詳細	AI の沿革、基本技術、活用パターンを講義とディスカッションで学習する。 必要に応じてゲスト講師を招く
第 3 講	
概要	ブロックチェーン技術とは
事前、事後学習ポイント	ブロックチェーン技術が、なぜフラット・自立型組織を必然とさせるのか
詳細	下記のテーマについて講義とディスカッション。必要に応じてゲスト講師を招く ・ブロックチェーン技術のフレームワーク　・あらゆるものを分散化させる ・　・社会や企業がブロックチェーン技術をどう活かすのか
第 4 講	
概要	ロボティクス、RPA
事前、事後学習ポイント	ロボティクス、RPA が、AI、IoT やビッグデータ活用と連動する意味
詳細	下記のテーマについて講義とディスカッション。必要に応じてゲスト講師を招く ・ロボティクス、RPA のフレームワーク ・社会や企業がロボティクスをどう活かすのか
第 5 講	
概要	AR/VR

事前、事後学習ポイント	AR/VR が、なぜ社会を変え、科学技術の透明化を加速させるのか
詳細	下記のテーマについて講義とディスカッション。必要に応じてゲスト講師を招く ・AR/VR のフレームワーク ・社会や企業が AR/VR をどう活かすのか
第 6 講	
概要	最新テクノロジー・企業ケーススタディ
事前、事後学習ポイント	既知の企業における最新テクノロジーの活用をベンチマークし、自身・自社へ活かす
詳細	最新テクノロジー活用の具体的ケースをリサーチし、プレゼンとグループディスカッションを進める
第 7 講	
概要	AI 革命で変わる社会
事前、事後学習ポイント	AI 革命の本質、AI と人間の関係について、自分の頭で考える
詳細	下記のテーマについて講義とディスカッション。必要に応じてゲスト講師を招く ・AI 革命で社会と企業、人間がどう変わるのか ・真の人間の幸福達成のために、社会や企業が先端技術をどう活かすべきなのか？
第 8 講	
概要	最新テクノロジー：自身・自社への応用計画プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	自身・自社の課題は何か？その課題の中で、テクノロジーで解決できるものは何か？
詳細	自身・自社への最新テクノロジーの応用計画を各自プレゼンテーションし、 ディカッション・グループワークを通じて教員・他メンバーへの共有とフィードバック、自身の振り返りを進める
教科書/Textbook	なし
指定図書/Course Readings	適宜、指定図書を紹介する。
参考文献・参考 URL /Reference List	WEB 日経 IT プロ連載『Peace Tech イノベーター』（金野索一著/日経 BP 社） https://tech.nikkeibp.co.jp/it/atcl/column/17/030200062/
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席: ディスカッション: リサーチプレゼンテーション: 応用計画 ＝25: 20: 25: 30
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内でのプレゼン＆議論等への参加、応用計画内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	授業内でのプレゼン＆議論等への参加、応用計画内容が良い。
評価： B（79～70 点）	授業内でのプレゼン＆議論等への参加、応用計画内容が普通。
評価： C（69～60 点）	授業内でのプレゼン＆議論等への参加、応用計画内容のいずれかが普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内でのプレゼン＆議論参加、応用計画内容が不十分。
留意点 /Additional Information	・秋学期に開講する「SDGS(社会課題)×Tech ビジネス」「IT ビジネス原理と事業創出」をあわせて履修すると学びの効果が大きい。 ・《読む・書く＋聴く・話す》コミュニケーションスキルがリーダー/イノベーターのキーであるのでプレゼンテーションや議論には積極的に参画すること

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	IT ビジネス原理と事業創出演習		
サブタイトル/Sub Title	X-Tech（クロステック）& DX(デジタルトランスフォーメーション)を学び実践する		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Theory and Planning of IT business		
教員/Instructor	金野索一	E-mail	skonno212@gmail.com
科目群/Course Classification	テクノロジー&ベンチャー	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

IT ビジネス事業創出で拓く企業と自己キャリアの新たな地平～今や IT 革命とは、IT 産業だけではなく、全ての産業・業種に及ぶ「××業種と IT」＝「X-Tech」のことであり、DX（デジタルトランスフォーメーション）と同義です。パーソナルコンピューターが登場して約 30 年、インターネットが普及を始めて約 20 年、IT というツールを的確に使いこなさずして、ビジネスの隆盛は成し得ません。クラウドやビッグデータ等のキーワードを知っていても、起業や経営にどのように活かすかの知見なくして、企業のイノベーションや自身のビジネス・キャリアは深化しません。本科目は、現代のビジネスパーソンに不可欠な、業種、職種の枠を超えて、ビジネスセクター全体の“最新の IT ビジネス原理と先端戦略の視点・ノウハウ＝X-Tech”を俯瞰し、体系化したものを学びます。そして、自身の目前の仕事やキャリア、所属企業の創造や戦略の明確化を図り、IT を駆使した新規事業計画を作成し、日本を代表する現役の起業家・経営者と投資家へ提案を行い、その結果によっては、実際の起業あるいは社内起業に繋げます。まさに、日本の IT ビジネスにおける最先端の理論と実践を往来し、企業と自分自身のイノベーションを推進する場とします。なお、IT 分野は、既知のものがすぐに陳腐化してしまう高速変化が常ですので、最先端の学びのために、このシラバスの内容を一部変更して、実際の講義を行うことがありますので、了承いただければ幸いです。

到達目標/Course Goals

“イノベーションの源泉は、テクノロジーとリベラルアーツの交差点にある。”自身の抱える課題に関して、ディプロマポリシーでの、DP1:「知識と理解」 、DP2:「思考と判断」、DP3:「関心と意欲」 を獲得し、DP4:「表現と技能」を実践するために、上記目的に資するビジネスセクター全体を俯瞰した“最新の IT ビジネス原理＝X-Tech の理論と実践”に精通し、IT を活用した実現性の高い新規事業を構想、計画し、実践・推進できるイノベーターシップを持ったビジネスパーソンとなることを目標とします。

授業形態/Form of Class	講義、ディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容関してのリサーチ・整理と指定文献の熟読 1 時間程度		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	IT ビジネス原理と先端戦略　総論
事前、事後学習ポイント	あらゆる業種、職種、個人キャリア、組織に活かせるツールとしての IT を理解
詳細	下記テーマについての講義とディスカション 4）IT 革命とは、IT 産業だけではなく、「××業種と IT」＝「X-Tech」のことである。 5）IT は、業種、職種を越えて、ビジネスモデルと仕事の仕方を変えている 6）AI/IT 革命によって、中央集権的大組織（国家、伝統的大企業）は弱体化し、DAO（Decentralized Autonomous Organization、分散型自律組織）が必然となる
第 2 講	
概要	インターネットソリューション基本類型・原理
事前、事後学習ポイント	「既存の IT 知見」と「既存の IT 知見」の「新しい組み合わせ」によりイノベーションは生まれることを理解する
詳細	下記についての講義とプレゼンテーション、ディスカッションを進める ・インターネットソリューション基本類型・原理 ①API　②CGM　③フリー戦略　④決済最適化　⑤P2P　⑥O2O　⑦SNS 戦略 ⑧ロングテール　⑨モバイル最適化　⑩VUI　11 プラットフォーム戦略他
第 3 講	
概要	IT が変えた職種・仕事の最新原理
事前、事後学習ポイント	既知の職種×ICT=職種別の新たな仕事の原理を理解する
詳細	下記についての講義とプレゼンテーション、ディスカッションを進める ・IT が変えた職種・仕事の最新原理 1）経営戦略：システム・デザイン・ストーリー思考へ 2）マーケティング：マーケッターからグロースハッカーへ 3）人事・組織：野球型からサッカー型へ、コーディネーターからファシリテーターへ 4）財務：フィンテック、決済システム、暗号通貨、クラウドファンディング他 5）製造：3D プリンター革命で、集中メインフレーム型から分散ネットワーク型へ

第 4 講	
概要	X-Tech Timemachine(クロステック・タイムマシン)とは①
事前、事後学習ポイント	既知の産業・業種×ICT= (X-Tech クロステック)＝新たな原理を業種・産業別にベンチマークし、自分・自社に活かす。
詳細	・「X-Tech」とは、「××業種と IT」のことである ・「X-Tech Timemachine」とは、下記１）の業種ごとに、下記２）の地域別にビジネスモデルを調査分析し、そのモデル・ノウハウを自身自社のビジネス実践に活かすことである １）X-Tech 業種分類例：Fin-Tech, Agri-Tech, Ed-Tech, Poli-Tech, Medi-Tech 等 ２）地域分類例：北米、南米、東アジア、西アジア、日本、欧州、アフリカ等 上記についての講義とプレゼンテーション、ディスカッションを進める
第 5 講	
概要	X-Tech Timemachine(クロステック・タイムマシン)とは②AD-Tech
事前、事後学習ポイント	AD-Tech の新たな原理・技術をベンチマークし、自分・自社に活かす。
詳細	・「AD-Tech」とは、「広告・プロモーションと IT 技術」のことである。 ・「X-Tech」「DX」が最も進んでいる業種が「AD-Tech」である。 ・「AD-Tech」を調査分析し、その技術・ノウハウを自身自社のビジネス実践に活かす。 ・必要に応じてゲスト講師を招き講義とプレゼンテーション、ディスカッションを進める
第 6 講	
概要	ゲスト講師：現役 IT/AI 企業家の講義
事前、事後学習ポイント	自分の現在地点（構想）と、目指すべき自分の到達地点（実践）の乖離を専門家から学ぶ
詳細	現役 IT/AI 企業家のノウハウ戦略とその現場を講義とディスカッションから学ぶ
第 7 講	
概要	ゲスト講師：現役 IT/AI ベンチャー経営者の講義
事前、事後学習ポイント	自分の現在地点（構想）と、目指すべき自分の到達地点（実践）の乖離を実践者から学ぶ
詳細	現役 IT/AI ベンチャー経営者のノウハウ戦略とその実践を講義ディスカッションから学ぶ
第 8 講	
概要	自身・自社の IT 事業計画プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	自身・自社が特化すべき原理・戦略を明確化する
詳細	自身・自社の IT 事業計画を、教員（金野、投資会社経営）、2 名のゲスト講師（ベンチャー経営者と IT 企業家）へ各自プレゼンテーションし、　ディカッション・グループワークを通じて教員・他メンバーへの共有をし、必要に応じて支援・出資を獲得し、新規 IT 事業を実現化する。専門家（教員、ゲスト講師）からフィードバックと検証を進める
教科書/Textbook	普通の君でも起業できる（大前研一、金野索一、他 著　ダイヤモンド社）
指定図書/Course Readings	適宜、指定図書を紹介する。
参考文献・参考 URL /Reference List	WEB 日経 IT プロ連載『Peace Tech イノベーター』（金野索一著/日経 BP 社/2017 年 1 月～） https://tech.nikkeibp.co.jp/it/atcl/column/17/030200062/
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席: ディスカッション: リサーチプレゼンテーション: 事業計画＝25: 20: 25: 30
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	IT ビジネス原理に精通している―分析―事業計画立案―高実現性の事業計画提案を行える
評価： A（89～80 点）	IT ビジネス原理に精通している―分析―事業計画立案を行える
評価： B（79～70 点）	IT ビジネス原理に精通している―分析を行える
評価： C（69～60 点）	IT ビジネス原理に精通している
評価： F（59 点～）	IT ビジネス原理の理解不十分
留意点 /Additional Information	・春学期に開講する「最新テクノロジーと AI の世界」、秋学期に開講する「SDGS×Tech ビジネス」をあわせて履修すると学びの効果が大きい。 ・《読む･書く＋聴く･話す》コミュニケーションスキルがリーダー/イノベーターのキーであるのでプレゼンテーションや議論には積極的に参画すること

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	プロジェクト・マネジメントの基本と応用		
サブタイトル/Sub Title	複数組織協働型のプロジェクトに挑む		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Elements of Project Management		
教員/Instructor	中分　毅	E-mail	nakawake@nikken.jp
科目群/Course Classification	テクノロジー&ベンチャー	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

プロジェクト・マネジメントも人によって担われるという原点に立ち返り、品質/スコープ・コスト・納期という三大古典的マネジメント要素に加え、目標設定、コミュニケーション・マネジメント、モティベーションの保持・強化、リーダーシップ等の人間的側面にも焦点を当てる。欧米における RPM（Rethinking Project Management）の提唱を踏まえ、事業戦略との関連性、複雑性・曖昧性を考慮した適応型プロジェクト・マネジメントの骨格を提案する

到達目標/Course Goals

変革の時代というビジネス環境下、変革をプロジェクトとして捉え、プロジェクト・マネジメントの知識を変革に実践的に活用できるような理解の醸成を目指す（DP1：「知識と理解（最新ビジネス環境への理解）」）。プロジェクト・マネジメントは、領域に関わらない体系だったマネジメント手法を使用し、効率的・効果的なプロジェクト運営を図ることにある。他方、この一般性が障害となって、その有効性を理解することが容易ではない。体験事例を交えた講義によって、受講者が活用における基本的視点を確立することを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、ワークショップ、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	第 8 講は実企業のプロオフィスで行うアクティブ・ラーニングとする。
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	·毎回配布するテキストによる復習（各 50 ページ程度、約 2 時間） ·最終レポートを含め全体で 3 回のレポート提出を求める（3 時間 X2 回、最終は 6 時間）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講も 180 分

第 1 講	
概要	プロジェクト的企業観の抬頭
事前、事後学習ポイント	オペレーション・マネジメントとプロジェクト・マネジメントの相違や事業戦略との関係を理解し、トータルな企業活動の中での位置付けを認識する。
詳細	プロジェクトは変革や革新を具体化する行為であり、企業活動とはプロジェクトの集合であるとのプロジェクト的企業観が抬頭し、プロジェクト・マネジメントの重要性の認識や期待が高まっている。 他方、知識体系や有効性への疑問が増大し、プロジェクト・マネジメントはその過渡期にある。この点を具体的に認識する。
第 2 講	
概要	プロジェクト・マネジメントの源流と伝統的プロジェクト・マネジメントの構成
事前、事後学習ポイント	伝統的プロジェクト・マネジメントが対応した課題の性格と方法論の特徴を理解し、その有効性と限界性を認識する。
詳細	プロジェクト・マネジメントは、国家レベルの建設プロジェクト、冷戦時代の宇宙・軍事開発への対応として、手法の開発体系化がなされた。ここでは以下を紹介する。 · Gantt Chart、PERT、WBS（作業分割構成）、EVM（Earned Value Management）など伝統的プロジェクト・マネジメントの個別技法と全体構成
第 3 講	
概要	プロジェクトの成功/失敗とプロジェクト・マネジメント
事前、事後学習ポイント	プロジェクトの成功/失敗とマネジメントの成功/失敗の相違を認識し、自身の業務の分析を行う。
詳細	プロジェクト・マネジメントが普及する一方、プロジェクトの失敗率に改善が見られないことが問題視されている。実践面での改善に向け、以下を講述する。 · プロジェクトの成功をどう評価するのか、について代表的な提案 · プロジェクトを成功や失敗に導く要因に関する調査研究 · 両者に関する筆者提案
第 4 講	
概要	プロジェクトの目標や要求事項の設定
事前、事後学習ポイント	自らの業務をプロジェクトと見立てて、プロジェクト憲章のフレームを用いて記述する。
詳細	プロジェクト・マネジメントの出発点として本質的に重要な、プロジェクト目標や要求事項の設定について述べる。 · Goals, Requirements の定義と相違、LFM（Logical Framework Method）の適用 · Goals, Requirements のマネジメント手法としてのブリーフィングやプロジェクト憲章 · 事例分析

第 5 講	
概要	品質マネジメント
事前、事後学習ポイント	コストと品質、複数の品質属性間のトレード・オフへの対応方法を理解し、自らの業務をこの視点から分析する。
詳細	品質マネジメントは目標の具体化という点で極めて重要であり、品質マネジメントという観点に立脚し、品質マネジメントの根本問題について述べる。 · 品質に関する目標、要求事項の設定にまつわる問題群：品質とコストのトレード・オフ、品質を構成する属性の複数性、短期的側面・長期的側面 · 品質をどのように作りこむのか、に関する問題群：プロジェクトの各段階に応じた固有のテーマ、初期段階の重要性
第 6 講	
概要	コスト・マネジメント
事前、事後学習ポイント	自身の業務における、立場駆け引き型交渉以外の原則立脚型交渉など、信頼構築につながるコスト・マネジメントの在り方を考える。
詳細	現実の世界では、何といってもお金が勝負である。TCM（Total Cost Management）や計画の誤謬という論理的枠組みから、タイトな予算制約の中でのプロジェクト・マネージャーの極めて実践的な対応まで、本領域の立体的な把握が可能な構成とする。
第 7 講	
概要	コミュニケーション・マネジメントとプロジェクト・マネジメントにおける人間的側面
事前、事後学習ポイント	自身の業務におけるコミュニケーション改善について検討する。
詳細	コミュニケーション、モティベーション、リーダーシップ等のプロジェクト・マネジメントの人間的な側面を対象とする。伝統的には、科学的方法論を適用してプロジェクトを管理すればプロジェクトは成功するとのテーラー主義の残滓とでもいうべき考えが色濃いが、これは有効性を欠く。ケース・スタディを交えてこの歪みの補正を試みる。
第 8 講	
概要	境界をこえるプロジェクト・マネジメント
事前、事後学習ポイント	自身の業務において、組織のサイロ化（蛸壺化）がプロジェクト遂行の障壁となっている事例を取り上げ、どうすればそれが解決できるのかを検討する。
詳細	複数組織が協働して遂行するマルチ - ステイクホルダー型のプロジェクトの重要性が高まっているが、この方法論は未確立である。典型的なマルチステイクホルダーな状況を想定して、この状況への対応方針を受講生各自に提案してもらい、これに基づく議論によって、境界をこえるプロジェクト・マネジメントのポイントを整理する。 臨場感を確保するため、社外の実企業のプロジェクトオフィス（日建設計竹橋オフィスを想定）における、アクティブ・ラーニングとして実施する。
教科書/Textbook	MBA 向けの適当な教科書がなく、本講義のために独自に作成した教科書を使用する。
指定図書/Course Readings	上記の理由により指定図書はない。
参考文献・参考 URL /Reference List	重要な参考文献を講義の進行と合わせて、電子的に配布する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席：30%、2 回のレポート：15%×2 回、最終レポート 40%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	以下の①②③の全てを高い水準で満たす ①出席率が良好である。 ②各回のレポートにおいて自身の経験との関連付けができている。 ③最終レポートに問題意識とそれを解決しようとする能動性が感じられる。
評価： A（89～80 点）	以下の①②③の全てを満たす ①出席率が良好である。 ②各回のレポートにおいて自身の経験との関連付けができている。 ③最終レポートに問題意識とそれを解決しようとする能動性が感じられる。
評価： B（79～70 点）	以下の①②③の 2 者を満たす ①出席率が良好である。 ②各回のレポートにおいて自身の経験との関連付けができている。 ③最終レポートに問題意識とそれを解決しようとする能動性が感じられる。
評価： C（69～60 点）	以下の 2 者を満たす ①出席率が良好である。 ②レポートからプロジェクト・マネジメントに関する最低限の理解が認められる。
評価： F（59 点～）	学習意欲が感じられない（出席不良 and/or レポート未提出）。
留意点 /Additional Information	ファイナンスと企業会計に関し、プロジェクト・マネジメントの理解において必要最低限の知識については講義でも触れるが、出来ればこれらの科目を履修して頂きたい。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	実践事業創造		
サブタイトル/Sub Title	不確実性時代の事業デザイン		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Process of Business Creation：Business Design in the Age of Uncertainty		
教員/Instructor	亀井 省吾	E-mail	kamei@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	テクノロジー&ベンチャー	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

不確実性の時代における事業創造とは何かを、事業デザインという枠組みの中で、実践的に理解することを目的とする。本授業のスタイルは主として講義形式のほかケースメソッドを採用し、そのスタティック（静態的）な側面を補う形で、フィールドワークを実施する。講義では、理解を促す概念や理論として、アーキテクチャ概念や紐帯理論のほか、「活用」と「探索」理論などを学ぶ。受講生は、教員作成の３ケース教材にチーム協働で取り組みことにより、リーンスタートアッププロセスを疑似経験し、理論と具象を往還する省察思考を獲得する。

到達目標/Course Goals

アーキテクチャ概念、紐帯理論、「活用」と「探索」理論など学際的知識を、ダイナミックなケース検討プロセスの中で活用する事で、省察思考に基づく実践的判断力を修得し、ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」、延いては DP4:「表現と技能」の達成を目指す。

授業形態 /Form of Class	講義、ケースメソッド、フィールドワーク、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	有り

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：配布ケース課題に関する調査（2 時間程度） 事後学習：各チームにて課題への解答作成（2 時間程度）

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	前半：不確実性の時代と事業デザイン 後半：事業創造と工程アーキテクチャ１
事前、事後学習ポイント	不確実性とは何か、事業デザインとは何か、アーキテクチャ概念の理解
詳細	前半（講義）：不確実性時代と事業デザインについての問題意識を持ち、課題を学ぶ。 後半（講義）：事業創造における工程構築の記述概念として工程アーキテクチャを学ぶ。 宿題（グループワーク）：授業配布するケース教材１の読み込みと課題への回答作成。
第 2 講	
概要	事業創造と工程アーキテクチャ２
事前、事後学習ポイント	教材１事例企業の誕生経緯、プロセスイノベーションとコラボレーションの関係性
詳細	前後半（フィールドワーク）：ケース教材１事例企業について現地調査を実施する。 宿題（グループワーク）： ケース教材１の課題につき、継続グループワークを実施する。
第 3 講	
概要	前半：事業創造と工程アーキテクチャ３ 後半：事業成長とアーキテクチャ・ダイナミクス１
事前、事後学習ポイント	組織における「探索」と「活用」、紐帯理論、アーキテクチャ・ダイナミクスとは何か
詳細	前半（プレゼンテーションとディスカッション）：ケース教材１につき、グループワーク、フィールドワークに基づいたプレゼンテーションとディスカッションを実施する。 後半（講義）：事業の持続的成長に必要な「探索」につき、紐帯理論などから考察する。 宿題（グループワーク）：授業配布するケース教材２の読み込みと課題への回答作成。
第 4 講	
概要	事業成長とアーキテクチャ・ダイナミクス２
事前、事後学習ポイント	ケース教材２事例企業の事業経緯、現在取り組んでいる新規事業は何か
詳細	前半（ゲスト講演）：ケース教材２事例企業より経営幹部をゲスト招聘し、講演を実施する。 後半（ディスカッション）：ディスカッションを実施し、課題についての認識を深める。 宿題（グループワーク）： ケース教材２の課題につき、継続グループワークを実施する。

第 5 講	
概要	事業成長とアーキテクチャ・ダイナミクス３
事前、事後学習ポイント	ケース教材２につき、真の課題は何か、その解決策はどのようなものか
詳細	前後半（プレゼンテーションとディスカッション）：ケース教材２につき、グループワーク、ゲスト講演を基にしたプレゼンテーションとディスカッションを実施する。 宿題（グループワーク）：授業にて配布するケース教材３の読み込みと課題への回答作成。
第 6 講	
概要	イノベーション誘因としてのソーシャル・インパクト１
事前、事後学習ポイント	ソーシャル・インパクトとは何か、何故イノベーション誘因となり得るのか
詳細	前後半（講義）：ソーシャル・インパクト関連の取り組みがイノベーションに繋がるパスと成り得るのかを事例から読み解く。 宿題（グループワーク）： ケース教材３の課題につき、継続グループワークを実施する。
第 7 講	
概要	イノベーション誘因としてのソーシャル・インパクト２
事前、事後学習ポイント	ケース教材３事例企業のこれまでの取り組みと今後の方向性
詳細	前半（ゲスト講演）：ケース教材３事例企業よりマネージャーをゲスト招聘し講演実施する。 後半（ディスカッション）：ディスカッションを実施し、課題についての認識を深める。 宿題（グループワーク）： ケース教材３の課題につき、継続グループワークを実施する。
第 8 講	
概要	前半：イノベーション誘因としてのソーシャル・インパクト３ 後半：不確実性時代の事業デザインとは何か
事前、事後学習ポイント	ケース教材３につき、真の課題は何か、その解決策はどのようなものか
詳細	前半（プレゼンテーションとディスカッション）：ケース教材３につき、グループワーク、ゲスト講演を基にしたプレゼンテーションとディスカッションを実施する。 後半（講義）：不確実性時代における事業デザインについて、授業で取り上げてきた３つの事業創造事例を「活用」と「探索」理論から考察し、総括する。
教科書/Textbook	なし。ケース教材を配布する。
指定図書 /Course Readings	亀井省吾(2016)『障碍者雇用と企業の接続的成長―事業における「活用」と「探索」の考察―』学文社
参考文献・参考 URL /Reference List	亀井省吾(2013)「知的障碍者活躍現場の工程アーキテクチャ」情報社会学会誌、Vol.8,No.1、pp.5-22. http://infosocio.org/vol8no1-01.pdf 亀井省吾、大橋正和(2014)「中小企業における紐帯活用とアーキテクチャ・ダイナミクス―中堅テントメーカーに見る新規事業創出事例からの考察―」情報社会学会誌、Vol.8,No.2、pp.45-62. http://infosocio.org/vol8no2-03.pdf 亀井省吾、大橋正和(2016)「組織における分化促進要因としてのソーシャル情報ハブ行動の考察―NTT ドコモ復興プロジェクトの考察を通じて―」情報文化学会誌、Vol.23,No.2、pp.5-11. なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席(30%)、授業内外での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容(30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A+（100～90 点）	諸理論を理解した上で、ケース検討プロセスに活用し、独創的な提案ができる。
評価： A（81～80 点）	諸理論を理解した上で、ケース検討プロセスに活用し、論理的な提案ができる。
評価： B（79～70 点）	諸理論を理解した上で、ケース検討プロセスに活用できる。
評価： C（69～60 点）	諸理論を理解できる。
評価： F（59 点～）	諸理論を理解できていない。
留意点 /Additional Information	授業外における教員、学生相互間の双方向的なリモートディスカッションツールとして、フェイスブックを活用する。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	社会課題起点のルール形成戦略		
サブタイトル/Sub Title	社会課題を成長市場へと転じるルール形成とビジネスモデル		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Rule Making Strategy by utilizing social issue		
教員/Instructor	國分　俊史	E-mail	kokubun@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ルール形成戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

政府ではもはや解決できない様々な社会課題に対し、民間企業の力が求められている。しかし、日本企業は政府の補助金以外に市場化する構想力が無く、政府機能が不十分な新興国では完全に出遅れている。一方、欧米企業は社会課題解決に繋がる製品、サービスが市場から支持されるルールを自ら創造して成長を勝ち取っている。社会課題をルール形成によって市場化するアプローチを実例から研究する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、社会課題を解決するイシューエコシステム設計とグローバル市場へのルール形成アプローチを理解し、事業成長に応じて社会課題解決力も高まるビジネスモデルが構想できるようになる。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、 グループワーク、ディベート、 プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容の整理と指定図書の熟読（各講義毎 2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	社会課題を市場化するルール形成戦略
事前、事後学習ポイント	欧米企業はどのようにして社会課題を事業成長の機会に転じているのか？
詳細	社会課題の解決を、ルール形成を梃にリードする欧米企業と、そうした企業の取り組みの一翼を担うポジションに止まる日本の大手企業の経営戦略の違いを把握する。
第 2 講	
概要	思想力とイノベーションとルール経営の関係
事前、事後学習ポイント	ルールを創り出す意識はどのようにして育まれるのか？
詳細	ルールに囚われないイノベーションを実現するために必要なマインドセット、長期経営姿勢、ビジョンによって他者を巻き込む力の本質を理解する。
第 3 講	
概要	SDGs と ESG 投資のルール形成との関係
事前、事後学習ポイント	国連が定めた SDGs の社会課題に対して求められる取り組みは何か？ESG 投資とはどのような投資行動なのか？
詳細	ESG 投資を行う投資家に求められる経営への関与の仕方、リターンを高めるために投資先だけでなく社会に対して行うべき活動は何かという新たな投資家像を把握し、SDGs への取り組みを梃に戦略的な資金調達の方法を学ぶ。
第 4 講	
概要	イシューエコシステムと社会課題解決型経営モデル
事前、事後学習ポイント	エコシステムとビジネスモデルの違いは何か？
詳細	先進的と言われている日本企業のリサイクル率の高さや環境配慮型製品と欧米企業が取り組んでいるイシューエコシステム開発の違いと、ビジネスモデル構築に求められる視座および時間軸、デザインのポイントを理解する。
第 5 講	
概要	ケーススタディ（1）
事前、事後学習ポイント	3.11 後の日本のエネルギー政策の変化、サイバーセキュリティ政策の今日までの動き
詳細	水素政策のアジェンダセッティングから政策形成および COP への展開、日本のインフラ輸出力を強化する国際ルール形成の動向、米国主導で進むサイバーセキュリティの国際ルール形成を実例とした社会課題解決型ルール形成戦略を解説し、着想から実行までのプロセスを、実例を通して理解する。
第 6 講	
概要	ケーススタディ（2）

事前、事後学習ポイント	自分が関心を有する社会課題の解決と市場創造を促せるルール形成の切り口は何か？
詳細	各自が関心を有する社会課題を取り上げてルール形成戦略を構想し、自社のビジネスモデルをどのように変革すべきかという改革案を策定してプレゼンテーションを実施。それぞれの構想に対してクラス全員で討議する。
第 7 講	
概要	ケーススタディ（3）
事前、事後学習ポイント	自らが構想したルール形成戦略の課題は何であったのか？を深堀する
詳細	ケーススタディ 2 で指摘された課題や追加調査をすることが有効な視点を反映した改善案をプレゼンし、全員で討議。
第 8 講	
概要	政産官学それぞれに求められる改革案とアクション
事前、事後学習ポイント	アメリカおよび欧州の政策立案プロセスと日本の違いは？
詳細	世界でルール形成を実現するために重要なファンクションとステークホルダーのかかわりを理解し、日本のルール形成力を高めるために、政産官学それぞれがどのような行動改革に取り組む必要があり、自身が所属する組織や立場からはどのような働きかけができるのかを議論する。
教科書 /Textbook	「世界市場で勝つルールメイキング戦略　技術で勝る日本企業がなぜ負けるのか」編著者 國分俊史、福田峰之、角南篤　朝日新聞出版
指定図書 /Course Readings	「持続可能な未来へ」ピーターセンゲ 日本経済新聞出版社、「チェンジ・ザ・ワールドの経営論」DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー　March 2012 ダイヤモンド社、「未来を拓く国際標準」 産業技術総合研究所、「WIDE LENS ワイドレンズ」 ロン・アドナー 東洋経済新報社
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	授業内での議論参加(40％)、出席(30％)、プレゼンテーション内容(30％)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	社会課題に対する理解が深くルール形成の切り口を多面的な角度から構想でき、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が良い。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	経済連携協定（FTA・EPA）と経営戦略		
サブタイトル/Sub Title	地政学インテリジェンスの理解を高めつつゲームチェンジを仕掛ける		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Global Trade Policies and Rule Making Strategy		
教員/Instructor	羽生田　慶介	E-mail	khanyuda@tohmatsu.co.jp keisukehanyuda@gmail.com
科目群/Course Classification	ルール形成戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

保護主義 vs 自由貿易などの通商動向がビジネスに与える影響を理解し、正しい経営判断を行う手法を身に着ける。同時に、企業で可変なモノサシづくりとしてのルール形成戦略（標準化・規制）についても方法論を学ぶ。（序盤の講義では戦略思考の基礎となるロジカルシンキング等の戦略コンサルティングスキルも学ぶ）

到達目標/Course Goals

DP1:「知識と理解」の達成のため以下を目指す：
総論としての地政学理解にとどまらず、企業サプライチェーンへの影響や経営として採り得る打ち手を具体的に理解する。ルール形成の具体的テーマに対し、特にビジネスインパクトを定量化して説明できるようになること（そのための経営戦略コンサルタントに準ずる思考スキルを身に着けること）

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容の整理と指定図書の熟読（1時間程度）		

講義概要/Course Description　全8講　第1講～第7講は各90分×2講座 第8講は90分

第1講	
概要	（序論）戦略思考の基礎／ルール形成戦略概論（1）：ロジカルシンキング
事前、事後学習ポイント	事前：課題図書の読了によるロジカルシンキング基礎（ピラミッドストラクチャー／MECE等）の理解
詳細	ルール形成戦略は「戦略思考」（何をして／何をしないか）が極めて重要となる（「オペレーション改善」とは思考が異なる）。第1講では、戦略コンサルタントの研修方法に倣い、ロジカルシンキングの基礎トレーニングを行う
第2講	
概要	なぜ国際通商ルールが経営課題とされるのか
事前、事後学習ポイント	事前：「国際通商ルール（本講ではFTA・EPAの意）対応の巧拙の差」について、第1講・で学んだ手法（ピラミッドストラクチャー等）で個人検討・発表（簡易プレゼン）
詳細	国際通商ルールが経営に与えるインパクトについて定性的・定量的に理解する。また、なぜ企業によって対応の巧拙に差が出る（結果、収益性に差が出る）のかを構造的に理解する
第3講	
概要	グローバル通商動向インテリジェンス（1）
事前、事後学習ポイント	事前：近年の通商動向についての基礎的理解を各自で進める。そのうえで日系企業に与える影響（各自の関心事項で可）について簡易に発表・討議 【課題図書：『稼げるFTA大全』（日経BP社）】
詳細	近年の通商動向（WTO体制～FTA加速～英国EU離脱・米中貿易摩擦）についての理解を進めるとともに、企業がとり得る対応策について討議を行う（特に、企業が所与とすべき前提と、ルール形成によって可変な要素について深い討議を行う）
第4講	
概要	グローバル通商動向インテリジェンス（2）
事前、事後学習ポイント	第3講に同じ
詳細	第3講に同じ
第5講	
概要	ルール形成の基本戦略「Standards×Regulations戦略」
事前、事後学習ポイント	事前：課題図書の読了によるルール形成戦略の基礎理解
詳細	企業戦略としてのルール形成は、「ビジネスの構造理解」と「ルール構造の理解」の双方が必要。「ルール」という総称での捉え方から脱し、「規制」「基準」「標準」「規格」「ガイドライン」等の区別を理解する
第6講	
概要	企業によるルール形成事例／ルール形成体制

事前、事後学習ポイント	事前：自身が関心ある分野でのルール形成事例を探し、構造を整理（簡易な発表）
詳細	国内企業／海外企業のルール形成事例を学び、成功要因が成り立った背景としての企業体制や社会基盤（官民体制ほか）を討議する
第 7 講	
概要	ルール形成戦略「定量化」演習
事前、事後学習ポイント	事前：自身が効果を定量化（しつつステークホルダーの折衝）したいルール形成テーマとの特定および関連情報の収集
詳細	ルール形成テーマの定性ストーリー（解決する社会課題・目指すルールデザイン）を資料に記載し、その想定効果に関する仮説を策定。定量化（ロジックによる試算）を行う
第 8 講	
概要	ルール形成戦略「定量化」発表
事前、事後学習ポイント	第 7 講に同じ
詳細	第 7 講に同じ
教科書 /Textbook	適宜講義資料を配布する
指定図書 /Course Readings	「稼げる FTA 大全」（羽生田慶介，日経 BP 社） 「考える技術・書く技術―問題解決力を伸ばすピラミッド原則」（バーバラミント，ダイヤモンド社） 「世界市場で勝つルールメイキング戦略」（國分俊史、福田峰之、角南 篤 編著， 朝日新聞出版社）
参考文献・参考 URL /Reference List	
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	授業内での議論参加(40％)、出席(30％)、プレゼンテーション内容(30％)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が優れている。かつ、業界水準において斬新な視点での提言ができている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が良い。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。
留意点 /Additional Information	本論の通商論点のみならず、序論の戦略思考／戦略コンサルティングスキルについても鋭意学ぶことが必要。ルール形成は（オペレーション改善と異なり）極めて戦略的な思考が求められることを理解すべし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	安全保障経済政策論Ⅰ		
サブタイトル/Sub Title	経済政策による地政学リスクへの能動的関与が生み出すルールと経営戦略への応用		
英文科目名/Course Title(Eng.)	National security and economic statecraft Ⅰ		
教員/Instructor	井形 彬	E-mail	akira.igata@gmail.com
科目群/Course Classification	ルール形成戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

日本を巡る国際環境が日々目まぐるしく変化している。戦後日本の安全保障経済政策にとり最重要国家であった米国では、歴史的に稀有な大統領として一期目を終えるドナルド・トランプの再選が問われている。また、習近平体制の中国は、一帯一路を通じて戦略的な安全保障経済政策を進めている。さらに、オーストラリア、インド、欧州諸国などとの協力関係も進展してきた。長らく「受け身外交」と揶揄されてきた日本。「インド太平洋」地域がこのような激動の渦中にある中で、日本は国家・企業・個人とそれぞれのレベルにおいて単なる傍観者になるのではなく、どのように世界に対して戦略的・能動的に関与していき、機会と転じていくことができるのか。現在日本が直面する様々な課題を概観し、具体的な事例研究を通じて「エコノミック・ステイトクラフト」と呼ばれる、「経済をテコに地政学的国益を追求する」方策について考える。

到達目標/Course Goals

世界の主要国は軍事産業以外の企業であっても、安全保障経済政策を経営戦略に活かす視座を有している。安全保障経済政策という視点から各国の戦略的意図とそれを体現している民間企業への投資誘発策を特定し、事業機会に転じているのだ。また、技術発展により無意識的に「軍事転用可能な」先端技術を開発する民間企業の数も飛躍的に増加している。本講義では、このような安全保障と経済の結節点にある事象への「知識と理解（DP1）」を深め「関心と意欲（DP3）」を培う。さらに、このような時代認識と世界認識を正確に捉え、見えにくい安全保障経済政策を捉える情報収集能力と分析能力を高める「思考と判断（DP2）」を培い、ルール化の切り口を研究し、能動的に経営戦略に活かしていく「志（DP5）」を習得する。春学期は安全保障、国際政治、Economic Statecraft の基礎的理解と、事例研究として特定問題領域に焦点を当てる。

授業形態 /Form of Class	講義、双方向、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：安全保障と経済が重なる分野のニュースをフォローし、参考文献を熟読する（2 時間程度） 事後学習：講義配布資料と引用文献の熟読（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	安全保障経済政策とは何か
事前、事後学習ポイント	国際政治における「パワー」、分析レベル、ウェストファリア体制、トゥキディデスの罠
詳細	安全保障経済政策を理解する上で必要となる主要な理論・分析枠組・論者・キーワードを解説する。また、国際政治学・国際関係論・安全保障研究といった既存の学問分野で、安全保障政策と経済政策のリンケージがどのように位置づけられてきたかを概観する。
第 2 講	
概要	国際政治経済の進展
事前、事後学習ポイント	重商主義、自由貿易、ブロック経済、ブレトンウッズ体制、パックス・アメリカーナ
詳細	15 世紀末から現在に至る国際政治経済の歴史を概観する。また、「パックス・アメリカーナ後」の国際政治経済体制の行方がどこに行くのか、トランプ政権のアメリカ・ファースト政策やイギリスのブレグジット等は「保護主義」への回帰なのかを検討する。
第 3 講	
概要	ユーラシア大陸を巡る地政学
事前、事後学習ポイント	地政学、ネットワーク、一帯一路、EAEU、アクト・イースト、「ビジョン 2023」
詳細	ユーラシア大陸における秩序発展の歴史を概観する。その上で、現在中国・ロシア・インド・オーストラリア・イラン・トルコ・EU 等各国がどのような思惑でユーラシア大陸における戦略構想を行っているかを検討する。
第 4 講	
概要	日本の安全保障政策と米国
事前、事後学習ポイント	湾岸戦争、「継続」か「変化」か、日米同盟、「トランプ現象」
詳細	第二次世界大戦後、特に冷戦後日本の安全保障政策の歴史を概観する。また日本にとり最重要国家である米国の歴史と政治制度を理解することで、日米関係についての理解を

	深める。
第 5 講	
概要	事例研究１：人道支援・災害救援活動
事前、事後学習ポイント	「非伝統的」安全保障、軍民関係、HA/DR
詳細	冷戦終結後、従来軍事団体の役割とは見做されていなかった「非伝統的」安全保障分野における活動が増加している。この一部をなす「人道支援・災害救援（HA/DR）活動」の歴史を概観し、各国の HA/DR 活動の現状を把握する。また、軍と非政府組織のとるべき役割、日本のとるべき戦略、企業レベルにおける関与の是非と方法について議論する。
第 6 講	
概要	事例研究２：宇宙空間
事前、事後学習ポイント	「第二の宇宙時代」、一帯一路と人工衛星網、デュアルユース、ニュースペース
詳細	科学技術の発展により、「グローバル・コモンズ（国際公共空間）」の中で今まで問題となることが少なかった「サイバー空間」や「宇宙空間」が注目を浴びるようになってきた。本講義では、アジア太平洋諸国の宇宙政策を概観し、日本がとるべき戦略、企業レベルにおける関与の是非と方法について議論する。
第 7 講	
概要	事例研究 3：サイバー・セキュリティー
事前、事後学習ポイント	サイバー・セキュリティー、セキュリティー・クリアランス
詳細	本講義では「グローバル・コモンズ」のサイバー空間についてとりあげる。アジア太平洋諸国のサイバー・セキュリティー政策を概観し、新たに浮上してきた安全保障経済政策の課題をとりあげ、日本がとるべき戦略、企業レベルにおける関与の是非と方法について議論する。
第 8 講	
概要	安全保障経済政策を梃にした経営戦略の立案アプローチ
事前、事後学習ポイント	企業レベルでの能動的関与の在り方とは
詳細	本講義を踏まえて、企業レベルで果たすこと可能となる能動的な役割に何があるか、新たな「民間外交」の在り方はどうあるべきかについて、グループディスカッションする。
教科書 /Textbook	適宜講義資料を紹介・配布する。
指定図書 /Course Readings	適宜講義資料を紹介・配布する。
参考文献・参考 URL /Reference List	適宜講義資料を紹介・配布する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席（30%）、授業内での議論参加（40%）、レポート提出（30%、メールでフィードバックを行う）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内での議論に毎回参加をし、レポート内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論へと積極的に関与し、レポート内容が良い。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論に関与し、レポート内容が普通。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論への関与が不十分、レポート内容が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良、授業内での議論貢献度が極めて低く、レポートが不十分。
留意点 /Additional Information	・「安全保障経済政策」は日本で体系化された書籍化無いことから、各講義に関係すると思われる書籍やレポートを事前に能動的に読み込んで議論に参加すること。 ・本講義では各回冒頭に時事問題を取り上げてディスカッションを行う。よって、日頃より日本のメディアに加え、海外の主要メディア（NYT, Washington Post, BBC, Guardian, Le Monde 等）に目を通しておくことを推奨する。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	安全保障経済政策論 II		
サブタイトル/Sub Title	経済政策による地政学リスクへの能動的関与が生み出すルールと経営戦略への応用		
英文科目名/Course Title(Eng.)	National security and economic statecraft II		
教員/Instructor	井形 彬	E-mail	akira.igata@gmail.com
科目群/Course Classification	ルール形成戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

日本を巡る国際環境が日々目まぐるしく変化している。戦後日本の安全保障経済政策にとり最重要国家であった米国では、歴史的に稀有な大統領として一期目を終えるドナルド・トランプの再選が問われている。また、習近平体制の中国は、一帯一路を通じて戦略的な安全保障経済政策を進めている。さらに、オーストラリア、インド、欧州諸国などとの協力関係も進展してきた。長らく「受け身外交」と揶揄されてきた日本。「インド太平洋」地域がこのような激動の渦中にある中で、日本は国家・企業・個人とそれぞれのレベルにおいて単なる傍観者になるのではなく、どのように世界に対して戦略的・能動的に関与していき、機会と転じていくことができるのか。現在日本が直面する様々な課題を概観し、具体的な事例研究を通じて「エコノミック・ステイトクラフト」と呼ばれる、「経済をテコに地政学的国益を追求する」方策について考える。

到達目標/Course Goals

世界の主要国は軍事産業以外の企業であっても、安全保障経済政策を経営戦略に活かす視座を有している。安全保障経済政策という視点から各国の戦略的意図とそれを体現している民間企業への投資誘発策を特定し、事業機会に転じているのだ。また、技術発展により無意識的に「軍事転用可能な」先端技術を開発する民間企業の数も飛躍的に増加している。本講義では、このような安全保障と経済の結節点にある事象への「知識と理解（DP1）」を深め「関心と意欲（DP3）」を培う。さらに、このような時代認識と世界認識を正確に捉え、見えにくい安全保障経済政策を捉える情報収集能力と分析能力を高める「思考と判断（DP2）」を培い、ルール化の切り口を研究し、能動的に経営戦略に活かしていく「志（DP5）」を習得する。秋学期は地域研究として、異なる特定地域に焦点を当てる。

授業形態 /Form of Class	講義、双方向、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：安全保障と経済が重なる分野のニュースをフォローし、参考文献を熟読する（2 時間程度） 事後学習：講義配布資料と引用文献の熟読（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	国際関係理論から見る国家間関係
事前、事後学習ポイント	社会科学の方法論、独立・従属変数、攻撃防御理論、安全保障のジレンマ
詳細	国家間関係を説明しようと試みる欧米の国際関係理論を概観する。また、その理解の手助けとなる、社会科学の基礎的な方法論や因果関係の捉え方を理解する。
第 2 講	
概要	「インド太平洋」を巡る大国間政治
事前、事後学習ポイント	インド太平洋戦略、FOIP、インフラ投資、日米豪印・ASEAN・欧州の関わり方
詳細	主要国で異なる解釈がされている「インド太平洋」概念について整理した上で、各国の政策を概観する。また、米国の「インド太平洋戦略」と中国の「一帯一路」の関係性について議論する。さらに、他国が当該地域でとる安全保障経済政策を概観する。
第 3 講	
概要	地域研究１：中国
事前、事後学習ポイント	一帯一路、米中戦略競争、相互依存の「武器化」、部分的デカップリング
詳細	中国の国内政治制度・政策決定過程の変遷を概観し、習近平政権の特色を抑える。また、一帯一路をはじめとする中国の各国に対するエコノミック・ステイトクラフトについて学ぶ。また、米中戦略競争の行方について考え、日本政府・企業は中国とどのように関与していくべきかを論じる。
第 4 講	
概要	地域研究２：ロシア
事前、事後学習ポイント	プーチン体制、日露関係、米露関係、フェイクニュース
詳細	ロシアの安全保障経済政策に関与する主要なアクターと国内制度、インド太平洋地域における国家・非国家主体の活動、および、日露関係の歴史を理解する。最後に、主要国がどのような対ロ政策をとっているかを理解した上で、今後日本がどのようにロシアに

	関与して行くべきかのディスカッションを行う。
第 5 講	
概要	地域研究３： 東南アジア
事前、事後学習ポイント	ASEAN の中心性、雁行型経済発展、グローバルサプライチェーン、コネクティビティ
詳細	東南アジア諸国や ASEAN の基本的知識を理解する。そのうえで、人件費が上がっており、米国との競争関係も続く中国に代わる工業生産地としての東南アジア地域のポテンシャルについて議論する。また、日米豪の「ブルー・ドット・ネットワーク」をはじめとする投資協力機会に民間企業が乗じる方策について考える。
第 6 講	
概要	地域研究４：中東
事前、事後学習ポイント	イスラーム、オイルショック、アラブの春、イラン核合意、越境的脅威
詳細	中東の地理的特徴・民族・宗教等を概観する。また、中東の不安定要因を伝統的なものから新たに浮上してきたものを解説する。さらに、中東諸国のエネルギー政策を詳細に検討する。最後に、米中等主要国がどのような対中東政策をとっているかを理解した上で、今後日本がどのように中東に関与して行くべきかのディスカッションを行う。
第 7 講	
概要	地域研究５：欧州
事前、事後学習ポイント	欧州統合の歴史、欧州軍事産業基盤、EU とブレグジット、日欧関係
詳細	欧州統合の歴史、特に、当初存在していた明確な「外交・安全保障問題」と「経済問題」の区別ができなくなっていった過程を検討する。また、欧州における軍事産業を詳細に検討する。最後に、米中等主要国がどのような対欧州政策をとっているかを理解した上で、今後日本がどのように欧州に関与して行くべきかディスカッションする。
第 8 講	
概要	総括
事前、事後学習ポイント	企業レベルでの能動的関与の在り方とは
詳細	春学期に焦点を当てた個別問題領域の分析視覚と、秋学期に焦点を当てた特定地域を詳細に見る分析視覚の双方を踏まえて、企業レベルで果たすこと可能となる能動的な役割に何があるか、新たな「民間外交」の在り方はどうあるべきかについて、グループディスカッションする。
教科書 /Textbook	適宜講義資料を紹介・配布する。
指定図書 /Course Readings	適宜講義資料を紹介・配布する。
参考文献・参考 URL /Reference List	適宜講義資料を紹介・配布する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席（30%）、授業内での議論参加（40%）、レポート（30%、メールでフィードバックを行う）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内での議論に毎回参加をし、レポート内容が優れている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論へと積極的に関与し、レポート内容が良い。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論に関与し、レポート内容が普通。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論への関与が不十分、レポート内容が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良、授業内での議論貢献度が極めて低く、レポートが不十分。
留意点 /Additional Information	・春学期開講の「安全保障経済政策論 I」を受講済みであることが望ましい。 ・春学期同様、適宜講義資料を紹介・配布する。引き続き、各講義に関係すると思われる書籍・レポート・ニュースを事前に能動的に読み込んで議論に参加すること。 **・地域研究に関しては、当該地域における新進気鋭の若手研究者をゲストレクチャーとして招聘する。よって、外部講師とのスケジュール調整が必要となるため、第 3-7 講の講義内容は多少前後・変更する可能性があることをご了承ください。**

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	議院内閣制度における公的ルール形成プロセス論		
サブタイトル/Sub Title	政治内部の視点に基づくプロセス論は外部視点とここまで異なる		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Public Rule-Making Process Theory in Parliamentary Cabinet System		
教員/Instructor	福田　峰之	E-mail	fukuda-m@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ルール形成戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

議院内閣制度の下、法律が出来上がるプロセスは、国会の審議だけを見ても理解することは出来ない。政党内議論、与党間協議、与野党間協議、こうした国会での議論（本会議・委員会等）以外の過程を理解すると共に、政党がルール形成の為にいかに必要な情報を入手し、ルール改廃を望む組織と繋がっているのかを学ぶ。

到達目標/Course Goals

「技術で勝ってルールで負ける」今後の日本経済は国も企業もルールを作る側に回ることによって持続的な発展を遂げる。その為には、ルール形成人材が必要不可欠であり、課題は各種あれどもルール形成の手法はスタンダードなものである。講義により DP4:「表現と技能」を身に着け、得た知識の下で課題を見出し、ルール形成のプロセスを作り上げ、社会変革を実現し、具体的なケースまとめ上げ、人に伝えていく力を取得する。

授業形態 /Form of Class	講義・双方向・プレゼンテーション・グループディスカッション・ディベート	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	(予習)WEB 等での事前調査９０分 (復習)課題レポートの作成９０分		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	議論の場としての国会と政党
事前、事後学習ポイント	国会・各法制局の概要について調べておくこと
詳細	国会と政党の役割分担を理解した上で、国会の機能、議員提出法案と内閣提出法案の提出手法の違いを理解すると共に法案作成と内閣・衆参法制局との関係を学ぶ。
第 2 講	
概要	政党内議論
事前、事後学習ポイント	主たる政党の概要について調べておくこと
詳細	政党本部と地方支部の関係を理解した上で、政務調査会の機能、超党派を含む議員連盟との役割分担、インナーと呼ばれる非役職者と役職者の権限について学ぶ。
第 3 講	
概要	与党間協議・与野党間協議と閣議決定
事前、事後学習ポイント	前回の衆議院選挙における主たる政党の公約の概要を調べておくこと
詳細	選挙公約と具体的な政策への反映、役職レベル別政党間協議の機能と国会対策員会の役割について学ぶ。
第 4 講	
概要	二元代表制度における地方議会の公的ルール形成
事前、事後学習ポイント	議院内閣制と首長・議会という二元代表制度の違い調べておくこと
詳細	政党と議会内会派との違いを理解すると共に地方議会における与野党区分や議員提出条例の事情、首長（知事・市長・町村長）と職員の関係について学ぶ。
第 5 講	
概要	EBPM データに基づくルール形成
事前、事後学習ポイント	民主党政権下の行政刷新会議・行政レビューシートの概要を調べておくこと
詳細	エピソードとエビデンスの政治力、行政レビューシートを理解した上で、如何にしてデータに基づく政策・ルール形成を確立するかを学ぶ。
第 6 講	
概要	事例研究1　官民データ活用推進基本法・資金決済法（仮想通貨）
事前、事後学習ポイント	官民データ活用推進基本法・資金決済法（仮想通貨部分）の概要を調べておくこと
詳細	個人情報保護法改正と限界、官民データ活用推進基本法制定。政党が定めるガイドライ

	ンによる価値記録の振興と資金決済法改正に至るプロセス及び国際ルール化を学ぶ。また、講義後半はディベートを行う。
第 7 講	
概要	事例研究2　マインナンバー制度
事前、事後学習ポイント	マイナンバー制度（マイナンバー・マイナンバーカード等）の概要を調べておくこと
詳細	社会課題の解決手法としてのマイナンバー制度の確立プロセスを理解し、政府と政党の役職兼務という手法、及び内閣府と省庁、国と地方自治体との関係を学ぶ。また、講義後半はディベートを行う。
第 8 講	
概要	公的ルール形成プロセス総論
事前、事後学習ポイント	課題解決の為につくりたいルールを1つ決めてくること
詳細	各種ルール形成プロセスを理解した上で、ルールの階層と決定者の選択、日本企業のルール形成能力向上を意識した上でプレゼンテーション、グループディスカッションを行う。
教科書 /Textbook	なし。講義資料は適宜用意する。
指定図書 /Course Readings	なし。
参考文献・参考 URL /Reference List	「世界市場で勝つルールメイキング戦略（朝日新聞出版）」 福田峰之ブログ　https://ameblo.jp/fukudamineyuki
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席:プレゼンテーション：ディスカッション:レポート＝　２０:２０：２５:３５
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：　A⁺（100～90 点）	ルール形成プロセスを理解し、課題・階層・場・手法の設定を確立できる。
評価：　A（89～80 点）	ルール形成プロセスを理解し、課題・階層・場の設定が出来る。
評価：　B（79～70 点）	ルール形成プロセスを理解し、課題・階層の設定出来る。
評価：　C（69～60 点）	ルール形成プロセスを理解し、課題の設定が出来る。
評価：　F（59 点～）	ルール形成プロセスを理解していない。
留意点 /Additional Information	Google Classroom にて連絡事項の伝達、資料の配布等を行う。授業形態は、双方向を中心とし、講義終了後に具体的なルール形成戦略を設定し、ディベート、グループディスカッションを行う。また、課題に対しルール戦略プロセスレポートを提出してもらい、その内容についてをフィードバックする。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ルール形成のためのメディア戦略		
サブタイトル/Sub Title	メディアから見た国家・社会制度の形成過程と今後の課題		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Media strategy for rule-making strategy professional		
教員/Instructor	岡田宏記	E-mail	okada12031@tbz.t-com.ne.jp
科目群/Course Classification	ルール形成戦略コース	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

米国の大統領選出や英国の EU 離脱、デジタル権威主義国家の伸張等では、SNS が媒介した新たな民意の登場や情報の操作・統制といった問題が顕在化、既存の政治手法とメディアの関係が大きく変質し始めている。本講では、近代の「国民国家」が創出されたプロセスと様々なメディアの誕生に着目、①思想、②シンボル、③儀礼空間／パフォーマンス、④メディア、という 4 つのレイヤーを経て、メディアがいかに機能してきたかを学ぶ。そして、この視座をベースに古今の体制・制度を検証、今後、新しいメディアが関与する政治・社会・国際関係の課題を探る。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」を達成するために、具体的な事例を基に、メディアの機能の本質を理解し、新しい時代に即応したメディア・リテラシーを向上させる。同時に、「知の再武装」を図るために、情報収集能力と分析能力を高め、今後の社会課題解決に向けてメディアが為すべきことを構想し、その発信方法についても習得する。

授業形態/Form of Class	講義、プレゼンテーション、ディスカッション、フィールドワーク	学外学習 /Off-Campus Learning	あり
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	予習；関連図書・資料等の熟読（2 時間程度） 発表の準備；プレゼンテーションの資料作成（4 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	オリエンテーション　プレゼンテーションの進め方について
事前、事後学習ポイント	時事的な問題について様々なメディアを熟読、視聴すること
詳細	流動化する現下の国際情勢・国内政治とメディアの関係を包括的な視点から分析。特に、SNS の機能が未曾有のインパクトをもって、政治や国際関係、社会のあり方に作用している現状を検証し、旧来のメディアの意義・役割・課題についても改めて学ぶ。 宿題；ある問題、テーマについて各メディアはどのように報じたか調べること。第 8 講までに、その調査結果と自分の意見を順次発表し、全員で議論する。
第 2 講	
概要	世論形成のツールとしてのメディア　①天皇制とメディア
事前、事後学習ポイント	幕末から明治維新にかけての日本の政治と世界情勢　天皇制と今後のメディアの関係
詳細	天皇制が誕生したのは、明治維新以降であることは余り知られていない。そして、日本国の「象徴」と憲法にうたわれる存在は、①思想、②シンボル、③儀礼空間／パフォーマンス、④メディア、という 4 つのレイヤーを経て、国民に浸透した。この稀有な統治形態と形成過程を検証することで、制度の成り立ちとメディアの関係の典型例を学び、今後の制度作りの課題を検討する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーションとディスカッション①
第 3 講	
概要	世論形成のツールとしてのメディア　②ヒトラーの時代から学ぶ
事前、事後学習ポイント	20 世紀前半の世界情勢、特に欧州の動向と今日の類似点
詳細	世界各地で民族問題が軋轢を生み、排外主義も台頭している。そして、今、この稀代の煽動政治家への言及も増している。不安定性が高まる世界情勢を読み解く意味で、ヒトラーの時代を再検証する。大衆を政治に統合するために、五輪のページェント化等で、新しいメディア戦略が開発され、様々な実験がなされた、その時代の情況と残された課題を探ることで、現代への教訓を得る。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーションとディスカッション②
第 4 講	
概要	世論形成のツールとしてのメディア　③トランプ政権とメディア戦略
事前、事後学習ポイント	米国を巡る内外の政治情勢　既存メディアと SNS の問題
詳細	戦後、国際的な秩序、ルールつくりを主導してきた米国のプレゼンスが低下している。その要因の 1 つ、トランプ大統領誕生に大きく作用した SNS。マイクロターゲティングを援用し、偽ニュースも含め、有権者にカスタマイズした情報を発信、世論誘導するなど、問題点も次第に露わになりつつある。今後、再選に向けて、トランプ氏はどのような政策を採り、メデ

	ィア戦略を練るのか。米国政治の現況から、今後の政治とメディアのあり方を検証する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーションとディスカッション③
第 5 講	
概要	世論形成のツールとしてのメディア　④放送局でのフィールドワーク
事前、事後学習ポイント	BS の政治討論番組、地上波ニュース番組を視聴　意見・疑問等を考えておく
詳細	フジテレビ・報道局を訪れ、ニュース番組の制作現場をリアルタイムで見学、メディアの最前線の実相を学ぶ。併せて、ニュース編集長・解説委員をゲストとして、報道番組の制作方法やあり方について質疑応答も行い、メディアのリアルな機能や手法、課題について理解を深める。
第 6 講	
概要	世論形成のツールとしてのメディア　⑤新聞・ラジオ・テレビと国家戦略
事前、事後学習ポイント	近代の欧米・日本の歩みとメディアの興亡　その功罪と今後の課題
詳細	現在、自由と民主主義、人権といった思想が揺らいでいる。これら近代社会を支えるルールはかつて英国で、新聞が世論形成し、権力との闘いを経て獲得された。今尚、一定の影響力を有する新聞と、続くラジオ・テレビが歴史的に果たした功罪を学び、メディア本来の使命を再確認する。同時に、新しいメディアが台頭する中、今後の課題解決のあり方についても検証する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーションとディスカッション④
第 7 講	
概要	世論形成のツールとしてのメディア　⑥外交とメディア
事前、事後学習ポイント	戦後の米国を軸とした日本外交の歩み　　ロシアのメディア戦略
詳細	前半は、戦後の同盟国である日米の外交関係をメディア史的な視点から俯瞰する。敗戦を経て、米国は日本をどのように国際関係に組み込んでいったか、節目の国家イベントとメディアを利用した PR の手法を通じて、外交におけるメディアの機能を学ぶ。後半、ロシアのメディア戦略を、クリミア侵攻で展開された「ハイブリッド戦」を中心に検証する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーションとディスカッション⑤
第 8 講	
概要	世論形成のツールとしてのメディア　⑦防衛とメディア
事前、事後学習ポイント	今日の防衛力整備のあり方　　中国との向き合い方
詳細	近隣の軍事的脅威が増す中、岐路に立つ日本の安全保障。米軍プレゼンスへの懸念、自衛隊のあり方等、数多の課題についてメディアとの関連から考察する。特に、中国を、その統治モデルたる「デジタル権威主義」の視点から分析。報道の自由はなく、国民を ICT で統制しようという試みは世界にどんな影響を及ぼすのか検証する。 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーションとディスカッション⑥
教科書/Textbook	なし。適宜、講義資料を配布する。
指定図書/Course Readings	「現代メディア史」　佐藤卓巳著　岩波書店 「政治を動かすメディア」　佐々木毅・芹川洋一著　東京大学出版会
参考文献・参考 URL /Reference List	「近代ジャーナリズムの誕生」　村上直之著　岩波書店
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	プレゼンテーション（40%）、出席（30%）、授業での議論参加（30%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	メディアの機能や戦略をよく理解し、プレゼン・議論内容が極めて優れている。
評価： A（89～80 点）	メディアの機能や戦略をよく理解し、プレゼン・議論内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	メディアの機能や戦略を理解でき、プレゼン・議論内容が良い。
評価： C（69～60 点）	メディアの機能や戦略を理解し、プレゼン・議論内容が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、プレゼン・議論内容が不十分。
留意点/Additional Information	日頃から様々なメディアに多く接して、自らの問題意識を高めること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ルール形成戦略研究所特別講義		
サブタイトル/Sub Title	日本のルール形成力を国家レベルで高めていくための改革シナリオ		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Special program by professor of Center for Rule-making Strategy		
教員/Instructor	ルール形成戦略研究所	E-mail	kokubun@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	ルール形成戦略	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

政治家、官僚、研究者、民間企業が現在どのような形でルール形成に関わっており、それぞれはどのような連携関係にあるのかを理解する。ルール形成力を高めるにはこれらの関係者全てが、より機動的かつ能動的に動いていく必要があるのだが、現在直面している障壁が一体何かを各ポジションで最前線を切り開いているルール形成戦略研究所の教授陣が実例をもとに解説する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP1:「知識と理解」を磨き、ルール形成力を国家レベルで高めるために政治、官庁、学会、民間企業の立場で取り組まれている最先端の活動と、より発展させていくために必要な日本の構造改革のポイントを理解する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	講義内容の整理と指定図書の熟読（各講義毎 2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	社会課題起点のルール形成戦略（國分教授）
事前、事後学習ポイント	講義内容の整理と指定図書の熟読
詳細	社会課題起点のルール形成戦略
第 2 講	
概要	ルール形成戦略研究所の教授陣による講義
事前、事後学習ポイント	講義内容の整理と指定図書の熟読
詳細	担当講師・講義内容は調整中
第 3 講	
概要	ルール形成戦略研究所の教授陣による講義
事前、事後学習ポイント	講義内容の整理と指定図書の熟読
詳細	担当講師・講義内容は調整中
第 4 講	
概要	ルール形成戦略研究所の教授陣による講義
事前、事後学習ポイント	講義内容の整理と指定図書の熟読
詳細	担当講師・講義内容は調整中
第 5 講	
概要	ルール形成戦略研究所の教授陣による講義
事前、事後学習ポイント	講義内容の整理と指定図書の熟読
詳細	担当講師・講義内容は調整中
第 6 講	
概要	ルール形成戦略研究所の教授陣による講義
事前、事後学習ポイント	講義内容の整理と指定図書の熟読
詳細	担当講師・講義内容は調整中
第 7 講	
概要	ルール形成戦略研究所の教授陣による講義
事前、事後学習ポイント	講義内容の整理と指定図書の熟読
詳細	担当講師・講義内容は調整中

第 8 講	
概要	ルール形成戦略研究所の教授陣による講義
事前、事後学習ポイント	講義内容の整理と指定図書の熟読
詳細	担当講師・講義内容は調整中
教科書 /Textbook	適宜配布する。
指定図書 /Course Readings	「世界市場で勝つルールメイキング戦略　技術で勝る日本企業がなぜ負けるのか」編著者 國分俊史、福田峰之、角南篤　朝日新聞出版、「水素たちよ、電気になーあれ！」福田峰之 アートデイズ、「グローバルルールと競争戦略」藤井敏彦 東洋経済新報社、「FTA ガイドブック」(JETRO)、「ペリーの対日交渉記」藤田忠 日本能率協会マネジメントセンター、「新たな規制をビジネスチャンスに変える環境経営戦略」市川芳明、中央法規出版、『「新しい安全保障」論の視座』赤根谷達雄・落合浩太郎・中西寛・栗栖薫子・中沢力 亜紀書房、「未来を拓く国際標準」 産業技術総合研究所、「WIDE LENS ワイドレンズ」ロン・アドナー 東洋経済新報社
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	授業内での議論参加度(70%)と出席状況(30%)による。
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内での議論参加、発言内容が特段優れており、出席状況も良好。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論参加、発言内容が優れており、出席状況も良好。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加、発言内容が良く、出席状況も良好。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加、発言内容、出席状況が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での議論参加、発言内容が不十分である。
留意点 /Additional Information	講師の講義を踏まえたディスカッションが中心になることから、各授業での討議への積極参加を重視する。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ビジネス実践知探究		
サブタイトル/Sub Title	“編集工学”で実践知を磨く」		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Business Practical Wisdom through Editorial Engineering		
教員/Instructor	佐藤 勝彦	E-mail	satou-k@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

松岡正剛氏が提唱する“編集工学”の基礎を学びながら、多様な情報や知を自らの中で綜合する実践知を修得し、モノゴトの認識力・理解力を磨き、イノベーターシップのベースとなる教養力基盤を築く

到達目標/Course Goals

編集工学アプローチ、技法を実践的な演習・ディスカッションなどを通じ修得するとともに、ビジネス最前線でのリーダーも招き、その実践知を学び、DP2 の知的課題解決力を身に着ける

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、 グループワーク、ディベート、 プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	あり
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	予習：課題図書や推薦図書、関連図書の読むこと 質問・疑問の用意（2 時間程度） 復習：授業内容の整理、小レポート作成（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	編集工学入門
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します。 課題図書を事前に読んでおくこと
詳細	講師：編集工学研究所　専務取締役　安藤昭子氏 “編集”とは何か？
第 2 講	
概要	編集術 1
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します。
詳細	講師：編集工学研究所　専務取締役　安藤昭子氏 編集工学スキルトレーニング、ワークショップ
第 3 講	
概要	編集術 2
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します。
詳細	講師：編集工学研究所　専務取締役　安藤昭子氏 編集工学の応用、ワークショップ
第 4 講	
概要	ビジネス実践知と編集 1
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します。
詳細	ゲストスピーカー：ビジネスリーダー（調整中） ビジネスと編集の AIDA
第 5 講	
概要	ビジネス実践知と編集 2
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します。
詳細	講師：安藤昭子氏 編集工学を駆使したビジネス展開実例紹介
第 6 講	
概要	ビジネス実践知と編集 3
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します。
詳細	Real Story から学ぶビジネスと編集
第 7 講	

概要	千夜千冊探索
事前、事後学習ポイント	“千夜千冊”から１編選択し、事前にレポートを作成
詳細	松岡正剛氏の書評集“千夜千冊”から編集を学ぶ　レポート発表
第 8 講	
概要	編集工学まとめ　編集工学をどう活かすか？編集力をどう磨いていくか？
事前、事後学習ポイント	簡単なレポート提出を課します。
詳細	編集工学をビジネス実践知として綜合する レポート発表
教科書 /Textbook	毎回講義資料を配布します
指定図書 /Course Readings	松岡正剛著『知の編集工学』
参考文献・参考 URL /Reference List	今井むつみ著『学びとは何か』 松岡正剛著『千夜千冊』
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席 30%、クラスでの積極的な発言とその内容 35%、レポート・発表 35%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	編集工学の理解が深く、その応用、適用にも発展性がある
評価： A（89～80 点）	編集工学の理解が十分で、その応用、適用が出来る
評価： B（79～70 点）	編集工学の理解が進んでいるが、その応用・適用には課題が残る
評価： C（69～60 点）	編集工学の理解にむらがあり、その応用・適用は難しい
評価： F（59 点～）	編集工学の理解が不十分
留意点 /Additional Information	第 3 講は豪徳寺にある編集工学研究所・本楼で行います。 留学生ももちろん歓迎いたしますが、かなりの日本語能力が求められます。 受講希望者は必ず事前に申し出てください。個別面談いたします。 毎回小レポートの作成を課しますが、その内容については講義の中で ディスカッション、フィードバックを行います。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	問題解決学Ⅰ		
サブタイトル/Sub Title	問題の発見と解決の本質に迫る		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Practical Science for How to Solve Problems I		
教員/Instructor	下井 直毅	E-mail	shimoi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

実学志向の多摩大学大学院では、問題解決の最前線に立つ力の育成を重視している。また、社会とは「問題」の塊そのものであって、社会で役割を担うことは、「問題を解決する」ことだと考える。そのためには、様々な問題にどう挑み、どのように解決するのかを修得する必要がある。この講義では、その修得を目指す。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」を達成するために、様々なテーマの問題解決事例を学んで、①それぞれのテーマに自分ならばどのようなアプローチをするか、②その事例の問題解決に用いられた方法が、いかに応用出来るかを考えることができるようになることを目指す。また、あわせてディプロマポリシーでの DP3:「関心と意欲」の修得を目指す。

授業形態 /Form of Class	講義、グループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：前回の講義内容の整理などに十分な時間をとること（2 時間程度） 事後学習：毎授業後にその回の講義の内容について振り返りを行うこと（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	問題解決の「前提」について
事前、事後学習ポイント	問題解決の体系的な理解
詳細	松本祐一教授（多摩大学経営情報学部）による講義及びグループワーク。問題解決をするための体系的な理解を目指す。
第 2 講	
概要	問題解決の「前提」について－実践編
事前、事後学習ポイント	問題解決の体系的な理解
詳細	第 1 講に引き続き、松本祐一教授（多摩大学経営情報学部）による講義。また、その理解を深めるために、グループワークやグループディスカッションを行う。
第 3 講	
概要	問題解決の「発見」の技法について
事前、事後学習ポイント	問題解決の「発見」の仕方
詳細	中村その子教授（多摩大学経営情報学部）による講義及びグループワーク。問題解決をする上で、問題をいかに「発見」したら良いのかということについて、ケーススタディを中心に学んでいく。
第 4 講	
概要	問題解決の「発見」の技法について－実践編
事前、事後学習ポイント	問題解決の「発見」の仕方
詳細	第 3 講に引き続き、中村その子教授（多摩大学経営情報学部）による講義。また、その理解を深めるために、グループワークやグループディスカッションを行う。
第 5 講	
概要	問題解決の「分析」の技法について
事前、事後学習ポイント	問題解決の「分析」の仕方
詳細	久保田貴文准教授（多摩大学経営情報学部）による講義及びグループワーク。問題解決をする上で、問題をいかに「発見」したら良いのかということについて、ケーススタディを中心に学んでいく。
第 6 講	
概要	問題解決の「分析」の技法について－実践編
事前、事後学習ポイント	問題解決の「分析」の仕方

詳細	第 5 講に引き続き、久保田貴文准教授（多摩大学経営情報学部）による講義。また、その理解を深めるために、グループワークやグループディスカッションを行う。
第 7 講	
概要	問題解決の「解決」の技法について
事前、事後学習ポイント	問題解決の「解決」の仕方
詳細	志賀敏宏教授（多摩大学経営情報学部）による講義及びグループワーク。問題解決をする上で、問題をいかに「発見」したら良いのかということについて、ケーススタディを中心に学んでいく。
第 8 講	
概要	問題解決の「解決」の技法について－実践編
事前、事後学習ポイント	問題解決の「解決」の仕方
詳細	第 7 講に引き続き、志賀敏宏教授（多摩大学経営情報学部）による講義。また、その理解を深めるために、グループワークやグループディスカッションを行う。
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	各教員が随時、紹介・指定する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席:ディスカッション:グループワーク：プレゼンテーション＝30:30:20:20
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	講義に出席し、積極的に発言し、内容を十分に理解した上で他の院生に対しても良い影響を及ぼしている。
評価： A（89～80 点）	講義に出席し、積極的に発言し、内容を十分に理解している。
評価： B（79～70 点）	講義に出席し、積極的に発言している。
評価： C（69～60 点）	講義に出席している。
評価： F（59 点～）	講義への欠席が多く、積極的な発言が認められない。
留意点 /Additional Information	全教員は、豊富な教育・研究業績、実践・実務経験、最高の学位・資格を持ち、日本や海外の産・官・学の分野にて活躍されている。詳しいプロフィールについては、多摩大学ホームページを参照（https://www.tama.ac.jp/guide/teacher/index-smis.html）。講義時間は、第 8 講も含めて、12 時 50 分から 15 時 15 分までとなる。(注：登壇教員が変更する場合もある)。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	問題解決学 II		
サブタイトル/Sub Title	問題の発見と解決の本質に迫る		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Practical Science for How to Solve Problems II		
教員/Instructor	下井 直毅	E-mail	shimoi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

実学志向の多摩大学大学院では、問題解決の最前線に立つ力の育成を重視している。また、社会とは「問題」の塊そのものであって、社会で役割を担うことは、「問題を解決する」ことだと考える。そのためには、様々な問題にどう挑み、どのように解決するのかを修得する必要がある。この講義では、その修得を目指す。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」を達成するために、様々なテーマの問題解決事例を学んで、①それぞれのテーマに自分ならばどのようなアプローチをするか、②その事例の問題解決に用いられた方法が、いかに応用出来るかを考えることができるようになることを目指す。また、あわせてディプロマポリシーでの DP3:「関心と意欲」の修得を目指す。

授業形態 /Form of Class	講義、グループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：前回の講義内容の整理などに十分な時間をとること（2 時間程度） 事後学習：毎授業後にその回の講義の内容について振り返りを行うこと（2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	問題解決の「前提」について
事前、事後学習ポイント	問題解決の体系的な理解
詳細	小林英夫教授（多摩大学経営情報学部）による講義及びグループワーク。問題解決をするための体系的な理解を目指す。
第 2 講	
概要	問題解決の「前提」について－実践編
事前、事後学習ポイント	問題解決の体系的な理解
詳細	第 1 講に引き続き、小林英夫教授（多摩大学経営情報学部）による講義。また、その理解を深めるために、グループワークやグループディスカッションを行う。
第 3 講	
概要	問題解決の「発見」の技法について
事前、事後学習ポイント	問題解決の「発見」の仕方
詳細	浜田正幸教授（多摩大学経営情報学部）による講義及びグループワーク。問題解決をする上で、問題をいかに「発見」したら良いのかということについて、ケーススタディを中心に学んでいく。
第 4 講	
概要	問題解決の「発見」の技法について－実践編
事前、事後学習ポイント	問題解決の「発見」の仕方
詳細	第 3 講に引き続き、浜田正幸教授（多摩大学経営情報学部）による講義。また、その理解を深めるために、グループワークやグループディスカッションを行う。
第 5 講	
概要	問題解決の「分析」の技法について
事前、事後学習ポイント	問題解決の「分析」の仕方
詳細	大森拓哉教授（多摩大学経営情報学部）による講義及びグループワーク。問題解決をする上で、問題をいかに「発見」したら良いのかということについて、ケーススタディを中心に学んでいく。
第 6 講	
概要	問題解決の「分析」の技法について－実践編
事前、事後学習ポイント	問題解決の「分析」の仕方

詳細	第 5 講に引き続き、大森拓哉教授（多摩大学経営情報学部）による講義。また、その理解を深めるために、グループワークやグループディスカッションを行う。
第 7 講	
概要	問題解決の「解決」の技法について
事前、事後学習ポイント	問題解決の「解決」の仕方
詳細	中庭光彦教授（多摩大学経営情報学部）による講義及びグループワーク。問題解決をする上で、問題をいかに「発見」したら良いのかということについて、ケーススタディを中心に学んでいく。
第 8 講	
概要	問題解決の「解決」の技法について－実践編
事前、事後学習ポイント	問題解決の「解決」の仕方
詳細	第 7 講に引き続き、中庭光彦教授（多摩大学経営情報学部）による講義。また、その理解を深めるために、グループワークやグループディスカッションを行う。
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	各教員が随時、紹介・指定する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	出席:ディスカッション:グループワーク：プレゼンテーション＝30:30:20:20
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	講義に出席し、積極的に発言し、内容を十分に理解した上で他の院生に対しても良い影響を及ぼしている。
評価： A（89～80 点）	講義に出席し、積極的に発言し、内容を十分に理解している。
評価： B（79～70 点）	講義に出席し、積極的に発言している。
評価： C（69～60 点）	講義に出席している。
評価： F（59 点～）	講義への欠席が多く、積極的な発言が認められない。
留意点 /Additional Information	全教員は、豊富な教育・研究業績、実践・実務経験、最高の学位・資格を持ち、日本や海外の産・官・学の分野にて活躍されている。詳しいプロフィールについては、多摩大学ホームページを参照（https://www.tama.ac.jp/guide/teacher/index-smis.html）。講義時間は、第 8 講も含めて、12 時 50 分から 15 時 15 分までとなる。(注：登壇教員が変更する場合もある)。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	21 世紀の日本の社会課題		
サブタイトル/Sub Title	なぜ解決できないのか。「失敗の本質」の構造問題と解決策を探る		
英文科目名/Course Title(Eng.)	21st Century Japanese Social Issues		
教員/Instructor	近藤 洋介	E-mail	kondo-y@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

「失われた 30 年」と呼ばれた平成が幕を閉じ、本格的な人口減少社会に突入した令和が始まった。ＡＩ、ＩｏＴに代表されるデジタル革命が進み、ビジネス環境や経済社会が劇的に変わる中で、世界における日本の比重は埋没（30 年間で世界 GDP に占める割合 99 年 16%→18 年 6%に）している。多くの社会課題の本質的解決が先送りされていることが、日本の産業のイノベーションを停滞させ、企業活動の大きな足かせとなっている。講義では、原発、再生可能エネルギーといったエネルギー問題、人口減少が進む一方で加速する東京一極集中、政府主導の成長戦略の限界、ポピュリズム（大衆迎合）に揺れる政党政治と統治機構改革、など日本社会の根底にある課題を取り上げ、その失敗の本質を探る。同時に、グループディスカッション等を通じて、各テーマについて、複数の解決策のシナリオの提示、議論を通じて本質的な解決策を考える。

到達目標/Course Goals

日本社会が抱える最先端の課題について、その知識を身につける。また解決の分析し、先送りの失敗の原因を探るとともに、その解決策について議論し合うことで、DP1:「知識と理解」、DP2:「思考と判断」を身につける。また、危機感を共有することで、DP3:「関心と意欲」と DP4:「表現と技能」を高めることを目標とする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループワーク、 グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：指定図書、及び、宿題資料の読み込み、資料調査などで毎回 2 時間 30 分ほど 事後学習：講義振り返りで 30 分ほど		

講義概要/Course Description　全 8 講 第 1 講～第 7 講は各 180 分 第 8 講は 90 分でも可

第 1 講　日本の課題・1	
概要	エネルギー（どうする原発）　原発問題の本質と新しいルールの必要性
事前、事後学習ポイント	日本のエネルギー全体像について経産省ＨＰよいエネルギー白書に目を通しておく。原発の再稼働の賛否、リスクとメリット、長期的な是非について、考えを整理しておく。
詳細	３・１１の東日本大震災以降、脱原子力発電へパラダイムシフトを迫られた日本のエネルギー事情、また、その中で進んでいる大規模な規制緩和＝電力自由化、が「暮らし」「産業界」に与えている影響について学ぶ。原発のリスク、政府が主張するメリット、を分析、社会的なコスト、世界情勢を踏まえ、日本のシナリオを提示、選択する。
第 2 講　日本の課題・2	
概要	エネルギー（どうする再エネ・CO2 削減,SDGs の道と課題）
事前、事後学習ポイント	気泡変動の影響とＣＯ２削減、SDGs のビジネス上の意義について事前に考えておく。
詳細	太陽光など再生可能エネルギーの現状と可能性、その課題について学ぶ。パリ協定など温暖化防止への国際環境、また SDGs などビジネス環境、企業行動にも大きく影響を与えている。「エネルギーと食料は海外から買う」という日本産業の骨格を変えることができるか？　第 1 講で出された宿題のプレゼンテーションも行う①
第 3 講　日本の課題・3	
概	人口の減少と集中　分権社会と新・田園都市構想のススメ
事前、事後学習ポイント	人口減少が自社のビジネスにどのような影響を与えているか、その対策について考察しておく。移民制度の是非について、考えをまとめておく。
詳細	急ピッチで進む人口減少と高齢化。そして東京への一極集中。これが持続可能な社会なのか？　地方分散、分権を阻む要因は何か、を学ぶとともに、分権社会への道筋を考察する。その中で、Society5.0 について、課題解決策としての可能性を学ぶ。
第 4 講　日本の課題・4	
概要	成長戦略・失敗の本質１（なぜイノベーションは起きなかったのか?）
事前、事後学習ポイント	参考図書「バブル」永野健二著を読み、受け止めをまとめておく。
詳細	毎年のように作られる政府の「成長戦略」だが、効果がないと言われて久しい。なぜ、アベノミクスの「第三の矢」、イノベーションは起きないのか？　その原因について、米国と比較しながら金融の側面から要因を分析する。

第 5 講　　日本の課題・5	
概要	成長戦略・失敗の本質２（ルールは自らつくる）
事前、事後学習ポイント	参考図書「経営学」小倉昌男を読み、「ヤマト成功の秘訣」をまとめておく。 新しいイノベーションがなぜ起きにくくなったのか、自社に照らして考えておく。
詳細	ヤマト運輸「宅急便」の創設者・小倉昌男会長が、なぜ成功したのか、取材経験をもとに「ルール形成に積極的に関わる意義」を解説するとともに、今日的必要性と事業への「志」の重要性を学ぶ。また、過去 30 年間、ルールづくりで「出遅れていた日本」の実情を欧米と比較する。6 講に向けて、「私の成長戦略」という題で宿題
第 6 講　　日本の課題・6 医療・農業	
概要	医・食は大丈夫か
事前学習	
詳細	命を支える医療、そして食料分野。実はこの分野が大きく出遅れているのも事実。大半の病院は赤字続き、農地も崩壊しつつある。その要因、今後の可能性について学習、各自が自身の考える「成長戦略」を発表する。
第 7 講　　日本の課題・7	
概要	統治機構改革・国会　日本に野党は必要か？1
事前事後学習ポイント	日本史・近現代史になかで、大正時代の政党政治を事前に調べておく。
詳細	二大政党を志向した小選挙区制度。政権交代により政策論争を期待したが、完全な失敗に終わった。なぜか？　なぜ、野党は機能しないのか？　必要なのか？　日本の政党政治、選挙制度についてグループディスカッションしてもらう。
第 8 講　　日本の課題・8	
概要	統治機構改革・日本に野党は必要か？2　官と政　ポピュリズムと「SNS」、メディア
事前事後学習ポイント	社長に「否」と言ったことがあるか？　言うべきか、考えてみる。
詳細	権力を持つ首相官邸、政と官の関係が劇的に変化している、その功と危うさについて学ぶ。また、SNS と新聞、テレビなどメディアの在り方の変容、ポピュリズムの影響について、昭和初期と比較しながら考える。
教科書/Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	「失敗の本質」（野中郁次郎編著　中公文庫）「原発敗戦」（船橋洋一著　文春文庫） 「バブル」（永野健二著　新潮社）　「経営学」（小倉昌男　日経 BP）
参考文献・参考 URL /Reference List	エネルギー白書 https://www.enecho.meti.go.jp/about/whitepaper/2019html/
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席 30%、授業内での議論参加 25%、プレゼン内容 25%、レポート 20%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	日本の社会的課題について、構造的な原因を分析し、少なくとも 4 分野について、自ら解決策を提言できる。
評価： A（89～80 点）	日本の社会的課題について、構造的な要因を分析し、理解し、改善案を提言できる。
評価： B（79～70 点）	日本の社会的課題について、概要を理解し、問題点を指摘できる。
評価： C（69～60 点）	日本の社会的課題について、概要を理解できる。
評価： F（59 点～）	日本の社会的課題について、理解が不十分。出席も不良で、授業内でのプレゼンのなお用意も不十分である。
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	1年次春と秋、2年次春と秋
科目名/Course Title	インターゼミ I～IV		
サブタイトル/Sub Title	-社会工学研究会(寺島実郎学長ゼミ)-		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Inter Seminars I～IV		
教員/Instructor	金　美徳	E-mail	kim-m@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	各学期 2

講義目的/Aim of Course

　インターゼミ(寺島学長ゼミ)の目的は、学部生・院生・ゼミ OB/OG など約 40 名と寺島学長をはじめとする本学 2 学部と大学院の教員 15 名が、現代社会の抱える課題について、塾形式で切磋琢磨しながら多様な要素や手法を組み合わせた柔らかい発想で、体系的・総合的な答を志向する総合設計力を身に付けることである。
　院生・学生自身による課題の発掘・発見から仮説の提示、そして多様な要素の組み合わせによる問題解決へ至るプロセスの中で、寺島学長以下、学内の教員や社会で活躍する学外の専門家による付加価値を高め、創造的問題解決策を志向する。12 年目を迎えるインターゼミは、11 年間で 51 論文を完成させた。
　テーマは、下記から希望する分野・グループから選ぶこと。
①多摩学、②アジアダイナミズム、③サービス・エンターテインメント、④AI、⑤地域活性化。

到達目標/Course Goals

①産業社会の持つ課題を発見し、解決へのアプローチを目指す論文を作成する。
②選択したテーマについて、文献研究とフィールドワーク、考察と執筆を行い、1 年間で論文を完成させる。
③この教育目標を実現することにより、ディプロマポリシー(DP：学位授与方針)「深い時代認識と世界認識に基づいて、高い志を育み、新しい時代での事業機会、社会構想機会を見極める実践的教養を習得して、イノベーションを提起できる」の実質化を目指す。とりわけ DP1:「知識と理解」と DP3:「関心と意欲」の達成を図る。

授業形態 /Form of Class	講義、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	有
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：各テーマに関する文献研究やフィールドワーク事前調査を行う(2 時間程度)。 事後学習：論文の作成に着手する(2 時間程度)。		

講義概要/Course Description　全 15 講は、各 90 分である。毎週土曜日 16 時 20 分～17 時 50 分(学部時間割 5 限目)に九段サテライトキャンパスで開講される。

第 1 講～第 2 講	
概要	オリエンテーション。学長講話と自己紹介。
事前、事後学習ポイント	インターゼミは、どのようなゼミで、どのような課題解決や研究活動をするのかを知る。
詳細	春学期は、①多摩学、②アジアダイナミズム、③サービス・エンターテインメント、④AI、⑤地域活性化の各班のこれまでの論文を通読する。 秋学期は、論文を作成する。
第 3 講～第 4 講	
概要	グループの決定と詳細テーマの検討。
事前、事後学習ポイント	今年度のテーマを決める。
詳細	春学期は、①多摩学、②アジアダイナミズム、③サービス・エンターテインメント、④AI、⑤地域活性化の各班のこれまでの論文を踏まえて、テーマについて各グループ毎にディスカッションする。 秋学期は、論文を作成する。
第 5 講～第 6 講	
概要	学長講話とグループワーク。
事前、事後学習ポイント	文献調査を行う。 寺島学長の講話内容を深く理解する。
詳細	春学期は、各テーマに沿って文献一覧を作成すると共に文献を通読する。 秋学期は、論文を作成する。
第 7 講～第 8 講	
概要	研究計画の発表と学長のアドバイス。
事前、事後学習ポイント	研究計画を完成させる。

詳細	春学期は、各分野・テーマ毎にグループワークとディスカッションを行い、研究計画を立てる。研究計画の内容は、先行研究(文献一覧)、問題意識、フィールドワークやインタビュー、年間スケジュールなど。 秋学期は、論文を作成する。
第 9 講～第 10 講	
概要	学長講話と各グループの担当教員と学生からの進捗報告。
事前、事後学習ポイント	学長のアドバイスに従って研究の方向性を調整する。
詳細	春学期は、各分野・テーマ毎にグループワークとディスカッションを行い、学長の論考なども参照し、研究計画を練り直す。 秋学期は、論文を作成する。
第 11 講～第 12 講	
概要	グループワークおよびフィールドワーク。
事前、事後学習ポイント	フィールドワークの具体的な計画を立てる。
詳細	春学期は、各分野・テーマ毎にグループワークとディスカッションを行い、現地調査、研究者や関係者のインタビュー、アンケート調査、シンポジウムやセミナーへの参加などフィールドワークの内容を決定し、実施する。 秋学期は、論文を作成する。
第 13 講～第 14 講	
概要	学長講話と学長のグループ別指導。
事前、事後学習ポイント	春学期は、院生と教員が共に文献研究とフィールドワークを積み重ねる。 秋学期は、分担して論文を作成する。
詳細	春学期は、文献研究により問題意識を高く持つほど、フィールドワークでのギャップが大きくなり、このギャップの大きさが気付きとなる。この気付きが、問題意識を研ぎ澄ませ、視点を先鋭化させる。また、論文の独創性や質を大きく左右する。 秋学期は、論文を作成する。
第 15 講	
概要	春学期は、中間発表。 秋学期は、最終発表と完成論文の提出。
事前、事後学習ポイント	春学期は、中間発表の準備をする。 秋学期は、論文の編集し、レイアウトを整える。
詳細	春学期: 8 月中旬箱根合宿(1 泊 2 日)。 秋学期:12 月初旬最終発表、12 月下旬論文提出、1 月初旬教員によるフィードバック、1 月下旬完成論文の提出。
教科書 /Textbook	①『ジェロントロジー宣言～「知の再武装」で 100 歳人生を生き抜く～』((NHK 出版新書、2018 年) ②『シルバー・デモクラシー-戦後世代の覚悟と責任-』(寺島実郎、岩波新書、2017 年) ③『ユニオンジャックの矢-大英帝国のネットワーク戦略-』(寺島実郎、NHK 出版、2017 年) ④『中東・エネルギー・地政学』(寺島実郎、東洋経済新報社、2016 年)
指定図書 /Course Readings	①『世界を知る力』(寺島実郎、PHP 新書、2010 年) ②『世界を知る力 日本創生編』(寺島実郎、PHP 新書、2011 年) ③『何のために働くのか-自分を創る生き方-』(寺島実郎、文春新書、2013 年) ④『脳力のレッスンⅠ-正気の時代のために-』(寺島実郎、岩波書店、2004 年) ⑤『脳力のレッスンⅡ-脱 9.11 への視座-』(寺島実郎、岩波書店、2007 年) ⑥『脳力のレッスンⅢ-問いかけとしての戦後日本と日米同盟-』(寺島実郎、岩波書店、2010 年) ⑦『脳力のレッスンⅣ-リベラル再生の基軸-』(寺島実郎、岩波書店、2014 年)

参考文献・参考 URL /Reference List	①『若き日本の肖像-1900 年、欧州への旅-』(寺島実郎、新潮文庫、2014 年) ②『二十世紀から何を学ぶか(上)(下)』(寺島実郎、新潮選書、2007 年) ③『時代との対話 寺島実郎対談集』(寺島実郎、ぎょうせい、2010 年) ④『新しい世界観を求めて』(寺島実郎、毎日新聞社、2010 年) ⑤『大中華圏-ネットワーク型世界観から中国の本質に迫る-』(寺島実郎、NHK 出版、2012 年) ⑥『時代を見つめる「目」』(寺島実郎、潮出版社、2013 年)
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	グループワーク(20%)、中間および最終プレゼン(30%)、論文(50%)の割合で評価。
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：A＋（100～90 点）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、90 点以上の場合。
評価：A（89～80 点）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、80～89 点の場合。
評価：B（79～70 点）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、70～79 点の場合。
評価：C（69～60 点）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、60～69 点の場合。
評価：F（59 点～）	議論参画度と最終発表(相互評価)の合算点が、59 点以下の場合。
留意点 /Additional Information	講義の開始時間は、16 時 20 分であるが、原則 15 時 50 分に集合すること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	1年次春と秋、2年次春と秋
科目名/Course Title	フィールドスタディⅠ～Ⅳ		
サブタイトル/Sub Title	-アクティブ・ラーニング-		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Field Study Ⅰ～Ⅳ		
教員/Instructor	金　美徳	E-mail	kim-m@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	各学期1～2

講義目的/Aim of Course

文科省は現在、大学教育の質的転換を図るために「生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学」を政策的に要請しており、これをアクティブ・ラーニング(AL)によって実現しようとしている。そのためには、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(AL)への転換が必要である」と中央教育審議会が提言している。

また、世界ビジネススクール・ランキングでは、フィールドワークやワークショップ(ファシリテーター)が評価を左右する重要な指標となっている。因みに世界のビジネススクール数は1,000大学院(うち日本30大学院)、世界の大学数は18,000大学である。

このような要請を受けて、大学のみならず、企業の研修においてもALが積極的に導入されている。特に大学院ビジネススクール(MBA)では、フィールドワーク、ケースメソッド(院生がケースを事前に学習し分析結果や意思決定の理由を教員の指導の下で発表・議論する授業形式で学習者自身が主体的に学ぶ方法)、アジア・新興国市場開拓のイノベーションなどが注目されている。

本学では、2016年度より「アクティブ・ラーニングセンター」を設立し、本格的にALを導入している。本学が目指すALとは、「教員と学生の意思疎通、切磋琢磨、相互の知的成長により新たな知識と知恵を創造し、問題や課題を解決すること」と考えている。また、SDGs(持続可能な開発目標)、ESD(持続可能な開発のための教育)、ESG(環境・社会・企業統治)にも注目している。

したがって「フィールドスタディⅠ～Ⅳ」では、フィールドワークやALを積極的に評価する。本来、研究活動や論文作成において「文献研究とフィールドワーク」が基本であり、車の両輪のようなものである。フィールドワークとは、現地・現物・現人の調査(インタビュー、ヒアリング、体験)や定性・定量的手法を用いた実証的検証(アンケート、データ分析、実験)などである。また、学内外のプログラム・セミナー・地方実習・海外研修などへの参加も奨励し、評価する。

「フィールドスタディⅠ～Ⅳ」では、院生の「気付き」、「理論と経験の繋がり」、「行動力・現場力・実践力の向上」、「視野拡大」、「問題・課題の発見力と解決力の向上」などの機会を提供する。

この目的を達成することにより、ディプロマポリシー(DP：学位授与方針)「深い時代認識と世界認識に基づいて、高い志を育み、新しい時代での事業機会、社会構想機会を見極める実践的教養を習得して、イノベーションを提起できる」の実質化を目指す。とりわけDP4:「表現と技能」、DP5:「志」の達成を図る。

評価方法/Method of Evaluation

1.「フィールドスタディ」は、院生の研究活動、修士論文や特定課題作成に資するフィールドワーク、学内外のプログラム・セミナー・地方実習・海外研修への参加などに対して、各学期毎に2単位を認定する。これまで研究活動やフィールドワークは、「研究実習」として単位認定していたが、今年度より「フィールドスタディ」科目で単位認定する。また、本学の学部で開講する寺島学長監修リレー講座、ALプログラム(飛騨高山プログラムなど)、地方実習、海外研修なども対象とする。

2.単位の認定は、大学設定基準により30時間～45時間の学修・活動時間を確保することを条件とする。

3.エビデンス(証憑書類)は、必要に応じて添付や提出をすること。エビデンスは、プログラム・セミナー・実習・研修の案内(コピーやメール)、写真、旅程表・領収書、渡航証明など実施したことが証明できるもの。

4.「フィールドスタディ」の申請および報告方法は、以下の通り。

(1)事前申請

①「フィールドスタディ事前申請書」と「フィールドスタディ結果報告書」の用紙は、事務局で入手する。

②「フィールドスタディ事前申請書」には、目的と30時間以上の学修・活動時間を確保できるエビデンスを記入すること。関連資料を添付することも可能である。

③作成した「フィールドスタディ事前申請書」は、事務局に提出すること。

④提出された「フィールドスタディ事前申請書」は、担当教員(金美徳教授)が、内容確認を行い、署名・捺印する。署名・捺印後に実施が可能となる。

(2)事後報告

①「フィールドスタディ結果報告書」には、研究・活動の成果と30時間～45時間の学修・活動時間を確保したエビデンスを記入すること。関連資料を添付することも可能である。

②作成した「フィールドスタディ結果報告書」は、事務局に提出すること。

③提出された「フィールドスタディ結果報告書」は、担当教員(金美徳教授)が、内容確認を行い、合否を判定する。合格すれば2単位を認定する。

(3)単位認定の時期と単位数

①単位認定は、2月～7月末までに提出した場合は春学期、8月～1月末までに提出した場合は秋学期の単位として認定する。

②事前申請されずに事後報告だけの場合は、認めない。また、実施時期(最終日)が、1年を過ぎたものは認めない。

③単位数は、各学期毎に 2 単位を限度とする。また、2 年間で認定される最大単位数は、8 単位とする。
⑷申請内容の変更と取消
①事前申請の内容を変更する場合、学修・活動が終了する前に事前申請書を修正し、事務局に提出すること。
②事前申請の内容を取消す場合、その旨を文面(取消届)にて事務局に提出すること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	留学生のための日本経済・経営基礎		
サブタイトル/Sub Title	大学院での学びの基礎・基盤つくり		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Introduction of Japanese Economy and Management		
教員/Instructor	佐藤勝彦	E-mail	satou-k@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	留学生支援	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

日本における実務経験がない（浅い）留学生に対し、日本経済・経営に関する基礎知識を取得することで当大学院での学びを支援する

到達目標/Course Goals

日本経済・経営に関する基礎的な知識を修得するだけでなく、経済・経営記事を活用しながら最新の日本の状況に関する理解を深め、DP2:「思考と判断」力を磨き、同時に日本語による読解力、要約力、発表力向上も目指す。

授業形態 /Form of Class	講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること 最低でも 2 時間程度の予習・復習

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	日本概要
事前、事後学習ポイント	当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること（事前に提出すること）
詳細	・日本の国土、人口、歴史、文化、法制度、政治など概説 （中国とのつながり） ・本の読み方解説 ・第 2 講以降、最新の経済・経営に関する新聞・雑誌記事を読み、その要約を事前に提出すること。
第 2 講	
概要	日本経済史（特に戦後）
事前、事後学習ポイント	・当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること（事前に提出すること） ・第 2 講終了後関心のある日本人を一人選び、wikipedia だけに頼らず、調べ A4 で 1－2 枚程度のレポートを作成すること（個人ワーク：提出は第 5 講まで）
詳細	・戦後に日本経済の歴史を振り返り、その特徴を把握し、現状を理解すること ・前回課題の記事に関する発表、ディスカッション及び解説
第 3 講	
概要	産業構造・企業形態・ガバナンス
事前、事後学習ポイント	・当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること（事前に提出すること）
詳細	・経済成長とともに日本の産業構造や企業形態などがどう変化したか？ ・前回課題の記事に関する発表、ディスカッション及び解説 ・２－３人でチームを組み岩波新書から関心のある本を一冊選び共読し、チームで A4,１－２枚の要約レポートを作成すること （チームワーク：提出は第 6 講まで）
第 4 講	
概要	教育・労働・雇用
事前、事後学習ポイント	当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること（事前に提出すること）
詳細	・教育制度、労働事情・雇用慣行などについて現状と課題を学ぶ ・前回課題の記事に関する発表、ディスカッション及び解説
第 5 講	
概要	“日本的経営”

事前、事後学習ポイント	当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること（事前に提出すること）
詳細	・いわゆる日本的経営とは何か？その起源や現在も機能しているのか？ ・前回課題の記事に関する発表、ディスカッション及び解説
第 6 講	
概要	グローバル化と日本の経済・経営
事前、事後学習ポイント	当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること（事前に提出すること）
詳細	・日本は経済のグローバリゼーションが進む中でどのように対処してきたのか？ 歴史と現状そして課題を探る ・前回課題の記事に関する発表、ディスカッション及び解説 ・個人ワーク発表・ディスカッション及び解説
第 7 講	
概要	現在の日本経済・経営の課題（少子高齢化など）
事前、事後学習ポイント	当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること（事前に提出すること）
詳細	・現在の日本経済・経営が直面する課題について学ぶ ・前回課題の記事に関する発表、ディスカッション及び解説 ・個人ワーク発表・ディスカッション及び解説 ・チームワーク発表・ディスカッション及び解説
第 8 講	
概要	まとめ
事前、事後学習ポイント	当回、次回のテーマに関する疑問・質問を その理由を添えてそれぞれ 3 つ以上用意すること（事前に提出すること）
詳細	・これまでの講義などでの疑問の整理 ・前回課題の記事に関する発表、ディスカッション及び解説 ・個人ワーク発表・ディスカッション及び解説 ・チームワーク発表・ディスカッション及び解説
教科書 /Textbook	適宜配布する。
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	『日本経済図説』岩波新書
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率 25%、クラス参画度 20%、事前質問提出 15%、 個人ワーク 20%、チームワーク 20%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	上記項目が全て非常に優れており、日本経済・経営に関して自分の言葉で語れる
評価： A（89～80 点）	上記項目が全て優れており、日本経済・経営に関して理解が出来ている
評価： B（79～70 点）	上記項目が 70%程度であり、日本経済・経営に関し理解が進んでいる
評価： C（69～60 点）	上記項目が 60%程度であり、日本経済・経営に関し理解がまだら模様である
評価： F（59 点～）	上記項目が 60%未満であり、日本経済・経営に関して理解が不十分
留意点 /Additional Information	留学生必修科目です。既受講生の再受講も歓迎します。 レポートは提出後、講義内でフィードバックします。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	ビジネスジャパニーズⅠ		
サブタイトル/Sub Title	日本語の口頭発表		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Business Japanese Ⅰ		
教員/Instructor	藏夛　礼佳	E-mail	me_chen2008@yahoo.co.jp
科目群/Course Classification	留学生支援	単位数/Credits	1

講義目的/Aim of Course

日本語での口頭発表の表現とその手法を学び、聞く力、話す力を向上させ、ビジネスパーソンとしての基礎教養を身につけることを目的とします。

到達目標/Course Goals

DP4:「表現と技能」に沿って、人前で発表することに慣れ、日本語の表現力を向上させ、自分の意見を論理的に述べることができること、グループ内でのコミュニケーションを取り（協調性、傾聴力を習得）、最善なアウトプットにたどり着くプロセスを習得する。

授業形態 /Form of Class	講義、グループワーク、グループディスカッション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	グループディスカッションに備え、データ収集を含む事前準備を行うこと（予習・復習 2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講 第 1 講～第 7 講は各 180 分 第 8 講は 90 分でも可

第 1 講	
概要	オリエンテーション
事前、事後学習ポイント	敬語、謙譲語、丁寧語などを復習する
詳細	オリエンテーション及び自己紹介、ビジネスマナー①
第 2 講	
概要	スピーチについて学ぶ
事前、事後学習ポイント	スピーチのポイント、原稿の書き方を復習する
詳細	スピーチのポイント、準備、原稿の書き方を学ぶ／ビジネスマナー②
第 3 講	
概要	スピーチを実践する
事前、事後学習ポイント	①　事前に今回のスピーチテーマを考えておく ②　授業後スピーチの基本ポイントを復習する
詳細	第 2 講で学んだことを踏まえて自分が興味を持つデーマを決めて、スピーチの原稿を書き、クラスで発表、それについて講師からフィードバックする
第 4 講	
概要	ディスカッションについて学ぶⅠ
事前、事後学習ポイント	グループ内で意見の違うメンバーにどのように自分の考えを伝えればいいのかを考えること
詳細	①　ディスカッションのポイント、ディスカッションの流れ、ディスカッションの形式 ②　グループディスカッションの練習
第 5 講	
概要	ディスカッションについて学ぶⅡ
事前、事後学習ポイント	ブレーンストーミングのルールを理解し、ディスカッションに臨むこと
詳細	ブレーンストーミングとしてのディスカッションを学ぶ
第 6 講	
概要	ディスカッションについて学ぶⅢ
事前、事後学習ポイント	自分の意見を他人に伝え、他のメンバーの意見をうまく引き出し、グループの意見をまとめることを心がける
詳細	第 4 講、第 5 講の内容を踏まえてディスカッションをし、グループごと発表
第 7 講	
概要	ディベートについて学ぶⅠ
事前、事後学習ポイント	立論・反論組み立てる

詳細	ディベートの目的、方法と技術について学ぶ
第 8 講	
概要	ディベートについて学ぶⅡ
事前、事後学習ポイント	ディスカッションの手法を用いてグループ内での立論、反対尋問、最終弁論をまとめることを心がける
詳細	グループ A と B に分かれて、ディベートを行い、講師からフィードバック
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率 30%　講義・議論参加度 35%　各セッションの発表 35%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：A⁺（100～90 点）	上記評価方法配分合計の到達点、90%以上を原則とする
評価：A（89～80 点）	上記評価方法配分合計の到達点、80%以上を原則とする
評価：B（79～70 点）	上記評価方法配分合計の到達点、70%以上を原則とする
評価：C（69～60 点）	上記評価方法配分合計の到達点、60%以上を原則とする
評価：F（59 点～）	上記評価方法配分合計の到達点、60%未満を原則とする
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	ビジネスジャパニーズⅡ		
サブタイトル/Sub Title	アカデミック・プレゼンテーション		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Business JapaneseⅡ		
教員/Instructor	藏夛　礼佳	E-mail	me_chen2008@yahoo.co.jp
科目群/Course Classification	留学生支援	単位数/Credits	1

講義目的/Aim of Course

日本語でアカデミック・プレゼンテーション・スキルを身に着けることを目的とする。

到達目標/Course Goals

DP4:「表現と技能」を達成するために、アカデミック・プレゼンテーションに必要な基本的語彙表現を学び、発表スライドの作成やプレゼンテーションにおいて論理的な話し方ができるようにする。

授業形態 /Form of Class	講義、グループワーク、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	プレゼンテーションに備え、データ収集を含む事前準備を行うこと（予習・復習 2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講 第 1 講～第 7 講は各 180 分 第 8 講は 90 分でも可

第 1 講	
概要	プレゼンテーションの基礎知識
事前、事後学習ポイント	何のために、誰に向かってプレゼンテーションするかを心がける
詳細	①　プレゼンテーションのポイント、準備 ②　伝わる資料作成の基本知識及び分かりやすい資料作成のコツ
第 2 講	
概要	プレゼンテーション実践①「私の専門」「私がこれから学ぶ専門」
事前、事後学習ポイント	専門用語の学習
詳細	前回のプレゼンテーション学習を踏まえて、資料を作成し、発表する
第 3 講	
概要	目的に応じた図形活用テクニック
事前、事後学習ポイント	図形効果的な使い方
詳細	図形の種類と使う目的、多角形、矢印・線、カッコ吹き出しなどの使い方及び注意すべきポイント
第 4 講	
概要	チャートで関連性を表現
事前、事後学習ポイント	チャートの効果的な使い方
詳細	チャートの種類と使う目的、象限図、階層図、集合図などの使い方及び注意すべきポイント
第 5 講	
概要	統計データをグラフ化する
事前、事後学習ポイント	グラフの効果的な使い方
詳細	グラフの種類と使う目的、棒グラフ、円グラフなどの使い方と注意すべきポイント
第 6 講	
概要	プレゼンテーション実践②「私の国」「私の町」
事前、事後学習ポイント	スライドのデザイン、構成、作り方
詳細	図形、チャート、グラフを用いて、資料を作成し、発表する
第 7 講	
概要	プレゼンテーション実践③最終プレゼンテーションの準備
事前、事後学習ポイント	プレゼンテーションの事前準備
詳細	グループに分かれて、それぞれテーマを決めて、プレゼンテーションの資料を作成する。
第 8 講	

概要	プレゼンテーション実践③最終プレゼンテーション
事前、事後学習ポイント	プレゼンテーションの事前準備
詳細	グループごとテーマに沿ってプレゼンテーションを行い、発表内容についてアドバイスや発表者からの質問について回答を行う
教科書 /Textbook	適宜配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率 30%　講義・議論参加度 35%　各セッションの発表 35%
評価基準/Evaluation Criteria	
評価：A⁺（100～90 点）	上記評価方法配分合計の到達点、90%以上を原則とする
評価：A（89～80 点）	上記評価方法配分合計の到達点、80%以上を原則とする
評価：B（79～70 点）	上記評価方法配分合計の到達点、70%以上を原則とする
評価：C（69～60 点）	上記評価方法配分合計の到達点、60%以上を原則とする
評価：F（59 点～）	上記評価方法配分合計の到達点、60%未満を原則とする
留意点 /Additional Information	なし

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	論文スタートアップⅠ		
サブタイトル/Sub Title	留学生修士論文・実践知論文の前指導		
英文科目名/Course Title(Eng.)	How to write the master`s thesis for foreigner		
教員/Instructor	劉　麗娜	E-mail	mizukisumaru11@yahoo.co.jp
科目群/Course Classification	留学生支援	単位数/Credits	1

講義目的/Aim of Course

外国人にとって日本語で文書を書くことにハードルが存在し、論文にまとめることとなると尚更難しくなり、そこで一人一人の国や経験を踏まえ、論文作成に必要な独自な問題提起、先行文献の検索方法、仮設や検証方法など講義を通じて論文の方向性を気付かせ、枠組みを構築し、作成の手助けとなるのが目的。

到達目標/Course Goals

多摩大学大学院の教育理念である「知の再武装」とディプロマポリシーでの「DP２：思考と判断（知的課題解決力」）を達成するために、論理的構造が明確な修士論文、実践知論文の作成（仮説を立て、文献調査とフィールドワーク調査をもとに検証、分析し考察）に当たり、以下の７項目について、評価できる論文作成を行えることを求める。
（1）問題意識と課題設定（2）先行研究（3）事実調査（4）切り口と論理展開（5）オリジナリティ（6）説得性

授業形態 /Form of Class	講義、受講生による発表、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：日頃から好奇心を働かせ、製造業、サービス業、金融業などどんな業界でもいいので、自分の主となる強みを確立させ、授業時に毎回自分が興味を持つことについて紹介し、徐々に論文の方向性を決めて、論文については発表していただく。 （所要時間：2時間程度） 事後学習：発表内容を深堀してさらに広げて情報収取していく。 （所要時間：2時間程度）		

講義概要/Course Description　全８講　第１講～第７講は各 90 分×2 講座 第８講は 90 分

第１講	
概要	論文演習に関するガイダンス①を行う。
事前、事後学習ポイント	今までの社会経験を踏まえた問題提起を羅列
詳細	教員による個人面談を行い、問題意識や得意分野を確認し、適宜アドバイスを行う。
第２講	
概要	論文に関するガイダンス②を行う。
事前、事後学習ポイント	問題設定から論文作成に必要な基礎知識の共有
詳細	教員による論文の構成、先行文献の検索方法、仮設や注意事項などについての共有
第３講	
概要	先輩たちの論文を分析
事前、事後学習ポイント	自分が興味を持つ分野から他者の論文を解読
詳細	本校或いは他校の論文を読み、その構成から自身の課題をより具現化できるように手掛ける。
第４講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
第５講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
第６講	

概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
第 7 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
第 8 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
教科書 /Textbook	教科書や図書は特に定めはないが、随時紹介する。
指定図書 /Course Readings	教科書や図書は特に定めはないが、随時紹介する。
参考文献・参考 URL /Reference List	先輩たちの論文を少なくても 5 部読んで分析する。 観光庁や経産省などの公的機関データを確認。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率（30%）授業内での議論参加（30%）演習成果及び報告（40%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内での論議参加、発表内容がとても優秀である。
評価： A（89～80 点）	授業内での論議参加、発表内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	授業内での論議参加、発表内容がいい。
評価： C（69～60 点）	授業内での論議参加、発表内容が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での論議参加、発表内容が不十分。
留意点 /Additional Information	自分の論文にだけでなく、ほかの方が発表しているときも、きちんと確認し、考え方や発表、資料作成方法などを学びながらアドバイスすること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	論文スタートアップ II		
サブタイトル/Sub Title	留学生修士論文・実践知論文の前指導		
英文科目名/Course Title(Eng.)	How to write the master`s thesis for foreigner		
教員/Instructor	劉　麗娜	E-mail	mizukisumaru11@yahoo.co.jp
科目群/Course Classification	留学生支援	単位数/Credits	1

講義目的/Aim of Course

外国人にとって日本語で文書を書くことにハードルが存在し、論文にまとめることとなると尚更難しくなり、そこで一人一人の国や経験を踏まえ、論文作成に必要な独自な問題提起、先行文献の検索方法、仮設や検証方法など講義を通じて論文の方向性を気付かせ、枠組みを構築し、作成の手助けとなるのが目的。

到達目標/Course Goals

多摩大学大学院の教育理念である「知の再武装」とディプロマポリシーでの DP2:「思考と判断」を達成するために、論理的構造が明確な修士論文、実践知論文の作成（仮説を立て、文献調査とフィールドワーク調査をもとに検証、分析し考察）に当たり、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えることを求める。
（1）問題意識と課題設定（2）先行研究（3）事実調査（4）切り口と論理展開（5）オリジナリティ（6）説得性

授業形態 /Form of Class	講義、受講生による発表、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	事前学習：日頃から新聞やニュースから興味を持つテーマを巡って作文を書いていただく。（所要時間：2 時間程度） 事後学習：作成して文書を論文に仕上げられように深堀していき、情報収取していく。（所要時間：2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文演習に関するガイダンス①を行う。
事前、事後学習ポイント	今までの社会経験を踏まえた問題提起を羅列
詳細	教員による個人面談を行い、問題意識や得意分野を確認し、適宜アドバイスを行う。
第 2 講	
概要	論文に関するガイダンス②を行う。
事前、事後学習ポイント	問題設定から論文作成に必要な基礎知識の共有
詳細	教員による論文の構成、先行文献の検索方法、仮設や注意事項などについての共有
第 3 講	
概要	先輩たちの論文を分析
事前、事後学習ポイント	自分が興味を持つ分野から他者の論文を解読
詳細	本校或いは他校の論文を読み、その構成から自身の課題をより具現化できるように手掛ける。
第 4 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
第 5 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
第 6 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成

詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
第 7 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
第 8 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成
詳細	受講生による発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は参考となる部分をピックアップして自身の論文に活かす。
教科書 /Textbook	教科書や図書は特に定めはないが、随時紹介する。
指定図書 /Course Readings	教科書や図書は特に定めはないが、随時紹介する。
参考文献・参考 URL /Reference List	先輩たちの論文を少なくても 5 部読んで分析する。 観光庁や経産省などの公的機関データを確認。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100%）	出席率（30%）授業内での議論参加（30%）演習成果及び報告（40%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	授業内での論議参加、発表内容がとても優秀である。
評価： A（89～80 点）	授業内での論議参加、発表内容が優れている。
評価： B（79～70 点）	授業内での論議参加、発表内容がいい。
評価： C（69～60 点）	授業内での論議参加、発表内容が普通。
評価： F（59 点～）	出席不良で、授業内での論議参加、発表内容が不十分。
留意点 /Additional Information	自分の論文にだけでなく、ほかの方が発表しているときも、きちんと確認し、考え方や発表、資料作成方法などを学びながらアドバイスすること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	河野　龍太	E-mail	kono-r@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。
そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考 察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1) 問題意識と課題設定、(2) 先行研究、(3) 事実調査、(4) 切り口と論理展開、(5) オリジナリティ、(6) 説得性、(7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自分の論文について準備発表するだけでなく、他のメンバーの発表についても理解しアドバイスできるようにすること。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文演習の概要説明とメンバーの相互理解
事前、事後学習ポイント	論文のテーマ設定や進め方など基本と全体像を理解する。 予習 1 時間程度、復習 1 時間程度
詳細	当論文ゼミの方針や進行を理解する。メンバー相互について、個人のバックグラウンド、研究テーマ、問題意識、ゼミを通じた抱負などを理解する。
第 2 講	
概要	各自の研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表
事前、事後学習ポイント	教員やクラスメンバーからのコメントやアドバイスを整理し、論文作成に適宜取り入れる 予習 1 時間程度、復習 1 時間程度
詳細	各自の論文テーマに基づいたプレゼンテーション、教員による課題指摘等のフィードバック、ゼミ生によるコメントやアドバイス、クラス全体でのディスカッション。
第 3 講	
概要	各自の研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表
事前、事後学習ポイント	教員やクラスメンバーからのコメントやアドバイスを整理し、論文作成に適宜取り入れる 予習 1 時間程度、復習 1 時間程度
詳細	各自の論文テーマに基づいたプレゼンテーション、教員による課題指摘等のフィードバック、ゼミ生によるコメントやアドバイス、クラス全体でのディスカッション。
第 4 講	
概要	各自の研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表
事前、事後学習ポイント	教員やクラスメンバーからのコメントやアドバイスを整理し、論文作成に適宜取り入れる 予習 1 時間程度、復習 1 時間程度
詳細	各自の論文テーマに基づいたプレゼンテーション、教員による課題指摘等のフィードバック、ゼミ生によるコメントやアドバイス、クラス全体でのディスカッション。
第 5 講	
概要	各自の研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表、ディスカッション
事前、事後学習ポイント	教員やクラスメンバーからのコメントやアドバイスを整理し、論文作成に適宜取り入れる 予習 1 時間程度、復習 1 時間程度
詳細	各自の論文テーマに基づいたプレゼンテーション、教員による課題指摘等のフィードバック、ゼミ生によるコメントやアドバイス、クラス全体でのディスカッション。

第 6 講	
概要	各自の研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表、ディスカッション
事前、事後学習ポイント	教員やクラスメンバーからのコメントやアドバイスを整理し、論文作成に適宜取り入れる 予習 1 時間程度、復習 1 時間程度
詳細	各自の論文テーマに基づいたプレゼンテーション、教員による課題指摘等のフィードバック、ゼミ生によるコメントやアドバイス、クラス全体でのディスカッション。
第 7 講	
概要	各自の研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表、ディスカッション
事前、事後学習ポイント	教員やクラスメンバーからのコメントやアドバイスを整理し、論文作成に適宜取り入れる 予習 1 時間程度、復習 1 時間程度
詳細	各自の論文テーマに基づいたプレゼンテーション、教員による課題指摘等のフィードバック、ゼミ生によるコメントやアドバイス、クラス全体でのディスカッション。
第 8 講	
概要	各自の研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表、ディスカッション
事前、事後学習ポイント	教員やクラスメンバーからのコメントやアドバイスを整理し、論文作成に適宜取り入れる 予習 1 時間程度、復習 1 時間程度
詳細	各自の論文テーマに基づいたプレゼンテーション、教員による課題指摘等のフィードバック、ゼミ生によるコメントやアドバイス、クラス全体でのディスカッション。
教科書 /Textbook	適宜配布する。
指定図書 /Course Readings	指定なし
参考文献・参考 URL /Reference List	「論文のレトリック」澤田昭夫、講談社学術文庫、
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%)、作成した論文内容（30%)
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 2 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title	テーマ選択から論文執筆まで		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	宇佐美　洋	E-mail	usami@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

修士の学位を取得するためには、論文もしくは実践知研究を提出しなければならない。その基本は、理論と実践を「行ったり、来たり」しながら、仮説と論証を育成する作業になる。まず先行研究で、自分の抱えている問題に「重ね書き」や「見立て」ができそうな枠組みはないかを探してみる。そこで探求のための「プラットフォーム」が見つかればしめたもの。場合により、未知の学問分野を習得する必要があるが、問題意識を抱えたうえでの未知分野の学習は容易である。そのうえで「思考実験」や「比較検討」を繰り返してアウトラインを改訂していく作業をするが、それが本演習科目の目的である。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにあるDP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていくDP5:「志」やDP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1)問題意識と課題設定、(2)先行研究、(3)事実調査、(4)切り口と論理展開、(5)オリジナリティ、(6)説得性、(7)未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	プレゼンテーション、ディベート、グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習(予習・復習等)に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること。		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文の対象・主題・テーマ 修論のテーマは卒業後も「雪だるま」のように大きく育つ。「小さく生んで大きく育つ」の方針でのぞむのが大事。
事前、事後学習ポイント	教科書1に沿って説明するので、事前に読んでおくこと。2 時間
詳細	「土地勘」のある領域でのテーマ選び 「入り口は狭いが、奥行きは深そうにみえる」対象が理想。 「面白そうで、不思議なところがある」テーマは好奇心を刺激。 タイトルは、読み手が「これを読むと何が分かるか」という視点で決める
第 2 講	
概要	先行研究 探求のための「プラットフォーム」の見つけ方
事前、事後学習ポイント	自分のテーマに沿った先行研究探索を開始する。3 時間
詳細	問題に「重ね書き」や、問題の「見立て」ができそうな枠組みはないか？ 未知の学問分野に踏み込むことを畏れない。 複眼思考による組み合わせ
第 3 講	
概要	仮説のつくり方 問題を詰め込んで、疲れ果て、散歩にでたり、寝たりすると、何かの拍子に「ひらめく」ことがあります。
事前、事後学習ポイント	自分の仮説をいろいろと考えて試行錯誤する。3 時間
詳細	「発見的探索(Heuristics)」、「切り貼り細工(Bricolage)」、間違い・失敗(根本的な軌道修正)、「ひらめき(Serendipity)」
第 4 講	
概要	論証(考えを導く方法) まず結論や「ひらめき」があり、それから逆順で論証方法(テーマによりさまざまです)を考える方が楽。
事前、事後学習ポイント	教科書1，2などを参照しながら、自分なりの論証方法を思考実験。2時間
詳細	演繹(Deduction)：トップダウンの論証で(真か偽か)、新しい視界を開いていく力はない。結論は正しいけど、新しいことは何も言っていない。 帰納(Induction)：観察や事例の収集による規則性(飛躍がともなう)。結論は正しくないけど新しいことを言っている。 仮説形成(Abduction)：名探偵の推理のように、想像力と仮説で推理する

第 5 講	
概要	仮説形成（abduction）、「演繹」とは異なり、「観察」から「推理」する方法
事前、事後学習ポイント	教科書1，2などを参照しながら、自分なりの論証（とくに仮説形成法）を思考実験。2 時間
詳細	結論は必然ではないが、手持ちの材料から判断するかぎり、もっとも蓋然性の高い仮説である。
第 6 講	
概要	論文書き方の留意点、読む人に分かりやすい文
事前、事後学習ポイント	教科書2、3、4で章の書きかたの基本を確認。2 時間
詳細	論理的で「一文一義」の文、パラグラフ・節・章の構成、接続詞の上手な使い方
第 7 講	
概要	日本語との付き合い方 論理的な文を書くには、「外国語」のように日本語の構造をとらえる知識が必要
事前、事後学習ポイント	教科書2，4で文章を書く訓練。3 時間
詳細	文体は「である」「だ」で統一し、言い切る。分かりやすく論理的な文の鍵は、接続詞でのつながりの付け方。内容語は漢字に。機能語は平仮名。
第 8 講	
概要	全体的な留意点 論文は内容だけではなく、「形式（裃の付け方）」も大事
事前、事後学習ポイント	教科書全部を参照して「抜け」や形式の「間違い」がないかをチェック。3 時間
詳細	文章の質（文頭と文末の対応はとれているか。長すぎる文は含まれていないか。漢字・かな・カタカナの使い分けは一貫しているか。） 論文の形式（注の番号に重複や脱落はないか。引用のしかたが一貫しているか。参考文献表に記載漏れや過剰記載はないか。）
教科書 /Textbook	1.『新版論文の教室』戸田山和久、NHK 出版 2.『日本語リテラシー』滝浦真人著、放送大学出版会（TV番組もお薦め） 3.『理科系の作文技術』木下是雄、中公新書
指定図書 /Course Readings	各人のテーマに合わせて指示する。
参考文献・参考 URL /Reference List	各人のテーマに合わせて指示する。
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%）、作成した論文内容（30%）
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%）
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A+（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。書くことに慣れていない者は、できるだけ早い機会に、教科書を読み、書く力を身につける努力をすること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	紺野登	E-mail	konno-n@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1) 問題意識と課題設定、(2) 先行研究、(3) 事実調査、(4) 切り口と論理展開、(5) オリジナリティ、(6) 説得性、(7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	個別ではなくグループでの相互発表を行う 日程は土曜午後を中心に行う	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	修士論文とはなにか（ガイダンス）
事前、事後学習ポイント	修士論文(dissertation)とは何か　事前・事後学習時間計 3 時間
詳細	論文は自分自身の知識を概念化・体系化する作業
第 2 講	
概要	論文作成者との対話、テーマ設定
事前、事後学習ポイント	テーマの討議、RQ(Research Question)　事前・事後学習時間計 3 時間
詳細	テーマ発見は論文作成の三大要素の一つ
第 3 講	
概要	論文作成者による相互プレゼン、討議
事前、事後学習ポイント	基本的な論文のコンセプト、先行研究など　事前・事後学習時間計 3 時間
詳細	個人の頭だけからは良いコンセプトは生まれない
第 4 講	
概要	論文作成者との対話、構成
事前、事後学習ポイント	仮説、検証へのアプローチ　事前・事後学習時間計 3 時間
詳細	第二の重要要素：仮説とは何か、できるだけ早くから取り組む検証
第 5 講	
概要	論文作成者による相互プレゼン、討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成への展開　事前・事後学習時間計 3 時間
詳細	第三の重要要素プレゼンテーションとは何か
第 6 講	
概要	論文作成者との対話、構成
事前、事後学習ポイント	どんな論文にするのか？自分のコンセプトは何か？　事前・事後学習時間計 3 時間
詳細	（何回ものクイックプレゼンを行う）
第 7 講	

概要	論文作成者との対話、構成、形成（1）
事前、事後学習ポイント	論文の作成、練磨　事前・事後学習時間計 3 時間
詳細	論文作成者間による相互プレゼン、討議
第 8 講	
概要	論文作成者との対話、構成、形成（2）
事前、事後学習ポイント	論文の作成、練磨　事前・事後学習時間計 3 時間
詳細	論文作成者間による相互プレゼン、討議
教科書 /Textbook	なし
指定図書 /Course Readings	①各自自分の特性にあった「マニュアル本」を見つけること ②各自自分の特性にあった他者の論文を探索、収集していくこと
参考文献・参考 URL /Reference List	参考：修論説明資料　初回オリエンで配布
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%)、作成した論文内容（30%)
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 2 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title	論文演習		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	佐々木　弘明	E-mail	sasaki-hi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにあるDP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていくDP5:「志」やDP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1)問題意識と課題設定、(2)先行研究、(3)事実調査、(4)切り口と論理展開、(5)オリジナリティ、(6)説得性、(7)未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	あり
準備学習(予習・復習等)に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文演習の進行説明とメンバーの相互理解
事前、事後学習ポイント	論文の作成:問題の設定から書き方までの基本を理解する(180 分)
詳細	論文演習の進行を理解するとともに、アクティビティを通じてメンバー相互を理解する。 宿題:必読書を担当し、パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する。
第 2 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。
事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。(180 分)
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向) 第 1 講で出された検討課題への回答をプレゼンテーション。
第 3 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。(180 分)
詳細	前講に同じ。
第 4 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。(180 分)
詳細	前講に同じ。
第 5 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。(180 分)
詳細	前講に同じ。
第 6 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。(180 分)
詳細	前講に同じ。

第 7 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。(180 分)
詳細	前講に同じ。
第 8 講	
概要	前講に同じ。個別指導とする
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。(180 分)
詳細	前講に同じ。
教科書 /Textbook	なし
指定図書 /Course Readings	「知性を磨く」田坂広志、光文社新書
参考文献・参考 URL /Reference List	「博士・修士・卒業論文の書き方」新堀聰(同文館出版) 、「論文の教室(新版)」戸田山和久(NHK ブックス)、論文・レポートの基本 石黒圭(日本実業出版社)、「問題解決」高田貴久・岩澤智之(英治出版)
評価方法/Method of Evaluation	
配分(合計 100%)	履修期末に論文提出する院生:演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容(25%)、作成した論文内容(30%)
	履修期末に提出予定でないもの:演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容(30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価: A+(100～90 点)	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの:論文内容(1)～(7)で 5 項目が達成されている。
評価: A(89～80 点)	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの:論文内容(1)～(7)で 4 項目が達成されている。
評価: B(79～70 点)	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの:論文内容(1)～(7)で 3 項目が達成されている。
評価: C(69～60 点)	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの:論文内容(1)～(7)で 2 項目が達成されている。
評価: F(59 点～)	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの:論文内容(1)～(7)のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	徳岡晃一郎	E-mail	tokuoka@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1) 問題意識と課題設定、(2) 先行研究、(3) 事実調査、(4) 切り口と論理展開、(5) オリジナリティ、(6) 説得性、(7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	あり
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文演習の進行説明とメンバーの相互理解
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する。1.5 時間
詳細	論文演習の進行を理解するとともに、アクティビティを通じてメンバー相互を理解する。 宿題：必読書を担当し、パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する。
第 2 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。
事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。各自の発表とディスカッションを一人 30 分ずつで、計 6 人
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向) 第 1 講で出された検討課題への回答をプレゼンテーション。
第 3 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。
詳細	前講に同じ。
第 4 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。
詳細	前講に同じ。
第 5 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。
詳細	前講に同じ。
第 6 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う

事前、事後学習ポイント	前講に同じ。
詳細	前講に同じ。
第 7 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。
詳細	前講に同じ。
第 8 講	
概要	前講に同じ。期末の論文提出者から順に行う
事前、事後学習ポイント	前講に同じ。
詳細	前講に同じ。
教科書 /Textbook	なし
指定図書 /Course Readings	「知性を磨く」田坂広志、光文社新書
参考文献・参考 URL /Reference List	「論文の教室（新版）」戸田山和久、ＮＨＫブックス、「論文マニュアル」山内志朗、平凡社新書、「調査のためのインターネット」アリアドネ著、「アイデアのちから」チップ・ハース、ダアン・ハース、日経 BP 社
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%)、作成した論文内容（30%)
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 2 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	今泉　忠・久保田　貴文	E-mail	imaizumi@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。

そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。

また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。 (1) 問題意識と課題設定、 (2) 先行研究、 (3) 事実調査、 (4) 切り口と論理展開、 (5) オリジナリティ、 (6) 説得性、 (7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	双方向，グループディスカッション，プレゼンテーション	学外学習 /Off-Campus Learning	あり
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる 程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく，他の履修者の研究発表について理解し，アドバイスできるようになること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文テーマ
事前、事後学習ポイント	これまでの授業・自身の研究を踏まえて，論文テーマの方向性を検討し決定する（3 時間）
詳細	ビジネスに関する課題としての論文テーマなどについて情報を共有する
第 2 講	
概要	課題からの仮説構築（2～3名の院生）
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。必要であれば文献をあたり，研究を進める。（3 時間）
詳細	仮説構築と分析についてグループでディスカッションを行う。
第 3 講	
概要	課題からの仮説構築（2～3名の院生）
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。必要であれば文献をあたり，研究を進める。（3 時間）
詳細	課題からの仮説構築とモデル構築と分析について2～3名の院生より進捗状況を報告してもらい，研究の方向性や分析の手法などについて学修します。
第 4 講	
概要	課題からの仮説構築とモデル構築（2～3名の院生）
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。（3 時間）
詳細	分析結果をもとにした提案ついてグループでディスカッションを行う。
第 5 講	
概要	課題からの仮説構築とモデル構築と分析（2～3名の院生）

事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。さらに，分析結果をもとにした提案へとすすめ，論文の Draft を作成する。(3 時間)
詳細	レポートと論文の違いを確認し，論文の構成検討を行います。
第 6 講	
概要	課題からの仮説構築とモデル構築と分析 II(2～3名の院生)
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。さらに，論文の Draft の構成を検討する。(3 時間)
詳細	レポートと論文の違いを確認し，論文の構成検討を行います。
第 7 講	
概要	論文の構成検討
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。さらに，論文の Draft への記述を図る。(3 時間)
詳細	論文の Draft を確認し，論文の構成検討を行います。
第 8 講	
概要	整理
事前、事後学習ポイント	これまでの指摘を論文の Draft に落とし込み，レポートを完成させる。(3 時間)
詳細	これまでの指摘をレポートに落とし込み，レポートを完成させます。また，論文の Draft への記述を図ります.
教科書 /Textbook	適宜配布する。
指定図書 /Course Readings	なし。
参考文献・参考 URL /Reference List	なし。
評価方法/Method of Evaluation	
配分(合計 100%)	今学期末に論文提出するもの：演習への取組態度(15%),演習での議論参加(30%),プレゼンテーション内容(25%),作成した論文内容(30%)
	今学期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%),演習での議論参加(40%),プレゼンテーション内容(30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺(100～90 点)	積極的に議論に参加し 他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。 今学期末に論文提出するもの：論文内容(1)～(7)で 5 項目が達成されている
評価： A(89～80 点)	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 今学期末に論文提出するもの：論文内容(1)～(7)で 4 項目が達成されている
評価： B(79～70 点)	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 今学期末に論文提出するもの：論文内容(1)～(7)で 3 項目が達成されている
評価： C(69～60 点)	授業内での議論参加がやや弱く,プレゼンテーション内容が普通。 今学期末に論文提出するもの：論文内容(1)～(7)で 2 項目が達成されている
評価： F(59 点～)	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 今学期末に論文提出するもの：論文内容(1)～(7)のいずれも達成されていない
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、 クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、 クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title	修士論文・実践知論文入門		
英文科目名/Course Title(Eng.)	How to write the master thesis		
教員/Instructor	久保田貴文・今泉忠	E-mail	imaizumi@tama.ac.jp kubota@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1) 問題意識と課題設定、(2) 先行研究、(3) 事実調査、(4) 切り口と論理展開、(5) オリジナリティ、(6) 説得性、(7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	講義・グループディスカッション	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文テーマ
事前、事後学習ポイント	これまでの授業・自身の研究を踏まえて，論文テーマの方向性を検討し決定する（3 時間程度）
詳細	ビジネスに関する課題としての論文テーマなどについて情報を共有する
第 2 講	
概要	課題からの仮説構築（２～３名の院生）
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。必要であれば文献をあたり，研究を進める。(3 時間程度)
詳細	仮説構築と分析についてグループでディスカッションを行う。
第 3 講	
概要	課題からの仮説構築とモデル構築（２～３名の院生）
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。必要であれば文献をあたり，研究を進める。(3 時間程度)
詳細	課題からの仮説構築とモデル構築と分析について２～３名の院生より進捗状況を報告してもらい，研究の方向性や分析の手法などについて学修します。
第 4 講	
概要	課題からの仮説構築とモデル構築（２～３名の院生）
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。(3 時間程度)
詳細	分析結果をもとにした提案ついてグループでディスカッションを行う。
第 5 講	
概要	課題からの仮説構築とモデル構築と分析（２～３名の院生）
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。さらに，分析結果をもとにした提案へとすすめ，論文の Draft を作成する。(3 時間程度)

詳細	分析結果をもとにした提案について２～３名の院生より進捗状況を報告してもらい，研究の方向性や分析の手法などについて学修します。また，作成した Draft についても確認します。
第 6 講	
概要	課題からの仮説構築とモデル構築と分析 II（２～３名の院生）
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。さらに，論文の Draft の構成を検討する。(3 時間程度)
詳細	レポートと論文の違いを確認し，論文の構成検討を行います。
第 7 講	
概要	論文の構成検討
事前、事後学習ポイント	事前学習として，論文進捗状況をまとめ，授業の中で報告出来るように準備する。また，事後学修として，授業の中で出された意見を研究・レポートに反映させる。さらに，論文の Draft への記述を図る。(3 時間程度)
詳細	論文の Draft を確認し，論文の構成検討を行います。
第 8 講	
概要	整理
事前、事後学習ポイント	これまでの指摘を論文に落とし込み，修士論文を完成させる。(最低 3 時間程度)
詳細	これまでの指摘を論文に落とし込み，修士論文を完成させる。
教科書 /Textbook	指定なし
指定図書 /Course Readings	指定なし
参考文献・参考 URL /Reference List	指定なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%)、作成した論文内容（30%)
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 2 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title	留学生修士論文・実践知論文指導ゼミ		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	巴特尔（バートル）	E-mail	baatar@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1) 問題意識と課題設定、(2) 先行研究、(3) 事実調査、(4) 切り口と論理展開、(5) オリジナリティ、(6) 説得性、(7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	プレゼンテーション、グループディスカッション、グループワーク	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文演習に関するガイダンスを行う。
事前、事後学習ポイント	問題設定から論文作成に至る基本的な知識を再確認すると共に、受講生の研究テーマに関するプレゼンテーションを行う。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	①教員による問題意識・課題設定、先行研究、文献とフィールド調査、切り口と論理展開、オリジナリティ、未解明な事柄や学問研究等についての解説。 ②教員による個人面談を行い、研究テーマの設定状況を確認し適宜アドバイスを行う。
第 2 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関連する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	受講生による研究発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は、それを整理し、次回以降の発表に活かし論文作成に役立てる。
第 3 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関連する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	受講生による研究発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は、それを整理し、次回以降の発表に活かし論文作成に役立てる。
第 4 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関連する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	受講生による研究発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は、それを整理し、次回以降の発表に活かし論文作成に役立てる。
第 5 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関連する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	受講生による研究発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は、それを整理し、次回以降の発表に活かし論文作成に役立てる。
第 6 講	

概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関連する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	受講生による研究発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は、それを整理し、次回以降の発表に活かし論文作成に役立てる。
第 7 講	
概要	サークル形式による全体の発表と研究テーマに関する個別指導を行う。
事前、事後学習ポイント	研究テーマに関連する参考資料やデータ、情報の収集、分析に基づいた発表資料の作成。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	受講生による研究発表に対し、教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は、それを整理し、次回の発表に活かし論文作成に役立てる。
第 8 講	
概要	総括（最終発表）
事前、事後学習ポイント	事前学習として、受講生は論文の進捗状況をまとめ、授業の中で報告できるように準備をすると共に、事後の学習としてレポートにまとめ、提出する準備をする。更に、論文のドラフトの構成を検討しＰＰＴ形式で資料を作成し発表する準備を行う。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	受講生全員による研究成果の総括を行う。それに対し教員とメンバーからコメントやアドバイスを行う。発表者は、それを整理し、論文作成に役立てる。
教科書 /Textbook	教科書や図書は特に定めないが、随時紹介ないし適宜資料を配布する。
指定図書 /Course Readings	無し
参考文献・参考 URL /Reference List	日本貿易振興機構ＨＰ：http://www.jetro.go.jp/world/asia/cn/ 日本財務省貿易統計 HP：http://www.customs.go.jp/toukei/info/ 日本政府観光局ＨＰ：https://www.jnto.go.jp/jpn/ 「日本経済新聞」「東洋経済」「エコノミスト」「日経ＢＰオンライン」、CNN、BBC,WSJ 等新聞、雑誌メディア類
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%)、作成した論文内容（30%)
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 2 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	國分　俊史	E-mail	kokubun@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1) 問題意識と課題設定、(2) 先行研究、(3) 事実調査、(4) 切り口と論理展開、(5) オリジナリティ、(6) 説得性、(7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	あり
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	論文演習の進行説明とメンバーの相互理解。
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する。 事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	論文演習の進行を理解するとともに、アクティビティを通じてメンバー相互を理解する。 宿題：必読書を担当し、パワーポイントでまとめてくること。第 8 講までに全員が発表する。
第 2 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。
事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向) 第 1 講で出された宿題のプレゼンテーション。
第 3 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。
事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向)
第 4 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。
事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向)
第 5 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。
事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向)
第 6 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。

事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向)
第 7 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。
事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向)
第 8 講	
概要	研究テーマに基づいた個別指導及び全体発表によるサークル形式指導。
事前、事後学習ポイント	授業内で教員及びメンバーから貰ったコメントやアドバイスを整理し、論文作成に役立てる。事前事後の学習時間は合計 3 時間とする。
詳細	論文作成者による作成論文のプレゼンテーション、教員及びメンバーによる問題点の指摘、アドバイス、ディスカッション。(双方向)
教科書 /Textbook	適宜配布する。
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%)、作成した論文内容（30%)
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 2 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title	実践知論文作成を通じて行うビジネス経験の棚卸し		
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	田坂 広志	E-mail	tasaka@hiroshitasaka.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1) 問題意識と課題設定、(2) 先行研究、(3) 事実調査、(4) 切り口と論理展開、(5) オリジナリティ、(6) 説得性、(7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	グループによる集中ゼミと個別指導	学外学習 /Off-Campus Learning	無し
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること （予習・復習　各講義 2 時間程度）		

講義概要/Course Description　全 8 講 第 1 講～第 7 講は各 180 分 第 8 講は 90 分でも可

第 1 講	
概要	グループによる集中ゼミと個別指導
事前、事後学習ポイント	研究論文の作成、集中ゼミでのプレゼン、相互コメント、個別指導による論文修正
詳細	研究テーマに基づいた相互発表とグループ討議、個別相談と個別指導
第 2 講	
概要	前講に同じ
事前、事後学習ポイント	前講に同じ
詳細	前講に同じ
第 3 講	
概要	前講に同じ
事前、事後学習ポイント	前講に同じ
詳細	前講に同じ
第 4 講	
概要	前講に同じ
事前、事後学習ポイント	前講に同じ
詳細	前講に同じ
第 5 講	
概要	前講に同じ
事前、事後学習ポイント	前講に同じ
詳細	前講に同じ
第 6 講	
概要	前講に同じ
事前、事後学習ポイント	前講に同じ
詳細	前講に同じ
第 7 講	

概要	前講に同じ
事前、事後学習ポイント	前講に同じ
詳細	前講に同じ
第 8 講	
概要	前講に同じ
事前、事後学習ポイント	前講に同じ
詳細	前講に同じ
教科書 /Textbook	『知性を磨く　「スーパージェネラリスト」の時代』（田坂広志著：光文社新書）
指定図書 /Course Readings	『企画力』（田坂広志著：ＰＨＰ文庫）
参考文献・参考 URL /Reference List	ダイヤモンドオンライン「７つの知性を磨く田坂塾」の連載記事
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%)、作成した論文内容（30%)
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 2 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。 春学期は「スーパージェネラリスト論」の受講、秋学期は「ネオ・リベラルアーツ論」の受講が条件

講義年度/Year	2020	開講学期/Semester	春学期・秋学期
科目名/Course Title	論文演習		
サブタイトル/Sub Title			
英文科目名/Course Title(Eng.)	Dissertation exercises		
教員/Instructor	真野 俊樹	E-mail	mano@tama.ac.jp
科目群/Course Classification	本質思考力	単位数/Credits	2

講義目的/Aim of Course

ある程度まとまった文章を書いた経験のない者にとり、論文作成の作業は一人では容易ではない。そこで、 問題の設定の仕方、関連する先行文献の探索方法、自身の問題関心の深堀の仕方、仮説の設定、推論・考察の進め方、実証の方法、実際の論文作成の作法など、お互いの発表と実践を通して修得する。

到達目標/Course Goals

ディプロマポリシーにある DP2:「思考と判断」を磨き、各種講義で学んだ実践知に基づく「イノベーターシップ」にあふれた挑戦的なテーマをまとめ、社会人として変革を起こしていく DP5:「志」や DP3:「関心と意欲」の底力をつける。これによりビジネスパーソンとしての自己のキャリアを明確にし、次の段階への方向性について明確できるようになる。
また、多摩大学大学院にふさわしい実践と理論を取り入れた修士論文、実践知論文(特定課題研究論文)の完成を目指すために、以下の 7 項目について、評価できる論文作成を行えること。(1) 問題意識と課題設定、(2) 先行研究、(3) 事実調査、(4) 切り口と論理展開、(5) オリジナリティ、(6) 説得性、(7) 未解明なことへの貢献、ビジネスに対する有用性

授業形態 /Form of Class	グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション、双方向	学外学習 /Off-Campus Learning	なし
準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学習内容	自身の論文や必読書の担当部分について発表準備するだけではなく、他の履修者の研究発表について理解し、アドバイスできるようになること		

講義概要/Course Description　全 8 講　第 1 講～第 7 講は各 90 分×2 講座 第 8 講は 90 分

第 1 講	
概要	院生による発表と討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する　学習時間[1.5 時間~3 時間
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
第 2 講	
概要	院生による発表と討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する　学習時間[1.5 時間~3 時間
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
第 3 講	
概要	院生による発表と討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する　学習時間[1.5 時間~3 時間
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
第 4 講	
概要	院生による発表と討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する　学習時間[1.5 時間~3 時間
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
第 5 講	
概要	院生による発表と討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する　学習時間[1.5 時間~3 時間
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
第 6 講	
概要	院生による発表と討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する　学習時間[1.5 時間~3 時間
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する

第 7 講	
概要	院生による発表と討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する　学習時間[1.5 時間~3 時間
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
第 8 講	
概要	院生による発表と討議
事前、事後学習ポイント	論文の作成：問題の設定から書き方までの基本を理解する 学習時間[1.5 時間~3 時間
詳細	アクティビティ（プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート）を通じてメンバー相互を理解する。パワーポイントでまとめてくること。第8講までに全員が発表する
教科書 /Textbook	資料を適宜配布する
指定図書 /Course Readings	なし
参考文献・参考 URL /Reference List	なし
評価方法/Method of Evaluation	
配分（合計 100％）	履修期末に論文提出する院生：演習への取組態度(15%)、演習での議論参加(30%)、プレゼンテーション内容（25%)、作成した論文内容（30%)
	履修期末に提出予定でないもの：演習への取組態度(30%)、演習での議論参加(40%)、プレゼンテーション内容（30%)
評価基準/Evaluation Criteria	
評価： A⁺（100～90 点）	積極的に議論に参加し、他者への貢献に優れるとともに、プレゼンテーションが特に優れている。履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 5 項目が達成されている。
評価： A（89～80 点）	授業内での議論に積極的に参加し、プレゼンテーション内容が優れている。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 4 項目が達成されている。
評価： B（79～70 点）	授業内での議論参加が標準的であり、プレゼンテーション内容が良い。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 3 項目が達成されている。
評価： C（69～60 点）	授業内での議論参加がやや弱く、プレゼンテーション内容が普通。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）で 2 項目が達成されている。
評価： F（59 点～）	取組態度が不良で、授業内での議論参加、プレゼンテーション内容が不十分。 履修期末に論文提出するもの：論文内容（1）～（7）のいずれも達成されていない。
留意点 /Additional Information	各自の研究活動と論文作成の支援が目的なので、授業には毎回出席し、全体発表、クラスディスカッション、論文の個別指導など、積極的に取り組むこと。また、クラスメンバーへの助言などの貢献も心がけること。